国宝　長保寺大門ほか二棟修理工事報告書

国宝　長保寺大門ほか二棟修理工事報告書

和歌山県

国宝　長保寺大門ほか二棟修理工事報告書

宗教法人　長　保　寺

1　竣工　大門全景（南東より）

2　竣工　多宝塔全景（南より）

3　竣工　鎮守堂全景（南西より）

序　文

長保寺は一条天皇の勅願により長保二年に創建され、江戸時代に至り紀州徳川家の菩提寺となりました。境内には国宝本堂を始めとし、多くの建造物、美術工芸品などの文化財が残されております。

国宝大門は明治四四年に特別保護建造物として解体修理されてから、根本的な修理が行われなかったため、軒の垂下や屋根瓦の破損が目立つようになりました。十年あまり前から、次第に大門の状態は重篤になってまいり、県を通じて国へ保存修理事業の立ち上げを請願してまいりました。その結果、関係機関のご配慮により、平成二三年一月をもって、今回の保存修理事業を実施する運びとなりました。

今回の修理では、大門は屋根瓦を葺き替え、軒の垂下を防止するため、小屋組内に構造補強を施しました。国宝多宝塔は部分的に屋根瓦を葺き替える予定でしたが、工事着手後、屋根の破損が各所に及んでいたことで、全面を葺き替えいたしました。また相輪の根本的な修理も併せて行いました。重要文化財鎮守堂は、檜皮屋根を全面葺き替えいたしました。

工事にあたっては、意志決定の過程を明確にし、相互の信頼関係を構築して維持するために、事業者である長保寺と設計監理者である公益財団法人和歌山県文化財センター、施工者である株式会社金剛組と、毎月一回、定例会議を実施して、十分な意志の疎通を図り、円滑に事業を進めました。

本報告書は今回の修理の記録と、調査記録を取りまとめ、刊行するものです。文化財保護や学術研究に、広くお役立て頂ければ幸いです。

最後になりましたが、多大なご援助とご指導を頂きました、文化庁、和歌山県、海南市にお礼申し上げますと共に、修理に携わられた方々に深く感謝申し上げます。

平成二四年一二月吉日

宗教法人　長　保　寺

代表役員　瑞　樹　正　哲

例　言

一、この報告書は、国庫補助事業である、国宝（建造物）長保寺大門ほか二棟保存修理事業の一部として刊行するものである。

二、編集にあたっては、建造物・修理事業・修理工事の概要、各種の調査事項、資料、記録写真、図面をまとめた。

三、記録写真は、工事中に撮影したものの中から、竣工・修理前、並びに工事中の経過を示すもの、調査事項に関する資料を掲載した。本文中の挿図は、各部の説明として必要なものを調製、掲載した。関係資料として文書史料、古写真も掲載した。

四、寸法表示は、メートル法によったが、必要に応じて尺貫法を併記した。

五、瓦調査にあたっては、中世瓦研究者である芦田淳一氏（総持寺寺史編纂調査研究員）の指導・協力を得た。

六、本書の編集、執筆などの担当は、次のとおりである。

編集・総括　公益財団法人　和歌山県文化財センター

本文執筆（左記以外）　工事主任　御船　達雄

第一章第一節第一、二項　和歌山県立博物館学芸課長　竹中　康彦

第四章第二節第三項二　住友金属テクノロジー株式会社材料機能評価室　朝倉　亮

第三章第五節、第四章第四節第一～四、六項　和歌山県文化財センター　工事主任補佐　下津健太朗

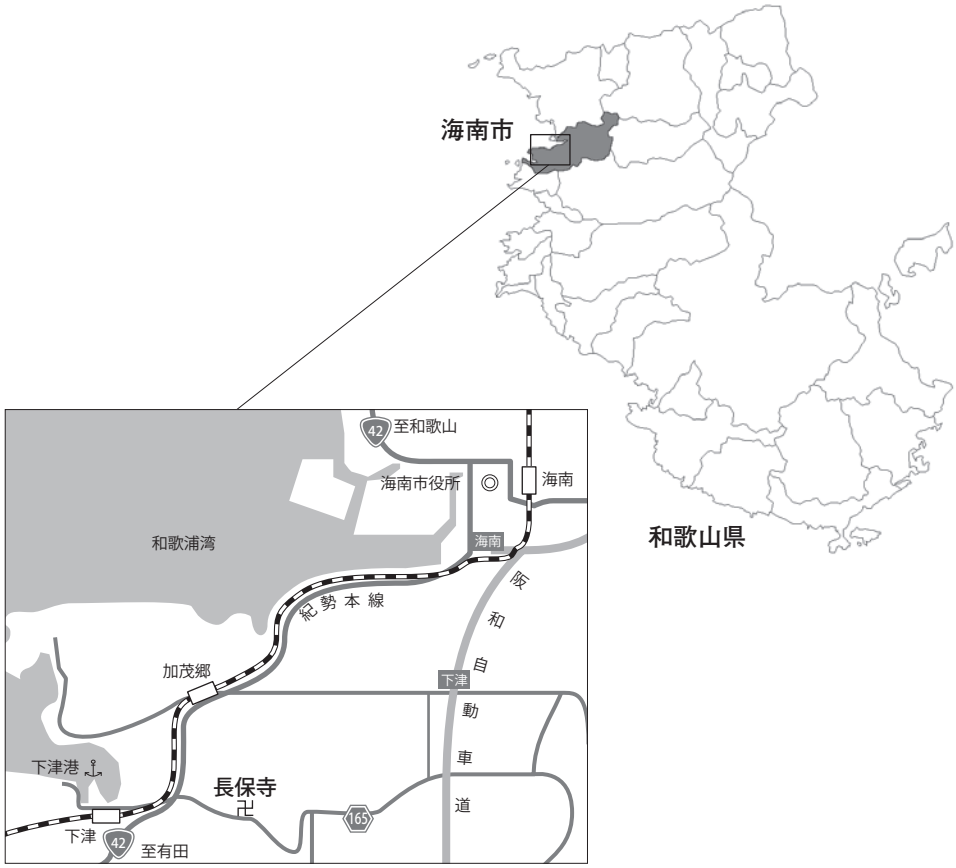
第四章第四節第五項　総持寺寺史編纂調査研究員　芦田　淳一

挿図作成・組版　和歌山県文化財センター　工事主任補佐　田村　收子

写真撮影　現場職員

七、第五章掲載の資料調査にあたっては、和歌山県立博物館の協力を得た。

八、巻末図面は奈良文化財研究所の協力を得て、同所蔵の保存図を借用し、撮影したものを掲載した。



国宝　長保寺大門ほか二棟修理工事報告書

目　次

第一章　建造物の概要
第一節　寺院の概要……1
第一項　長保寺の創立と沿革……1
第二項　長保寺の伽藍の変遷について……5
第三項　境内の概要と建造物……7
第二節　指定告示……9
第一項　指定年月日……9
第二項　指定告示……9
第三節　規　模……10
第四節　構造形式……11
第二章　修理事業の概要
第一節　事業に至るまでの経過……13
第二節　事業の運営と経過……13
第三節　工事関係者……14
第四節　事　業　費……16
第三章　工事実施の概要
第一節　修理の大要……19
第一項　修理方針……19
第二項　修理内容……19
第二節　工事工程……19
第一項　工　期……19
第二項　実施工程……19
第三節　実施仕様……20
第一項　工事事務……20
第二項　工事実施仕様……21
第四節　定例会議議事録……36
第五節　大門小屋組の補強……47
第四章　調査事項
第一節　大　門……52
第一項　修理前の破損状況……52
第二項　屋根・野地……52
第三項　木　部……54
第二節　多宝塔……56
第一項　修理前の破損状況……56
第二項　屋根・野地……56
第三項　相　輪……58
第三節　鎮守堂……61
第一項　修理前の破損状況……61
第二項　屋根・野地……61
第四節　大門・多宝塔の屋根瓦……63
第一項　瓦調査について……63
第二項　多宝塔の屋根瓦……63
第三項　大門の屋根瓦……72
第四項　周辺地域の中世期建造物の屋根瓦……78
第五項　多宝塔所用瓦の編年（芦田淳一氏寄稿）……80
第六項　長保寺伽藍中興時の屋根瓦に関する考察……85
第五章　資　料
第一節　近代の文化財解体修理資料……90
第二節　大門明治修理精算書……90
第三節　多宝塔・鎮守堂昭和修理精算書……95
写　真
図　面
修理概要

第一章　建造物の概要

第一節　寺院の概要

第一項　長保寺の創立と沿革

長保寺の創建

長保寺の創建に関しては、一条天皇（九八〇～一〇一一）の勅願により、慈覚大師の弟子で播磨国書写山円教寺を創建した性空（九一七～一〇〇七）を開基として長保二年（一〇〇〇）に創建し、寛仁元年（一〇一七）に伽藍の造営が完了したとされている。すなわち、長保寺は一条天皇の勅願寺ということになるのであるが、これは長保寺に残存する応永二四年九月二一日の奥書を持つ「紀州海部郡浜仲庄長保寺縁起」（『慶徳山長保寺縁起并勧進状写』所収）や年代不明の「王代一覧抜書」（『長保寺記録抜書』所収）といったかなり後の時代の縁起の写本類（江戸時代のものと思われる）によって示されていることである。そしてこのような重要な事業であるにもかかわらず、長保寺以外の場に残る別系統の史料、例えば当時の天皇に近い貴族の日記である『御堂関白記』『小右記』『権記』『左経記』などでは全く確認することができない。

一般的に勅願寺あるいは御願寺というものについては、創建した天皇直筆の寺額（勅額）を賜り、その天皇の没後は位牌を本尊の脇に安置するものとして理解されている。ただその際、必ずしも天皇自身の発意によるものである必要はなく、貴族や僧侶の奏請により太政官が裁許する場合もあったということである。そしてこれは、天皇の意向とは全く無関係に、国家の直接的支配を回避して寺院を建立する動きにつながり、その傾向が一〇世紀後半以降顕著になるという見解も存する。このように考えるならば、長保寺の場合、荘園などを媒介として中央貴族と強い関係を持った在地の有力者が、貴族を通じて中央へ申請して勅願寺を建立したということも考えられないことではない。しかしいずれにしても、天皇や中央政府と無関係に勅願寺を建立することは不可能なのであり、中央の記録に全くその痕跡をとどめず、また都からかなり離れた寺院であることを否定できない長保寺の創建に関しては、いまだに未解明の部分が多いことは事実である。ただ、この時期に創建されていたかどうかという点に関しては別問題であり、後でふれてみたいと思う。

浜仲荘と長保寺

このように長保寺の創建期については、不明確な点が多いのであるが、平安時代末期以降は長保寺が所在した浜仲荘の推移の中で、長保寺の歴史をたどることが可能になる。

まず、江戸時代の史料ながら（『高野春秋』）、浜仲荘は一二世紀半ばに摂関家の藤原忠実・頼長父子によって、高野山の金剛心院へ寄進されたことが認められる。すなわち、この記事を信用するならば、それ以前に浜仲荘は摂関家領の荘園になっていたことが判明するのであるが、摂関家領となる前が皇室領であったと限定して考える必要はない。

浜仲荘に関する確実な史料上の初見は、寿永二年（一一八三）閏一〇月二二日の「摂政近衛基通御教書案」（仁和寺文書）であり、そこでは木曽義仲の浜仲荘の譲渡を求める申請を近衛基通が却下して、仁和寺が元通り知行することを命じている。この史料によれば、それ以前から近衛家が浜仲荘の本家職を、仁和寺が領家職をそれぞれ所有しており、仁和寺は金剛心院および浜仲荘を知行していたことが推定される。

しかしその後、近衛家は次第に浜仲荘に対する支配を後退させていったもの

と考えられ、鎌倉時代中期の建長五年（一二五三）一〇月二一日の「近衛家所領目録」（近衛家文書）には、すでに進止には及ばない旨が記されている。一方仁和寺は、相変わらず浜仲荘に対する支配権を保持しているが、貞和二年（一三四六）一〇月二七日の足利直義下知状案に引用している文永元年（一二六四）六月八日の「関東成敗状」によれば、浜仲荘は南方・北方に下地中分され、仁和寺は南方を進止するものの、北方は地頭湯浅氏が管領するようになっている。

長保寺はそれ以降、浜仲南荘に属するのであるが、この時期の長保寺の実態をよく表しているのが、永仁六年（一二九八）一一月一九日の「浜仲南荘惣田数注進状写」（高野山文書）である。そこでは、浜仲南荘には惣田数五七町三一〇歩が存在し、うち三〇町は金剛心院・真光院分に充てられるが、その他は荘園内外の寺社免田となっている。そのうち長保寺については「長保寺念仏免」「同堂塔免」が保証されており、あるいは「千部経田」「仏性田」「湯屋免」なども長保寺に関わるものかも知れない。ここで特に注目されるのが、念仏免である。

長保寺に古くから伝来する「不断念仏式」（なお『長保寺記録抜書』には「不断念仏式奥書」という史料が引用されているが、その中に見える年紀や引用関係から考えると不断念仏式より後の時代に書写された式の奥書であると考えられる）は、鎌倉時代後期の長保寺における不断念仏の式次第を記したものであるが、それによると長保寺において不断念仏は大治三年（一一二八）に始まり、保元三年（一一五八）・正応二年（一二八九）の二度にわたる日数の改正を経て、少なくとも延慶二年（一三〇九）まで継続していたことが分かる。この不断念仏は一〇月半ばごろ行われるものであるが、その実施の経費を捻出するために念仏免が設定されたのである。

ところで不断念仏とは、円仁が中国の五台山から五会念仏を常行三昧の作法として請来したのち、比叡山の常行三昧堂で仁寿元年（八五一）に初めて修したものである。本来の常行三昧における念仏は止観（心を対象に集中し観察する）成就の手段に過ぎなかったが、五会念仏では念仏そのものに絶対の価値を認め、懺悔滅罪による浄土往生の効用を期待するものとなり、自己目的化したということである。その結果、この称名念仏的な要素が九世紀から一〇世紀にかけての貴族・僧侶を中心とした自己救済的な浄土教的運動につながるものとして理解されるのが一般的である。時期的には降るが、長保寺の不断念仏式の敬白文の末尾で、阿弥陀如来と慈覚大師（円仁）に導かれて極楽往生を願っているのも、このような動きの一端を示しているといえよう。

すなわち、宗教的な観点から創立期の長保寺の実態を考えるためには、以上のような浄土教的信仰の展開を念頭にいれておく必要がある。長保寺の創建が、初期の念仏聖として著名な性空によるという伝承があるのも、そのことと無関係ではないであろう。

しかしその一方で、これまでみてきたように、長保寺の所在する浜仲（南）荘は、少なくとも一二世紀半ばに摂関家から金剛心院に寄進されて以来、高野山や仁和寺といった真言宗寺院の傘下にあったことは否定できない事実である。そして、おそらく長保寺も浜仲荘に存在する限り、真言宗の影響を受けざるを得なかったことと思われる。このことは、一見すると天台宗の法会である不断念仏の存在と齟齬をきたしているような印象を与えている。

ただ、摂関期以降の天台宗における念仏の展開の一方で、称名念仏の中に真言陀羅尼的な死霊鎮送・怨魂調伏の機能も見いだされるという点も指摘されている。すなわち、この時期真言諸寺の僧侶・験者が鎮魂の仏事の場で、「念仏」として「陀羅尼」を読誦していた実例が知られ、阿弥陀称名念仏と真言陀羅尼は未分化の状態であったことが分かる。そもそも、常行三昧は天台宗の密教化に大きく関わった円仁によってもたらされたことからも、密教すなわち真言宗

的な要素と無縁であるとは考えられないのである。

以上のように考えるならば、中世の荘園の領有関係の中で真言宗の影響下にあった長保寺において、天台宗の流れをくむ不断念仏が実施されていたとしても、それほど不思議ではないであろう。

更に、近世以降の寺院と異なり、中世の寺院、とくに学侶が存在して教義の研究を行っていた「学問寺」においては、様々な宗派の教えが混在していたことも指摘されている。つまり中世寺院においては、近世以降のような各宗派が峻別される状況は、まだ現れていないのである。また、このような状況の下で最も力を持ち得たのは、なんと言っても経済的な後盾を持っていた勢力であろう。長保寺において、近世以前に天台・真言あるいは法相と宗派が移動しているという伝承は、ある時点で卓越的であった教義の持ち主の存在と、現実の経済的基盤の存在との微妙な関係をふまえて、各勢力が自己主張するために後世に生み出されてきたものであると考えられる。

中世後期の長保寺

鎌倉時代後期以降、一四世紀を中心に現在の長保寺の主要な伽藍が整備されたのであるが、嘉慶二年（一三八八）に再興された大門には妙法院宮尭仁法親王（永享二年（一四三〇）没）筆の額が掛けられた（「長保寺大門額裏書」〔応永二四年（一四一七）のもの〕による）。これは、確実に中世における天皇家との関係を示す唯一の事例であり、おそらくこのことによって、後の時代に長保寺が勅願寺院であることをより強く意識させることにつながったものと思われる（なお、「紀州浜仲庄長保寺縁起」によれば、長保寺には綸旨・院宣などの天皇家発給文書が宝蔵に保存されていたということであるが、天正一三年（一五八五）に伽藍の一部と宝蔵が焼亡した際に失われたということである）。

一方、この時期の浜仲荘の動向に目を向けると、在地の武士の濫妨に対する仁和寺や金剛心院の抵抗がみられるようになる。たとえば、前掲の貞和二年（一三四六）の足利直義下知状によれば、地頭の湯浅八郎左衛門尉法師道尭（浜中北荘を管領）の暦応元年（一三三八）以来の押領に対して、仁和寺（御室雑掌良勝）は室町幕府へ訴え、地頭の押領を停止するとともに浜仲南荘の支配権を保持しえたことが分かる。しかし室町時代に入ると、今度は紀伊国の守護であった大内氏や畠山氏の浜仲南荘への押妨が目立つようになり、金剛心院や仁和寺の支配は次第に及ばなくなっていくのである。このような時期に長保寺の護摩堂で堅海によって書写されたのが、大般若経六〇〇巻である。その跋文に、「入壇」（伝法や授戒のとき行者が灌頂壇に登って受法すること）や「金剛仏子」（密教の教えを奉じ、入壇・灌頂を済ませた者）などの真言宗系の用語が用いられていることから、宗教的にも真言宗の勢力が卓越していたものと思われる。そのため、後世の史料の中にはこの応永年間以降から真言宗に改宗したとするものがある（「長保寺堂社御改書留」〔元禄三年（一六九〇）〕など）。

その後、金剛心院や仁和寺の浜仲南荘への支配は、史料上文明年間（一四六九～一四八七）までしか確認することができず、おそらく全国的な荘園制の衰退と軌を一にして、中央の権門の傘下から離れたのであろう。それと同時に、長保寺は後盾となる権威を失い、一時的に衰退したと言われているが、中央の史料に見えないだけで実態は全く不明である。高麗版の『妙法蓮華経要解』は、応仁元年（一四六七）九月一九日に長保寺常任の有成によって寄進されたものであるが、残念ながらそれ以上の情報を提供するものではない。高麗版の版本をどのような経緯で、有成が入手したのかということも全く不明である。

このようにして、長保寺は中世の時代を終えるのであるが、前述したように戦国時代の天正一三年（一五八五）に宝蔵などが焼亡した際に、貴重な史料が失われたことは、近世以前の長保寺の歴史を知る上で大きな障害となっている。

紀州徳川家菩提寺としての長保寺

戦国時代の終末期から江戸時代の初頭にかけて、快栄と恵尊の二人の僧侶が長保寺の整備に力をつくした。とくに、真言宗系の僧侶としては最後の人である恵尊（一五八一～一六五五）は、元和～寛永年間（一六二〇年代）ころに、大門・鎮守堂などの修理・再建を行っている（「大門再営由来写」（『元和三年十月十八日長保寺大門并食堂鎮守八幡宮棟札』）など参照）。またこの間、慶長六年（一六〇一）には、前年紀伊藩主に移封された浅野幸長が検地を行ったのちに、浜中上村の五石を寺領として寄付している（「慶長六年浅野幸長寺領寄進状」）。

浅野氏が広島に転封されてのち、元和五年（一六一九）紀伊藩主となったのは、徳川頼宣であった。頼宣は、すでに慶安三年（一六五〇）九月に和歌山近辺の寺院の中から菩提寺を選定するための調査を行わせており（「元禄三年雲蓋院留帳抜書」）、長保寺もその候補の一つになっていた可能性がある。そして、寛文六年（一六六六）に熊野巡検の帰りに、頼宣は長保寺に立ち寄って菩提寺にすることを決定したのである。長保寺が紀州徳川家の菩提寺に選定された理由としては、「執当中御書物」によれば、城下から適度な距離があり、長く戦乱が及ばない神聖な場所であるということが述べられている。また、和歌山城が万一落城した際に、最後に立てこもるという事態を想定して、戦略的な観点から長保寺が選ばれたという考え方も存する。いずれも決定的な根拠を欠くので性急に結論付けることはできないが、一つ忘れてはならないのは、勅願寺院であるという長保寺をあえて菩提寺にしたという点である。江戸時代前期の朝幕関係を念頭に置くならば、紀州徳川家の政治的なデモンストレーションの意味あいも含まれていたのではないであろうか。同時に、寛文年間の全国的な寺院整理・統制の動きの中で、紀州の中でも最も由緒ある寺院の一つである長保寺を直接支配下に入れる意図もあったものと思われる。

寛文一一年（一六七一）一月一〇日に頼宣は亡くなり、同二四日に長保寺に埋葬されている。これに先立ち、おそらく寛文六年のことと思われるが、頼宣は「吾可必以天台宗葬」との遺言を残しており、長保寺は真言宗から天台宗へと改宗することになった（その際、頼宣の意向を受けて高野山との折衝に携わったのが雲蓋院住職の憲海であった）。以後、長保寺には歴代藩主（将軍となった吉宗・慶福（家茂）を除く）やその夫人・側室・子女の一部の墓が設置されることになったのであるが、その後の江戸時代における長保寺の基本的な態勢は、寛文一二年（一六七二）に整っている。

まず、六月一三日には日光門主で天台座主・寛永寺門主を兼任した守澄法親王から長保寺を定院室に補す旨の文書が発給され（「日門様定院室御書物」）、また六月一七日には比叡山の執当中からその守澄法親王の命令を確認・徹底させる文書が長保寺に出されている（「執当中御書物」）。

この段階で長保寺は、関東天台を中心とした江戸時代の天台宗の秩序に正式に組み入れられることになったのである。

そのことを受けて、九月一〇日には今度は第二代藩主光貞から菩提寺にふさわしい待遇を用意された。

それまで長保寺の寺領は、浅野幸長から寄進された五石の土地のみであったが、ここでそれに追加して五〇〇石の土地が寄進されたのである。

このようにして安堵された土地は、寄進関係の文書に藩主の黒印が捺されるので「黒印地」と呼ばれるが、そこでは租税・諸役の賦課権、行政・司法権などが保証されていた。しかし、その一方で「寛文五年公府所領下諸州寺院法令」すなわち諸宗寺院法度の遵守を求める文言は、各宗派の画一的統制をめざす幕藩体制下の寺院政策の中に、長保寺が完全に包み込まれるようになったことを意味するのである。

紀州徳川家の菩提寺になった長保寺には、歴代藩主から仏画や経典を含め多

くの什物が奉納されているが、同様に金銭も寄付されている。江戸時代中期以降、長保寺はこの寄付金を元本にして多方面に貸付を行う祠堂銭を行っている。詳細は『下津町史』に譲るが、全国的な動向と同様に、長保寺も貨幣経済に巻き込まれたことを示している。

以上、歴史的推移を祖述してきたが、単なる一地方寺院の動きにとどまらず、全国的な動向とも密接な関わりを持つ点で、長保寺は学術的に貴重な材料を提供していると言うことができるであろう。

注　記　本稿は竹中康彦「長保寺の文化財―仏画と教典―」平成四年、和歌山県立博物館を再掲したものである。

第二項　長保寺の伽藍の変遷について

伽藍の変遷

長保寺は、国宝に指定されている本堂（釈迦堂）・多宝塔・大門をはじめとする諸堂舎によって伽藍が構成されているが、創建期から現在まで複雑な変遷がみられる。江戸時代前期までについては、「長保二年（一〇〇〇）に一条天皇の勅願により性空が開山し、伽藍は寛仁元年（一〇一七）に完成した。仁治三年（一二四二）に西から東へと移転し、延慶四年（一三一一）には本堂がさらに上壇へ移転した。天正一三年（一五八五）の兵火により伽藍の一部が焼亡したが、寛文六年（一六六六）に紀州徳川家の菩提寺になり、伽藍の整備が行なわれた」とされるのがこれまで一般的であったが、近年の調査研究の成果をふまえて、あらためて伽藍の変遷について整理してみたい。

本堂・大門・多宝塔の建立年代について

長保寺の三棟の国宝建造物のうち、本堂（釈迦堂）は一八世紀半ばころに作成された「長保寺記録抜書」所収の「王代一覧抜書」などの記録によって、延慶四年（一三一一）の建立とされる。また、大門は「紀州海郡浜中庄長保寺縁起」などによって、嘉慶二年（一三八八）の建立とされている。

一方、多宝塔だけは、とくにこのような記録がないことから、様式的にみて本堂建立の時期とほぼ同じか、やや下る時期（鎌倉後期～南北朝）の建立とされてきた。ところで、明治期以降、主要な長保寺の建造物は文化財としての修理をうけており、多宝塔は明治三七年（一九〇四）八月二九日に特別保護建造物に指定され、昭和三年（一九二八）二月一一日から同年一二月一一日まで修理工事が行われた。この工事について、昭和四年五月一四日付で文部大臣に提出された事業報告書の控（「長保寺特別保護建造物多宝塔並鎮守堂修理工事精算書」・第五章第三節参照）が残されており、その末尾に心柱の墨書が記録されていた。この墨書は、和歌山県立博物館により赤外線カメラで現物の確認調査が行われ、断片的ではあるが貴重な情報を得ることができた。とりわけ、報告書と現物調査の両方で、建立に関わる銘文の年紀が正平一二年（一三五七）一〇月三日と確認できた点は重要である。また、勧進者の中に有力僧・弘真（文観）の名が見られる点は、この時期の長保寺が南朝方の重要な寺院であった可能性を示唆している。さらに、銘文の中には「下壇より遷して修造した」という文言があり、康永三年（一三四三）の「御影堂勧進帳」にみえる「宝塔」を移転したという記述にも符合する（この史料には、鎮守堂（重要文化財）がみえるので、少なくとも康永三年以前の建立であることが分かる）。

長保寺十二箇坊

長保寺が紀州徳川家の菩提寺となった寛文年間までに、長保寺の塔頭は五箇坊（地蔵院・福蔵院・最勝院・本行院・専光院）に整理されたものと思われ、寛文一二年（一六七二）九月には、それぞれ二〇石が安堵されたのであるが、

それ以前には十二箇坊の塔頭が存在していたことが、江戸時代に書写された「長保寺記録抜書」などの古記録にみえる。

この十二箇坊とは、普賢院・専光院・相応院・吉祥院・小坊（のちの本行院）・最勝院・西福院・西南院・地蔵院・池之坊・明王院・大坊（のちの福蔵院）であり、そのほかに宝光院・西光院があった。これらは、中世における長保寺の繁栄をあらわすものであるが、中世末に衰退したため、整理・統合がはかられたのであろう。

「長保寺記録抜書」には、かつての十二箇坊と江戸時代の五箇坊の場所との関係をあらわす記述がみられ、また近世・近代に長保寺境内を図示した絵画・古文書とあわせると、現在では福蔵院だけが残る五箇坊だけでなく、十二箇坊の位置を比定することも可能である。

近世・近代における伽藍配置の変遷

一七世紀の後半に、長保寺は紀州徳川家の菩提寺となり、真言宗から天台宗に改宗されたが、その時期に、紀州徳川家によって伽藍は大幅な修繕と新築が行われた。その内容は、棟札や棟札を書写した古文書によって知ることができる。まず、現存する棟札からは、寛文七年（一六六七）に御仏殿（紀州藩霊殿・県指定文化財）が新築され、阿弥陀堂の修理がなされたこと、寛永六年（一六二九）・天和三年（一六八三）・宝永三年（一七〇六）・享保二年（一七一七）の数度にわたって八幡社（鎮守堂）の修理が行なわれたこと、さらに享保二年には護摩堂にも修理がなされたことが判明する。

また、棟札を書写した「長保寺大門并食堂鎮守堂棟札〔写〕」・「諸堂棟札写」「（釈迦堂棟札写）」などの古文書からは、上記のほか寛文七年と享保二年の釈迦堂の修理、天和三年の大門と食堂の修理などが行なわれたことがうかがわれる。このように、一七世紀の後半から一八世紀の初頭にかけて、近世の長保寺の伽藍は整備されたと言ってよいであろう。

それ以後の伽藍の変遷については、一八世紀前半の境内を描いたものと考えられる「長保寺絵図面（廟所絵図）」によると、多宝塔の東に護摩堂があること、本堂の西隣に渡り廊下で連絡した食堂があること、本堂の南西に袴腰形式の鐘楼があることが判明する。この伽藍配置は、慶応二年（一八六六）に暴風のため食堂が大破し除去されるまで変化がなかったものと思われる。その後、明治一〇年に護摩堂が本堂西の食堂跡地に移転・再建され、遅れて食堂は明治一七年中に鐘楼の東隣に移転・再建された。また、明治二一年（一八八八）八月三〇日の暴風雨により、阿弥陀堂と鐘楼が倒壊し、明治二二年一一月に同じ場所に再建された（鐘楼は袴腰形式ではなく鐘衝き堂形式で再建）。なお、食堂については、昭和三六年（一九六一）九月一六日の第二室戸台風によって、塔頭の本行院や大門脇の大杉などとともに倒壊したため、現在は残っていない。

約千年に及ぶ歴史を持つ長保寺には、膨大な史料・情報が残されているが、とくに江戸時代より前に成立した史料はきわめて少ない。本稿は、数少ない史料による点描であり、諸賢のご批正を希望して擱筆することにする。

【参考文献】

安藤精一編『和歌山県の文化財』第二巻（清文堂、一九八一年）
下津町史編集委員会編『下津町史』通史編（下津町、一九七六年）
下津町史編集委員会編『下津町史』史料編・上（下津町、一九七四年）
竹中康彦「長保寺伝来の不断念仏式と大般若経について」（『和歌山地方史研究』二二、一九九二年）
竹中康彦「長保寺木造金剛力士立像像内納入文書断簡」（『和歌山県立博物館研究紀要』二、一九九七年）
竹中康彦「長保寺の伽藍に関する二、三の考察」（『和歌山県立博物館研究紀要』三、一九九八年）
竹中康彦「浜中荘―中世寺院・長保寺の歴史とともに―」（山陰加春夫編『きのく

に〔荘園の世界〕』下巻（清文堂、二〇〇二年）
服部英雄「書評　山陰加春夫編『きのくに〔荘園の世界〕』下巻」（『和歌山地方史研究』四四、二〇〇二年）
社団法人和歌山県文化財研究会編『国宝長保寺本堂修理工事報告書』（長保寺、一九七二年）
和歌山県立博物館編『長保寺の文化財―仏画と経典―』（一九九二年）
和歌山県立博物館編『八代将軍吉宗と紀州徳川家』（一九九五年）

第三項　境内の概要と建造物

長保寺は紀伊水道に面する海南市下津町の上集落にある古刹で、紀州徳川家の墓所として知られる。下津港から小畑川沿いに二kmほど東方に入った谷間の南斜面にあり、境内の広さは一万五千坪余りになる。境内の常緑広葉樹林の林叢は県指定天然記念物（昭和四六年指定）、境内は和歌山藩主徳川家墓所として国指定史跡（昭和五六年指定）になっている。

山裾の南を切り開いた上壇に本堂、多宝塔などの堂塔が建ち、そのさらに東の上壇に鎮守堂が建つ。鎮守堂の東側は、山腹が切り開かれ、紀州藩主の墓所が造られている。墓所には紀州徳川家初代藩主徳川頼宣を始め、各代藩主やその夫人が祀られている。なお五代藩主吉宗は、江戸で八代将軍となったため、上野寛永寺に墓所がある。

本堂は国宝に指定されており、桁行五間、梁間五間、一間向拝付、入母屋造、本瓦葺の密教本堂形式で、延喜四年（一三一一）に建立された。和様を貴重とするが、内陣まわりは禅宗様が採用され、特徴的な空間を造る。昭和四七年（一九七二）に根本修理されている。

多宝塔は本堂の東側に建つ、正平一二年（一三五七）に建立された桁行三間、梁間三間、本瓦葺の塔で、国宝に指定されている。今回事業の修理対象で、昭

写真1-1　大門より境内を遠望する

写真1-2　本堂

写真1-3　護摩堂

写真1-4　阿弥陀堂

和二年（一九二七）から昭和三年にかけ解体修理されている。プロポーションに優れた多宝塔で、上下層で瓦の大きさを変えるなど特徴的な技法が見られる。

本堂の西側には護摩堂、阿弥陀堂、鐘楼の堂舎が建つ。護摩堂は江戸時代後期の『紀伊名所図会』では、現在の位置に食堂が描かれ、護摩堂は本堂の東に描かれている。現存の建物は桁行三間、梁間三間、寄棟造、本瓦葺で、奈良国立文化財研究所の調査では、一六世紀後期の建立と考えられている。

鎮守堂の建立年代は不明であるが、寺伝では永仁三年（一二九五）とされ、様式上も鎌倉時代後期と考えられている。重要文化財に指定されており、今回修理を行った。一間社流造、檜皮葺の建造物で、鎮守堂と称するが、かつての境内社である。鎌倉時代にさかのぼる一間社流造の遺構として大変貴重なもので、多宝塔と同じ昭和二～三年に根本修理されている。

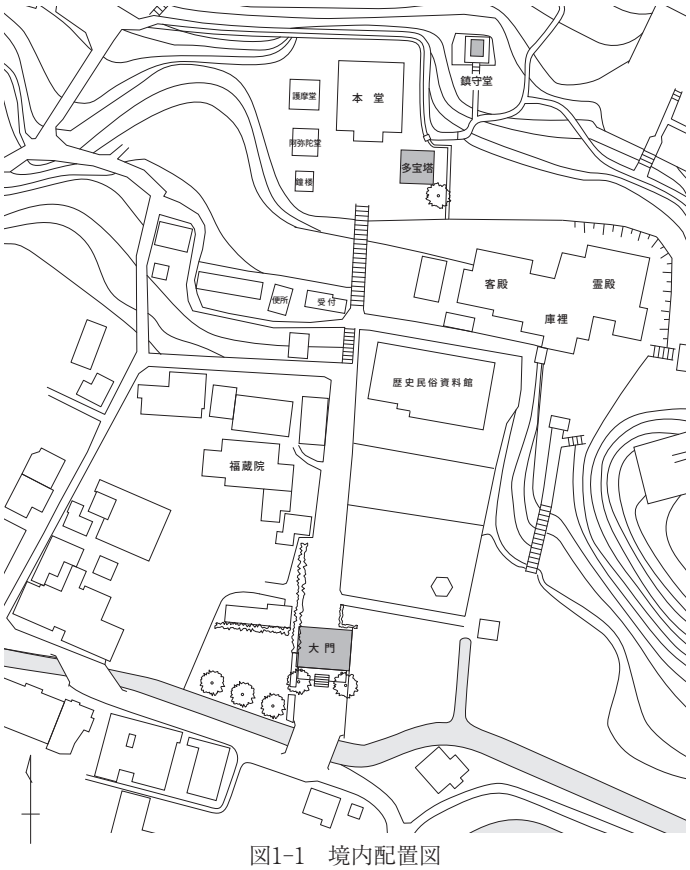


図1-1　境内配置図

上壇から石段を下りた中壇の東側に、土塀に囲まれ本坊がある。本坊は庫裏、客殿、紀州藩霊殿などの建造物群よりなる。霊殿は寛文七年（一六六七）に建立された入母屋造、本瓦葺の建物で、西側の二室に、歴代藩主や藩主夫人の位牌を祀っている。良材の桧を用いた普請になり、安永七年（一七七八）に建立された客殿とともに、県指定文化財（昭和四五年指定）になっている。

中壇から南へ下ると、東に海南市歴史民俗資料館（平成二四年に閉館）、西に福蔵院があり、大門に至る。

大門は小畑川に掛かった橋に面して建つ山門で、三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺で、国宝に指定されている。棟札写により、嘉慶二年（一三八八）に後小松天皇の勅宣を受け、寺僧の実然が建立したことが知られ、当初の扁額には応永二四年（一四一七）の銘がある。なお現在掛かる扁額は、寛文四年（一六六四）に徳川頼宣の命により、大門修理にあたって紀州藩の儒学者李梅溪が揮毫したものである。明治四三年（一九一〇）～四四年にかけて解体修理が行われ、今回の事業で、再び根本修理されることになった。

長保寺は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて建立された、本堂、多宝塔、大門が国宝指定されていることに加え、近世の紀州徳川家菩提寺となった頃の遺構群が良好に保存されており、文化財の宝庫となっている。

第二節　指定告示

第一項　指定年月日

大　門　　明治三三年四月七日（内務省告示第31号）
多宝塔　　明治三七年八月二九日（内務省告示第57号）
鎮守堂　　大正三年四月一七日（文部省告示第85号）

第二項　指定告示

①内務省告示第三十一号

古社寺保存法第四条ニ依リ左記ノ建造物ヲ以テ特別保護建造物ノ資格アルモノト定ム　　明治三十三年四月七日　内務大臣　侯爵　西郷従道

長保寺大門（仁王門）　三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺　和歌山県海草郡濱中村長保寺境内

②内務省告示第五十七号

古社寺保存法第四条ニ依リ左記ノ建造物ヲ以テ特別保護建造物ノ資格アルモノト定ム　　明治三十七年八月廿九日　内務大臣　子爵　芳川顕正

長保寺本堂（釈迦堂）　桁行五間、梁間五間、単層、入母屋造、本瓦葺

仝寺塔婆（多宝塔）　三間二層塔婆、屋根本瓦葺

所在地名　和歌山県海草郡濱中村長保寺境内

③文部省告示第八十五号

古社寺保存法第四条ニ依リ左記ノ建造物ヲ以テ特別保護建造物ノ資格アルモノト定ム　　大正三年四月十七日　文部大臣　法学博士　一木喜徳郎

長保寺鎮守堂　一間社流造、屋根桟瓦葺

所在地名　和歌山県海草郡濱中村長保寺境内

④文部省告示第六百一号

左記国宝ハ其ノ構造形式下欄ノ通改メタリ
昭和十六年四月二十四日　文部大臣　橋田邦彦

大正三年文部省告示第八十五号

長保寺鎮守堂　和歌山県海草郡下津町長保寺

和歌山県海草郡下津町長保寺境内　一間社流造、屋根桧皮葺

⑤文化財保護委員会告示第六十五号

文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第二十七条第二項の規定により、昭和二十八年三月三十一日付をもって第一号表上欄に掲げる重要文化財を同表下欄のようにそれぞれ国宝に指定し、及び第二号表上欄に掲げる重要文化財の一部を同表下欄のようにそれぞれ国宝に指定した。

［上欄］名称・指定告示

長保寺本堂（釈迦堂）　明治三十七年内務省告示第五十七号

長保寺塔婆（多宝塔）　明治三十七年内務省告示第五十七号

長保寺大門（仁王門）　明治三十三年内務省告示第三十一号

［下欄］名称・員数・構造及び形式

長保寺本堂　一棟　桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、本瓦葺、附厨子一基

長保寺多宝塔　一棟　三間多宝塔、本瓦葺

長保寺大門　一棟　三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺、附扁額一面応永廿四年六月一日の記がある

所有者　長保寺

所有者の住所　和歌山県海草郡下津町大字上

所在の場所　和歌山県海草郡下津町大字上

⑥文化財保護委員会告示第四十七号

次の表の上欄に掲げる重要文化財の名称、員数並びに構造及び形式についての記載事項を同表の下欄のように改める。

昭和四十一年六月十一日　文化財保護委員会委員長　稲田清助

［上欄］名称・関係告示

長保寺鎮守堂　大正三年文部省告示第八十五号及昭和十六年文部省告示第六百一号（構造形式の変更）

［下欄］名称・員数・構造及び形式・所有者

長保寺鎮守堂　一棟　一間社流造、桧皮葺　長保寺

所有者の住所　和歌山県海草郡下津町大字上

所在の場所　和歌山県海草郡下津町大字上

第三節　規　模

大　門

［下　層］

桁　行	桁行両端柱間真々
梁　間	梁間両端柱間真々

［上　層］

桁　行	桁行両端柱間真々
梁　間	梁間両端柱間真々
軒の出	側柱真より茅負外下角まで
軒　高	柱礎石上端より丸桁外上角まで
棟　高	柱礎石上端より棟頂上まで
平面積	下層柱真々内側面積
軒面積	上層茅負外下角内側面積
屋根面積	平葺面積

七・三七八メートル
四・〇三〇メートル
七・一二〇メートル
三・八七八メートル
二・九〇〇メートル
六・五三〇メートル
一一・一〇五メートル
五二・五三一平方メートル
一二五・〇四〇平方メートル
一七〇・三二九平方メートル

多宝塔

［下　層］

桁　行	桁行両端柱間真々
梁　間	梁間両端柱間真々
軒の出	側柱真より茅負外下角まで
軒　高	柱礎石上端より丸桁外上角まで
平面積	柱真々内側面積
軒面積	茅負外下角内側面積
屋根面積	平葺面積

四・六三三メートル
四・六三三メートル
一・五〇六メートル
三・三六六メートル
二一・四六一平方メートル
六六・〇八二平方メートル
六五・四一九平方メートル

［上　層］

直　径	向かい合わせ柱間真々
軒の出	側柱真より茅負外下角まで
軒　高	柱礎石上端より丸桁外上角まで
棟　高	柱礎石上端より相輪頂上まで
軒面積	茅負外下角内側面積
屋根面積	平葺面積
総屋根面積	下層・上層合計

一・九六六メートル
一・三〇六メートル
七・〇一四メートル
一三・三五九メートル
一一・一〇五メートル
四四・四三一平方メートル
一〇九・八五〇平方メートル

鎮守堂

桁　行	桁行両端柱間真々
梁　間	梁間両端柱間真々（向拝含む）
軒の出	背面柱真より茅負外下角まで

二・一九七メートル
二・四二五メートル
〇・七四二メートル

向拝柱真より茅負外下角まで　〇・五七七メートル
軒　高　柱礎石上端より丸桁外上角まで　二・二七九メートル
平面積　柱真々内側面積　三・二六八平方メートル
軒面積　茅負外下角内側面積　一〇・二七六平方メートル
屋根面積　平葺面積　一五・五六九平方メートル

第四節　構造形式

【大門】

概要

三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺、南面。

平面

上層、下層とも桁行三間、梁間二間とする。下層は桁行中央間を通路とし、両脇間は前後二室に区分し、正面側は左右脇間に仁王像（県指定文化財）を置く。脇間は床を設けず土間に造る。上層は一室に造り、背面側中央間に入口を設ける。四周に縁を廻し、勾欄を付ける。

基礎

基壇は割石を縁石として並べて造る。柱礎石は自然石礎石を据える。基壇内を三和土叩きとする。

軸組

柱は全て円柱とし、礎石建て。下層柱は地覆、腰貫、飛貫、頭貫を通す。上層柱は土居桁上に建て、地貫、頭貫を通し、外周に切目長押、内法長押を打つ。

柱間装置

下層中央間は吹き放し。下層両脇間正面と背面、及び内寄りの側面は金剛柵を付ける。脇間の前後境は横板壁、脇間外寄り側面の壁は真壁白漆喰塗り。上層は背面中央間に板扉吊り込み。その他外廻りは真壁白漆喰塗り。

組物

下層は和様三手先、通肘木上の肘木鼻は拳鼻付。各間の中備は間斗束二段とする。上層は和様三手先、中備は間斗束とし、柱筋と手先の通肘木間に軒小組天井を張り、丸桁と手先通肘木間に支輪を入れる。

軒廻り

二軒、本繁垂木。組物上に丸桁を据え垂木を打つ。木負、茅負を取り付け、切裏甲を並べる。茅負は隅増付き。隅木鼻は和様に造り隅木蓋付き。

縁廻り

上層は四方に勾欄付き廻縁。勾欄は隅を擬宝珠柱で納め、背面側は中央間を開放する。

妻飾り

虹梁大瓶束。破風板には欠眉を施し、拝みには猪目懸魚を下げ、懸魚には六葉を付ける。

屋根

入母屋造、本瓦葺。大棟、降棟、隅降棟とも棟端に鬼瓦据え、鳥衾付き。

【多宝塔】

概要

三間多宝塔、本瓦葺、南面。

平面

下層は桁行三間、梁間三間、内部中央間一間を内陣とし、北寄りに須弥壇を置く。周囲は切目縁を巡らす。上層は円形平面とし、内部空間はなく、周囲に縁、勾欄を巡らす。

基　礎

柱礎石は自然石切石。縁束石は切石礎石を据える。周囲基壇は花崗岩切石を並べ、基壇内を三和土叩きとする。

軸　組

柱は円柱、下層は礎石上に建て、地貫、飛貫、頭貫を通し、庇柱は角柱で外部に切目長押、腰長押、内法長押を打つ。堂内は内法長押を打つ。上層柱は敷桁上に建て、柱上台輪、長押を打ち廻し、中心柱上部に左義長柱を入れる。

柱間装置

下層は各面とも中央間を両開き板戸吊り込み。内外に幣軸付き。両脇間は額縁付き連子窓、腰長押下を板壁とする。内部は来迎柱間を来迎壁とする。

組　物

下層は柱上に和様出組、中備は蟇股とする。上層は和様四手先とする。

軒　廻り

上層、下層とも二軒、本繁垂木。組物上に丸桁を据え垂木を打つ。木負、茅負を取り付け、布裏甲を打つ。茅負は隅増付き。隅木は和様で隅木蓋付き。

天　井

下層は内外陣とも折上小組格天井。上層組物の手先間は小組天井。

屋　根

下層は上層亀腹より葺き下し。上層は宝形造、本瓦葺。隅棟端に鬼瓦を据え鳥衾付き。棟の相輪は、露盤上に請花、火炎付き九輪を載せる（修理前は一輪欠失し八輪）。

【鎮守堂】

概　要

一間社流造、檜皮葺、南面。

平　面

身舎は桁行一間、梁間二間。内部を内陣と外陣に区分し、背面を除く三方に勾欄付きの縁を廻らし、背面柱筋に脇障子を立てる。身舎正面に向拝取り付き。木階六級を造る。

基　礎

土台下及び雨落葛石とも花崗岩切石。軒下周辺は三和土叩き仕上げ。

軸　組

身舎、向拝ともに土台を廻らせ、身舎柱は円柱、土台上に建て、腰貫、頭貫を通し、外部に切目長押、内法長押を打つ。向拝柱は大面取り角柱。土台上に建て、木鼻付き頭貫を入れ、身舎とは繋虹梁で繋ぐ。

柱間装置

身舎正面は引違格子戸、内陣正面は幣軸を構え板扉釣り込み。その他の壁は板壁とする。

組　物

身舎は柱上に和様三斗組、中備は蟇股。向拝は和様連三斗組で中備を蟇股とする。

軒　廻り

身舎、向拝とも二軒、本繁垂木。茅負は隅増付き、上に裏甲を打つ。破風は欠眉、猪目懸魚付き。

屋　根

流造、檜皮葺。軒付一重。大棟は瓦積み、棟両端に鳥衾付鬼瓦を据える。

第二章　修理事業の概要

第一節　事業に至るまでの経過

長保寺の大門、多宝塔、鎮守堂は、明治時代から大正時代にかけて、それぞれ国の文化財に指定された。大門は明治四三～四四年（一九一〇～一九一一）に文化財建造物の保存修理で解体修理され、これにやや遅れ、多宝塔と鎮守堂も、昭和二～三年（一九二七～一九二八）に文化財として解体修理されている。その後これら三棟の堂塔は、根本的な修理はなく、近年になり経年劣化によって各部に破損が生じていた。

ことに解体修理後一〇〇年余りが経過した大門は、屋根まわりの垂下や、屋根瓦の滑り出しが顕著になり、重篤な状態に至っていた。また多宝塔も北面屋根を中心に、屋根瓦の破損が進んでおり、また相輪も腐朽し、一部部材が欠失してしまっていた。鎮守堂は、昭和五四年（一九七九）に葺き替えた檜皮が腐朽、摩耗したうえ、さらに北東隅部の屋根は穴が空いてしまい、ムササビなどの小動物が、小屋内に出入りするような事態となっていた。

長保寺では、大門の破損が重篤となった一〇年余り前から、海南市教育委員会、和歌山県教育委員会を通して、文化庁へ保存修理事業の立ち上げを請願してきた。

その結果、文化庁など関係機関の取り計らいにより、平成二三年度に至り、国庫補助事業として保存修理事業が採択され、平成二三年一月から平成二四年一二月までの、二四ヶ月間にわたる事業期間で、事業費一五〇、〇〇〇、〇〇〇円により、大門、多宝塔、鎮守堂の保存修理事業を施行する運びとなった。

第二節　事業の運営と経過

事業は宗教法人長保寺の直轄事業として行い、事業事務は長保寺修理委員会に諮り、委員長の決裁によって運営した。事務業務は修理委員会の事務補助員が行った。

工事は請負工事で株式会社金剛組に発注し、施工した。設計監理は、公益財団法人和歌山県文化財センターに業務委託して実施した。

工事の運営にあたっては、事業者、設計監理者、施工者の三者によって、毎月定例会議を開催し、問題の共有化と意志決定を行った。

平成二三年一一月二四日と平成二四年七月二六日には、文化庁担当官の現地指導を受けた。

平成二三年一月一日付けで国庫補助金の交付決定を受け、保存修理事業に着手した。平成二二年度は、事業費一〇、〇〇〇、〇〇〇円であった。設計監理者による実施設計に基づき、平成二三年三月八日に入札を執り行い、落札した株式会社金剛組と、年度を跨ぐ債務負担行為をとって、三月一〇日に工事請負契約を締結した。契約直後に東日本大震災がおこり、工事の進捗が危ぶまれたが、金剛組の迅速な資材の手配により、予定通り共通仮設と大門の素屋根を建設することができた。

平成二三年度は四月一日に、事業費一〇〇、〇〇〇、〇〇〇円で国庫補助金の交付決定を受け、引き続き大門と多宝塔、鎮守堂の修理を進めた。多宝塔の軒足場を建設し、屋根瓦を精査した結果、各面の瓦は破損が大なることが判明し、これにより補助事業の計画変更を申請し、平成二三年一二月一六日に文化庁長官の許可を得て、多宝塔の屋根瓦を全面葺き替えすることとなった。

平成二四年度は四月一〇日に事業費四〇、〇〇〇、〇〇〇円で、国庫補助金の交付決定を受け、残る大門と多宝塔の屋根葺きを進めた。工事は順調に進捗

したが、大門の素屋根を撤去した結果、軒内土間叩きの破損が進んでいることが判明したため、重ねて補助事業の計画変更を申請し、平成二四年八月二九日に許可を得て、大門の土間叩きを追加修理することとなった。

これにより、平成二四年九月二八日をもって、全ての工事を完了した。総事業費は一五〇、〇〇〇、〇〇〇円、平成二四年一二月三一日に報告書刊行を含む全事業を完了し、延べ二四ヶ月にわたる今回の保存修理事業を終えた。

第三節　工事関係者

事業者

宗教法人	長　保　寺	代表役員　瑞樹　正哲

修理委員会

委員長	（海南市教育委員会教育長）	西原　孝幸
副委員長	（海南市教育委員会次長）	岡本　芳伸
前		谷　勝美
委員・財務担当	（長保寺代表役員）	瑞樹　正哲
委員・監事	（長保寺檀家総代）	若林　康弘
委員	（海南市文化財審議会）	笠原　正夫
委員	（海南市文化財審議会）	植田　法彦
委員	（海南市教育委員会生涯学習課長）	中阪　雅則
前		田幡　好章
委員	（海南市教育委員会生涯学習課長補佐）	野上　修司
前		田中　良幸
事務補助員	（長保寺法嗣）	瑞樹　弘芳

行政関係者

文化庁	参事官	村田　健一
前		大和　智
修理指導部門	主任調査官	豊城　浩行
文化財調査官		西山　和宏
同		田中　禎彦
和歌山県教育委員会	教育長	西下　博通
前		山口　裕市
生涯学習局	局長	喜多　英夫
前		井上　誠
文化遺産課	課長	川端　真理
前		津井　宏之
同	副課長	松本　幸久
前		濱口　洋
同	保存班長	西山　耕司
同	主査	川戸　章寛
海南市教育委員会	教育長	西原　孝幸
	教育次長	岡本　芳伸
前		谷　勝美
生涯学習課	課長	中阪　雅則
前		田幡　好章
同課長補佐		野上　修司
前		中阪　雅則
文化振興係	係長	栩野　望
前		津田　成吾

設計監理者

公益財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　森　郁夫

前事務局長（兼文化財建造物課長）　鈴木　嘉吉

前文化財建造物課副主査（工事主任）　渋谷　高秀

同　技師（工事主任補佐）　田中　洋次

同　技術補佐員　御船　達雄

同　主事　下津健太朗

田村　收子　矢倉　嘉人

施工者

株式会社　金剛組

代表取締役　刀根　健一

前営業本部長　小川　完二

営業本部第二グループ　課長　番匠谷敏雄

前工事統括部長　安雑　孝造

工事部課長代理（現場代理人）　赤山　徳隆

住田　博夫

中山奈津夫

主な協力業者

仮設工事　株式会社伊達組　伊達　恕

木工事　株式会社木内組　木内　繁男

屋根工事（瓦）　有限会社匠平安瓦　東村　俊之

屋根工事（檜皮・土居葺）　有限会社宮川屋根工業　宮川　善史

左官工事　小林左官店　小林錦四郎

相輪工事　株式会社大谷相模掾鋳造所　大谷　哲秀

塗装工事（古色）　古川塗装株式会社　古川　智通

塗装工事（胡粉塗）　ターナー色彩株式会社　地平　宏

板金工事　有限会社阪南板金工作所　佐々木　明

避雷針工事　大阪避雷針工業株式会社　西村　文宏

防腐材塗布工事　株式会社マエダ　谷　正明

防蟻工事　有限会社ノカオイジャパンインターナショナル　ダウバーニール

木材納入　西垣林業株式会社　西垣　泰幸

施工に携わった主な職方

大工（棟梁）　赤根　清三

小浦　悟

中川　瑛一

東村　俊之

瓦葺師　奥村　征孝

西山　誠

大原　博

鬼師　西村　信生

檜皮師　塩田　隆司

杉村　功

左官　小林錦四郎

玉置　徳一

鋳物師　大谷　哲秀
作業員　澤田　孝夫

第四節　事業費

一　収入内訳

区分	事業者負担額	海南市補助額	和歌山県補助額	国庫補助額	合計
平成二三年度	七五〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
平成二三年度	七、五〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇
平成二四年度	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三二、〇〇〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇、〇〇〇
合計	一一、二五〇、〇〇〇	一一、二五〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇、〇〇〇

二　支出内訳

区分	金額（円）	説明
総事業費	一五〇、〇〇〇、〇〇〇	
Ⅰ主たる事業費	一四五、六五三、九〇〇	
A修理工事経費	一二三、三〇八、八五〇	
(1)工事請負費	一二三、三〇八、八五〇	
1大門工事費	七〇、八四七、三七一	
ア木工事	三二、八六〇、七八二	
(ア)労務	二〇、九一六、六六三	
a大工	一四、〇四三、三七五	六五七人
b作業員	六、八七三、二八八	五三八人
i特殊作業員	一、八五二、〇三二	一三〇人
ii普通作業員	五、〇二一、二五六	四〇八人
(イ)原材料	一一、九四四、一一九	
a補足木材	一〇、七一六、六五九	
i化粧材	三、七七七、四九八	一・六三六m³
ii野物材	五、四八一、三三二	五・一七九m³
iiiその他材	一、四五七、八二九	四・七八六七m³
b金属資材	八七八、四二四	
i洋釘類	二〇、三〇一	三八kg
ii鎹類	一五〇、二五五	三七五本
iii補強金具類	七〇七、八六八	一式
c雑資材	三四九、〇三六	
i接着剤	一〇、六八四	二〇kg
ii合成樹脂	二二二、六〇〇	一式
iii古色材	二六、七一二	一式
ivその他材	八九、〇四〇	一式
イ屋根工事	一七、九七五、三四五	
(ア)施工	一一、二八〇、四三六	
a解体・瓦整理	一、六〇六、二二三	一七〇・三m²
b土居葺き	五、〇三九、一七七	一七〇・三m²
c本瓦葺き	四、六三五、〇三六	一七〇・三m²
i軒瓦葺き	五〇三、三一六	四九・二m
ii本瓦平葺き	二、二一二、一九七	一七〇・三m²
iii大棟積み	二九三、三九六	八・二m
iv降り棟・隅棟積み	八三〇、二八〇	五一m
v瓦選別	七九五、八四七	一七〇・三m²

(イ)原　材　料	六、六九四、九〇九	
a補　足　瓦	六、六九四、九〇九	一式
ウ仮設工事	一五、四八八、四九二	
(ア)素　屋　根	七、二八二、一一二	二七〇㎡
(イ)工作保存小屋	一、七九六、三〇〇	七七・七六㎡
(ウ)事務所・休憩所	三、五〇〇、〇〇〇	一式
(エ)電気給排水工事	一、一三〇、〇八〇	一式
(オ)仮設物撤去	一、七八〇、〇〇〇	一式
エ雑　工　事	四、五二二、七五二	
(ア)左官工事	二、九三八、三五七	一式
a漆喰塗直し	一、二二七、八〇二	七三・四㎡
b胡粉塗直し	三一六、一〇四	二五・七㎡
c軒内土間叩き	一、三九四、四五一	九四・九㎡
(イ)防蟻工事	二七六、〇九五	
a木部処理	二七六、〇九五	二五五㎡
(ウ)防災設備撤去復旧	七一二、〇〇〇	一式
(エ)修理銘板作成	一九五、八〇〇	一枚
(オ)発生材処分	四〇〇、五〇〇	一五車
2多宝塔工事費	一七、五五一、九五五	
ア木　工　事	二、四六六、四七六	
(ア)労　　務	一、六六〇、一二九	
a大　　工	一、三八九、三七五	六五人
b作　業　員	二七〇、七五四	二二人
(イ)原　材　料	八〇六、三四七	
a補足木材	七八八、五三九	
i化　粧　材	三九八、五八六	〇・二〇五五㎥

ii野　物　材	三八九、九五三	〇・八七六三㎥
b雑　資　材	一七、八〇八	一式
イ屋根工事	九、九五三、二〇七	
(ア)労　　務	六、二六六、七三八	
a解体・瓦整理	一、〇八四、四〇〇	一二二・四㎡
b土居葺き	一、六〇九、七九七	六一㎡
c本瓦葺き	三、五七二、五四一	一二二・四㎡
i軒瓦葺き	五五九、〇二八	六一・四m
ii本瓦平葺き	一、七七九、五三〇	一二二・四㎡
iii隅棟積み	五二四、五〇一	三六・二m
iv付熨斗積み	一五〇、四五四	一四・七m
v瓦　選　別	五五九、〇二八	一二二・四㎡
(イ)原　材　料	三、六八六、四六九	
a補　足　瓦	三、六八六、四六九	一式
ウ左官工事	一二四、一五三	六㎡
(ア)上層亀腹漆喰解体	八、三八三	六㎡
(イ)上層亀腹荒壁修理	四七、五七九	六㎡
(ウ)上層亀腹漆喰塗り	六八、一九一	六㎡
エ仮設工事	一、三〇一、六二五	六五㎡
オ雑　工　事	三、七〇六、四九四	
(ア)相輪補修工事	三、一一八、九一六	一式
(イ)避雷針撤去復旧工事	五七四、二二八	一式
(ウ)修理銘札作成	一三、三五〇	一枚
3鎮守堂工事費	四、九八〇、八五七	
ア木　工　事	四五二、四三八	
(ア)労　　務	三二〇、五四四	

a野地補修	三二〇、五四四	一五人
(イ)原材料	一三一、八九四	
a補足木材	一一四、〇八六	〇・二八四六㎥
b雑資材	一七、八〇八	一式
イ屋根工事	三、二八七、一〇三	
a旧檜皮解体	二三、〇一三	一五・七六㎡
b軒付け積み替え	三二四、一一〇	〇・八四㎡
c軒付け補修	一八五、二五六	一〇・一m
d平葺き	二、四四四、八八九	一五・七六㎡
e品軒積み	九六、〇〇七	〇・二八㎡
f棟瓦積み	一三八、五九〇	二・八三m
g補足瓦	七五、二三八	一式
ウ仮設工事	五二五、〇〇〇	
a素屋根建設・解体	五二五、〇〇〇	四二㎡
エ雑工事	七一六、三一六	
(ア)屋根野地防腐剤塗布	六三、一四七	一五・七六㎡
(イ)飛散防止金網	七〇、一六三	一五・七六㎡
(ウ)防蟻工事	四四五、〇〇〇	一式
(エ)修理銘札作成	一三、三五〇	一枚
(オ)発生材処分	一二四、六五六	二台
4諸経費	二四、〇五六、八一八	
5消費税	五、八七一、八四九	
B委託料	二八一、四〇〇	
(1)委託料	二八一、四〇〇	
ア多宝塔相輪調査委託	二六八、〇〇〇	
(ア)直接業務費	二三〇、〇〇〇	一式

(イ)諸経費	三八、〇〇〇	一式
イ消費税	一三、四〇〇	一式
C設計料及び監理料	二二、〇六三、六五〇	
(1)委託料	二二、〇六三、六五〇	
ア設計料及び監理料	二一、〇一三、〇〇〇	
(ア)直接業務費	一〇、三〇〇、九〇〇	三七七日
(イ)諸経費	七、二一〇、四七〇	一式
(ウ)技術経費	三、五〇一、六三〇	一式
イ消費税	一、〇五〇、六五〇	一式
Ⅱその他の経費	四、三四六、一〇〇	
A事務費	四、三四六、一〇〇	
(1)賃金	一、二二五、五〇〇	
ア事務補助員	一、二二五、五〇〇	一九月
(2)旅費	九六、〇四〇	
ア特別旅費	九六、〇四〇	二回
(3)需用費	二、九三〇、五二〇	
ア消耗品費	一四五、二九〇	二一月
イ印刷製本費	二、七八五、二三〇	
(ア)工事報告書	二、七八五、二三〇	三〇〇部
(4)役務費	九四、〇四〇	
ア通信運搬費	二、八四〇	二一月
イ手数料	九一、二〇〇	二一月

第三章　工事実施の概要

第一節　修理の大要

第一項　修理方針

大　門－半解体修理
多宝塔－屋根葺替・部分修理
鎮守堂－屋根葺替修理

第二項　修理内容

【大　門】

ア　仮設工事　素屋根をかけた。その他工作保存小屋、事務所休憩所を建設した。
イ　木工事　屋根野地全てと小屋組の一部を解体し、締め直しと不陸調整を行った。また小屋組に軒垂下防止の構造補強を施した。
ウ　屋根工事　瓦葺屋根を全て葺き直した。
エ　左官工事　壁の漆喰塗りを塗り直した。軒内土間叩きを叩き直した。
オ　雑工事　屋根野地に防腐処理を施した。

【多宝塔】

ア　仮設工事　軒足場をかけた。相輪足場をかけた。
イ　木工事　破損した屋根野地、裏甲等を修理した。
ウ　屋根工事　瓦葺屋根を全面葺き直した。
エ　左官工事　亀腹の漆喰塗りを塗り直した。
オ　雑工事　相輪を修理した。屋根野地に防腐処理を施した。

【鎮守堂】

ア　仮設工事　素屋根をかけた。
イ　木工事　茅負、裏甲と、野垂木、野木舞を修理した。
ウ　屋根工事　檜皮屋根を全て葺き直した。
エ　雑工事　防蟻処理を施した。屋根野地に防腐処理を施した。

第二節　工事工程

第一項　工期

工事期間　着手　平成二三年一月一日
　　完了　平成二四年九月三〇日　延べ二一ヶ月間
事業期間　着手　平成二三年一月一日
　　完了　平成二四年一二月三一日　延べ二四ヶ月間

第二項　実施工程

工事着手　平成二三年三月一一日
第一回変更契約（多宝塔相輪解体追加）　平成二三年八月一〇日
第二回変更契約（多宝塔屋根修理追加）　平成二四年二月八日
第三回変更契約（瓦精算、大門土間叩き追加、工期延長）　平成二四年八月二八日
工事完了　平成二四年九月二八日

各種工事の工程は表3-1の通り。

表3-1　実施工程表

期間		着手：平成23年１月１日　完了：平成24年12月31日　事業期間24箇月間																								
		平成22年度			平成23年度												平成24年度									
施工区分		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
工事事務	着手準備																									
	実測図調整																									各部の実測、製図
	調書作成																									破損、技法調書他
	記録作成																									写真撮影、施工記録他
	報告書編集																									原稿、挿図作成、編集
	報告書印刷																									印刷、製本
大門	仮設工事																									素屋根建設、解体
	木工事																									野地補修、小屋組補強
	屋根工事																									本瓦葺屋根の葺き替え
	左官工事																									漆喰壁塗り直し、土間叩き
	雑工事																									避雷針撤去復旧
多宝塔	仮設工事																									軒足場建設、解体
	木工事																									野地、軒先、縁廻り補修
	屋根工事																									本瓦葺屋根の葺き替え
	左官工事																									亀腹漆喰塗の塗り直し
	雑工事																									相輪修理
鎮守堂	仮設工事																									素屋根建設、解体
	木工事																									屋根野地補修
	屋根工事																									檜皮屋根の葺き替え
	雑工事																									防蟻工事
共通仮設工事																										事務所、保存小屋建設、解体
跡片付け、残務整理																										

第三節　実施仕様

第一項　工事事務

一　工事運営の規準

文化財保護法、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律及び同法施行令、文化庁文化財補助金交付規則、その他関係法令、並びに、文化財保存事業費及び文化財保存施設整備費関係補助金交付要綱、同国庫補助実施要領、重要文化財（建造物・美術工芸品）修理・防災事業費国庫補助要項、和歌山県財務規則等を参照して工事の運営を行った。

工事の設計監理は公益財団法人和歌山県文化財センターに委託し、工事の主任技術者は文化庁の承認を得た者をあてた。

二　着　手

工事着手に当たっては工事場設置の届出等、必要な手続きを行うとともに、工事工程及びこれに関連する予算執行計画を作成した。

三　帳　簿

予算差引簿・現金出納簿・見積・入札・納品・検収・請求・領収書及び工事日誌・工事写真等必要な書類を整え、詳細かつ正確に記入し保管した。

四　記録作成

ア　調　書

破損・各部仕様・痕跡手法等その他必要な調書を作成した。

イ　写真撮影

修理前、竣工及び工事中に必要な記録写真を撮影した。竣工、修理前写真は四×五判、その他はブローニー判及びデジタルカメラを使用した。

五　計画変更

施工の進捗により、破損の実態に則し、工事費内訳の変更、仕様を変更する必要が生じたため、文化庁に申請し、承認を得て実施した。

六　工程報告

工事の進捗状況は、別に定められた書式によって工程月報を作成し、写真添付の上、各月末日から五日以内に文化庁に報告した。

七　修理工事報告書

竣工後、工事調査結果を編集した修理工事報告書を三〇〇部刊行した。報告書は普及と活用の適正を図るため、文化庁指定先に配布した。

八　竣　工

全事業が完了したのに際し、工事の経過及び結果を記載した実績報告書に精算書・実施仕様書・図面・竣工写真・その他資料を添付し、事業完了後三〇日以内に和歌山県教育委員会に提出した。

第二項　工事実施仕様

一　一般事項

ア　仕様書の範囲

この仕様書に示すもの以外については、「建築工事共通仕様書」（国土交通省大臣官房庁営繕部監修、社団法人営繕協会編集）によった。

イ　設計図書

設計図書は、図面及び仕様書とした。

ウ　監督員

監督員は「国宝長保寺大門ほか二棟保存修理」のため、文化庁の承認を得た主任技術者をあてた。

エ　疑義に対する協議

設計図書に明記のない場合、又疑いを生じた場合は、監督員と協議した。

オ　現場の納まりなどの関係による協議

現場の納まり、取合などの関係で、設計図書によることが困難又は不都合であったさいは、監督員と協議した。

カ　協議の結果の処置

監督員と協議を行い、必要に応じて設計変更を行った。設計変更にいたらぬ事項は、打合せ記録を作成し、簡易な事項については省略した。

キ　官公署・その他の手続き

工事の施工に必要な官公署、その他の手続きは請負者にて、遅滞なく行った。

二　工事現場の管理

ア　現場代理人

現場代理人は、建設工事請負契約書に規定する現場代理人とした。

イ　工事現場の安全衛生管理

工事現場の安全衛生に関する管理は、現場代理人が責任者となり、関係法令等に従ってこれを行った。現場は常に整理整頓を行い、特に危険箇所の点検を行うなど、事故の防止に努めた。

ウ　災害及び公害の防止

工事の施工に伴う災害及び公害は、関係法令等に従い適切に処理するとともに、第三者に災害を及ぼさず、公害の防止に努めた。

エ　臨機の処置

災害又は公害が発生した場合は、適切な処置をとり、監督員に報告した。

オ　火気の禁止

工事に伴う火気の使用、及び指定場所以外での喫煙は禁止した。

カ　養　生

損傷、汚染などの恐れのある部分は、適切な方法で養生を施した。

キ　跡片付け

工事の完成に際しては、建物内外の後片付け、清掃を行った。又工事中は、毎日工事区域内の片付け清掃をした。

三　工程表・その他

ア　実施工程表

着工に先立ち実施工程表を作成し、監督員の承認を受けた。着工後、実施工程表に変更の必要を生じた場合は、変更実施工程表を作成し、定例会議を通じ、事業者と監督員の承認を受けた。

イ　職方への指示

工程、工事内容、打合せ事項などは、関係する職方に周知徹底した。

ウ　色、柄などの指示

色、柄などはあらかじめ見本などにより、承認を得た。

エ　提出書類

a　契約時　工事請負契約書、請負代金内訳書、工程表

b　着工時　着工届、現場代理人届、監理技術者・主任技術者・専門技術者届、下請業者届、主要資材発注先名簿届

c　施工中　実施工程表、施工図・承認図、工事日報、打合せ記録書

d　竣工時　完了届、引渡書、請負代金請求書、施工状況写真

四　材料・施工

ア　材　料

材料は監督員の検査を受けて合格したものとした。品質が明示されない場合は均衡を得た品質のものとした。仮設資材は差し支えない限り中古材とした。

イ　材料搬入の報告

材料の搬入ごとにその材料が設計図書に定められた条件に適合することを確認し、必要に応じて証明となる資料を添えて監督員に文書で速やかに報告した。ただし、軽易な材料については、監督員の承諾を受けて報告を省略した。

ウ　材料の検査

監督員の検査は材料種別ごとに行った。ただし軽易な材料は、検査を省略した。合格した材料と同じ材料は、以後の使用を承諾されたものとした。

エ　施　工

施工は、設計図書及び監督員の承認を受けた工程表、施工計画書、施工図、原寸図などに従って行った。

オ　一部施工の確認及び報告

施工の一工程を完了したときは、その施工が設計図書に定められた条件に適合することを確認した。また確認した事項を適時監督員に報告した。

カ　施工の完了

本工事の完了は工事竣工後、設計監理者の竣工確認及び事業者の竣工検査をもって完了とした。

五　仮設工事

ア　概　要

修理対象の建物三棟に、修理に必要な素屋根、軒足場を設けた。建設および解体時期は全体工程表にもとづくものとした。構造は建枠組及び鋼管足場組等によるものとし、設計図書の図面相当を施工者の任意仮設で建設した。

また新材加工や解体古材を保管するための工作保存小屋や、工事事務所・休憩所を建設した。これら仮設物は全工事完了後に撤去した。

イ　素屋根［大門・鎮守堂］

①　計画概要

主要構造は鋼製建枠組、鋼管足場組とし、作業床は茅負外下角から六〇㎝下に設け、作業床の幅は軒先から一・〇m以上を確保できるよう計画し、足場板を敷き詰め、周囲に幅木を設けた。屋根はトラス組とし、垂木、母屋を掛け渡した。屋根葺材はトタン波板張りとした。外壁にはメッシュシートを張った。

大門は東側に登桟橋を設けた。

②　材　料

材料は左記を標準とした。

a　鋼管足場材

JIS A 8951（鋼管足場）の定める規格に適合するもの、また社団法人仮設工業会の認定品とした。主要な資材は左記を用いた。

・枠組足場材

鳥居型建枠　巾九〇〇㎜

鋼製布板　長　一八二九㎜×巾二五〇㎜

ジャッキベース　径三五㎜、調整長さ二五〇～四六〇㎜、その他筋違、階段枠

・単　管

JIS 3444に定める三種（STK51）亜鉛メッキ仕上げ品。長さ二・五m以上のものは両端にピン加工を施したもの。ベース金具・継手金具・クランプ類はいずれも、JIS規格品或いは社団法人仮設工業会の認定品とした。

b　足 場 板

板足場板　厚三・六×巾二〇㎝以上×長さ四・〇mの杉材、木口割防止金具付

c　屋根葺材

カラー小波鉄板　〇・七六×一・八二m、および塩ビ小波（明り取り用）

d　メッシュシート　五・一m×一・八m　網目一・〇㎜

e　胴縁　厚三・〇㎝×幅六・〇㎝×長さ四・〇mの米栂材

f　その他材　釘、傘釘、番線等はJIS規格品を使用した。

③　工　法

a　縄張り・遣方

素屋根予定地に遣方を設け、縄張りを行った。

b　整　地

素屋根の足元部分は極端な凹凸のないよう盛土をして整地し、建地位置に板足場板を敷き並べた。史跡地内であるため掘削を伴わないようにした。

c　建地・布

単管足場は、敷板足場板上の所定の位置に、ベースプレートを釘打ちに据え、単管建地を組んだ。足元には根搦みを取り付けた。

枠組み足場は、敷板足場板上の所定の位置に、ジャッキベースを釘打ちに据え付け、鳥居型建枠を組み、建枠はジャッキベースを調整しながら不陸の生じないよう組み立てた。筋違を入れ、布板をはめ、要所に階段

枠を設けた。布は飛びつきを一・八mとし、それより上は八五cm～一・二m程で割り付けた。控え、大筋違を構造上必要箇所に入れた。

d　足場・根太

素屋根内軒足場は軒先茅負外下角より〇・六m下に設けた。根太は約一・〇m間隔に設け、足場板は突き付けに敷き込むよう根太割をし、作業床には足場板を全面に敷き詰め、釘打ち、或いは桟木で押さえ、周囲に幅木を設けた。

e　小屋組・屋根

素屋根の小屋組は、トラス組に棟と桁を通し、その間に垂木を掛け、切妻屋根を造った。屋根はトタン葺きとし、垂木に単管母屋を渡し、胴縁を番線括りしトタンを張った。大門は要所に明かり取りの塩ビ小波板を張った。

f　登り桟橋

大門の登り桟橋は、勾配を三〇／一〇〇として根太受けを取り付け、その上に根太を〇・九m内外に配し、足場板を四枚敷き並べ、滑り止めを四〇cm間隔に配した。また手摺りを設けた。

g　外　壁

素屋根の四周は、全面にメッシュシートを張った。メッシュシートは縦横の目地の通りよく割り付け、ひもで結び止めた。

h　仮設通路

大門素屋根は参拝者が中央部を通り抜け出来るよう、トンネル状にコンパネで通路を造った。

i　出入り口

大門素屋根の出入り口は施錠できるように造り、夜間や休日の不審者の侵入を防げるようにした。

ウ　軒足場［多宝塔］

多宝塔軒足場の仕様は前記素屋根に準じるものとした。なお相輪の修理のため、相輪上部まで囲い込む足場を建設した。

エ　工作保存小屋

大門の東側に工作保存小屋を建設した。大きさは桁行一〇・八m、梁間七・二mとし既製の軽量鉄骨造平屋建て組立式仮設ハウスとした。内部は木製床とし、天井なしとし、古材格納用の棚を設けた。出入り口は施錠出来るようにした。

オ　事務所・休憩所

大門の西側に事務所・休憩所を建設した。事務所は事業者、設計監理者が使用し、休憩所は工事請負者が使用した。

大きさは桁行九・〇m、梁間四・五mとし、既製の軽量鉄骨造二階建て組立式仮設ハウスとした。一階を休憩所、二階を工事事務所とした。内部は木製床とし、天井を張った。一、二階に流し台を設けた。

カ　諸設備工事

①　電　気

各素屋根へ仮設で配線した。器材はJIS規格のものを使用した。また事務所・休憩所、工作保存小屋にも電気設備を設置した。

②　水　道

現場事務所へ仮設水道を引き、工事現場内にホースで配管した。

③　表　示　等

大門素屋根の正面に工事の表示、安全対策上の標識等を設置した。

キ　仮設物の解体

諸工事完了後、素屋根他の仮設物は解体し、仮設資材は搬出撤収し、残材は適切に処分の上、工事区域内の整地清掃を行った。

六　解体工事

ア　概　要

大門は屋根の野地板、野垂木まで解体した。多宝塔は屋根野地の腐朽部分を解体した。鎮守堂は檜皮葺平葺と軒付腐朽部、野木舞、野垂木を解体した。

イ　番　付

檜皮を除きすべての解体材に、解体番付を行った。番付札は厚三㎜のシナ合板、四・五×六・〇㎝の大きさを標準とし、番付札には所定の番付を書き込み、各部材に原則として、見付けより針釘打ちに止めた。瓦は役物にチョークで番付を振り、鬼瓦は番付札を紐で括った。金具類は必要に応じ荷札を付け、使用位置を明確にした。

ウ　養　生

解体材は養生を施し取り扱いに留意した。化粧材角は板を打ち養生した。

エ　解体及び調査

解体は屋根より瓦－野地－野垂木と同種部材毎に順を追って丁寧に進めた。解体に際しては古材の尊重を第一に心掛け、継手・仕口を破損したり、釘抜き・金槌等によって、古材を傷つけることのないよう、解体手順、作業方法には十分に配慮した。

各部材に使用されている留釘、またそれ以外の不用な留釘痕跡等は、解体に際し化粧部分、野物部分を問わずチョークで印を施し、その状況を明確にした。

解体を一工程進める毎に、清掃・片付けを行った。また監督員が記録写真の撮影、諸調査を行った。

オ　古材整理

解体した部材は、再用・繕い・取替予定等に区分し、同種材ごとに整理して、保存小屋や素屋根内に格納した。再用材・補修材は、たわしがけを行い清掃し、汚損、破損等の生じないよう取り扱いには特に注意した。

七　木工事

ア　再用材

解体材は、将来の保存に支障のない限り努めて再用した。再用材のうち、腐朽部分は、埋木・矧木により繕いを行った。この際、旧長さ・旧断面が保存できるような修理を心掛けた。

補修用の接着剤は、尿素系樹脂（木工用ボンド）及びエポキシ系樹脂を用いた。また、必要に応じ、合成樹脂による破損・欠失部分の補強・整形を行った。

イ　樹脂処理

破損の状態に応じて、合成樹脂により破損・欠損部分の補強と整形を行った。合成樹脂は次の物を用いた。

ボンドEセット　コニシ株式会社

XNR6105／XNH6105　長瀬チバ株式会社（人工木材）

ウ　取替材

腐朽、破損の著しいものは取り替えたが、取替材は原則として旧形状、旧材種を踏襲した。

取替材は、左記を標準とした。材は乾燥したもので、含水率一八％以下とした。また、死節、抜節、割れ、目廻り、入皮、陽疾などがないものとした。

化粧材軒廻り材－桧上小節芯去り赤身勝ち材

造作材－桧上小節芯去り赤身材

野物材小屋組材－桧一等芯持ち材

野地材－杉・桧小節材芯去り赤身勝ち材

エ　新材加工・古色塗り

新材は継手・仕口・曲線は在来通りに加工した。

新材には古色塗りを施した。古色塗りは硝煙墨、弁柄、黄土を柿渋で溶いて調合し、色調の調整をしたうえで、二度塗りで拭き取り仕上げとした。

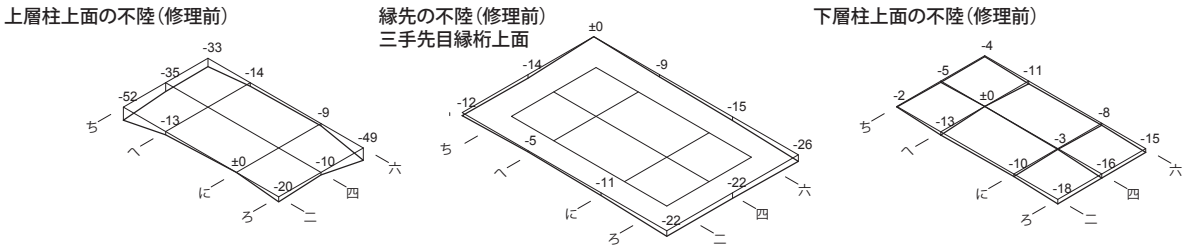


図3-1　軸部の不陸図

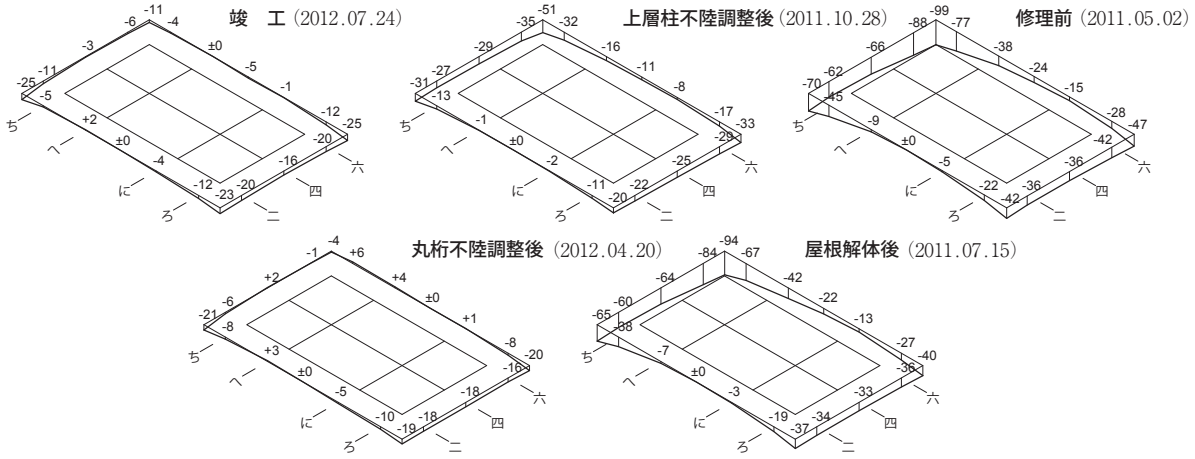
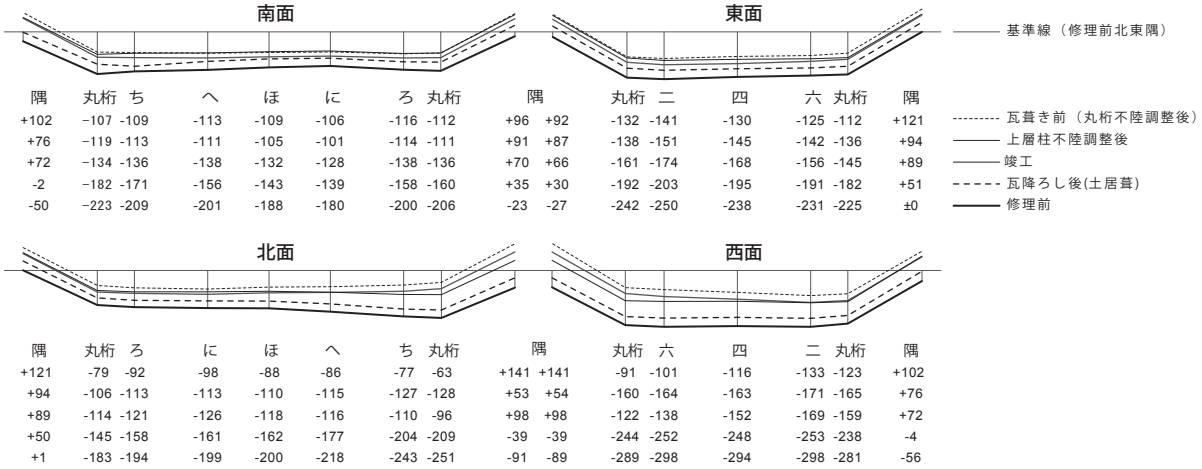


図3-2　丸桁の不陸図



隅	丸桁	ち	へ	ほ	に	ろ	丸桁	隅	隅	丸桁	二	四	六	丸桁	隅
+102	−107	-109	-113	-109	-106	-116	-112	+96	+92	-132	-141	-130	-125	-112	+121
+76	−119	-113	-111	-105	-101	-114	-111	+91	+87	-138	-151	-145	-142	-136	+94
+72	−134	-136	-138	-132	-128	-138	-136	+70	+66	-161	-174	-168	-156	-145	+89
-2	−182	-171	-156	-143	-139	-158	-160	+35	+30	-192	-203	-195	-191	-182	+51
-50	−223	-209	-201	-188	-180	-200	-206	-23	-27	-242	-250	-238	-231	-225	±0

隅	丸桁	ろ	に	ほ	へ	ち	丸桁	隅	隅	丸桁	六	四	二	丸桁	隅
+121	-79	-92	-98	-88	-86	-77	-63	+141	+141	-91	-101	-116	-133	-123	+102
+94	-106	-113	-113	-110	-115	-127	-128	+53	+54	-160	-164	-163	-171	-165	+76
+89	-114	-121	-126	-118	-116	-110	-96	+98	+98	-122	-138	-152	-169	-159	+72
+50	-145	-158	-161	-162	-177	-204	-209	-39	-39	-244	-252	-248	-253	-238	-4
+1	-183	-194	-199	-200	-218	-243	-251	-91	-89	-289	-298	-294	-298	-281	-56

図3-3　茅負の不陸図

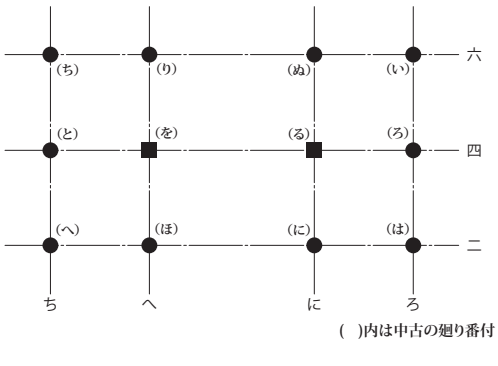


図3-5　上層解体番付

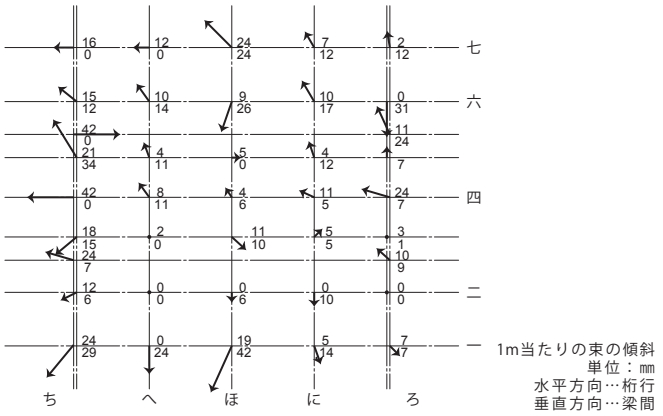


図3-4　小屋束傾斜図

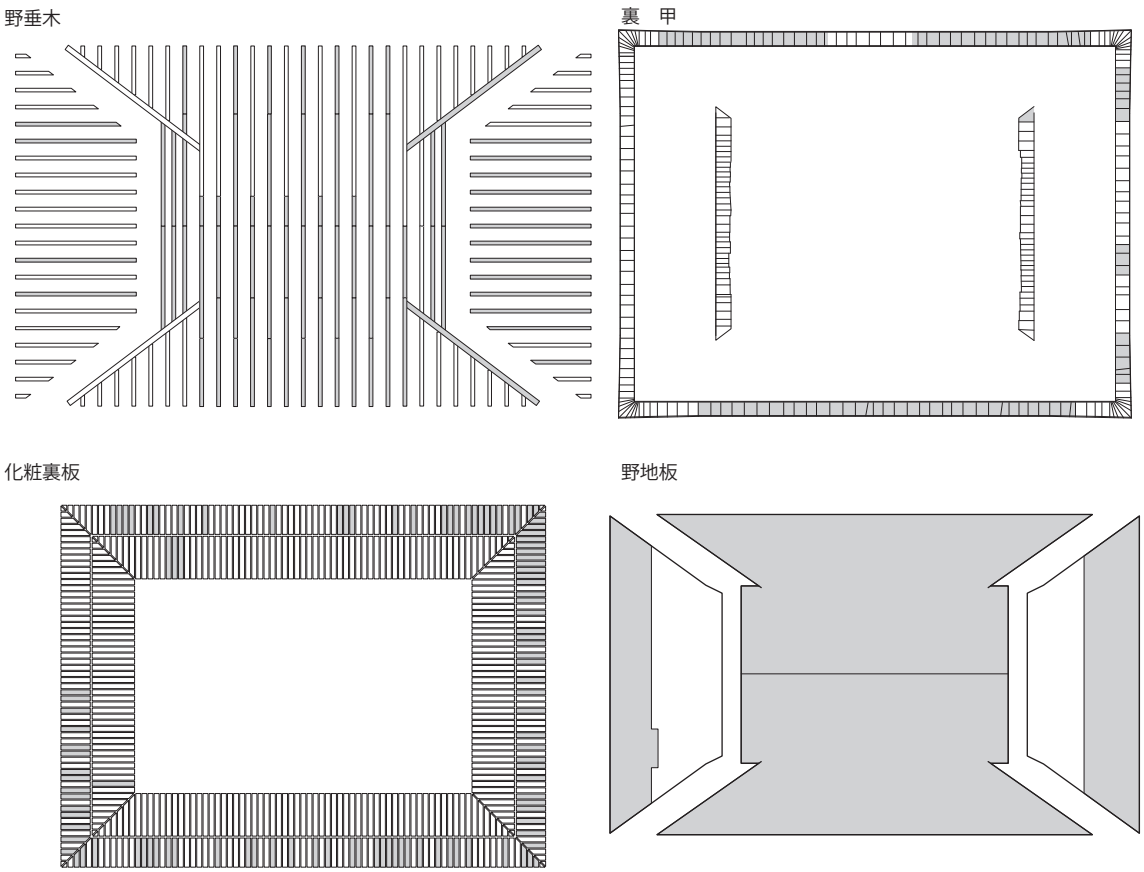


図3-6　大門木部修理状況（アミカケが取替材）

写真3-2　多宝塔素屋根建設状況

写真3-1　大門素屋根建設状況

写真3-4　新材加工

写真3-3　補足木材検査（於西垣林業）

オ　金属類

今回修理カ所は、いずれも過去の解体修理で洋釘で施工されていたため、施工は洋釘で行った。大門、多宝塔の鎹は旧材を再用したが、破損していたものは同等品を新たに作成して用いた。

カ　組　立

当初の仕様に従って順次組み立てた。施工に当たっては当初の仕口を切削しないよう十分に留意した。構造上不完全と認められる部分には、添木や金物等により適宜補強した。

キ　大門不陸修正

大門上層の柱と軒まわりの不陸修正を行った。上層柱盤上に爪ジャッキを据え、各柱の不陸を修正した。柱盤と柱の間には欅材の飼物を入れ込んで固定した。また軒まわりの不陸を修正するため、丸桁をジャッキアップし、大斗敷面と巻斗敷面に飼物を入れた。ジャッキアップは修正状況を確認し行った。

ク　大門構造補強

大門は小屋組に補強を施し、軒の垂下を防いだ。丸桁桔木に補強金具を取り付け、二の母屋桔を新たに設けた。（詳細は第三章第五節参照）

八　屋根工事（瓦葺－大門、多宝塔）

ア　概　要

屋根は本瓦葺きで、大門、多宝塔とも全面を葺き替えた。屋根重量軽減のため空葺工法で葺いた。

イ　屋根下地葺き

屋根下地として土居葺を施工した。長さ一尺のサワラ手割り板を二寸足で竹釘留めで葺いた。多宝塔は古い土居葺を残したため、下層北面を除き、土居葺破損部のみを新たに葺き直した。

ウ　土留め桟・空葺下地

土留め桟は、杉赤身材、長さ四m×厚一・一・八cm×幅四・五cmを用い、三六cm間隔で配し、野垂木位置毎にステンレス釘で止めた。空葺下地は瓦割りに合わせ、瓦桟を配って造った。銅板（厚〇・三mm）で瓦桟内に箱樋を作り、瓦桟に釘打ちに留め、下部は軒平瓦に載せ、排水をはかった。

エ　再　用　瓦

在来の瓦は、一枚ずつ木槌で叩き、打音で割れと焼き締めの状況を判断し、ひび割れのあるものと、焼きの甘いものは不再用とした。また、形状寸法の極端に異なるものも不再用とした。再用瓦はすべて土・塵・埃を落し、清掃のうえ収納した。

オ　補　足　瓦

補足瓦は係員の作成した図面及び見本品にならい、特注で製作し、一一〇〇℃で焼成した。全ての瓦には「平成二四年修補」の刻印を入れた。

文様のある瓦は、係員による生型検査を受けたのちに、実際の瓦を作成した。

カ　大門大棟鬼瓦

大門大棟鬼瓦は明治修理の補足品であったが、ヒビが入り再用困難であったため、新調した。

鬼瓦の意匠については、明治修理の時の鬼瓦を再現する案もあったが、事業者、文化庁担当官、設計監理者で検討した結果、多宝塔の鬼瓦の意匠を参考にすることに、次の理由により決定した。

・当初の形が全く不明であること

・多宝塔の鬼瓦が最も長保寺で近

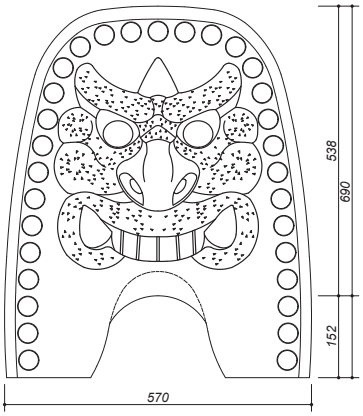


図3-7　大門鬼瓦実施図

表3-3　多宝塔瓦明細表

	名称	構成員数	再用員数	補足員数	備考
	【下層】				
1	平瓦	2,416	916	860	
2	平瓦（水返付）	0	0	640	
3	丸瓦	876	416	460	
4	軒唐草瓦	128	61	67	
5	軒巴瓦	132	66	66	
6	軒敷平瓦	128	54	74	
7	切隅瓦（唐草瓦）	8	8	0	
8	切隅瓦（敷平瓦）	8	8	0	
9	切隅瓦（二の平）	8	8	0	
10	隅巴瓦	4	4	0	
11	棟面戸瓦	40	40	0	
12	隅面戸瓦	104	26	78	
13	熨斗瓦	236	59	177	
14	捨て熨斗	16	4	12	
15	隅棟衾瓦	64	64	0	
16	隅棟鬼瓦	4	4	0	2ヶ修理
17	鳥衾瓦	4	3	1	
	【上層】				
18	平瓦	2,000	632	1,368	
19	丸瓦	800	350	450	
20	軒唐草瓦	120	48	72	
21	軒巴瓦	124	71	53	
22	軒敷平瓦	120	120	0	
23	切隅瓦（唐草瓦）	8	8	0	
24	切隅瓦（敷平瓦）	8	8	0	
25	切隅瓦（二の平）	8	8	0	
26	隅巴瓦	4	4	0	
27	棟面戸瓦	16	16	0	
28	隅面戸瓦	112	90	22	
29	熨斗瓦	186	46	140	
30	捨て熨斗	16	4	12	
31	隅棟衾瓦	112	27	85	
32	隅棟鬼瓦	4	4	0	1ヶ修理
33	鳥衾瓦	4	4	0	
	合計	7,818	3,181	4,637	再用率40.6%

表3-2　大門瓦明細表

	名称	構成員数	再用員数	補足員数	備考
1	平瓦	5,396	1,496	3,900	
2	丸瓦	2,198	698	1,500	
3	軒唐草瓦	173	93	80	
4	軒巴瓦	177	91	86	
5	軒敷平瓦	173	0	173	
6	切隅瓦（唐草瓦）	8	8	0	
7	切隅瓦（敷平瓦）	8	8	0	
8	切隅瓦（二の平）	8	8	0	
9	隅巴瓦	4	2	2	
10	破風唐草瓦	56	28	28	
11	破風巴瓦	52	26	26	
12	破風敷平瓦	56	0	56	
13	破風二の平瓦	56	0	56	
14	破風面戸瓦	56	27	29	
15	拝み巴瓦	2	0	2	
16	拝み唐草瓦	0	0	4	
17	拝み敷平瓦	0	0	4	
18	拝み二の平瓦	0	0	4	
19	袖丸瓦	56	0	56	
20	棟面戸瓦	69	40	29	
21	隅面戸瓦	80	8	72	
22	熨斗瓦	1,310	150	1,160	
23	捨て熨斗	16	4	12	
24	大棟衾瓦	31	0	31	
25	降棟衾瓦	85	17	68	
26	隅棟衾瓦	60	15	45	
27	大棟鬼瓦	2	0	2	
28	隅棟鬼瓦	4	4	0	3ヶ修理
29	降棟鬼瓦	4	4	0	3ヶ修理
30	鳥衾瓦	10	6	4	
	合計	10,150	2,733	7,429	再用率26.9%

表3-4　鎮守堂瓦明細表

	名称	構成員数	再用員数	補足員数	備考
1	熨斗瓦	60	0	60	古瓦に準じた特注製作品
2	捨て熨斗	8	0	8	いぶし仕上げ、修理印押
3	大棟衾瓦	10	5	5	
4	鳥衾瓦	2	1	1	
5	鬼瓦	2	2	0	
	合計	82	8	74	再用率9.7%

写真3-6　大門正面茅負の金具補強

写真3-5　大門　取り替える巻斗の加工

写真3-8　大門屋根空葺き下地の銅板施工

写真3-7　鎮守堂縁板修理

似する年代であること

・本堂の鬼瓦も多宝塔を参考にして新調していること

多宝塔の意匠を参考に、大棟との取り合い原寸図を作成し、寸法や形状を決定した。鬼面の作り込みは事業者及び係員にて中間検査を行い、合格した後に焼成した。

キ　瓦葺き

①　概　　要

瓦は補足瓦、再用瓦の配置を事業者と協議して決定したうえ、瓦割りをして葺いた。葺き工法は重量軽減のため空葺きとした。

②　材　　料

葺土－丸瓦、棟積用の葺土は、従来の葺土に藁すさを切り込み水練りして寝かせ、十分に練り返して用いた。草の繁茂を防ぐため、石灰を適量混ぜ込んだ。

緊結線－径一・六㎜、二・〇㎜のホルマット銅線

瓦釘－軒丸瓦止め釘、銅製既製品

③　瓦合わせ

軒平瓦は隅反りに合わせて、右左勝手と紋様の並びにより配置を決め、軒丸瓦はノサ、カギを測定し、紋様を考慮しつつ使用位置を決めた。平瓦は幅と谷深さを、丸瓦は幅を計測して分類し、同種毎に使用箇所を決めた。

④　瓦　割　り

軒先各面に指定の数の瓦を割り付けた。瓦割寸法は、建物真の垂木位置や破風板を基準に左右に割り付けた。

瓦座は軒瓦配置を決定した後、敷平瓦の曲線に合わせ瓦座繰りした。

⑤　軒先瓦葺き

軒先瓦は瓦座から三寸出し、葺土を用いて通りよく葺き立て、銅線吊りに止めた。

軒丸瓦は要所に定規伏せをし、上端の通りよく葺き立てた。葺土は固めのものを幅狭に盛り上げ、玉縁からはみ出ないよう留意した。軒丸瓦は、土留め桟から一・六㎜銅線で緊結した。

⑥　平　瓦　葺

平瓦は、一通りずつ谷深さが同一になるよう瓦あわせし、水糸を引き通し、通りよく葺き立てた。各平瓦は尻を銅線で引き付けた。葺き足は四寸を基準とした。多宝塔下層屋根のうち、上層の雨落ちとなる部分は、袖付の平瓦を使用した。

⑦　丸　瓦　葺

丸瓦は一通りずつ水糸を引き通し、天端の通りよく葺き立てた。葺土は固めのものを幅狭に盛り上げ、玉縁からはみ出ないように丸瓦を伏せ、登り四本目毎に一・六㎜銅線を用いて土留め桟に繋ぎ止めた。

⑧　棟　積　み

棟は在来通り熨斗積みとした。

各鬼瓦は二・〇㎜銅線三条撚りで野棟木、隅木に緊結し、熨斗積みは左右の各熨斗瓦を銅線で繋ぎ、衾瓦、鳥衾も銅線で結束した。

ク　残材処分

残材は明治、昭和修理のものはサンプルを取り置き、残りを廃棄処分とした。中世の瓦については、可能な限り長保寺の瓦小屋に整理して保管した。

九　屋根工事（檜皮葺－鎮守堂）

ア　概　　要

鎮守堂の屋根檜皮葺を葺き替えた。施工範囲は、品軒と平葺は全面、また、

軒付けは腐朽部分のみ部分的に解体し積み替えた。なお水切り鉄板と上目皮は全てを葺き替えた。

イ　旧檜皮解体

修理前の檜皮は、品軒と平葺は全面を解体したが、軒付けは腐朽部分を解体した。解体した旧檜皮は、小運搬で参道まで運び、搬出処分した。

ウ　材　料

①　檜　皮

八～九年張りの根皮・節皮・網皮等欠点のない黒背皮一級品

平葺皮　長さ七五cm・四五cm、厚二mm、尻先三割落仕立

軒付皮　長さ三六cm、厚二mm、とんぼ皮

上目皮　長さ七五cm・三七cm、厚三mm、口幅九cm内外箱皮仕立て

生皮　隅背箕甲用長さ三七cm、厚二mm、口幅九cm内外扇仕立て

②　竹　釘

平葺用　三・五cm

軒付用　四・七cm

何れも四～五年生で秋伐の硬質真竹で製作し、焙り上げたもの。

③　押　縁

軒付用杉赤身勝　巾七cm、厚一・二cm、長さ二m。

平葺用杉赤身勝　巾四・五cm、厚〇・九cm、長さ二m。

④　水切鉄板

着色亜鉛鉄板カラーコイル　幅九一四mm、厚〇・二七mm、切り使い

板の両側に水切りのハゼをあだ折りし、上幅六cm、垂れ幅一・二cmに折り曲げたもの。

⑤　品軒覆い鉄板

着色亜鉛鉄板カラーコイル　幅九一四mm、厚〇・二七mm、切り使い

エ　施　工

①　軒付け裏板

軒付け裏板は、腐朽部のみ解体した。在来通りの寸法、据わり勾配とし、板傍に合釘を入れ、裏甲へ釘打ちに留め付けた。

②　軒付け積み

掛羽遣返しに積み重ねた軒付皮をよく水に浸し、一手二・四cmとし、裏甲より木口に斫り代を出し、傍をよく摺り込み、隙間なく附け立てた。一手毎に長さ四・五cmの竹釘で口釘は一〇cm位、尻手釘は二〇cm位の所にそれぞれ一cm内外の間隔に打固め、順次積上げて、三手を積む毎に押縁を大釘打とし、最後の押縁より、釣付木を六〇cm位の間隔で端母屋と釣付けた。

積上げる軒付高さは旧規に倣い、各隅々に反り増しを付け、見付は在来通りの投勾配に釿切り仕上げを行った。

③　水切鉄板

着色亜鉛鉄板を水切りのハゼをあだ折りし、上幅六cm、垂れ幅一・二cmに折り曲げたものを、軒付け積みの上端に、軒付けから一・二cmの出に並べ釘打ちに止めた。

④　上目皮葺

箱皮仕立ての長さ七五cm皮を二枚、長さ三七cm皮を三枚、計五枚の上目皮を重ね、竹釘を三通り横歩み二cm間隔に打ち締め葺立てた。

⑤　平　葺

軒先の落ち込みに呼出板を打ち、平葺皮の葺足は一・二cmとし、六足葺き登る毎に竹釘を二通り、平均二cmの横歩みに十分打ち締めた。葺足は通りよく葺き、斑のないように葺きあげた。

⑥ 箕甲葺

色艶よく割れ目のない扇形に拵えた生皮に込足を入れて葺き廻し、四足毎に竹釘二通り打ち、差皮を入れて地斑や界割れの生じないように葺きあげた。

⑦ 品軒積

軒付積と同様であるが、品軒積箇所の平地が高低のないようによく地均しをし、厚さに高低の生じないようにした。この上に軒皮を三手で葺上がり、押縁で挾んで大釘打ちに締めた上、上目皮を二枚重ねて棟折り皮とし、木口を釘で通りよく伐り揃えた。

⑧ 品軒覆い鉄板

品軒の積み上げ後、雨漏り防止策として、品軒上と瓦棟との間に、品軒上全面にわたって、着色亜鉛鉄板を差し込み釘打ちに止めた。

⑨ 棟積

棟の瓦積みは在来通りに積み直した。

⑩ ムササビ対策

檜皮屋根内にムササビ等小動物対策のため、ステンレスの金網を張った。金網は、五㎜目の平網とし、野木舞上にベタ貼りし、ステンレス釘で止めた。

一〇 左官工事

ア 概要

大門の壁漆喰塗り、多宝塔の亀腹漆喰塗りを塗り直した。仕上げ塗りを解体後、下地の荒壁が傷んでいたところは、荒壁補修も行った。仕様は在来に倣った。

イ 仕上げ塗り解体

修理箇所の漆喰塗り仕上げを解体した。荒壁も打音検査し、浮き上がりのある部分は解体した。建物や仁王像に汚損のないよう、養生を施した。

ウ 荒壁・中塗修理

① 材料

・荒壁土

荒壁土は新土を用いた。新土は粘土混じりの土（荒木田土の類）で一五㎜篩いを通過する程度とした。

・中塗土

荒壁土のうち五㎜篩いを通過する程度のものを用いた。（通称粉土）

・藁すさ

荒壁用藁すさは、藁を打ち、長さ六～七㎝に切ったもの。

・もみすさ

中塗用もみすさは、藁を打ったもの、畳床、藁縄などを解し長さ二㎝内外に切ったもの（通称綱すさ）。

・砂

良質の川砂で、二・五㎜篩いを通過するものとした。

② 調合

荒壁付け　荒壁土一〇〇L、藁すさ〇・六kg

荒壁裏返し　荒壁土一〇〇L、藁すさ〇・四kg

荒壁斑直し　中塗土一〇〇L、砂六〇～一五〇L、もみすさ〇・四～〇・七kg

中塗　中塗土一〇〇L、砂四〇～一〇〇L、もみすさ〇・四～〇・七kg

③ 工法

荒壁付けは、土をねかせて切り返し、藁すさを補給した。荒壁付けは小舞、既存荒壁に十分すり込み、所定の面まで付けた。荒壁土の乾燥後、

散り際や下地の割れやすい面にシュロやトンボを伏せ、土を塗った。伏せ・散り廻りが十分に乾燥した後、中付土で小斑を取り、次に大斑を取った。中塗は斑直しが十分乾燥した後、中塗土を力強く、薄手の鏝で塗付けた。

エ　漆喰塗

①　材　料

・消石灰

土中炉で、石灰岩・無煙炭・岩塩を焼成した塩焼消石灰で消化させたもの。

・マニラすさ

古ロープ・マニラ麻屑等で製造されたもので、夾雑物がなく、長さ25㎜内外のもの。

・並浜すさ

麻の繊維をほぐしたもので夾雑物がなく、よく洗われ、乾燥したもの。

・上晒すさ

南京袋などをほぐしたもので煮沸して水で晒したもの。（通称白雪）

・の　り

北海道産の角又、銀杏草。春または秋に採取し、一年以上乾燥させたもので、草や茎を除いたもの。

②　調　合

砂漆喰　消石灰二袋、砂〇・一二L、マニラすさ一・九kg、のり二・四kg

下塗り　消石灰一袋、砂〇・〇三L、並浜すさ一・七kg、のり一・七kg

上塗り　消石灰二袋半、上晒すさ二・六kg、のり二・〇kg、油〇・六L

③　練り合わせ

のりは乾燥時に所要量を計り、一船分を一釜で煮た。煮ている間はあま

写真3-10　大門胡粉塗り

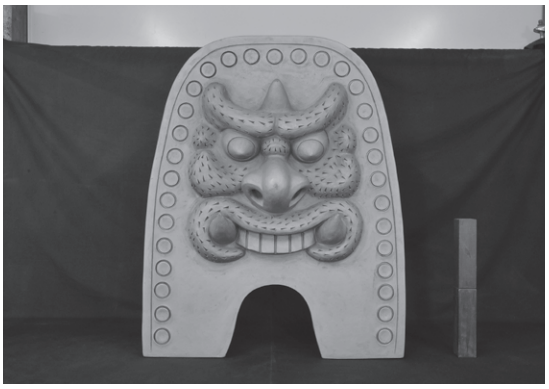


写真3-9　新調した大門大棟鬼瓦

写真3-12　多宝塔避雷針復旧状況

写真3-11　大門土間叩き

りかき廻さないようにした。下塗用ののりは、二・五㎜篩いを一回、上塗用のものは一・二㎜篩いを二回通して用いた。すさは乾燥時に所要量を計り、木片で叩きほぐし、よく洗った。前記のふるったのりがまだ熱いうちに、のり一釜分のすさをのりに入れて、竹の小箒でよくさばいた。石灰と砂を空練りし、それにすさ入りののりを加え、鍬でよく切り返した。この時、水は加えないようにした。

④ 工　法

漆喰の塗り立てにあたっては、建物や仁王像に汚損のないよう、十分な養生を施した。砂漆喰は中塗が十分に乾燥した後に施工した。材料はよく切り返し混ぜあわせ、塗厚一・五㎜内外とした。

下塗りは砂摺りが白色を呈する程度に乾燥したときに施工した。塗厚は二・四㎜内外とした。

上塗りは下塗りが半乾きのとき、水引き加減を見計らい施工した。塗厚は三㎜内外とした。

鏝押えは上塗り後、水引き加減を見計らい施工した。五回以上鏝押えをして、目潰し仕上げとした。

オ　胡粉塗

大門の板壁の胡粉塗を塗り直した。まず旧塗装面の胡粉を掻き落とし、ケレン処理を行った。ケレンはたわし、サンドペーパー等を用いた。胡粉は天然牡蠣を原料として粉砕水簸製造した極上品とし、膠で溶いて二回塗りした。

塗り立てにあたり、建物や仁王像に汚損のないよう、十分な養生を施した。

カ　大門土間叩き補修

大門の現状土間叩きを補修した。補修箇所は脇間内を除いた軒内全面とした。まず現状土間のモルタル仕上げ層と、下地の捨てコンクリート層をはつり取った。木部や壁面は養生を施した。地覆際の土間はカッターを入れて解体した。捨てコンクリートは砕石を入れて突き固め、生コンを打った。塗り厚さは80㎜とした。生コンはレディーミクスト普通コンクリートとし、呼び強度一八、スランプ一八、粗骨材二〇を用い、鉄筋金網D10、一〇〇㎜目を伏せ込んだ。

表面仕上げは、モルタルに土と砂味を配合した改良土間叩きとし、セメント：真砂土配合比、一：三を基準に、塗り厚は三〇㎜程度とし、真砂土と砂味石径三㎜程を良く混練りし、金鏝で押さえ、水引き加減を見て、ブラシでノロを掻き出して仕上げた。

一一　雑工事

ア　多宝塔相輪金具補修

多宝塔の相輪金具はいったん全てを解体した。

まず各隅に取り付いている宝鎖を解体し、火炎、宝珠、宝輪、擦管、請花、伏鉢、露盤の順に上から心柱に沿って引き抜いた。解体材には番付を打ち、工作保存小屋に格納した。解体後は心柱周囲に雨水養生を施した。

再用できない部材は、新たに造り直した。また欠失していた部材も新たに造り直した。いずれも形状、寸法は在来にならい、鋳型を造り鋳造した。これにより、修理前は八輪であったが、今回の修理で九輪に復旧した。鋳造には、純鉄FeにマンガンMnを微量加え、耐久性を高めたものを用いた。

再用品は錆落としと素地調整を行った。新材、再用材ともに防錆のため、樹脂コートの上に黒色フッ素塗装を二度塗りして仕上げた。

組み付けは解体とは逆の手順で行い、形良く積み上げた。宝鎖受け金具は在来通り野隅木に打ち付けた。

イ　大門防災設備撤去復旧

大門修理にあたり支障となった既設避雷設備をいったん撤去した。また小屋内の差動式熱感知機も一時的に盛り替えた。屋根や小屋組の修理完了後、在来

通りに防災設備を復旧した。

ウ　多宝塔避雷設備復旧

多宝塔修理にあたり支障となった既設避雷設備をいったん撤去した。撤去は屋根面のみとし、下層軒下の引下導線保護管上端部分で、導線を巻いて仮置きした。屋根工事完了後、在来の通りに復旧し、既存品で再用に耐えない突針、導線、導線受け金具等は、新たに取り替えた。なお突針部は、修理前は宝珠にまたがり問題があったので、突針を金具で持ち出し、オフセットさせた。

エ　防蟻工事

鎮守堂に防蟻工事を施した。軒下に防蟻ステーションを設置して、継続的な防蟻対策とした。本工事は設置のみとした。

境内既設置のシステムと合わせて管理するため、専門会社の責任施工とした。

オ　屋根野地防腐剤塗布

屋根野地全面に防腐剤を刷毛塗りして防腐処理を施した。材料は高性能木材保存剤（商品名「キシラモントラッド」武田薬品株式会社）とした。

カ　修理銘板・銘札

大門は修理銘板、多宝塔・鎮守堂は修理銘札を作成した。修理方針、工事年度等を銅板に刻印して作成し、規格、内容は文化庁指定のものとした。

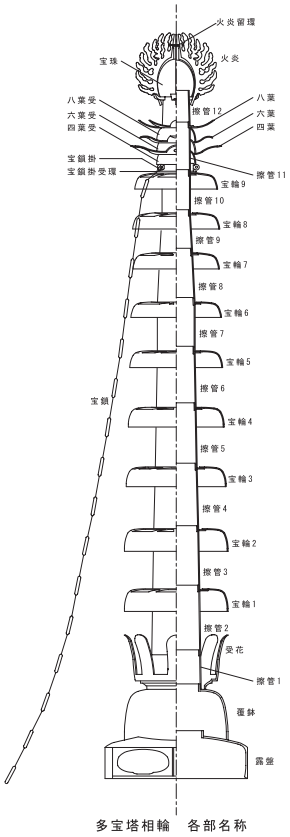
修理銘板－大門　銅製、厚一・五mm、幅四五cm、高さ三〇cm

修理銘札－多宝塔、鎮守堂　銅製、厚一・五mm、幅二・五cm、高さ一八cm

大門の修理銘板は上層小屋内に、多宝塔の銘札は来迎壁裏面、鎮守堂の銘札は背面外壁に取り付けた。

キ　残材処分・清掃

工事で発生した廃棄材、残材は場外へ搬出処分した。運搬処分は産業廃棄物処理の関係法令に従い、マニフェストを取りそろえ事業者へ提出した。全工事完了後に工事区域内の残材を搬出し清掃を行った。



多宝塔相輪　各部名称

国宝長保寺多宝塔相輪部材修理明細

	構成員数	新調員数	再用員数	備　考
火炎	4	4		4～4.5厚の板で作る
火炎留環	1		1	火炎振れ止め付ける
宝珠	1		1	錆落とし・防錆塗装
四葉	1	1		現状欠失
六葉	1		1	穴埋め・錆落とし・防錆塗装
八葉	1		1	錆落とし・防錆塗装
四葉受	1	1		ヒビ大のため新調
六葉受	1	1		ヒビ大のため新調
八葉受	1		1	錆落とし・防錆塗装
宝鎖掛	1	1		破損大
宝鎖掛受環	1	1		破片あり
宝鎖受金具	4		4	肉盛り・錆落とし・防錆塗装
宝鎖受金具覆板	4	4		
宝鎖	4	4		9mm径、工業用純鉄で
擦管1	1	1		住金テクで試験体
擦管2	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管3	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管4	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管5	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管6	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管7	1		1	錆落とし・防錆塗装、湯流れ不足は修理せず
擦管8	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管9	1		1	錆落とし・防錆塗装、湯流れ不足あり、縁薄い
擦管10	1		1	錆落とし・防錆塗装
擦管11	1	1		
擦管12	1		1	錆落とし・防錆塗装
宝輪1	1	1		
宝輪2	1	1		
宝輪3	1	1		
宝輪4	1		1	錆落とし・防錆塗装、縁修理
宝輪5	1	1		住金テクで試験体
宝輪6	1		1	錆落とし・防錆塗装、縁修理
宝輪7	1		1	錆落とし・防錆塗装
宝輪8	1	1		ヒビ多し
宝輪9	1	1		現状欠失
受花	1	1		破損大
覆鉢	1		1	錆落とし・防錆塗装
露盤	1		1	錆落とし・防錆塗装

図3-7　多宝塔相輪明細表・部材図

第四節　定例会議議事録

定例会議

修理事業では、事業者、設計監理者、施工者とで、月例の定例会議を実施し、工事の円滑な進捗のため、意志決定や事務連絡の場を設けた。運営担当は施工者である（株）金剛組の現場代理人で、毎回の議事録も金剛組により作成された。左記は全一五回分の議事録であり、後世への記録のため掲載する。なお、議事録内記載の参加者名は次の通りである。

住職は事業者である瑞樹長保寺代表役員。住田は金剛組工事統括部長、中山は同社現場代理人、安雑は同社営業部課長、渋谷は（公財）和歌山県文化財センター事務局長、御船は同財団工事主任、下津は同財団工事主任補佐。（第二章第三節参照）

第一回（平成二三年六月七日）

出席者　住職、住田、中山、御船、下津

一　第一回、定例会挨拶　特になし

二　全体工程表説明－中山

1全体工程について

大門・左官工事用の壁土の土練り時期及び、壁胡粉の掻き落し時期を、次回までに協議検討する。

多宝塔・亀腹漆喰解体の時期を、予定よりも早くしてはどうか。

・仮設足場が、平成二四年三月二〇頃の解体予定になっているが、四月八日に境内地を使用するので、遅れないように。－住職

鎮守堂・足場組建て後、廻りの樹木撤去を予定しています。－住職

文化庁史跡指定の為、長保寺と和歌山県（文化庁の業務代行）との、事前協議必要です。

金剛組にて、施工業者手配し、現地にて施工方法及び、施工範囲の下打合せ実施。

六月二七日～の週で、下打合せの日時調整。－住職と

・防蟻工事－セントリコン・システム（ノカオイジャパン、ニール氏）時期を見て、打合せ実施する。

2実施工程について　工程表の実施工程は、色を濃くする。

3工事工程写真について　提出は、カラーコピーとする。

三　各種提出書類について

（株）金剛組緊急連絡体制表　内容を訂正して提出。

下請業者（予定）届及び、主要資材発注先（予定）届

・予定でも良いので、仮設業者も含めて提出してください。－御船

四　定例会議開催日・時間について

・毎月七日、午前九時～、現場事務所にて。休日の時は変更。

・次回は、七月七日（木）、午前九時～、現場事務所にて

五　質疑・要望・その他

・議事録は、一週間以内に、提出する。－御船

・打合せ書の中に、設計監理及び住職の質疑欄を設ける。－住田

七月一八日の、海の日の作業は行わない。－多宝塔足場を、組み終わっているのは、かまわない。

六　下請協力業者の選定について

屋根檜皮・土居葺－（有）宮川屋根工業　文化財実績多数あり。

屋根瓦葺工事－（有）匠平安瓦　個人の実績はあるが、会社としてはすくない。

右記業者を使用予定ですが、よろしいですか（施工技術に問題はありま

せん）

※特に指定はしないので、金剛組の責任でしてください。－住職

住職－瓦は何処の瓦使用か。

奈良産の土使用で、製作予定です。－住田

七　鎮守堂ムササビ対策について　方法等、検討して案を提出します。

第二回（平成二三年七月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・六月実施工程及び七月工程説明

大工－大門軒高さの寸法確認の事（屋根瓦降ろし前後）。

瓦工－瓦葺き土仮置箇所には、囲い及びシート敷きの事。

大棟瓦に既存は束が入っていないが出来れば検討したい。－住田

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・七月～八月の寺院行事で、作業休止の必要な日時がありますか。

七月一八日施餓鬼、八月七日福蔵院施餓鬼、八月一三～一五日参道提灯吊などの予定。－住職

いずれの日も作業は休みます。－中山

※夏季休暇時の緊急連絡表提出の事－住田

2長保寺住職より

連絡事項

・参道舗装について－平成二四年一二月末迄に実施したい。（注・舗装は別事業）

・庫裏台所屋根修理－七月末迄に着工予定（年末迄に完了させる）（注・別事業）。

業者の資材搬入は、大門横の墓横から搬入予定。

・資料館は、平成二四年三月末で終了。－海南市撤去予定

・境外地、南西進入口道路補修－工事着手

・鎮守堂の樹木伐採について－撤去木のわかる資料が必要（海南市）。

（注・別事業）

現地樹木に目印、リスト作成、写真、配置図などが必要か。

・大門解体瓦を欲しい方がいます－処分瓦をいくらか残して下さい。

3（公財）和歌山県文化財センターより

・多宝塔相輪について

相輪の被害状況を確認して、納まり及び修理方法検討します。

（相輪上部新調予定、露盤再用の可否の検討、防錆塗料の検討他）

避雷針・既存相輪の撤去工事の準備－後日、変更契約をお願いいたします。

※奈良文化財研究所に、昭和二年の解体修理の写真あり－元々は、九輪になっている。

・多宝塔屋根瓦について

現在一部修理しか予定していないが、上層部の瓦は、かなり状態が悪い。

専門業者にて、調査予定。

・実施工程表について

共通及び直接仮設の実施線は、必要ですか。

継続していると言う事で、入れています。－中山

仮設実施工程は、枠を破線にし色分けか斜線入れしてはどうか。－住田

四　次回定例会議開催日　次回は、八月八日（月）、午前九時～

第三回（平成二三年八月八日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・七月実施工程及び八月工程説明

大工－大門軒高さの寸法確認（屋根瓦降ろし後の）、屋根通し勾配及び小屋束倒れの確認作業予定。屋根野垂木迄、撤去完了予定。

瓦工－大門屋根瓦美装及び補足数量確定予定。

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根瓦補修の為の修理案について

修理案説明（参考資料提出）－費用追加が出てきます。－御船

修理案了解いたしました。－住職

上層屋根は、瓦修理後に相輪を取付ける。－足場を浮かす・工期検討必要。

・土居葺材見本提出

サワラ材、長さ三〇〇㎜、乱幅、厚み一分を使用します

・大門再用瓦の配置について

大小の瓦がある為、種類別分けにして主に東及び西面に葺く予定。

現状の再用率は、平三九％、丸四七％程度になります。－御船

出来れば、西面は新調したい（傷み易い）。鬼瓦は取替え無いのか。－住職

大門鳥衾は新調、鎮守堂鳥衾の欠けは修理、大門鬼瓦は再用予定です。

－御船

2長保寺住職より

連絡事項－庫裏屋根改修工事は、御盆明けから作業開始予定です。

相輪の材質の検討をして欲しい。既存は、かなり腐食しているが、原因を解明し対策を検討する。

鎮守堂樹木撤去の件－撤去樹木、平面配置図及び番付リスト図作成します。－中山

3（公財）和歌山県文化財センターより

相輪解体・避雷針撤去について－請負変更契約をお願いします。

四　次回定例会議開催日　次回は、九月七日（水）、午前九時～

第四回（平成二三年九月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・八月実施工程及び九月工程説明

大工－大門上層柱盤、不陸修正、仮受け材取付け、補足材調査・発注、裏甲・化粧軒天井板解体、軒組み物破損部修理。

瓦工－大門屋根瓦、補足数量確定予定。

檜皮葺工－鎮守堂屋根檜皮解体撤去。

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・小屋裏補強の、鉄骨材発注予定については、どうなっていますか

小屋裏補強方法を検討し、詳細納まり図作成します。錆止め塗装をした鉄骨材を使用します。－御船

2長保寺住職より

・連絡事項－庫裏屋根改修が、先日の地震の為少し遅れています

・鎮守堂、ムササビ対策について
檜皮捲り後、ムササビの痕跡及び巣の確認を、お願いします。
※後日イタチの糞が確認され、一部木部で動物にかじられた痕跡があります。－御船
・鎮守堂の勾欄架木が、折れているので、直しておいて欲しい。
3（公財）和歌山県文化財センターより
・鎮守堂檜皮葺きの、正面軒付けは、悪い部分のみ取替え予定ですが、正面に継ぎが見える為両側とも角を廻る所まで、取替えを予定します。予算増になります。－御船
・鎮守堂は、慰斗瓦の南蛮漆喰が固く付き、瓦の再用が困難です。こちらも、予算増になります。－御船
・多宝塔相輪の作成について
住友金属テクノロジーに検査依頼予定。－箇所、数量検討。
全体工期を見て、事前準備検討も必要。
四　次回定例会議開催日　次回は、一〇月七日（金）、午前九時～

第五回（平成二三年一〇月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津
一　前回議事録説明－中山
二　工事工程説明－中山
・九月実施工程及び一〇月工程説明
大工－大門軒組物、支輪破損部補修、柱敷板取付け及び不陸修正、構造補強金物取付け、多宝塔下層補修材加工他。
※住職－住友金属テクノロジーの相輪調査日が実施工程に無い。
次回訂正します。－中山
三　質疑・要望・その他
1（株）金剛組より
・大門小屋裏補強金物の、納まりは、どうなっているか。
当初より鉄骨金物にて補強の予定でした、原寸図作成及び設置方法検討の上、補強図作成しています。図面説明。－御船
・補足木材の材木検査について
一〇月二〇日前後で検査予定していますが、当社と御船先生で、現地検査でよろしいですか
それでよろしいです。－住職
・鎮守堂樹木伐採の平面位置図提出（注・樹木伐採は別事業）
早急に見積もり提出します。－幹部分は切断の上現地集積、枝部分は指定場所へ運搬集積、抜根はせず、切断面には、ラウンドアップ剤塗布とする。－住田
樹木写真撮影に付いて。－看板不要、写真ファイル横に番号をつけて、図面に記入で良い。－住職
2長保寺住職より
・今回は特にないが、庫裏の修理が一一月中くらいで、完了予定。
3（公財）和歌山県文化財センターより
・大門古瓦の再用位置と、補足瓦について
既存一五〇～一六〇ミリの平瓦の葺足を、全体葺足一二〇ミリに変更します。（一五〇〇枚程度の数量増）
平瓦は、奈良産既製品を転用。（面取り、掛け桟用の爪撤去）。
軒巴瓦は、明治の瓦にあわせて製作。
再用瓦は、両妻部に使用します。
鬼瓦は、大棟の二箇所取替えとして、他は再用します。（すでに亀裂が

入っており、現状足元部分が納まり上、合っていない為）
※住職－古瓦再用位置と、補足瓦は了解した。鬼を全て、室町・鎌倉時代の物に変えられないか。国・県と協議できないか。
県に協議してみます。－御船
・多宝塔相輪修理について
昭和三年の修理資料がありましたので、それにより、昭和修理での再用材が破損の中心と判明。
住友金属テクノロジーへの、調査依頼・内容・箇所数については、鋼材構成元素分析及び鋼材断面組織観察のみ、昭和材と以前材との比較に絞って、二～三ピース分析してはどうかと思います。
4その他
※住職－現在工事中の庫裏の屋根で、ステンレスの谷板が錆びた。ステンレスも、製品により、錆びる事があります。－住田
※住職－銅板ならば、どうなのか。
作業効率が良い（加工が容易）、瓦結束銅線と相性が良い。－住田
大門は、瓦割りを改善し、直接雨水に常時さらされる訳ではないので錆びにくい。－御船
※住職－銅板に変更してはどうか。
銅板使用の方向に変更します。－住田
四　次回定例会議開催日　次回は、一一月七日（月）、午前九時～

第六回（平成二三年一一月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津
一　前回議事録説明－中山
二　工事工程説明－中山
・一〇月実施工程及び一一月工程説明
大工－大門軒先仮受け、野隅・桔木原寸型取り及び解体、補足材加工、小屋裏補強金物及び挟み束加工取り付け。
三　質疑・要望・その他
1（株）金剛組より
・大門木工事－補足木材の材料検査報告。
一〇月二一日に、奈良県桜井市・西垣林業（株）の作業場にて検査実施しました。
別紙、木材検査報告書で木材含水率及び取替え率について説明。
一〇月二五日に、裏甲・瓦座を残して現場納入済み。
・鎮守堂樹木伐採の、見積もり内容変更について
補助金申請の為、県及び市との打合せにて、本堂廻りの危険樹木も含めて、見積もり提出直しになりました。
現地にて後日、県・市の担当者も含めて、処置樹木の確認を行います。
－一一月一六日
※環境整備及び史跡整備のどちらで処理するか、県のほうにて検討中。
－住職
2長保寺住職より
大門の大棟鬼瓦の変更について
室町時代の建物なのに、既存の明治の顔で、製作してよいのか。
（また、大門に室町時代の鬼が残っていない為、境内で近い物を探せば、多宝塔の鬼だと思う。）
役所の担当者の、悉意的な考えで決定していないか。
※文化財は、現状修理が基本で、国の審査を受けて事業決定しています。
担当者の個人的な見解では、無いと思います。－御船

3（公財）和歌山県文化財センターより

・大門、二の母屋構造補強について

施工図提出にて施工方法説明。木製補強桔木を取付けます。－御船

※これでよろしいです。－住職

・一一月二四日の文化庁来所時の、議題内容について

多宝塔上層の屋根を今回改修する件、大門鬼瓦修理の件、鎮守堂屋根銅網の納まりなどの打合せ予定です。

多宝塔の屋根と、相輪金物調査（住友金属テクノロジー）の件は、国へ変更申請提出。－変更許可後着工。

四　次回定例会議開催日　次回は、一二月七日（水）、午前九時～

第七回（平成二三年一二月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・一一月実施工程及び一二月工程説明

大工－大門野隅・桔木補足材加工、小屋裏補強金物と挟束取付け。

※丸桁の不陸は直せるものなのか？－住職

組物へ飼物を入れる事で修正しました。－中山

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根相輪に付いて

業者にて選別、再用、不再用を決めている。－後日現地にて確認

再用可能な部材は再用します。

フッソ塗装の色は、決まっているのか。－住田

黒又は濃い茶色の予定。－御船

・年末年始の作業予定について

年末作業は一二月二九日まで、年始は一月五日からです。－休暇中の緊急連絡先提出

・樹木伐採について

図及び写真提出済、見積早急に提出します。－一二月一四日提出

2長保寺住職より

・大門の金網補修について（注・金網補修は自費修理）

取替用の材料が無いと聞いている。－調べます（住田）

・大門柱等の穴空き箇所の補修をして欲しい。

人工木材にて補修いたします。－御船

3（公財）和歌山県文化財センターより

・多宝塔の土居葺について

上・下層とも不良部分の葺直し、再用可能部は残して作業予定です。

※その上に、瓦下地・銅板箱樋の取り付けを行います。

分かりました。－住職

四　次回定例会議開催日　次回は、一月一二日（木）、午前九時～

第八回（平成二四年一月一二日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・一二月実施工程及び一月工程説明

大工－大門桔木加工取付、化粧天井板取付、母屋束補修、切裏甲加工及び鎮守堂屋根下地。

※工程表の表示方法及び、誤字訂正の指摘あり。

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根相輪に付いて

一月一一日に、業者作業所にて、再用不再用の部材確認しました。

その他、住友金属テクノロジーの保管部材も、早急に確認します。

・大門の補修用金網について

銅製亀甲網で、同寸法の品物が数量分有りました。

現在、鉄の金網もさがしています。又見積もりも依頼中です。

・鎮守堂屋根、ムササビ対策について

以前に調査官に説明したように、作業したいと依頼していましたが、文化庁より敷込みか、上にかけるかで検討して下さいとの連絡がありました。－御船

※検討　下へ敷込みの方向で実施する（ステンレス五㎜目のサンプル取寄せ）。

・補足瓦について

製作巴及び唐草瓦の、見本生型を見ていただきました。

了解しました。－住職

2長保寺住職より

・本堂及び鎮守堂廻りの樹木伐採については、2月中頃決定の3月施工予定です。

3（公財）和歌山県文化財センターより　今回は、特にありません。

4そ の 他

・金剛組への取材で、一月一六～三一日の間に、朝日新聞社より長保寺現場作業所へ来所があります。－中山

・多宝塔瓦調査の為に足場南面を使用しても良いですか。－完了後は片付け、整理します。四月六日は、足場廻りを使用します。－住職

四　次回定例会議開催日　次回は、二月七日（火）、午前九時～

第九回（平成二四年二月七日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録説明－中山

二　工事工程説明－中山

・一月実施工程及び二月工程説明

大工－大門裏甲・野垂木加工及び取付、母屋調整、金物補強、桔木加工。

・工事工程写真説明

上層の棟鬼瓦下に、鉛板などを仕込んではどうですか。－住田

その方向でお願いします。－御船

※鎮守堂の化粧棟木の、赤外線写真は撮りましたか。－住職

早急に調べておきます。－住田

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根相輪金物について

使用部材のリスト提出及び説明。－御船

鎖は四本とも、錆びにくい材質（工業用純鉄）にて取替えします。

・大門の補修用金網について

二社見積もり依頼中、後日見積もり提出いたします。－中山

※中に入って掃除が出来るようにして欲しい。－住職

・多宝塔屋根瓦、調査解体についての、状況報告。

解体してみた結果、葺替え時期だったと思われますが、修理方法は上・

下層ともめくった後に検討いたします。－御船
※下層南東隅鬼から、安永九年（一七八〇）の年号がでて来ました。
・鎮守堂屋根、ムササビ対策について
文化庁の了解をもらいましたので、五㎜目のステンレス網を野木舞の上に敷込みます。
2長保寺住職より
・今回は、特にありません。
3（公財）和歌山県文化財センターより
・来年度補助金申請の準備をお願いいたします。
四　次回定例会議開催日　次回は三月七日（水）、午前九時～

第一〇回（平成二四年三月七日）

出席者　住職、中山、安雑、御船、下津
一　前回議事録の説明－中山
二　工事工程説明－中山
・二月実施工程及び三月工程説明
・工事工程写真説明
※鎮守堂の化粧棟木の、赤外線写真は撮りましたが、今回は持参していません。
大門野地板取付前に、小屋組の状態を確認していただく予定です。
三　質疑・要望・その他
1（株）金剛組より
・多宝塔屋根瓦下地の修理方法について
野地板全体の四五％を取替え、土居葺五〇㎡を取替えます。－上層の雨落部で、下層が悪くなっている。
※今回その部分に袖付き瓦を使用し、尚かつ銅板敷込み予定。－御船
・大門の補修用金網について
参考見積もり提出、工期は七月頃の予定。－検討します・住職
・大門・多宝塔の補足瓦について
鬼瓦制作の途中見学に行かれますか。－行きます・住職
鬼は奈良県で製作、その他は岐阜・奈良の両方で製作中。
・本堂・鎮守堂廻りの樹木剪定について
国より通知あり、三月中に工事完了してください。－住職
お彼岸前後と花見時期が人が多い。－作業手順・日程の検討必要
契約書作成。当社の一般契約書の書式で良い
※伐採樹木は、最終現場にて立合い確認。－住職
・防蟻は、鎮守堂素屋根解体後に行う予定です。－中山
2長保寺住職より　今回は、特にありません。
3（公財）和歌山県文化財センターより　三月末に実績報告書を提出します。
四　次回定例会議開催日　次回は、四月一〇日（火）、午前九時～

第一一回（平成二四年四月一〇日）

出席者　住職、中山、安雑、御船、下津
一　前回議事録の説明－中山
二　工事工程説明－中山
・三月実施工程及び四月工程説明
・工事工程写真説明
※住職－本堂及び鎮守堂廻り、樹木剪定工事の写真は、別途工事なので、削除する。
三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根瓦工事及び、相輪金物について

再用瓦は、上層は南及び東面にまとめ、下層は雨落ち部分に補足瓦（水返し付）を入れる為各面に、混在します。－御船

再用瓦は、出来れば、東面を主体に配置し、数量の多い物は、南面に使用するのが良いのか。－住職

比較すれば南面が、良いと思います。－中山

・大門の小屋組補修状況確認について

補強工事が完了しましたので、定例会議終了後の状況確認お願いします。

－中山

※状況を見ていただきました。

・大門・多宝塔の補足瓦・鬼瓦見学について

四月一七日（火）・午前一〇時、奈良県瓦センター集合でよいですか。

－中山

2長保寺住職より

大門・仁王廻りの金網修理は、今回は撤去のみで、復旧しないでおきます。

※通路上部彫刻の金網は残して下さい。

3（公財）和歌山県文化財センターより

・多宝塔相輪の防錆塗装について

再用・新調材共、フッソ塗装の黒色とします。相輪の非再用分は、処分しますか。

※残してください。－住職

※住職－相輪の部材検査は、反映できたのか？

検査により、昭和材と以前材の組成の違いが判明した。Mnを混入させると、耐性向上を図れるとのことで、新調材へ反映させます。

四　次回定例会議開催日　次回は、五月九日（水）、午前九時～

第一二回（平成二四年五月九日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津

一　前回議事録の説明－中山

・四月実施工程及び五月工程説明

・工事工程写真説明

二　工事工程説明－中山

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根瓦工事及び、相輪金物・避雷針工事について状況説明

亀腹漆喰仕上げで、漆喰の劣化を防ぐ方法は無いですか。－住職

漆喰仕上げ面に、撥水材を塗布してはどうですか（通気性があり、色調は無色）。初期の劣化を遅らせる事が出来ます。－住田

その方向で検討してください。－住職

亀腹、熨斗瓦天端漆喰ひねり掛け施工します。－中山

相輪・露盤と熨斗瓦取合いに水切り板を敷込みし、熨斗瓦の一番上は銅線を出してくくる。－御船

・鎮守堂防蟻工事（セントリコン・システム）について

ダウバーニール氏と打合わせをしたいので、連絡お願いします。

6月末の鎮守堂足場解体後に、設置工事の予定。－中山

建物より離れて設置でき、建物を傷める事が無い、またメンテナンスが一括で出来維持費が比較的に安価である。－住職

2長保寺住職より

大門・仁王像の廻りに、金網ではなくて、化学繊維の網を掛けたい（国と事前協議必要）。資料取り寄せできますか。

手配いたします。－中山

定例会議に、文化財センターの事務局長も、参加していただきたい。

3（公財）和歌山県文化財センターより

和歌山県より、四月一〇日付けで二四年度工事分の、補助金交付決定がでています。

四　次回定例会議開催日　次回は、六月七日（木）、午前九時～

第一三回（平成二四年六月七日）

出席者　住職、中山、安雑、渋谷、御船、下津

一　前回議事録の説明－中山

二　工事工程説明－中山

・五月実施工程及び六～八月の全体工程説明

・工事工程写真説明

三　質疑・要望・その他

1（株）金剛組より

・多宝塔屋根部分、足場解体前検査について

天候にもよるが、六月二〇日頃の予定でお願いします。－中山

何時でもよろしいですが、小屋裏の埃が室内に落ちているのではないですか。－住職

屋根野地をめくっている所は、小屋裏掃除をしていますが、堂内の確認は足場解体後にさせていただきます。－中山

※相輪の八輪から九輪への変更について、報告書に写真添付した説明がいるのではないか－住職

報告書に記載するようにいたします。－御船

・大門・仁王廻りの網について

資料提示、説明。－中山

文化庁七月末頃来所予定の為、それ迄に事前説明したいので、材料及び取付方法などの、詳しい資料を探してほしい。－住職

※大門通路部の欄間彫刻部分は、既存金網を復旧する。

2長保寺住職より

・フェイスブックに、長保寺の修理現場が載っていた件はどうでしたか。

（注・施工に関わった職人が無断投稿していた）

当社として各現場へ、新規入場時に注意喚起するよう、通達しました。

－安雑

3（公財）和歌山県文化財センターより

・古瓦の処置について－中世瓦が残っているのは珍しく、保存してはどうですか。

見本として、瓦は役物程度なら大門の上層に入れても良いが、多く残す場所が無い。－住職

※後日、寺の瓦小屋に、整理して入る分なら、残しても良いとの事。

四　次回定例会議開催日　次回は、七月九日（月）、午前九時～

第一四回（平成二四年七月九日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、渋谷、御船、下津

一　前回議事録の説明－中山

多宝塔内の床に、天井の胡粉が落ちているのではないか。－住職

早急に入って見てみます。－住田

二　工事工程説明－中山

・六月実施工程及び七月の工程説明
・工事工程写真説明
大門足場解体時に、軒先に埃防止のシート養生必要ではないか。－住田
養生の手配いたします。－中山
三　質疑・要望・その他
1（株）金剛組より
・多宝塔・鎮守堂について
鎮守堂の外柵及び扉の補修については、当社で直します。－中山
柵内に敷込みするのに、白玉砂利五～七㎜の国産は無いのか、聞いて欲しい。－住職
修理工事完了後、自費で設置したい。
・多宝塔社内検査及び監理検査報告について
監理検査報告書は原稿を、社内検査報告はコピーを、最終引渡し書類にて堤出します。
・大門防災設備について、指定業者はありますか
特に無いです。－住職
こちらの業者で、肪災設備の作勤確認いたします。
・大門上層内部への、瓦保管の件
寺の保存小屋へ入れてはどうか。－住職
小屋内の既存瓦を、整理して、七月末までに搬入します。－御船
大門小屋表の床養生シート撤去し、防カビ剤塗布、ベニヤ板敷込みします。－住田
・夏孝休暇の予定－八月一一日（土）～一五日（水）・緊急連絡表堤出します。
八月七日に、福蔵院のお施蛾鬼があります。－住職
大門の仮設通路確保及び、ガードマンを設置します。
2長保寺住職より
資料館の既設電気、撤去完了しました。－解体日程は打合わせに来る予定です。
3（公財）和歌山県文化財センターより
多宝塔縁板及び西面壁板の補修を予定しています。
七月二六日、文化庁来所時に、保存小屋を会場として使用したい。
4そ の 他
大門正面欄間の、貫廻りの虫穴が気になる。又、仁王像廻りの金網張りは取りやめる。　－住職
大門正面の貫穴の修理はしました。－御船
四　次回定例会議開催日　次回は、八月八日（水）、午前九時～

第一五回（平成二四年八月八日）

出席者　住職、住田、中山、安雑、御船、下津
一　前回議事録の説明－中山
二　工事工程説明－中山
・七月実施工程及び八月の工程説明
・工事工程写真説明
三　質疑・要望・その他
1（株）金剛組より
・多宝塔内部確認について
特にひどい埃は落ちていません。－内部を拭掃除しました（8/3）。
西面長押上の壁板、古色の色合わせをして下さい。－住職
※後日八月二七日に、補修完了（確認して頂きました）

・鎮守堂白玉石について
見本取り寄せ中です、（大きさ九㎜程度）。－入ればお持ちします。
※後日八月二七日に、見本提示も品物不良（こちらでもう一度考えます。－住職）。
・大門防災設備について
金剛組で、消防署への点検書類の提出をして欲しい。－住職
今回工事に関連する、自火報設備のみ提出します（消火設備は、別途として相談）。
・大門社内検査及び施主検査について
検査報告書説明－手直し完了しています。
事務所及び保存小屋の跡地の処置については、雑草を刈り取って、種芝まきにて処理いたします。－住田
福蔵院の樹木で、仮設足場に隣接していたものが、一部枯れているので苗木の植樹をお願いします。－住職
※後日八月二〇日に福蔵院・住職より、植樹の代わりに、撤去して土間コンクリート打設の依頼がありました。
大門素屋根内で枯れた低木の処置については？－御船
植え替えず、そのままでよいです。－住職
・大門欄間彫刻について
欠けているが、部材のある物は復旧しました。又、部材で取付け箇所のわからない物は、小屋裏へ保管します。－御船
2長保寺住職より
資料館の解体打ち合わせが、八月二四日の予定です。
参道舗装工事を実施の予定です。
3（公財）和歌山県文化財センターより
補足瓦（割れ替え用）等を、お寺の保存小屋へ八月九日の予定で置かせて下さい。－御船
多宝塔の旧縁板、大門補足野地板残材等も残しておきます。－中山
4そ の 他
大門土間の三和土は、どうするのか。－住職
既存土間の上層をはつりとって、真砂土・セメントにて、三和土風に仕上げる方向で検討中です。－御船
四　次回定例会議開催日　定例会議はありません。

第五節　大門小屋組の補強

概　要

大門の軒の出は、上層柱真より茅負前下角まで二・九四五mと大きく、丸桁の垂下及び傾斜は著しかった。小屋組内には軒を支える構造材として、丸桁桔木と茅負桔木が挿入されている。これらはすべて明治修理で整えられたものであるが、耐力の低下が顕著であった。ことに丸桁桔木は、断面が小さいうえ、上部からの荷重が少ないため、軒の荷重でむくり上がってしまっていた。

計算では茅負桔木一本が負担する屋根荷重は七五〇kg程度とみられるが、その効果は少なく、実質は小屋内まで延びた地垂木が軒先荷重を受けていると考えられた。また、丸桁桔木の納め方にも問題があった様で、丸桁の安定を保つばかりか、軒先垂下の一因となっていた。

よって今回の修理では、小屋組内での構造材の補強と荷重伝達方法を改善するべく、丸桁桔木を補強し、また新たに二の母屋桔木を付加し、補強した。

丸桁桔木の金具による補強

丸桁桔木は、桁行方向の丸桁どうしを繋ぐ梁間材（トガ）を四本渡し、梁行

方向の丸桁には中程に桁行材を一本、隅行方向には桁行・梁行に各一本ずつ配する（いずれもヒノキ）。全数一四本はいずれも明治修理時の補足材である。

丸桁桔木の鼻先は丸桁へ材巾のまま杓子枘差しに納まる。梁間材のうち中央二本には小屋束を建てて屋根荷重を伝達させるが、両端二本には小屋束を一本も建てない。桁行材の尻手は梁間材の中央二本へそれぞれ径二〇㎜のボルトで引き付ける。隅行材はその桁行材の下で四本を組み合わせることで、尻手の桔ね上がりを抑える納まりとする。現状では、梁間材の中央位置において、桁行材・隅行材の尻手での桔ね上げ力が屋根荷重を上回り、梁間材を大きく起らせてしまっていた。

修理前の計画では、桁行材・隅行材に対する補強も予定していたが、部材断面が梁間材に比べて十分大きいこと、杓子枘の折損等も確認されないこと、軒廻りの解体を実施せずに有効な補強は行えそうにないこと、尻手の桔ね上げ力に対しては梁間材の剛性の向上と変形の抑制である程度対応できること等の理由で、今回の修理では施工を見送った。

補強金具は、既存材を極力傷めないこと、人力施工が可能であること、小屋組材と干渉せずに取り込めることなどを考慮して、図3-8の通り実施した。丸桁桔木（梁間）の側面に一五〇×七五㎜の溝形鋼を山形鋼・ボルト・ゴム板を介して圧着させ、その溝形鋼をターンバックルにて柱盤へ引き付ける。反力を支持する柱盤は上木であることから、鉛直荷重を十分に伝えるために、柱盤と通し肘木間へ明治補足材に倣った挟み束を挿入した。

二の母屋桔木の挿入による補強

丸桁垂下の一因には、現状の茅負桔木の支点が丸桁直上の土居桁に置かれていることも考えられる。そこで、この土居桁に掛かる屋根荷重の一部を建物内方へ移行させるために、二の母屋桔木の挿入を図3-8の通り計画した。材質はヒノキの丸太材で、部材断面は挿入可能な寸法として元口径六寸を基準とした。妻面では、小屋組の懐が少ないことに加えて、既存の茅負桔木が占める空間も大きく、挿入位置との兼ね合いから茅負桔木自体を受けるところも生じた。

補強後の荷重伝達状況

今回の修理では、空葺工法の採用により、屋根瓦に伴う荷重を平均二割程度軽減できた。また、二の母屋桔木の挿入によって、丸桁筋に掛かる軒先荷重の三割程度を上層柱筋へ移行できたと考える。その結果、上層柱筋への荷重の負担割合は増加するが、屋根荷重の軽減と合わせて考えれば、構造的な支障はないものと思われる。

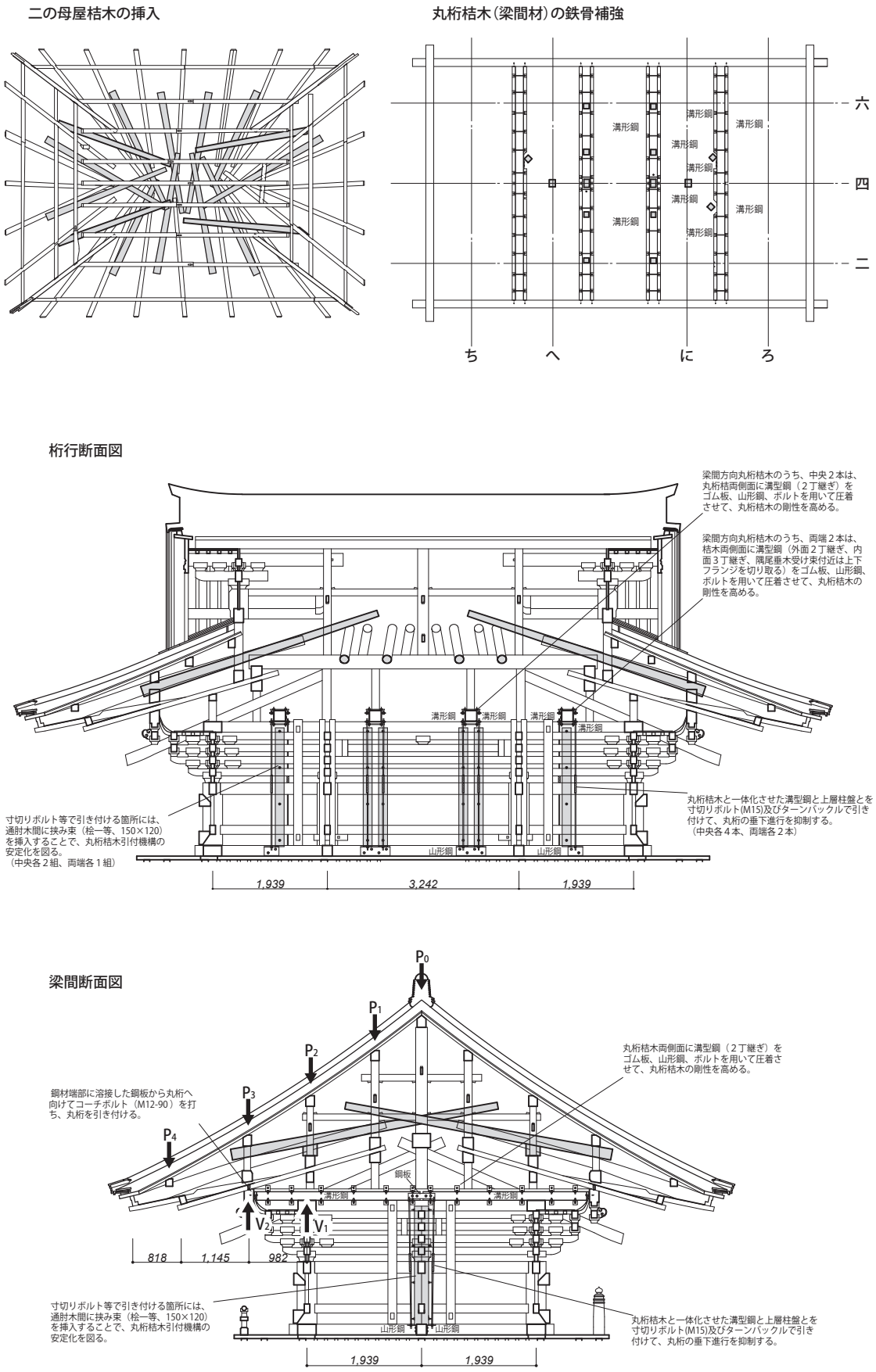


図3-8　大門小屋組補強実施図（アミカケは補強材）

表3-5　数式表（次ページへ続く）

（計算）

１．屋根重量の推移

修理前　瓦割９寸（0.273 m）、平瓦葺足５寸（0.15 m）
平瓦重量（明治瓦）2.40 kg／枚、丸瓦（正面・明治瓦）重量 0.95 kg／本、
丸瓦（背面・中世瓦）重量 3.00 kg／本、葺土重量 91.644 kg／㎡
屋根葺材（葺土を含む）１㎡あたりの重量
平瓦 2.40×1.00／0.15×1.00／0.273＝58.61 kg
丸瓦（正面）0.95×1.00／0.273×1.00／0.24＝14.50 kg
丸瓦（背面）3.00×1.00／0.273×1.00／0.30＝36.63 kg
合計　91.644＋58.61＋(14.50＋36.63)／2＝<u>175.82 kg</u>

竣工　瓦割９寸（0.273 m）、平瓦葺足４寸（0.12 m）
平瓦重量（平成瓦）3.31 kg／枚、丸瓦（平成瓦）重量 2.54 kg／本
屋根葺材（空葺下地を除く）１㎡あたりの重量
平瓦 3.31×1.00／0.12×1.00／0.273＝101.04 kg
丸瓦 2.54×1.00／0.273×1.00／0.273＝34.08 kg
合計　101.04＋34.08＝<u>135.12 kg</u>

→空葺工法の採用により、屋根面積１㎡あたり 40.70 kg の重量軽減となり、空葺下地の荷重を考慮しても、2 割程度の重量減となった。

２．茅負桔木尻引付金具に作用する桔ね上げ力（丸桁直上の土居桁を支点とする）

１㎡あたりの屋根荷重（修理前、土葺、下地含む）250 kg／㎡（概算推定値）
茅負桔木１本あたりの負担屋根面積　桔木間隔 1.60 m×流れ長さ 1.875 m＝3.00 ㎡
茅負桔木の負担屋根荷重　250×3.00＝<u>750.00 kg</u>
土居桁から鼻母屋までの水平距離 1.32 m、地垂木尻押えまでの水平距離 2.16 m
茅負桔木尻引付金具に作用する桔ね上げ力　750.00×1.32／2.16＝<u>458.33 kg</u>
丸桁桔木（梁間材）中央２本に対して、土居桁に作用する茅負桔木尻の桔ね上げ力は、
正背面各３本、計６本分と考えられ、修理前の土居桁に作用する桔ね上げ力の最大値は、
458.33×3／2＝<u>687.50 kg</u>　となる。

３．丸桁桔木（梁間材中央２本）に作用する鉛直荷重と引き上げ力

屋根荷重（修理前、土葺、下地含む）250 kg／㎡、屋根流れ長さ 6.04 m
大棟荷重　熨斗瓦（丸熨斗）重量 1.5 kg／枚、積土 955.4 kg 、瓦片 156.4 kg 、
大棟長さ 8.05 m 、水平方向 31 列、台・肌熨斗各 1 段、割熨斗 9 段、
衾瓦重量 3.5 kg／枚、水平方向 25 列（鳥衾瓦間）
(1.5×31×(1+1+0.5×9)×2＋3.5×27＋955.4＋156.4)／8.05
＝1,810.8／8.05＝224.94≒<u>225 kg／m</u>
野物材荷重（野垂木以下）600 kg／㎥（概算推定値）、野物材数量 0.137 ㎥／㎡（実測算出値）
正背面丸桁間距離　5.90 m 、丸桁桔木（梁間材）間隔 1.62 m
正背面小屋組巾（茅負前下角）9.77 m 、小屋組高さ（丸桁天～棟木天）2.99 m
小屋束間隔　中央２間 1.637 m　両端間 1.501 m　作用巾 1.637＋1.501／2＝2.3875 m
丸桁桔木上束に作用する鉛直荷重 P_0、P_1、P_2、P_3、P_4（茅負桔木未考慮）
P_0＝250×2.3875×1.00＋600×0.137×(2.69＋2.99)×0.79／2
＋225×2.37＝1,316.94 kg
P_1＝250×2.3875×1.18＋600×0.137×(2.00＋2.69)×0.94／2＝885.51 kg
P_2＝250×2.3875×1.30＋600×0.137×(1.28＋2.00)×1.08／2＝921.53 kg
P_3＝250×2.3875×1.38＋600×0.137×(0.58＋1.28)×1.19／2＝914.66 kg
P_4＝250×2.3875×1.80＋600×0.137×0.58×1.28／2＝1,104.89 kg
丸桁桔木（梁間材）１本に及ぶ鉛直荷重（茅負桔木尻の桔ね上げ力考慮）
P_0＋(P_1－687.50＋P_2＋P_3＋P_4)×2
＝1,316.94＋(885.51－687.50＋921.53＋914.66＋1,104.89)×2
＝7,595.12≒<u>7,600 kg</u>

上層柱筋、丸桁筋に作用する支点反力V_1、V_2

$(V_1+V_2)\times2=7{,}600$

$P_4\times2.330+P_3\times1.011-V_2\times0.982-(P_1-687.50)\times1.151-P_0/2\times1.939=0$

$V_2=(1{,}104.89\times2.330+921.53\times0.982-198.01\times1.151-1{,}316.94/2\times1.939)$
$/0.982=2{,}010.84$ kg≒<u>2,010 kg</u>

$V_1=7{,}600/2-2{,}010=$<u>1,790 kg</u>

上層柱真から丸桁真までの水平距離 0.982 m、建物真までの水平距離 1.939 m

丸桁桔木（桁行材）尻引付金具が丸桁桔木（梁間材）に及ぼす引き上げ力は、

2,010×0.982／1.939＝<u>1,017.96 kg</u>

この丸桁桔木（桁行材）の下に丸桁桔木（隅行材）が４本組み合うことから、全体では

1,017.96×(2＋1＋4)≒<u>7,126 kg</u>　の最大引き上げ力が生じるものと考えられる。

→丸桁桔木（梁間材）に作用する応力はほぼ釣り合っているが、丸桁桔木（梁間材）中央に応力負担を集中させたことで、桔木が全体に陸り上がったものとみられる。

４．二の母屋桔木尻に作用する桔ね上げ力（上層柱直上の土居桁を支点とする）

１㎡あたりの屋根荷重（空葺、下地含む）250×0.8＝200 kg／㎡

二の母屋桔木１本あたりの負担屋根面積　桔木間隔 1.05 m×流れ長さ 1.08 m＝1.134 ㎡

二の母屋桔木の負担屋根荷重　200×1.134＝<u>226.80 kg</u>

土居桁から二の母屋までの水平距離 1.063 m、野棟木までの水平距離 1.877 m

茅負桔木尻引付金具に作用する桔ね上げ力　226.80×1.063／1.877＝<u>128.44 kg</u>

丸桁桔木（梁間材）中央２本に対して、棟通りに作用する二の母屋桔木尻の桔ね上げ力は、正背面各４本、計８本分と考えられ、竣工時の棟通りに作用する桔ね上げ力の最大値は、

128.44×4／2＝<u>256.88 kg</u>　となる。

５．丸桁桔木（梁間材）の補強方針

丸桁桔木上束に作用する鉛直荷重P'_0、P'_1、P'_2、P'_3、P'_4（茅負桔木未考慮）を、竣工時（空葺）の屋根荷重 200 kg／㎡で算出し直す。

$P'_0=200\times2.3875\times1.00+600\times0.137\times(2.69+2.99)\times0.79/2$
$+225\times2.37=1{,}195.17$ kg

$P'_1=200\times2.3875\times1.18+600\times0.137\times(2.00+2.69)\times0.94/2=744.64$ kg

$P'_2=200\times2.3875\times1.30+600\times0.137\times(1.28+2.00)\times1.08/2=766.34$ kg

$P'_3=200\times2.3875\times1.38+600\times0.137\times(0.58+1.28)\times1.19/2-226.80=523.12$ kg

$P'_4=200\times2.3875\times1.80+600\times0.137\times0.58\times1.28/2=890.01$ kg

土居桁に作用する茅負桔木尻の桔ね上げ力　458.33×0.8×3／2＝<u>550.00 kg</u>　及び、

棟通りに作用する二の母屋桔木尻の桔ね上げ力　<u>256.88 kg</u>　を考慮すると、

上層柱筋、丸桁筋に作用する支点反力V'_1、V'_2は、

$(V'_1+V'_2)\times2=P'_0-256.88+(P'_1-550.00+P'_2+P'_3+P'_4)\times2$
$=5{,}686.51$≒<u>5,690 kg</u>

$P'_4\times2.330+P'_3\times1.011-V'_2\times0.982-(P'_1-550.00)\times1.151$
$-(P'_0-256.88)/2\times1.939=0$

$V'_2=(890.01\times2.330+523.12\times1.011-194.64\times1.151-938.29/2\times1.939)/0.982$
$=1{,}495.81$ kg≒<u>1,495 kg</u>　（修理前の 74%）

$V'_1=5{,}690/2-1{,}495=$<u>1,350kg</u>　（修理前の 75%）

丸桁桔木（桁行材）尻引付金具が丸桁桔木（梁間材）に及ぼす最大の引き上げ力は、

1,495×0.982／1.939＝<u>757.14 kg</u>　全体で 757.14×(2＋1＋4)≒<u>5,300 kg</u>　となる。

→二の母屋桔木挿入後も丸桁桔木（梁間材）に作用する応力はおよそ釣り合っているとみられて、丸桁桔木（梁間材）中央での変形を抑制するため、桔木側面に鉄骨を圧着させて剛性を高めるとともに、引き上げ力に対しては鉄骨ごと下方へ引き付けることで、応力集中の解消と桔木の変形抑制を図った。

第四章　調査事項

第一節　大　門

第一項　修理前の破損状況

明治四四年（一九一一）に解体修理されて以来、一〇〇年あまり根本的な修理はなく、上層軸部や軒廻りは緩みが生じてきていた。上層の組物は長年の屋根荷重のため、外側へ大きく倒れ出てしまっていた。また屋根の本瓦葺きは全体に滑り出し、割れや欠失が見られる状態であった。いっぽう下層は目立った腐朽や傾斜、不陸はなく、比較的健全な状態であった。

基　礎

基礎の基壇や礎石は目立った不陸、破損等は見られなかったが、軒内土間叩きに経年による割れが見られた。

軸　部

下層は目立った破損はなく、不陸、傾斜は見られなかった。いっぽう上層は経年による軸部の緩みで、柱に若干の不陸が見られる状態となっていた。

組物・軒廻　下層の腰組は、一部を除き特に目立った破損は見られなかった。上層の組物は長年の荷重で外側へ倒れ出ており、屋根回りの不陸の原因となっていた。巻斗や大斗の潰れ、めり込みも目立ってきていた。軒廻りは地垂木、飛檐垂木が全体的に垂下し、軒先の茅負に乱れや不陸が生じていた。地垂木、飛檐垂木の鼻先まわりは、虫害により穴が空き、また風食により摩耗した垂木も見られた。化粧裏板は薄く、各所で乾燥収縮により割れが生じていた。

隅木は屋根荷重で垂下してきていた。正面南側の軒先は、瓦が滑り出したため、茅負が割れ、裏甲が倒れ出してきていた。不陸状況は、図3-1～3-3参照。

小屋組・屋根野地

部材自体は比較的健全であったが、荷重により丸桁桔がむくり上がり、丸桁を桔ね上げる利きが低下していた。また放射状に入れられた各桔木も尻の引き付けが甘くなっていたうえ、北西隅の桔木は割裂しかかっており、軒先の垂下を招いていた。また南東野隅木は雨漏りにより上端が腐朽していた。

屋根野地は雨漏りにより、野地板の腐朽が各所に生じており、南面は破れてしまい、穴が空いてしまっているところもあった。野垂木も上面が蒸れ腐れし、修理が必要な状態であった。

屋　根

本瓦葺は経年で全体に滑り出しや乱れが見られる状態となっていた。特に南面の滑り出しが顕著で、軒の巴瓦、唐草瓦が上部の瓦に押されて落ちかかっていた。このような瓦の滑り出しや、経年による割れにより、各所で雨漏りが生じており、各棟積みも乱れ、瓦を根本的に葺き直す必要があった。

壁

下層壁と土壁の漆喰塗りは、割れが目立つ状態であった。仁王像背面板壁の胡粉塗りは風化により剥がれ落ちてきていた。

第二項　屋根・野地

屋根葺の概要

屋根は明治四三～四四年に解体修理された際の施工で、後に部分的な修理もなされていた。明治修理では、瓦の約半分が新調され、鬼瓦も北東隅棟を除いて明治期に全て新調されていた。

軒　瓦

再用軒平瓦は東面軒先に集約され、八割以上が明治補足瓦であった。再用軒丸瓦も大方東面に集約されており、明治補足瓦が全体の六割以上を占めていた。最下段の土留め桟へ巻き付けた銅線で軒平瓦尻、軒丸瓦玉縁をそれぞれ結い付け、軒丸瓦胴部には鉄製角断面の瓦釘を打つ。軒瓦の補修は、戦前に一回、戦後に三回確認できた。

平　葺

平葺は概ね明治期の施工が残っていた。明治修理では平瓦及び丸瓦をある程度分類・集約して葺いていた。瓦割は、南北面が丸瓦各五〇列で、東面は丸瓦三九列、西面は丸瓦四〇列と東西面で異なる。寸法差の大きい平瓦を同じ筋で混用しており、平瓦の間隔は不均一で、古瓦の再用を優先した結果と思われた。

葺足は、二の平瓦で一寸五分、以降五寸内外で葺き登っていた。明治修理時の補足平瓦の長さ九寸七分に対しては、やや甘い葺足寸法といえる。平瓦は八～十枚ごとに、丸瓦は四～五本ごとに、それぞれ土留め桟から引かれた銅線一条で括り付ける。葺土は褐色土で、平瓦下にベタ葺きとする。葺土厚は中世期平瓦底で二寸三分、近世期平瓦底では三寸もあり、葺土重量は屋根面積一㎡あたり九一・六四kgであった。平瓦間葺土内には多量の瓦片が含まれ、古瓦をその場で割り砕いていた。平葺き補修は、戦前に一回、戦後に二回を確認した。

棟　積　み

棟積も、戦前に一回、戦後に二回の補修を受けている。明治修理時の施工が残る棟積は、北流れ西側降棟と南西・北西の隅棟で、大棟下方も明治修理時の仕様が残る。いずれの棟も、台熨斗は四面に分割線と櫛目を付けた明治補足瓦を用い、割熨斗・捨熨斗には近世期平瓦を半裁転用し、衾瓦は積土内に埋め込んだ巾四分、成一寸の杉材の芯木に括り付けた銅線一条で一本ごとに玉縁を結い付ける。熨斗瓦も三～四枚ごとに銅線で相取りしていた。

明治修理以降の修理

昭和三年頃の修理では、大棟で衾瓦と鳥衾瓦が新調され、芯材として鉄棒を埋め込むために上方三段の熨斗瓦も積み直される。衾瓦は玉縁をもたず、この鉄棒に括り付けた銅線で引き付けられるが、積土内には旧衾瓦引付用の芯木と銅線も残存していた。この銅線の間隔から、旧衾瓦は現状よりも小振りなものと判断できた。この他、南流れ東側降棟と南東隅棟では台熨斗を残す形での積み直し、北流れ東側降棟でも最下段割熨斗を残す形での積み直しが行われて、南東隅棟では衾瓦と鳥衾瓦が新調されている。また、東面では平瓦の、北面では丸瓦の部分補修も行われている。この補修の特徴は、棟積内への鉄棒の挿入と補足瓦として多宝塔下層所用瓦の使用があげられる。

昭和三六年には、北東隅棟での台熨斗以上の積み直しを中心に、大棟では衾瓦とその下の熨斗瓦の部分積み直し、北流れ東側降棟では鳥衾瓦とそれに続く衾瓦の積み直し、軒瓦や丸瓦の部分補修が行われる。この補修の特徴は、積土に赤色土を使用し、熨斗瓦の相取りや衾瓦の銅線結い等を一切せずに土のみで積み切っている点で、熨斗瓦の安定を図るために、銅線の両端に括り付けた釘を熨斗瓦間に差し込んで棟積全体を帯状に押さえていた。

昭和四七年頃にも軒瓦の整備を中心とした小修理が入っている。この修理では、本堂の新調軒丸瓦及び中古軒丸瓦を使用し、南蛮漆喰にて葺き直す。

最近の修理は昭和五五年度で、南流れ西側降棟で鬼瓦の据え直しを含めた積み直しと、軒丸瓦の取り替えや据え直しが行われた。この時期の補修の特徴は、積土や葺土に南蛮漆喰を用いる点で、施工から三〇年ほど経過した現在も棟積は安定していたが、熨斗瓦への南蛮漆喰の付着が著しく、再用は困難であった。軒丸瓦の補修は、瓦座内側に銅線を結い付けた丸釘を打ち、南蛮漆喰を軒先側三分の二程度まで盛り、残りと続く丸瓦の下には白味の葺土を置く。昭和三六年修理の補足軒丸瓦を葺き直した箇所もあった。

土居葺

土居葺は、長八寸、巾三寸五分内外、厚五厘のサワラ柾の手割り板を、葺足二寸五分～三寸で葺き登り、鉄釘打ちで葺いていた。四隅の軒先には、土居葺上へ鉄板を伏せていた。土留桟は、巾一寸三分、成五分程度のスギの挽立て材を土居葺上に、南北面は一〇段、東西面は六段廻す。最下段の隅付近は軒平瓦用と軒丸瓦用の銅線を括るため二列沿わせて打つ。箕甲部分では、梯子状に打ち付けた桟木へ括り付けた銅線で掛瓦を引き付ける。いずれも明治修理時の施工がそのまま残っていたが、全体的に腐朽が著しい状態であった。

第三項　木　部

屋根野地

屋根野地まわりは、明治修理で全て取り替わっていた。

野地板は桧の板材で、厚五分、幅は八寸内外であった。長さは玉切りした状態の丸太長さによったようで、一間程度の板から、長いものでは三間あまりの板もあった。板傍は突きつけとし、脳天釘打ちに留めていた。

裏甲・瓦座

裏甲と瓦座も全て明治修理材であった。

裏甲は切目裏甲形式で、厚さ二寸、幅は利き幅なりにこしらえた桧材であった。板傍はだぼを入れ込み、茅負と裏甲受（端母屋）に脳天釘打ちに留め付けていた。木裏、木表の勝手は、特に法則は見られなかった。

瓦座は長押挽きした成六〇×幅八〇㎜の桧材で、上面を瓦繰りしていた。継手には目違を入れ、裏甲に釘打ちして留めていた。

樹種区分

化粧材には当初材が多く残る。それらの樹種を大別すると、柱はケヤキ、頭貫は下層がヒノキで上層はマツ、大斗や方斗、隅行肘木はクス、通肘木や尾垂木はマツで、巻斗は下半がマツ中心、上半がクス中心、軒支輪・垂木・茅負など軒廻り材はヒノキ、という使い分けがみられた。その他、中古にトガを用いた修理が存在し、軒支輪修理との関連もうかがえた。明治修理の補足材は、化粧材にケヤキとヒノキ、野物材にヒノキとトガを用いる。

下層軸組

下層柱には腰貫、飛貫、頭貫が入る。腰貫は小根枘差しに納まるが、飛貫は大入れとする。桁行方向の腰貫は、正面側に比べて背面側が二二一㎜高い。頭貫の反り増しは確認できない。

現在は解放となる正面両脇間、及び、土壁となる両側面では、柱間に水平部材が取り付いた仕口の痕跡が存在する。いずれも結界に関わるものとみられるが、頭貫直下の仕口は飛貫と干渉するため、飛貫が中古補足材の可能性も残る。

明治修理で取り替えた西面中央柱は、上層内部西側の柱に転用されていた。

上層軸組

上層では、北東隅柱を起点「い」とした廻り番付の墨書が確認できた。柱は柱盤へ二枚平枘差しに納まるが、明治修理で一方の枘を角枘に変更した箇所もみられた。頭貫は東面の二間通し材と南面東間、内部棟通り筋の中央間及び東間に当初材を残す。樹種はマツで、成は六寸、隅で五分の反り増しを付ける。柱天を柱盤上面から一、〇六一㎜（三尺五寸）に揃えるために、足元を柱盤へ大入れに落とし込んだり、頂部を切り縮めて調整していた。また、成六寸五分の明治補足頭貫に合わせて、各柱の頭貫仕口も彫り下げられていた。一方で、東面の一段目壁付肘木は、間斗束との取り合い仕口に勾配が付いている。その勾配と頭貫の反り増し、頭貫仕口の調整具合から、五分程度の隅延びがあったものとみられる。

軒支輪・軒支輪裏板

軒支輪及び軒支輪裏板は、明治修理時の施工が残る。軒支輪は、下端は天井桁へ大入れ、上端は丸桁内面へ丸釘止めとする。裏面には解体番付が墨書きされており、概ね番付通りに組み直されていた。垂下した軒に引っ張られる格好で、中央やや下寄りの位置で割れ裂けた部材が目立った。明治修理前も同様の破損傾向があった様で、明治修理で下半を突き付け・丸釘止めで接木した部材もあり、再び破損を来しているものもみられた。

樹種及び品質、木取り、曲面の加工具合、表面の風化具合、赤色系塗膜の残存状態、止め釘痕などの観察により、次の六種類に分類できた。当初比定材は九八本、明治修理以前の中古補足材として、中古材Aが二四本、中古材Bが一六本、中古材Cが五本、中古材Dが三本存在した。明治補足材は二二本であった。中古材Aはトガ材で寛文年間頃、以降、各時の修理で異なる手の補足材が入ったものと思われる。

軒廻り

今回の修理では飛檐垂木四本の解体に留まり、化粧隅木と木負もすべて明治補足材に取り替わっているため、旧状の軒廻りの詳細は不明である。飛檐垂木の木負前面位置での風食差痕、化粧裏板の張り替え回数、配付飛檐垂木の移設状況などから、明治以前に軒廻り以上の解体修理が三回以上は存在すると推測できた。垂木上面には明治修理時の解体番付とみられる墨書があり、概ね旧位置を踏襲している。墨書位置の木肌は調整されており、その下に古い番付墨書が残る部材もあった。

茅負桔木吊り金具の仕口が残る飛檐垂木において、その配置状況と番付墨書から、明治修理前の茅負桔木が各面で現状より二本ずつ少なかったことがうかがえた。また、化粧裏板の張り替え回数から、茅負桔木吊り金具が明治修理より二時期前の補足材と考えられた。その他、化粧裏板取り替えのために止め釘をいったん外した、北面東より五五本目の地垂木は、明治修理以前からの飛檐垂木転用材で、飛檐垂木時分の角釘も残存していた。

茅負は、南面東側、西面北側、北面中央に当初とみられる三材が残るが、いずれも明治修理時に上面や留先部分を調整している。切裏甲を解体した南面東側の茅負において、二回分以上の角釘止め痕跡を確認した。茅負の断面はL型で、眉の形は矩決りとする。明治修理で茅負内側に巾五寸の茅負桔木の杓子枘仕口が彫り足されている。また、茅負上面には、裏甲に対して大きすぎる角釘痕跡も存在し、茅負桔木を引き付けた鎹の痕跡ではないかと推測した。

茅負桔木は、隅にトガを用いる他はヒノキであった。先端を茅負に杓子枘差しに納め、尻手は地棟や土居桁へボールトで縫い付けていた。

小屋組

小屋組材は、土居桁の一部に旧丸桁を転用する他は、すべて明治補足材に取り替えられている。小屋束は、地隅木尻を両端として東西五筋で計画したものを、施工中に東西四筋へ変更していた。この変更は、先述した茅負桔木の増補との関連も考えられる。

野母屋は、丸桁直上を基準として、南北面四段、東西面三段を組む。野隅木は、建物中央と裏甲留先を結ぶ軸線上に配する。

野垂木はヒノキの挽き角材で、野地板にはヒノキを中心にトガも併用していた。いずれも手曳き鋸で仕立てられていた。野垂木は成五五㎜、巾六〇㎜、四五〇㎜間隔で野母屋に丸釘止めとする。

第二節　多宝塔

第一項　修理前の破損状況

多宝塔は昭和二～三年（一九二七～二八）に解体修理されている。それ以後の根本修理はなく、近年屋根の経年劣化が見られるようになってきていた。ことに下層北面屋根では瓦の滑り出しにより、雨漏りを来し、裏甲が腐朽し、脱落しかかっている状態であった。

上層の亀腹には、経年により亀裂が入り、剥離しかかっているところもあった。

相輪は全体に腐食し、受花や宝輪は錆びて、穴が空いたり折れてしてしまい、脱落している部品もあった。

一方で軸組や小屋組は、目立った腐朽や、傾斜、不陸はなく、健全であった。

基　礎

基礎じたいに目立った沈下等は見られなかった。

木　部

軸部や軒まわりは基本的に健全であったが、下層北側軒まわりに腐朽が見られた。この部分は瓦の滑り出しにより雨漏りを来し、裏甲が腐朽して折損したうえ、茅負まで部分的に腐朽していた。

また下層野地板は上層の雨落ち部分を中心に雨漏りにより腐朽が進んでおり、修理が必要な状態であった。

屋　根

下層屋根は北面で一部が滑り出し、軒先で雨漏りを来しており、葺き直しが必要な状態であった。事業の当初は下層北面のみの葺き替える計画であったが、軒足場を建設し、上層も含め屋根面を精査した結果、各所に瓦の割れが見られる状態で、全面的な葺き替えが必要となった。

亀　腹

上層亀腹は漆喰塗りに亀裂が入り、修理が必要であった。

相　輪

鋳鉄製の相輪は経年により腐食し、屋根瓦に錆びが流れ出していた。受花の花弁や宝輪は錆びて穴が空いたり欠けたりしているところがあり、宝輪は最上部の一つが脱落欠失しており、本来九輪であったものが八輪となっていた。

第二項　屋根・野地

屋根葺の概要

多宝塔は上層と下層とで瓦の大きさが異なっており、上層は下層に対し小さい。特徴的な瓦構成であった。

現状は昭和二～三年に修理されて以来、根本的な葺き替えはないが、部分的に、昭和二六、三六、四七年に修理されていた。

昭和修理の瓦配置

下層軒平瓦は東面と北面に近世瓦八種六四枚、南面と西面に昭和補足瓦七二枚、軒丸瓦は南面・東面・北面東半に中世瓦一一種四六本と近世瓦一一種三二本を配し、残りが昭和補足瓦であった。

下層平瓦は北面に近世瓦を集め、その他は昭和補足瓦二種であった。丸瓦は南面・東面に中世瓦と近世瓦、西面・北面は昭和補足瓦であった。軒平瓦と平瓦には中世瓦はなく、また中世軒丸瓦に対し中世丸瓦の残存率も低かった。

上層軒平瓦は各面とも中央二〇枚ずつを中世軒平瓦で揃え、中世瓦は南面の二種七本のみであった。中世平瓦は東南北の三面に、中世丸瓦は南面に配されていた。また、上層東面に集約されていた旧下層所用の軒平瓦及び平瓦は、瓦

当巾六寸五分の軒平瓦11番や13番に合わせ、片傍を欠き落して再用していた。

軒　瓦

昭和修理補足軒平瓦は、上層が均整唐草文11番（番号は後述四節参照）、下層は均整唐草文12番に倣っていた。軒丸瓦も同様、古手に倣っており、昭和修理は唐草文と三ッ巴文の組み合わせで整えようとしていた。

上下層ともに、軒平瓦は尻手中央を銅線一条引き付け、軒丸瓦は胴部釘止めと玉縁銅線一条引き付けとしていた。

平　葺

瓦割は、上下層で瓦大きさが異なるため、下層は八寸五分、上層は七寸であった。下層平瓦の葺足は三寸五分内外（両隅八筋は三寸）、上層葺足は、二の平瓦で二寸七分内外、以降三寸六分内外（両隅は三寸）で葺き登っていた。

平瓦は五～六枚ごと、丸瓦は二～三本ごとに銅線一条で括り付け、平瓦下の葺土は昭和修理の褐色土で、葺土厚は平瓦底で一寸四分であった。

隅棟積

隅棟では、上層南西に中世期の鬼瓦を残す他、修理時期を特定できる資料として、下層南東隅鬼裏側の箆書き紀年「安永九年」（一七八〇）を確認した。この頃とみられる軒平瓦が一手で四〇枚確認できて、江戸中期の屋根葺替修理が想定された。亀腹下や露盤下の際熨斗は、昭和修理時の施工が残る。積土は石灰分の極めて高い漆喰土であった。

昭和修理以降の修理

昭和二六年の修理は、前年のジェーン台風を受けての災害復旧として実施され、寺蔵の書類から当時の被害状況や施工状況もうかがい知れた。主に隅棟と上層軒瓦の補修が行われ、申請書添付の西面修理前写真と精算書添付の西面竣工写真からは軒丸瓦34番の取り替え等が確認できた。また、葺土の状況から、上層東面上方での平葺き部分補修も確認した。

昭和三六年の修理は、第二室戸台風を受けての災害復旧として実施され、施工状況から主に下層屋根と相輪の補修が行われたものと推察される。下層では、補足軒丸瓦一〇本を含む二六本が赤色土で葺き直され、北面で平瓦の部分補修も確認した。上層隅棟でも小修理が行われたとみられる。

昭和四七年頃の修理は、本堂屋根葺替修理契機の整備として、上下層の隅棟で台熨斗の一部とそれ以上を南蛮漆喰で積み直す。棟丸瓦は本堂所用の近世期丸瓦を転用し、旧棟丸瓦は平葺き補修用として再用されていた。その他、下層で一〇本、上層で二本の軒丸瓦が南蛮漆喰で葺き直され、上層では平瓦破損箇所に銅板を敷き込む補修や、南蛮漆喰の丸瓦補修が東西北で散見された。

土居葺

土居葺は、長さ九寸、巾三寸内外のスギ柾の手割り板を、葺足一寸五～八分で野地板上へ竹釘打ちに葺いていた。隅背は扇形に回さず、隅方向に葺いて納めていた。なお、文化財選定保存技術保持者であった谷上伊三郎氏の『檜皮葺の技法―選定保存技術の記録』（一九八〇）にある氏の施工経歴には、この多宝塔が最初期の施工として記されている。

土留桟は、巾一寸七分、成六分のスギの挽立て材を一尺ごとに配して、下層では九段（東面は軒先で一段多い）、上層は一〇段であった。いずれも昭和修理時の施工である。

野　地

小屋組は上下層共に、茅負桔木上に束を介して据えた野母屋上へ、スギ丸鋸挽き、厚み二七㎜内外の厚い野地板を、流れ方向に張っていた。全て昭和修理材であった。野地板には反りが付かない。昭和修理前の断面図をみても、上から二段目の母屋を境に、上方は厚手の野地板を縦張り、下方は野垂木を介して野地板を横張りとしており、三寸三分三厘と緩勾配の下層野地は、以前から傷み易い傾向にあったことがうかがい知れる。

第三項　相　輪

一　相輪の形式について

修理前の相輪は八輪の形式であった。大方の重塔の相輪は九輪であり、八輪は他に當麻寺東塔・西塔しか見あたらなく、その点で、当寺の塔は異色ともいえる形式であった。

奈良文化財研究所にガラス乾板写真群が収蔵されているが、その中に長保寺の多宝塔の古写真もある。主には昭和二～三年修理の写真で、修理前の撮影も含め三〇点がある。この写真において昭和修理の竣工写真を確認すると、相輪は九輪で写る（写真4-2）。写真と現状とを比較すると一番上部の宝輪9に違いがあり、現状は宝輪9が無い状態であった。

さらに同研究所所蔵の保存図にも、昭和修理の相輪詳細図が含まれており、こちらも確認したところ、九輪で描かれている（図16）。

現状の相輪を確認すると宝輪9が掛かる擦管の縁が腐食し欠落しており、本来九輪であったものが、昭和修理以降、擦管の縁が破損し、宝輪が脱落、欠失していたことが明らかとなった。

昭和修理前の写真（写真4-1）を見ると、八輪で写っているが、良く観察すると宝輪が一つ脱落し、下の宝輪に被さっているのが確認出来る。昭和修理精算書（第五章第一節第一項）を見ると、相輪修理は旧来の形式を「厳襲」したとある。補足材の明細からは、擦管や露盤、伏鉢等は補足されているが、宝輪は一つのみであり、宝輪の多くは昭和修理で再用されたことがわかり、現物での観察でも判別出来た。

これらから昭和修理にあたっては、他例に倣って整備するようなことはせずに、旧来の形式を尊重して修理され、九輪に復旧されたことが判明した。今回修理では欠失していた宝輪9を昭和修理保存図を元に製作し、復旧した。

写真4-2　多宝塔昭和３年修理竣工写真
（奈良文化財研究所蔵乾板写真）

写真4-1　多宝塔昭和２年修理前（撮影時期不明・大正期か・奈良文化財研究所蔵乾板写真）

なお当寺の庫裏内に、相輪擦管が保管されていたが、これは昭和修理で再用されなかったものと見られる（写真80）。宝珠下に位置して火炎を受ける擦管で、現状（昭和修理補足品）と同形同大である。側面には「奉建立／熊野本宮／九輪筒之同」の陽刻があった。しかしながら、銘文になぜ熊野本宮の九輪と同じとあるのかは不明である。

二　相輪化学分析

調査方法

解体した多宝塔相輪部材のうち二点について、住友金属テクノロジー株式会社研究支援事業部材料評価部材料機能評価室において、化学分析調査を行った。調査材は擦管1および宝輪5で、擦管1は昭和三年鋳造品、宝輪は昭和修理以前品（時期不明）である。調査は次の通りの項目で実施した。

1　外観および拡大撮影、観察－デジタルカメラで撮影

2　鋼材断面組織観察－断面の金属組織を光学顕微鏡（デジタルマイクロスコープ）にて観察・撮影

3　鋼材構成元素分析－構成成分をプラズマ発光分光分析装置（SIIナノテクノロジー製SPS3100HV UV型）を用いて分析。

調査結果

1　外観観察

腐食はほぼ全面で、擦管1では擦管2とのつなぎ目の隙間部に、宝輪5では側面部に局部腐食が見られた。また、両部材共に割れが見られた。

宝輪5は裏面片側に腐食減肉が集中し、層状のさび剥離が発生しており、表面はさびの脱落が見られず、比較的きれいな状態である。このことから、上部にある宝輪等の影響や設置箇所環境（風向き・方角等）の影響により、腐食加速因子である海塩粒子の付着具合が異なる可能性が考えられる。これは、表面

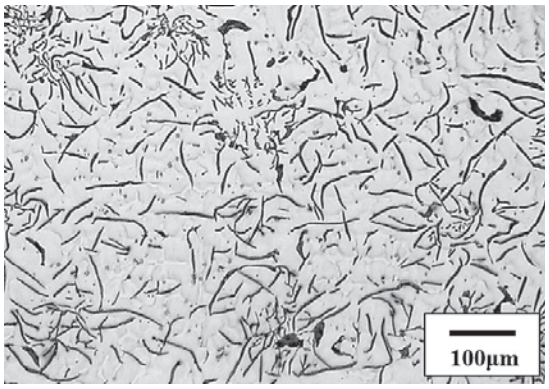


写真4-3　擦管１断面

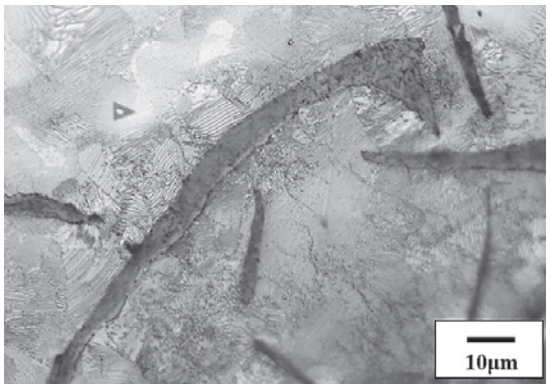


写真4-4　擦管１断面拡大

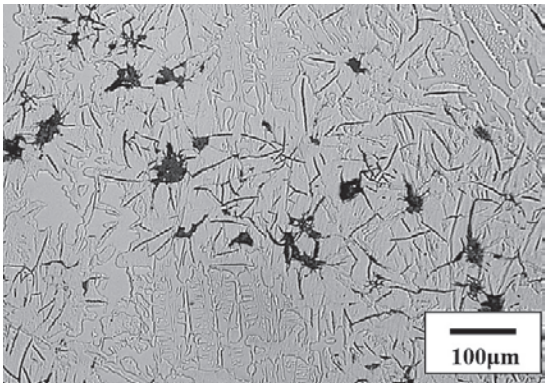


写真4-5　宝輪５断面

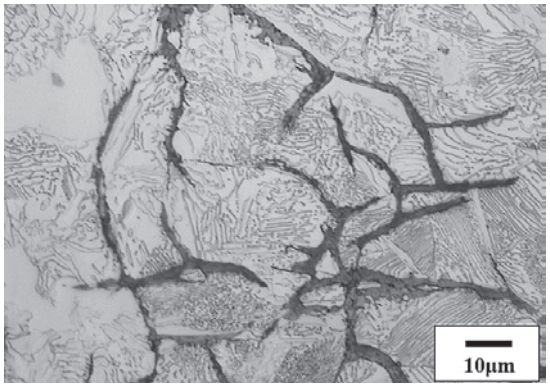


写真4-6　宝輪５断面拡大

については、雨水により海塩粒子は定期的に洗浄されるが、裏面は洗浄作用が得られにくく、海塩粒子が多いほど腐食が進行するためである。

2　鋼材断面組織観察

断面組織観察の結果を写真4-3，4，5，6に示す。

構成組織は擦管1、宝輪5共にフェライト・パーライト組織中に黒鉛が片状に分散している、「片状黒鉛鋳鉄」あるいは「ねずみ鋳鉄」である。黒い部分が黒鉛、白い部分がフェライト組織、灰色部分はパーライト組織と呼ばれるものである。ただし宝輪5は片状黒鉛部に加え、塊状黒鉛も多く確認された。

各部材を比較すると、擦管1に比べて宝輪5では片状黒鉛の大きさが小さく、また生成量自体も少なくなっていることが観察された。これは肉厚の関係で、鋳造してから固まるまでの冷却速度の差があるため、薄肉である宝輪部材は黒鉛生成が少なくなったか、製作時期の違いと考えられる。

なお、このような黒鉛が片状に晶出している組織では、伸びが小さく、また脆いため衝撃に弱いという欠点を有している。このため、両部材において台風や地震等による強い揺れにより負荷がかかり、腐食による減肉も影響して亀裂が発生したのではないかと考えられる。

強度・靭性の面で考えると、MgやCaなどを添加することにより黒鉛を球状化させた「球状黒鉛鋳鉄」あるいは「ダクタイル鋳鉄」を使用することで改善する可能性がある。ただし、耐食性の面では大きな差異は無いとされている。

3　鋼材構成元素分析

擦管1、宝輪5それぞれの構成元素分析結果を表4-1に示す。

実用されている鋳鉄はC（炭素）、Si（ケイ素）、Mn（マンガン）、P（リン）、S（いおう）の五種が含まれている。

表4-1　相輪部材元素構成

元素	擦管１	宝輪５
C	3.68%	4.58%
Si	1.76%	0.02%
Mn	0.71%	<0.01%
P	0.47%	0.15%
S	0.051%	0.020%
Cu	0.04%	0.01%
Sn	<0.01%	<0.01%
Pb	<0.01%	<0.01%
As	0.12%	0.02%
Cr	0.02%	0.01%
V	0.049%	0.004%

それぞれ特徴としては以下の内容があげられる。

C：存在比が多いほど流動性が増し、溶融点も低下し縮小も少なく、鋳物をつくりやすくする。しかし析出した黒鉛自体は脆いため衝撃に弱い。

Si：存在比が多いほどCの黒鉛化を促進する。よって通常は冷却速度が速く、黒鉛の生成が起こりにくいものほどSi量を多くする。

Mn：SをMnSとして取り除くために加える。Sと結合しないMn自体は黒鉛の生成を妨げる。

P：流動性をよくするが、一般的には有害な元素であり、鋳物に巣ができやすくなり、さらに低温脆性（低温で使用する際脆くなる）を引き起こす。

S：流動性を悪くし、さらにFeSを形成する事で割れを誘発する。Mnが十分に存在すれば害を及ぼす事は少ない。

他の元素については、存在は検出されたものの、ごく微量であったためほとんど影響を及ぼしていないと考えられる。

擦管1はC：3．68％，Si：1．76％，Mn：0．71％，P：0．47％，S：0．051％とごく一般的な鋳鉄の組成であったが、宝輪5はCおよびP，S以外の元素比が非常に小さく、特にCが4．58％と非常に高いが、Siが0．02％と少なく、同じ鋳鉄を使用したとは考えにくい。これは部材の製作時期の差と考えられる。

これらの成分の内、SはFeSで存在する事で腐食の基点となり、腐食を促進させる事が知られている。通常、Mnの添加によりMnSをつくることで悪影響を及ぼさないようにしている。MnSはFeSに比べて電気伝導率が低く、腐食量に差が現れると考えられる。

擦管1ではMn量が0．71％であり、MnSが形成され、Sの影響は少ないと考えられる。しかし宝輪5ではMnが0．01％以下と非常に少なく、FeSの影響を

受けていると考えられる。

実際にFeSが存在していると黒鉛の析出を阻害すると言われており、冷却速度が速い事に加え、この事も影響して宝輪5では黒鉛析出量が少なくなっている可能性がある。

まとめ

1　腐食は宝輪5の片面裏側に集中して起こっていた。これは、宝輪の形状から裏面にて飛来塩分の凝集が起こりやすくなっており、その結果腐食が促進された可能性が考えられる。

2　組織観察の結果、擦管1・宝輪5ともに片状黒鉛が確認された。この組織は非常に脆いため衝撃に弱く、割れやすい組織である。

3　構成元素分析の結果、擦管1と宝輪5で構成元素に大きな差が見られた。宝輪5ではMnが非常に少なく、Sによる腐食促進が影響していると考えられる。また構成元素の差は製作時期の差であることも考えられる。

第三節　鎮守堂

第一項　修理前の破損状況

鎮守堂は昭和二年（一九二七）に解体修理され、以後、昭和二六年（一九五一）と昭和三六年（一九六一）に災害復旧で部分修理、昭和五四年（一九七九）に災害復旧で屋根修理がなされていた。しかし最後の屋根替え修理から三〇年あまりが経過し、近年檜皮屋根の経年劣化が目立つようになってきていた。ことに背面側では一部に穴が空き、雨漏りを来し、重篤な状態であった。

基　礎

基礎じたいに目立った沈下等は見られない。

木　部

軸部や軒まわりは基本的に健全であったが、檜皮からの雨漏りや蒸れ腐れで、屋根の野木舞や野垂木が腐朽してきており、また正面、背面の裏甲も中央部分上面が腐朽してしまっていた。

屋　根

檜皮屋根は全体に経年で磨耗してきていた。各面軒先は水切銅板が腐朽し切れたことで、正面側と背面側のほとんどで、軒付にまで雨水が廻り込んでこんで、軒付が腐ってきていた。北東の部分では、屋根に穴が空いており、ムササビ等の小動物が棲みつくような状態となっており、小屋内には糞が大量に残されていた。穴からの雨漏りもあり、重篤な状態であった。

甍棟は全体的に乱れはなかったが、鳥衾先端が折損し、一部の熨斗瓦には割れが見られ、積み直しが必要な状態であった。

第二項　屋根・野地

鎮守堂は、明治六年（一八七三）の修理で本瓦葺に変更されたものが、昭和修理で檜皮葺に復原されている。

前述のように昭和二六年、三六年に災害復旧として部分修理、昭和五四年には屋根葺替修理を受けて来た。衾瓦に昭和五四年度の補足材を確認した。

檜皮葺

軒付は一重軒付である。昭和五四年修理で積み直しされたもので、切目の裏板仕様であった。積厚約九〇㎜であった。裏板はサワラ材、厚一五㎜で、板傍に合釘を入れ留めていた。軒付皮は長さ三〇〇㎜の軒付皮を、六〇×一五㎜の押縁を入れて積み、四五㎜長さの竹釘を打って留めていた。上端には先端をあだ折りした水切銅板を入れ、上目皮は摩耗により枚数が不明であったが、銅板

上に重ねて葺いていた。

平葺皮は先端が摩耗していたが、長七五〇㎜と長さ四五〇㎜の平葺皮を用いて、葺足一二㎜で葺かれていた。竹釘は長さ三六㎜で、二通りに打っていた。押縁は三〇×六㎜のものを、一五〇㎜間隔で入れていた。

甍棟下の品軒は、積み厚平均七〇㎜であった。品軒皮は水勾配を取るため、棟木近くに台形状の飼物を入れ、長さ一二〇㎜の皮を積んでいた。品軒上には棟折皮を用い、押縁を入れて押さえていた。

甍　棟

現状の甍棟は、昭和修理で瓦から檜皮葺に復されたさい、併せて復原されたもので、昭和五四年修理で積み直されたものである。

台熨斗一段、割熨斗三段、衾瓦で構成され、両端に鬼瓦を据える。棟長さは鬼瓦下側外々で、二八八〇㎜であった。台熨斗、割熨斗は特に銅線等で結束されず、南蛮漆喰で積んでいた。衾瓦は、各衾瓦毎に瓦片に銅線を括り付けたものを熨斗積み内に入れ、そこから銅線を立ち上げ、括っていた。

鬼瓦は投勾配九分で据え、銅線で棟木に打ち込んだ釘から引き付けていた。

瓦類の大半は昭和修理で新調されたもので、一部はさらに昭和五四年修理で補足されたものであった。鬼瓦は多宝塔上層に残る中世期鬼瓦に倣って製作されたもので、各鬼瓦の裏面には、東側で「下津港(大村瓦製造所)／鬼瓦細工人(谷中隆雄)」、西側で「下津港／大村瓦製造所／細工人谷中」と篦書きされていた。なお棟札に「棟瓦製作工　大村末吉」とあり、地元の大村瓦製造所製であった。

野地・野垂木

屋根野地は野垂木に野木舞を打つ仕様であった。野木舞は六〇×一二㎜の杉材で、一二〇㎜毎に打たれていた。大半が昭和二年材であったが、昭和五四年修理で、既存木舞間に増し打ちもされていた。

野垂木も昭和二年修理材であった。野垂木は幅六〇㎜、成三六㎜の材を成を三等分に挽き割って造られたもので、野母屋に釘打ちで留めていた。挽き割りは墨を打って手挽きでなされており、棟際は挽き切らず一材で残していた。このような仕様は、屋根の軒反りを無理なく造るためと思われる。

昭和修理棟札

小屋組内より昭和修理の棟札が発見された。(写真100)棟札は特製の箱に収められており、肩幅二二四、下幅二〇三、高さ六〇〇、肩高五八一、厚三〇㎜で、桧製であった。表面には長保寺住職瑞樹定海を始め、県知事名、修理工事委員会委員名が記されており、監督が文部技手の安間立雄、現場主任が松本軒吉であったことも分かる。

裏面には肝入大工として上林清太郎のほか、屋根檜皮葺に谷上巳之助、棟瓦製作工大村末吉などの名があり、当時の関係職人の名前が知られる。

同様のものは、同じ時に修理をした多宝塔内にも残されている。

大村瓦製造所について

鬼瓦篦書や棟札より、瓦工事は大村瓦製造所が関わったことが知られる。

しかし同じ修理時期の多宝塔の補足瓦の一部には「下津港／泉瓦製造所／大村末吉」の刻印があり、社名が異なっている。

岩本嘉弘氏(海南市文化財保護審議会委員)からの聞き取りによれば、大正期前半に、下津港で瓦屋一軒が創業し、泉州から瓦や粘土を仕入れて製造・販売を行っていたという。地元では「泉瓦」と称され、上等品として流通していたそうである。戦後に廃業するまでのあいだ、下津港付近の瓦屋はこの一軒のみであったという。同じ刻印は、下津町内の昭和六年建築の民家(岩本氏旧宅)で使用されていた瓦でも確認できた。

よって棟札にある大村瓦製造所は、泉瓦製造所からの社名変更の可能性もあるが、同一と見て良いだろう。泉州製造瓦と下津港で製造した自社瓦とを区別した可能性も考えられる。

第四節　大門・多宝塔の屋根瓦

第一項　瓦調査について

大門、多宝塔は、近代に解体修理され屋根も葺き替えられているが、中近世の瓦が良く残されていた。調査の結果、多宝塔、大門ともに、建立時に瓦を一式新調したのではなく、それ以前に焼かれたものも使用されたことが判明した。本堂と同じ瓦が、大門にも多数使用されていたのである。

本節では瓦調査の結果と、類例調査、編年考察を踏まえ、中世期の長保寺伽藍の建物相互における屋根瓦の使用状況についても考察したい。なお瓦調査にあたっては、瓦研究者である芦田淳一氏（総持寺寺史編纂調査研究員）に指導、助言を頂き、本節第五項に寄稿も頂いた。

第二項　多宝塔の屋根瓦

軒平瓦

多宝塔の軒平瓦は、下層九種、上層一〇種よりなる。

軒平瓦1番は下層東面に二枚存在し、瓦当巾二五〇㎜、瓦当高さ五四㎜、全長二七二㎜、尻手に釘穴を一個有する。瓦当文様は均整唐草文、中心飾りは橘。寛文六年（一六六六）建立の当寺紀州藩霊殿の軒平瓦と同種と考えられる。

瓦当文様からみて次に古いのは軒平瓦4番で八枚ある。瓦当巾二三六㎜、瓦当高さ三七㎜、全長二六五㎜。離型剤はキラ粉を使用し表面燻し層の残りは良い。

軒平瓦2番は下層東面及び北面で計四〇枚ある。瓦当巾二四〇㎜、瓦当高さ三七㎜、全長二六六㎜、離型剤にはキラ粉を使用する。瓦当文様は均整唐草文、中心飾り脇の花弁が右下がりとなる。

軒平瓦3番は下層東面及び北面で計九枚あり、2番と近い時期の製作とみられる。残りの四種は少数のため修理との関わりも不明である。瓦当文様からみて軒平瓦7番が最も新しい。

上層の中世期軒平瓦は九種八〇枚あり、軒平瓦11′番が四五枚、軒平瓦13番が二四枚と大半を占める。

軒平瓦11番の瓦当文様は均整唐草文で、中心飾りは宝珠形。唐草の反転は四回で、上下に界線を付ける。瓦当左端において、唐草文や界線の脇に笵傷がある。瓦当巾二〇六㎜、瓦当高さ三九㎜、全長二七九㎜。顎裏は曲線的で、タテケズリ後にヨコナデ、凹面調整台の圧痕が残る。頭部面取りは小さく、釘穴も有さない。胎土中には腐り礫を含む。残存数は四枚で、対応平瓦も一三枚と少ない。

軒平瓦11′番は、11番と同笵とみられるが、瓦当左端と中心飾り下方で笵傷が進行しており、11番よりも後作と判断できた（写真337）。瓦当巾一九七㎜、瓦当高さ三四㎜、全長二七四㎜と寸法もやや小さい。顎裏は曲線的だが、直線的な部分も現れる。タテケズリ後のヨコナデは入らない。尻手には釘穴を有する。胎土中には腐り礫を含む。対応平瓦も一、〇〇〇枚近く残存し、上層屋根瓦の中心的存在である。

軒平瓦12番の瓦当も11番に近い文様構成だが、中心飾りは花か蕾の様である。段顎で、瓦当は厚く、内区は浅い。全面的にヨコナデされ、頭部面取りは端部でなくなる三日月型である。釘穴はない。残存数一枚、昭和修理下層軒平瓦の模範品となった。

軒平瓦13番は連珠文で、珠文数一三個、界線に相当する部分を凹ませて珠文部を区画する。瓦当巾二〇九㎜、瓦当高さ五六㎜、全長二九八㎜。尻手には釘穴を有する。顎裏に曲線部分が残る段顎で、タテナデ後のヨコナデは顎裏から二寸まで。瓦当接合方法は「顎貼付」であり、平瓦部分に刻み目を付けていた（写真342）。胎土中には五㎜大の白色礫が散見される。

軒平瓦14番は連珠文で、珠文数一五個、四周界線付き、瓦当巾二一二㎜程度（片側脇区欠き取り）、瓦当高さ四〇㎜、全長二九七㎜。曲線部分の残る段顎で、尻手に釘穴を空ける。

軒平瓦15番は連珠文で、珠文数一六個、四周界線付き、瓦当巾二二〇㎜（片側脇区欠き取り）、瓦当高さ五六㎜、全長三一四㎜。顎裏に曲線部分が残る段顎で、タテナデ後のヨコナデは顎裏から二寸までなされ、尻手には釘穴を空ける。胎土中には五㎜大の白色礫が散見される。文様と寸法を除けば軒平瓦13番と非常に良く似た特徴を持つ（写真342）。

残る唐草文軒平瓦三種はいずれも単品である。軒平瓦16番は、中心飾りが宝珠形で、唐草の意匠が左右で異なる。両側とも脇区が欠き取られているため瓦当巾は不明、瓦当高さ三四㎜、全長二八〇㎜。段顎で、平瓦部凸面全体をタテナデ、釘穴なし。

軒平瓦17番は、蓮華文を中心飾りに据える均整唐草文で、小振りな唐草の反転が六回、四周界線付き。瓦当巾二〇九㎜、瓦当高さ四六㎜、全長三〇三㎜。曲線部分の残る段顎で、尻手に釘穴を有する。

軒平瓦18番は、瓦当巾二一〇㎜程度（片側脇区欠き取り）、瓦当高さ四六㎜、全長二七五㎜。曲線部分の残らない段顎で、表裏全面を丁寧にナデ仕上げする。凹面頭部付近に布目が残る。瓦当下縁の他に尻手凸面側も面取りし、尻手釘穴は矩形。寸法が異なる大門軒平瓦7番と調整方法や文様構成、釘穴形状が似ており、同時期の補足瓦の可能性が高い。

昭和修理上層補足瓦である軒平瓦19番は、各面隅から六枚ずつ葺かれる。いずれも片傍に高さ二〇㎜、巾一七㎜、長さ九六㎜の水返しが付いた左右勝手の瓦で、瓦当文様は11番に倣う。瓦当巾二一二㎜、高さ三九㎜、全長二七六㎜。

軒丸瓦

多宝塔の軒丸瓦は、下層二六種、上層五種よりなる。

軒丸瓦1番は、平用一三本、隅用二本が存在し、下層の中世期軒丸瓦全体の三分の一を占める。瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二九個。瓦当径一三八～一四〇㎜、瓦当厚三二㎜、全長三五〇㎜。釘穴は玉縁に一個で、胴部には中古の釘穴一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が残る。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一／二）、玉縁傍の面取りは肩中程まで及ぶ平坦なもので、玉縁先も軽く調整する。表面には五㎜大の白色礫が散見する。寸法面や胎土面から判断して、軒平瓦15番と組み合う可能性が最も高い。

軒丸瓦2番は下層南面に三本ある。瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、珠文の内外に圏線を有し、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二七個。瓦当径一三七㎜、瓦当厚三〇㎜、全長三五一㎜。釘穴は玉縁に一個で、胴部にも中古の釘穴一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が残る。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一～二／二）、玉縁傍の面取りは肩中程まで及ぶ平坦なもので、玉縁先も軽く調整する。頂部瓦当より一寸程度の位置に凹面調整時の受け型と考えられる圧痕が付く。表面には五㎜大の白色礫が散見する。瓦当文様を除けば、軒丸瓦1番と非常に良く似た特徴を持つ。

軒丸瓦3番は八本存在し、右巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がる。珠文数一六個。釘穴は玉縁に一個で、胴部にも中古の釘穴一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が全面に残り、抜き取り紐痕も残る。玉縁傍の面取りは肩端に達する一連のものである。

軒丸瓦4番は四本あり、左巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二一個。釘穴は胴部に一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が全面に残る。吊り紐は上方に位置し、紐の垂れ下がりも大きい。胴部側縁の面取りは大きく（側縁／側面＝四／二）、玉縁傍の面取りは二段階で肩端にまで達し、玉縁先も丁寧に面取りされている。肩外角にも面取りが入

る。同系瓦として、後述する護国院多宝塔の当初比定軒丸瓦があげられる。

軒丸瓦5番は、右巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がらない。珠文数一八個。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面にはゴザ目が全面に残る。吊り紐は上方に位置する他、下方に紐（刺し子か）痕が水平に三筋残る。胴部側縁の面取りも大きく（側縁／側面＝三／二）、玉縁傍の面取りも肩端にまで達する。玉縁先調整の有無は不明である。

軒丸瓦6番は五本存在し、右巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がる。珠文数一七個。外縁高さに対する文様高さが大きい。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が全面に残る。吊り紐は上方に位置する。五本の内一本で、内叩きの様な工具による調整痕跡も確認できた。玉縁傍の面取りは肩端にまで達するが、玉縁先は調整していない。

軒丸瓦7番は、巴が陰陽反転した右巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がらない。珠文数一四個。釘穴は胴部に一個有する。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が全面に残る。吊り紐は上方に位置する。玉縁傍の面取りは肩端にまで達し、玉縁先にも調整が入る。同種とみられる瓦に、後述する薬王寺観音堂の中古軒丸瓦があげられる。

軒丸瓦8番は、左巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二八個。釘穴は胴部に一個空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が全面に残る。側面には調整台圧痕が残る。大門軒丸瓦3番と同種とみられる。

軒丸瓦9番は、左巻き三ッ巴文、尾は内区圏線にあたらず、外縁巾も大きい。珠文数二五個。釘穴は胴部に一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が全面に残る。大門軒丸瓦2番と同種とみられるが、対応丸瓦は大門ともに存在しなかった。

軒丸瓦10番は、左巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二四個。釘穴は胴部に一個を空ける。凸面はナデ仕上げで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が全面に残る。吊り紐は上方に位置する。

軒丸瓦11番は、左巻き三ッ巴文、尾は内区圏線に繋がらない。珠文数一二個。釘穴は胴部に一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面上方には布外に付いた紐による水平方向の凹みが一筋ある。

以上の中世期軒丸瓦一一種では、胴部凹面に糸切り痕が確認できた。1、2、3番が古く、建立当初も含めて室町前期の瓦と思われた。続いて4、6、8番が室町中期頃、その他は室町後期の瓦と考えられた。

次に述べる近世期軒丸瓦一一種では、胴部凹面は鉄線引き痕に変わる。その中でまとまって存在する軒丸瓦は、15番が八本、16番が五本、20番が四本、21番が七本と四種あり、その他は主に単品で残存する。

軒丸瓦15番は、左巻き三ッ巴文、珠文数一四個、瓦当面は扁平。離型剤にキラ粉を用い、釘穴は胴部に二個を空ける。凸面はミガキに近いナデ仕上げ、凹面には成形時のゴザ目と調整時の内叩き（工具巾九㎜）が確認できる。吊り紐は上方に位置する。

軒丸瓦16番は、左巻き三ッ巴文、珠文数一四個。離型剤にキラ粉を用い、釘穴は胴部に二個有する。凸面は平滑なタテナデ仕上げ、凹面には成形時のゴザ目と調整時の内叩き（工具巾四・五㎜）が確認できる。吊り紐は無い。

軒丸瓦20番は、左巻き三ッ巴文、珠文数一六個。釘穴は胴部に一個を空ける。凸面はタテナデ仕上げ、凹面には成形時のゴザ目と調整時の内叩きの他、刺し子痕が中程に一筋確認できる。

軒丸瓦21番は、左巻き三ッ巴文、珠文数一六個。釘穴は胴部に二個、線穴も肩に一個ある。凸面は平滑なタテナデ仕上げ、凹面のゴザ目痕は玉縁部のみ残り、胴部は内叩きやナデにより平滑となる。下方には布外に付いた紐による水平方向の凹みが一筋ある。軒丸瓦22番も同種とみられたが、胴部釘穴は無い。

昭和修理の下層補足瓦である軒丸瓦23番は四八本存在する。瓦当文様は左巻

き三ッ巴文、珠文数は二八個で、瓦当径一四四㎜、瓦当厚三四㎜、全長三六二㎜。

軒丸瓦24番は、昭和三六年の災害復旧工事における補足瓦で、下層に一〇本存在する。プレス成型品で「ナラ／瓦又」の刻印がある。

隅軒丸瓦である25番及び26番は、下層南側に葺かれていたが、寸法や瓦当文様から、本来は上層用と思われた。この隅軒丸瓦二種の瓦当文様は、左巻き三ッ巴文、珠文の内外に圏線を有し、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二四個。珠文の偏りや笵型の乾燥割れによる縦方向の筋など共通点が多く、同笵の可能性が高い。隅軒丸瓦25番は、成形時に凹面の粘土を鑿で削り取っており、隅軒丸瓦1′番と共通の仕様である。頂部の曲線も似ている。一方、隅軒丸瓦26番の凹面には糸切り痕が残り、顎にも角が付く。瓦当は縦長で、頂部の反りも強い。右記より、隅軒丸瓦25番は隅軒丸瓦1′番と同時期の上層用瓦、隅軒丸瓦26番は上層用の中古補足瓦と考えられた。

軒丸瓦31番は、上層南面に五本あり、瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、珠文数は二四個、尾は内区圏線に繋がる。瓦当径一一二㎜、瓦当厚二六㎜、全長三三八㎜。釘穴は玉縁に一個で、胴部にも中古釘穴一個がある。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には布目が残る。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一～二／二）、玉縁傍は外角を二段階に面取りし、肩には及ばず、玉縁先も未調整である。瓦当接合部の補足粘土は台形を成す。頂部瓦当より一寸八分程の位置に凹面調整時の受け型と考えられる圧痕が残る。胎土中には腐り礫を含む。五本中一本は、焼成前に胴部尻手側の片方が切り欠かれた隅隣り用の瓦であった。

軒丸瓦32番は、上層南面に二本存在し、31番と同じ瓦当文様である。珠文脇の笵傷から同笵の可能性が高く、31番に対して笵型は天地逆使いで、文様高さが大きくなる。瓦当径一一六㎜、瓦当厚二七㎜、全長三二〇㎜。釘穴は玉縁に一個で、胴部にも中古釘穴一個を空ける。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が残る。胴部側縁の面取りは大きく（側縁／側面＝四／二）、玉縁傍の面取りは肩中程まで及ぶ平坦なもので、玉縁先も調整する。胎土中の腐り礫や白色礫は少なく、隅軒丸瓦26番と似る。これらから、隅軒丸瓦31番が古く、軒丸瓦32番は笵型を修正して製作された中古補足瓦と考えられた。

昭和修理上層補足瓦である軒丸瓦33番は一一三本存在する。瓦当文様は31番に倣い、瓦当径一一五㎜、瓦当厚二五㎜、全長三二三㎜。胴部凹面には鉄線引き痕、布目痕、抜き取り紐痕、内叩き痕が確認できた。上層隅軒丸瓦33′番四本も33番を元に尻手や顎形状を調整した昭和修理補足品である。

軒丸瓦34番及び35番は、昭和二五年の災害復旧における補足瓦である。

平　瓦

平瓦は、下層二、三五〇枚、上層一、八九〇枚で構成される。中世期平瓦は上層に集められ、東南北の三面で一、二〇〇枚葺かれていた。近世期平瓦は、下層北面で四〇〇枚葺かれ、さらに割熨斗瓦に転用されたものもあった。

昭和修理下層平瓦は、軒平瓦に合わせて二手に作り分けられる。南面と西面は補足軒平瓦に合わせて谷が深く頭部を面取りした平瓦3番を一、二〇〇枚（水返し付き二五〇枚を含む）、東面と北面は近世期軒平瓦に合わせた谷の浅い平瓦4番を八四〇枚（水返し付き二六〇枚を含む）配する。

平瓦11番は上層南北面に九七〇枚あり、頭巾六寸、尻巾六寸五分、長さ九寸内外で、厚み一四～一七㎜、重さ一・四〇～一・八〇kgとばらつきがある。糸切り痕が残り、頭部には面取りし、尻手に釘穴がある。

平瓦11′番は、11番とほぼ同寸であるが、尻手に釘穴がない。軒平瓦11番に対応し、一〇枚あった。

その他の中世期平瓦九種二二〇枚は東面に配される。平瓦12番は11番よりもやや大きく、尻手に釘穴がない。この平瓦には側面にも糸切り痕が確認できるものがあり、仕上がり寸法に対する粘土板の大きさもわかる。

平瓦13番の二三枚は連珠文軒平瓦13番と、平瓦14番の七枚及び15番の五三枚の二種は連珠文軒平瓦15番と対応し、大門の小振りな中世期平瓦の大半を占める瓦と同種である。糸切り痕が残るナデで、表面には砂が付く。頭部に面取り、尻手に釘穴がある。

平瓦17番は、頭部木口に「〇」型刻印があるものが二枚ある。頭部面取りは端部でなくなる三日月型で、凹面は糸切り痕が残らないナデ仕上げ、四周とも角を面取りし、凸面全体も粗いタテナデ。表面に付着した砂の粒子は細かい。

昭和修理の上層補足平瓦20番は、11番に倣って製作され、厚手（六分）の分だけ頭部面取りが大きくなる。

丸　瓦

丸瓦は、下層九五〇本、上層七六〇本で構成される。下層は南・東面に中世期七六本、近世期四三七本を配し、西・北面は昭和補足瓦となる。上層は南面に中世期一八五本を配する他は昭和補足瓦であった。

軒丸瓦1番に対応する丸瓦5番は一四本、軒丸瓦2番に対応する丸瓦3番は六本残存する。寸法は大差無いが、杵の肩の張り、凹面頭部の面取り、側縁の面取り具合等に違いがある。

丸瓦8～11番は、中世期でもやや時代が降り、いずれも対応する軒丸瓦がある。

丸瓦17番は、成形時のゴザ目痕と吊り紐痕が確認できるが、内叩きが施されて紐痕が目立たなくなった個体も含まれている（写真471）。

丸瓦25番は下層東面で一二六枚が葺かれ、近世期丸瓦で最多数を占める。一本には胴部に「谷川三太郎」の刻印があった。

丸瓦27番では一三本中四本で「泉谷川日下」の刻印三種、丸瓦29番では二本中一本で「泉州谷川／日下堅作」の刻印がある。『大阪府泉南郡岬町 谷川瓦調査報告Ⅰ』（岬町教育委員会編、一九九三）所収の刻印集成より、明治以降昭和修理以前の補足瓦とわかる。

丸瓦35番にも「半截菊花文・商標／泉州谷川田兵」の刻印があり、下層東面で一本、上層東面で三本、上層北東隅棟で三本点在する。この瓦は、明治二二年（一八八九）建立の阿弥陀堂の正側面にも葺かれている。葺土から、昭和修理で棟丸瓦で再用したものを、昭和四七年補修で平葺に再転用したとみられる。

昭和修理補足瓦の丸瓦36番は、西・北面で四一〇本ある。同じく昭和修理とみられる丸瓦37番及び49番は、下層は南面を中心に計一〇本、上層は南西隅棟で三本ある。胴部に「下津港／泉瓦製造所／大村末吉」の刻印がある。葺土から、昭和修理の補足棟丸瓦を、昭和四七年頃の修理時で平葺に転用したとみられる。

上層の丸瓦41番は、中世期丸瓦一九〇本中一六六本を占め、頭径三寸八分、尻径四寸、胴長八寸七分前後、玉縁長一寸六分前後、厚み五分、重さ一・三五kgである。玉縁に釘穴がある。凸面は軽いタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には糸切り痕と布目痕が残る。頭部面取り巾は一寸五分。玉縁傍は外角を二段階に面取りし、肩にはほとんど及ばない。玉縁先は未調整あるいは軽いナデ程度。胴部側縁の面取りも小さめ（側縁／側面＝一～二／二）である。同寸・同仕様で、玉縁釘穴がない丸瓦41′番が八本、同仕様で胴長が五分短い丸瓦42番も一本ある。42番は軒丸瓦用とも考えられる。

丸瓦42′番は、42番と寸法は

表4-2　多宝塔中世平瓦の構成割合

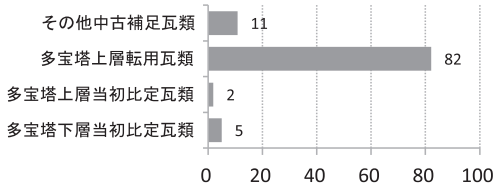
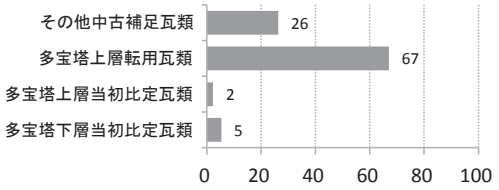


表4-3　多宝塔中世丸瓦の構成割合



近いが、布目は粗く、吊り紐痕も存在し、胴部側縁の面取りが大きい（側縁／側面＝三／二）など、特徴が異なる。残存数一本。

丸瓦43番は、胴長七寸、玉縁に釘穴があり、凸面は縄叩き目の残るタテナデ、凹面には糸切り痕と布目痕、吊り紐痕が残る。頭部面取り巾一寸。残存一本。

丸瓦44番は七本残存し、頭径四寸、尻径四寸一分、胴長九寸と41番よりやや大きく、釘穴はない。凸面のナデ仕上げも丁寧になる。玉縁傍の面取りは肩に及び、玉縁先の内外両角を三日月状に面取りする。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一／二）、頭部面取り巾は三寸と深く緩い。

丸瓦45番は、凹面の調整具合から軒丸瓦32番に対応する瓦とみられた。釘穴は玉縁にも胴部にもない。凸面はタテ＋ヨコナデで、縄叩き目も残る。凹面は目の粗い布目痕が深く残るため糸切り痕は確認できない。残存数一本。

下層丸瓦38番及び上層丸瓦50番は昭和三六年の補足瓦である。プレス成型で、「ナラ／瓦又」の刻印が押されていた。

鬼　瓦

下層の隅鬼瓦はいずれも近世期で、南東鬼に「安永九子年／五月日／東瓦町／鳴神屋甚助／作」の篦書きがある。南西と北西は同時期の補足とみられ、裏側の仕様から江戸時代前期頃と考えられる。北東隅鬼は、股繰りに軒丸瓦瓦当を嵌め込んで据えるが、昭和修理前も同様であったことが、古写真から確認出来る。寸法も上層に適する。裏側は安永銘のある南東隅鬼と似る。

上層の鬼瓦は中世期、近世期、昭和修理品よりなる。

上層南西隅鬼は中世期である。頭と裾の一部がはつり取られ、背面掴みが欠損しているが、現存部の寸法は、巾三五八㎜、高二八〇㎜、厚三〇㎜内外、鬼面鼻先の出七〇㎜であった。南西隅鬼の次に古手の北西隅鬼は、昭和修理前は下層北西に据えられていた。裾部はまだ開かずに、板裏の粘土を鑿で削り取った痕跡がある。北東隅鬼は、下層南西及び北西と同じ仕様で、ひとまわり小さい。

上層南東の隅鬼は、南西に倣った昭和修理補足瓦である。板側面に「昭和三年新補」、板裏面に「大村瓦製造所／鬼瓦細工人／谷中隆雄」の篦書きがある。なお、鎮守堂東側斜面の廃棄瓦溜まり中に、鬼面が欠失した鬼瓦があった（写真4-7）。寸法や仕様、他の廃棄瓦の状況からみて、昭和修理で不再用となった上層北西隅鬼（中古補足）の可能性が高い。

棟 丸 瓦

上下層の棟丸瓦である39番及び51番は、径五寸三分、胴長一尺一寸で、昭和四七年の本堂修理時に降ろされた近世期丸瓦を転用した補足瓦である。下層棟丸瓦39番は、各棟に一〇本ずつ配する。上層では、宝鎖金具より上方に棟丸瓦51番を各棟一〇本ずつ配し、宝鎖金具より下方は、鳥衾の胴径に見合った小振りな丸瓦を二～三本用いている。

この上層の小振りな棟丸瓦は、南西隅棟が「下津港／泉瓦製造所／大村末吉」刻銘入り丸瓦49番、南東隅棟が凹面に内叩きのある近世期丸瓦46番、北東隅棟が「半截菊花文・商標／泉州谷川田兵」刻銘入り丸瓦49番、北西隅棟が「ナラ／瓦又」刻銘入りの戦後補足丸瓦50番である。棟丸瓦は多宝塔精算書に補足瓦の記載がなく、これら小振りな棟丸瓦が当時再用されたと考えられる。

熨斗瓦・面戸瓦

熨斗瓦は、近世期平瓦転用品と、長さ八寸五分、凹面櫛目付きの熨斗瓦が中心で、少量だが下層昭和修理平瓦も転用していた。また捨熨斗（凹面櫛目付き、素地の段階で半截）もあった。

下層南東隅棟では、割熨斗転用の近世期平瓦頭部木口に「谷川三太郎」の刻印があるものがあり、刻印は丸瓦25番と同種とみられる。

面戸瓦はいずれも昭和修理補足瓦であった。下層隅棟と亀腹下及び上層露盤下には上層補足丸瓦を割ったものを使用し、上層隅棟は裏面に「上」の文字を篦書きした鰹面戸瓦を入れる。面戸瓦どうしは銅線一条で相取りしていた。

表4-4　多宝塔軒平瓦一覧（切隅含む）

（単位mm）

	分類番号	構成員数（枚）	時代区分	対応平瓦	重量（g）	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	中心飾り	内外区界線	珠文の径	幅 A(上)	幅 (下)	谷深 B	高 H	顎深 h	瓦当厚 顎底 E	瓦当厚 下面 F	瓦当厚 比率 F/E	瓦当外区 上区高 a	瓦当外区 下区高 b	瓦当外区 脇区幅 c	瓦当内区 幅 d	瓦当内区 高 e	瓦当内区 深 f	面取り 上区 高	面取り 上区 幅	面取り 下区 高	面取り 下区 幅	面取り 後縁 高	面取り 後縁 幅	全長 L	平瓦部 粘土板の拵え（コビキ）	厚 G	反り g	尻手 幅 C	尻手 谷深 D	尻手 面取り 高	尻手 面取り 幅	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴	瓦留穴の有無（△は後補） 線穴	備考
（下層）	1	2	寛文頃		2,370	均整唐草文	橘			250		25	54	37	37	20	0.54	13	6	39	171	35	6	3	4			2	1	272		18	3	224	26	1.5	3	○径13		紀州藩霊殿建立時の修理か
	2	40	安永頃		1,940	均整唐草文				240		17	37	21	24	17	0.71	7	8	45	148	22	5	糸面		糸面				266		18	4	235	17	糸面			△	近世期解体修理か
	3	9	近世		1,970	均整唐草文				248	242	15	36	22	21	16	0.76	9	8	49	146	19	4	糸面		糸面				268		18	2	237	15	糸面			△	大門に同種瓦2枚
	4	8	近世		1,820	均整唐草文	橘			236	230	16	37	22	23	14	0.61	7	8	44	147	22	5	糸面		糸面				265		17	5	233	15	糸面			△	大門に同種瓦1枚
	5	1	近世		1,910	均整唐草文				240		16	40	23	25	16	0.64	10	8	44	152	22	5	糸面		糸面				272		17	3	232	17	糸面			△	大門に同種瓦1枚
	6	2	近世		1,840	均整唐草文				240	243	18	41	24	27	15	0.56	10	9	57	127	22	5	糸面						263		17	−2	227	15	糸面			△	
	7	1	近世		1,640	均整唐草文	橘			231		18	38	23	20	15	0.75	9	7	53	125	22	4	糸面						254		17	2	225	18	糸面			△	
	8	1	近世		2,130	均整唐草文				236		16	43	26	26	19	0.73	10	9	47	142	24	6	糸面		糸面		糸面		260		19	3	223	16	糸面				
	9	72	昭和3		2,800	均整唐草文	牡丹			253	248	37	44	26	32	21	0.66	10.5	6	13	225	27	4	4	9	0.5	2	1	1	312		19	2	247	35	1.5	2		○径6	昭和解体修理、片傍水返し付きは左右勝手24枚ずつ
（上層）	11	4	（当初）	12	1,630	均整唐草文	宝珠	上下		206		33	39	22	32	29	0.91	9	8	9	188	22	6					4	2	279	糸切り	14	2	191	26	3	10		△	
	11'	45	（当初）	11	1,580	均整唐草文	宝珠	上下		197	195	33	34	23	31	24	0.77	8	5	7.5	181	21	6	1	3			1.5	1.5	274	糸切り	13.5	4	185	24	3	10	○径12	△	No.11と同笵（後笵、笵傷進行）
	12	1	中世	18	(2,120)	均整唐草文	牡丹			(218)		(20)	42	24	45	43	0.96	16	6	10	(196)	20	4	5	15			4	3	278		19	0	(184)	(16)	1	3		△	
	13	24	当初	13	2,320	連珠文、13個		内区浮出	6	203	209	33	56	39	32	32	1.00	17	12	9	185	27		6	9			2	3	298	糸切り	19	6	184	22	6	9	○径12		大門に同種瓦5枚、顎貼付
	14	1	中世		(2,030)	連珠文、15個		四周	4.5	(212)		(28)	40	28	35	28	0.80	12	9	11	190	19	8	4	7			3	2	297	糸切り	16	3	208	25	5	8	○径13		大門に同種瓦2枚
	15	2	当初	14	(2,350)	連珠文、16個		四周	4.5	(195)	(208)	(35)	56	38	35	36	1.03	17	11	12		28	7	6	8			3	3	314		21	3		−	9	12	○径11		大門に同種瓦3枚、礫を多く含む、顎貼付
	16	1	中世		(1,800)	唐草文	宝珠			(200)		(20)	34.5	18	24	22	0.92	7.5	9	(15)	(185)	17	6	1.5	6	1	1.5			280		19	2	(200)	(18)				△	
	17	1	中世		2,100	均整唐草文	蓮華	四周		209		31	46	33	27	26.5	0.98	17	8	10	189	21	5.5	7	7			1.5	1.5	303	糸切り	18	6	194	25	3	5	○径11	△	
	18	1	中世	19	(2,260)	均整唐草文	蓮華	上下		(210)		(20)	46	19	26	22	0.85	13	9	11	(188)	24	3	4	13	1	1	2.5	3	275		20	5	(190)	(23)	2	3	◇9角		大門に類似瓦5枚
	19	48	昭和3	21	2,080	均整唐草文	宝珠			212		33	39	23	28	17	0.61	12	6	10	193	21	8	6	11					276		18	2	200	(37)	1	2		○径6	昭和解体修理、片傍に水返し付き、左右勝手各24枚

表4-5　多宝塔軒丸瓦一覧

（単位mm）

	分類番号	構成員数（本）	時代区分	対応丸瓦	重量（g）	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	巴文の巻き方	外区圏線	珠文数（個）	珠文の径	直径 R	外区径 r1	内区径 r2	厚 a	外縁高 b	瓦当周縁の面取り 前縁	瓦当周縁の面取り 後縁	離れ砂の有無	全長 A+B L	丸瓦部 胴長 A	玉縁長 B	胴厚 c	玉縁厚 d	反り e	胴尻 幅 C	胴尻 高 F	玉縁元 幅 D	玉縁元 高 G	玉縁先 幅 E	玉縁先 高 H	粘土板 拵え（コビキ）	粘土板 板長（L−a）	胴部の面取り 凹面内角 幅	胴部の面取り 凹面内角 高	胴部の面取り 凸面外角 傍	胴部の面取り 凸面外角 肩	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴 胴	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴 玉縁	瓦留穴の有無（△は後補） 線穴 胴	瓦留穴の有無（△は後補） 線穴 玉縁	備考
（下層）	1	13	当初	5	2,790	三ツ巴文	左巻き		29	5	138	107	84	32	10		○	○	350	287	63	24	16	7	152	75	107	54	73	42	糸切り	318	8	10			△	径11			
	2	3	当初	3	2,860	三ツ巴文	左巻き	径93	27	4.5～6	137	103	69	30	12		○	○	351	287	64	22	15	9	152	75	115	56	79	43	糸切り	321	8	12			△	径14			礫を多く含む、凸面頂部瓦当寄りに圧痕残存
	3	8	中世	2	3,020	三ツ巴文	右巻き		16	7	143	105	73	28	11		○	○	353	293	60	19	18	6	150	83	113	64	75	51	糸切り	325	7	12			△	径12			大門に同種瓦5本
	4	4	中世	9	2,610	三ツ巴文	左巻き		21	6～7	142	102	76	24	8	○			314	278	36	23	14	9	142	74	105	56	75	43	糸切り	290	14	13	○	○	径13			△	
	5	1	中世		1,830	三ツ巴文	右巻き		18	7.5	141	98	75	24	7				314	276	38	19	11	7	132	67	104	52	欠け大	40	糸切り	290	8	12			径9			△	
	6	5	中世	11	2,210	三ツ巴文	右巻き		17	6	138	95	73	21	7	○			291	255	36	22	13	6	141	69	107	53	73	40	糸切り	270	6	8			径12			△	
	7	2	中世	10	2,130	三ツ巴文	（右巻き）		14	9	145	98	68	21	8	○	○		293	258	35	22	12	10	134	73	98	54	70	45	糸切り	272	10	10			径10.5			△	三ツ巴文様は陰陽反転
	8	1	中世		2,610	三ツ巴文	左巻き		28	6.5	146	102	76	21	6	○	○	○	309	266	43	23	14	11	143	74	103	55	欠け大	44	糸切り	288	10	11	○	○	径15			△	大門に同種瓦1本
	9	2	中世		2,770	三ツ巴文	左巻き		25	7.5	153	105	84	30	14	○		○細	331	286	45	24	15	9	149	75	106	55	71	38	糸切り	301	15	11	○		径8			△	大門に同種瓦1本
	10	1	中世		2,520	三ツ巴文	左巻き		24	6	146	105	67	19	7.5	○			341	297	44	20	12	10	140	73	103	53	70	40	糸切り	322	9	15	○		径9			△	
	11	2	中世	8	1,810	三ツ巴文	右巻き		12	8.5	150	105	77	23	8	○			282	253	29	23	8	13	136	70	101	55	77	38	糸切り	259	10	8			径13			△	
	12	1	近世		1,900	三ツ巴文	左巻き		12	7.5	145	103	(61)	20	6	○	○		309	280	29	15	13	6	133	64	101	50	72	40	鉄線引き	289	13	8	○		径16×2				
	13	1	近世		1,790	三ツ巴文	左巻き		13	11.5	138	94	(60)	17	7	○			329	300	29	15	13	10	131	58	103	46	72	35	鉄線引き	312	8	4			径14×2			△	
	14	1	近世		2,050	三ツ巴文	左巻き		14	11	140	98	(57)	17	5	○	○	○細	359	333	26	17	12	7	131	61	100	46	69	31	鉄線引き	342	14	10	○	○	径12×2			△	
	15	8	近世		2,280	三ツ巴文	左巻き		14	11	145	97	(56)	17	5	○	○		367	333	34	15	14	5	138	63	107	48	77	40	鉄線引き	350	7	3	○	○	径12×2			△	
	16	5	近世		1,860	三ツ巴文	左巻き		14	9	135	90	(50)	19	4	○	○		349	318	31	14	14	5	129	62	101	46	67	29	鉄線引き	330	13	10		○	径11×2			△	
	17	2	近世		2,430	三ツ巴文	左巻き		14	10	156	104	(60)	22	7.5	○			357	322	35	14	14	4	148	60	116	44	欠け大	34	鉄線引き	335	6	3	○	○	径12×2			△	
	18	1	近世		2,150	三ツ巴文	左巻き		16	9	148	98	(57)	19	7	○	○		326	297	29	16	15	7	138	63	110	51	欠け大	38	鉄線引き	307	10	3	○	○	径9			径3	
	19	1	近世		2,090	三ツ巴文	左巻き		16	11	152	98	(60)	20	5	○	○		320	290	30	16	12	8	136	57	105	43	70	32	鉄線引き	300			○	○	径12			径3	
	20	4	近世		2,380	三ツ巴文	左巻き		16	10	143	92	(56)	19	8	○	○		337	305	32	17	17	9	142	62	116	51	78	38	鉄線引き	318	11	5	○	○	径10.5			径6	
	21	7	近世		2,530	三ツ巴文	左巻き		16	13	153	108	(65)	24	8	○	○		342	313	29	15	16	4	150	63	112	45	78	36	鉄線引き	318			○	○	径11×2			径6	
	22	1	近世		2,200	三ツ巴文	左巻き		16	12	152	108	−64	19	7	○	○		345	313	32	16	17	4	143	62	115	50	79	35	鉄線引き	326			○					径6	
	23	48	昭和3	36	3,080	三ツ巴文	左巻き		28	4.5	144	116	83	34	12		○		362	312	50	19	12	9	152	79	112	59	78	43	鉄線引き	328			○	○	径11	径11			昭和解体修理
	24	10	昭和36	38	2,560	三ツ巴文	左巻き		20	9	151	110	79	21	7	○	○		300	266	34	18	12	3	153	73	119	57	88	38	プレス	279								径6	災害復旧（昭和36年第二室戸台風被害）
（上層）	31	5	（当初）	41	1,890	三ツ巴文	左巻き		24	5	112	88	62	26	11				338	288	50	15	9	6	121	67	91	49	68	40	糸切り	312	4	9			△	径11			礫を多く含む、凸面頂部瓦当寄りに圧痕残存
	32	2	中世	45	2,050	三ツ巴文	左巻き		24	5	116	92	64	27	11				320	271	49	20	10	11	126	63	96	45	60	34	糸切り?	293	18	17			△	径12			No.31と同笵（後笵、笵修正・天地逆使い）
	33	117	昭和3	48	1,430	三ツ巴文	左巻き		24	4.5	115	89	62	25	12		○		323	286	37	13	12	12	115	53	86	35	66	35	鉄線引き	298			○		径8			径6	昭和解体修理
	34	1	昭和26		1,630	三ツ巴文	左巻き		13	9	125	95	(62)	22	6				300	275	25	13	10	3	123	54	94	40	66	33	鉄線引き	278			○		径11×2			径4.5	災害復旧（昭和25年ジェーン台風被害）
	35	3	昭和26		1,500	三ツ巴文	右巻き		18	6	129	99	75	19	7	○	○		318	293	25	14	12	7	119	55	88	42	73	37		299			○	○			径5×2		災害復旧（昭和25年ジェーン台風被害）

表4-6　多宝塔隅軒丸瓦一覧

（単位mm）

	分類番号	構成員数（本）	時代区分	対応丸瓦	重量（g）	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	巴文の巻き方	外区圏線	珠文数（個）	珠文の径	直径 R	外区径 r1	内区径 r2	厚 a	外縁高 b	全長 A+B L	丸瓦部 胴長 A	玉縁長 B	胴厚 c	玉縁厚 d	反り e	胴尻 幅 C	胴尻 高 F	玉縁元 幅 D	玉縁元 高 G	玉縁先 幅 E	玉縁先 高 H	粘土板 拵え（コビキ）	粘土板 板長（L−a）	胴部の面取り 凹面胴傍 幅	胴部の面取り 凹面胴傍 高	胴部の面取り 凸面外角 傍	胴部の面取り 凸面外角 肩	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴 胴	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴 玉縁	瓦留穴の有無（△は後補） 線穴 胴	瓦留穴の有無（△は後補） 線穴 玉縁	備考
（下層）	1'	2	当初	(5)	2,910	三ツ巴文	左巻き		29	4.5	140	109	84	69	10	337	337	−	−	−	28	−	−	−	−	−	−	糸切り?	−	−	−	−	−		−	△	−	北西／北東隅
	25'	1	当初		2,140	三ツ巴文	左巻き	径89	24	5	129	97	65	56	9	295	295	−	−	−	7	−	−	−	−	−	−	糸切り?	−	−	−	−	−		−	△	−	南東隅、旧上層所用瓦
	26'	1	中世		1,760	三ツ巴文	左巻き	径89	24	6	125	94	64	58	9	261	261	−	−	−	15	−	−	−	−	−	−	糸切り	−	−	−	−	−		−	△	−	南西隅、旧上層所用瓦、No25'と同笵
（上層）	33'	4	昭和3		2,050	三ツ巴文	左巻き		24	4.5	117	90	62	80	12	342	342	−	−	−	18	−	−	−	−	−	−	鉄線引き	−	−	−	−	−	径13	−		−	昭和解体修理

表4-7　多宝塔丸瓦一覧

（単位mm）

	分類番号	時代区分	重量(g)	全長	胴厚	胴長	頭幅	頭高	尻幅	尻高	胴部の面取り 凹面頭幅	凹面頭高	凹面傍幅	凹面傍高	凸面外角 傍	頭	尻	玉縁厚	玉縁長	玉縁元幅	玉縁元高	玉縁先幅	玉縁先高	玉縁凹面の面取り 傍	肩	先	粘土板の挽え(コビキ)	凸面 成型時縄目痕	ナデ調整	凹面 成型時痕跡(△:2次) 布目	ｺｻﾞ目	調整方法(△:有無) 吊紐	ナデ	内叩き	櫛掻き	釘穴 胴部	玉縁	線穴(△:後補) 胴部	玉縁	葺き面別構成員数 南面	北面	東面	西面	隅棟	備考
（下層）	1	中世	2,160	341	19	281	140	68	145	67	65	5	10	15				13	60	110	50	74	41	○	△	△	糸切り	○	縦+横	○							径11			3					
	2	中世	2,130	332	19	275	145	82	152	80	50	2	11	16				14	57	114	62	80	48	○	○	○	糸切り	○	縦	○		○								1					軒丸3と組む
	3	当初	2,230	334	21	270	144	73	153	76	30	5	5	10				15	64	109	55	75	44	○			糸切り	○	縦+横	○		○					径11			6					軒丸2と組む(大門No.12と同種)、碟を多く含む
	4	中世	2,060	331	22	268	146	74	148	76	60	5	7	17				14	63	103	54	75	45	○		○	糸切り	○	縦+横	○		○					径10.5			3					
	4'	中世	1,880	327	19	271	139	65	145	75	60	8	11	14	○			13	56	106	56	77	47	○	○	○	糸切り	○	縦	○		○布内								4					
	5	当初	2,190	326	22	265	146	71	150	76	45	5	8	10				15	61	103	56	78	46	○	△	△	糸切り	○	縦+横	○		○					径11			13					軒丸1と組む、碟を多く含む
			1,740	331	20	265	141	72	146	76	60	5	11	10				15	66	108	59	80	45	○	△	△	糸切り	○	縦	○		○					径12			1					軒丸1と組む(大門No.14と同種)、碟を多く含む
	5'	中世	1,900	316	18	252	139	67	146	76	50	4	7	9				13	64	106	58	80	46	○		○	糸切り	○	縦+横	○		○布内								2					
	6	中世	2,110	325	20	264	130	73	140	72	43	6	7	10				15	61	99	53	73	36	○		△	糸切り	○	縦	○		○					径11			8					
	7	中世	2,040	313	22	255	142	70	159	77	40	5	8	10				18	58以上	109	56	欠け大	欠け大	○	△	不明	糸切り		縦								不明			2					
	8	中世	1,520	295	20	264	139	67	144	71	36	10	8	8			○	15	31	107	53	75	42	○	○		糸切り	○				○							△	9					軒丸11と組む
	9	中世	1,910	299	25	252	129	65	143	73	40	12	18	18				16	47	107	54	80	40	○			糸切り		縦	○		○								1					軒丸4と組む
	9'	中世	1,440	262	19	244	136	65	140	74	28	10	10	12				17	18	106	56	80	47	○	○		糸切り		縦	○	○	○								1					No.8と似るも玉縁が短い
	10	中世	1,400	278	20	244	132	67	136	67	34	9	8	8			○	16	34	105	52	65	40	○	△		糸切り	○	縦	○		○								9					軒丸7と組む
	11	中世	1,440	269	20	235	129	70	143	70	35	9	8	9				17	34	99	53	70	42	○	○		糸切り		縦	○		○								13					軒丸6と組む
	12	近世	1,780	316	18	280	140	64	142	67	35	6	12	10		○	○	18	36	115	55	欠け大	42	○	○		鉄線引き				○		○							3					
	13	近世	1,360	260	17	221	143	65	142	70	25	8	14	8	○		○	18	39	107	54	76	44	○		○	鉄線引き		縦		○									1					
	14	近世	1,910	285	19	243	151	70	151	75	26	6	15	10	○		○	19	42	119	60	83	45	○	○	○	鉄線引き		縦		○	○		○						10					
	15	近世	1,750	281	21	244	142	76	147	70	27	9	15	10	○		○	17	37	117	56	84	40	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○						2					
	16	近世	1,560	271	17	244	150	73	154	76	10	4	12	9	○	○	○	17	27	138	62	94	44	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○						15					
	17	近世	1,480	261	18	227	151	72	153	74	24	3	14	10	○			16	34	120	60	95	46	○	○	○	鉄線引き		縦		○	○		△						2					
	18	近世	1,850	305	18	262	148	76	160	78	34	4	15	10	○	○	○	18	43	130	60	80	45	○	○		鉄線引き		縦		○			○						2					
	19	近世	1,430	260	16	232	154	72	147	72	13	5	14	8	○			20	28	114	52	74	40	○	○	○	鉄線引き		縦		○	○		○						54		7			
	19'	近世	1,500	271	17	234	150	68	146	71	21	7	14	8	○			20	37	114	51	80	34	○	○	○	鉄線引き				○			○											玉縁先は丸みを帯びる
	20	近世	1,190	274	15	240	145	61	137	65	17	5	6	3	○	○		18	34	120	48	79	37	○			鉄線引き		縦	○				○					△	35					
	21	近世	1,270	257	16	225	145	61	136	66	22	6	15	9	○	○	○	16	32	113	50	79	40	○	○		鉄線引き		縦			○		○						7		1			
	22	近世	1,360	256	18	220	141	62	150	71	18	7	16	8	○	○	○	18	36	118	53	85	40	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○						3					
	22'	近世	1,340	257	15	225	145	70	152	73	21	7	10	6	○		○	20	32	117	57	89	47	○	○	○	鉄線引き		縦			○	○	○											
	23	近世	1,250	260	15	224	141	65	150	70	14	4	12	9	○		○	20	36	121	52	94	40	○	○	○	鉄線引き		縦		○	?	○	○		径12				1					
	24	近世	1,230	241	16	218	149	60	150	66	10	6	10	3	○		○	22	23	124	50	75	35	○		○	鉄線引き		縦	△	○	○		○						2		7			
	25	近世	1,230	236	18	205	141	62	150	64	15	7	10	2	○	○	○	20	31	115	50	78	35	○	△	○	鉄線引き		縦		○			○								126			「谷川三太郎」刻印
	26	近世	1,100	237	16	201	140	57	145	63	20	6	16	6	○			14	36	115	47	74	38	○	○		鉄線引き		縦		○	○		○								5			
	27	近世	1,040	239	14	205	141	58	146	64	15	4	10	1	○	○		13	34	115	49	87	37	○	○	○	鉄線引き		ｾｶﾞｷ		○		○							1	9	3			「泉谷川日下」刻印3種
	28	近世	1,150	228	16	202	141	63	145	62	15	6	12	3	○		○	19	26	115	49	75	36	○		○	鉄線引き		縦		○			○								41			
	29	近世	980	223	15	195	137	55	141	61	22	9	10	6	○		○	15	28	112	44	72	34	○			鉄線引き		縦+横	○	○	○		○						1		1			「日下堅作」刻印
	30	近世	990	222	16	193	134	55	142	62	10	6	10	2	○		○	18	29	111	45	78	30	○	○	○	鉄線引き		縦+横		○			○						1		2			
	31	近世	1,250	252	16	225	128	61	136	66	20	7	17	10	○		○	20	27	105	51	76	44	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○						3					
	32	近世	1,020	236	15	208	131	59	129	64	19	5	11	5	○		○	17	28	99	50	72	38	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○					△			50			
	33	近世	860	234	13	202	129	51	135	51	13	3	8	4	○		○	15	32	110	47	74	35	○			鉄線引き		縦		○			○								18			
	34	近世	960	220	16	194	127	60	127	60	18	8	16	9	○			18	26	99	47	74	44	○	○	○	鉄線引き				○		○	○								1			
割欠		近世																									鉄線引き													9		14			
	35	明治22頃	1,060	235	15	201	129	58	138	63	23	6	10	4	○			17	34	108	45	80	37	○			鉄線引き		縦						○		径3					1			「泉州谷川田兵」刻印、No.47と同一
	36	昭和3	2,310	328	18	281	153	81	154	90	20	9			○	○	○	12	47	120	70	85	65	△		○	鉄線引き											径6		201		207		
	37	昭和3	1,170	232	15	207	146	69	145	66	14	6	14	3	○		○	17	25	116	52		33	○			鉄線引き									○			径6	8	1	1			「下津港/泉瓦製造所/大村末吉」刻印、No.49と同一
	38	昭和36	2,300	379	20	310	149	78	148	76	65	9	12	12	○		○	15	69	115	60		50	○		○	プレス											径4.5		1				「昭和二十九年修補」「ナラ瓦又」刻印
	38'	昭和36		353	16	291	147		136										62								プレス											径3		1				「昭和三十年修補」「鈴木瓦工業株式会社」刻印
	38"	昭和36	1,660	276	16	242	146	67	150	67	35	8	15	1		○	○	12	34	118	51	85	40	○		○	プレス											径3		8	2			「ナラ瓦又」刻印
	39	昭和47	2,790	394	22	340	165	84	168	82	30	14	20	4	○	○		19	54	78	64	100	41	○	○	○	鉄線引き		縦								△	径5	1	2			40	本堂所用瓦を転用、No51と同一
（上層）	41	(当初)	1,350	305	15	260	113	56	121	61	35	5	8	14				8	45	92	47	67	37	□		△	糸切り	○	縦	○		○					径9.5			165		1			軒丸31と組む、腐り碟を多く含む
	41'	(当初)	1,180	316	14	265	118	57	117	60	45	4	5	14				9	51	86	45	66	35	□		△	糸切り	○	縦	○		○								8					
	42	(当初)	1,370	300	15	249	112	58	116	59	45	5	10	18				10	51	86	44	68	36	□		○	糸切り	○	縦+横	○		○					径10			1					軒丸31と組む
	42'	中世	1,100	301	13	247	113	50	109	58	50	3	9	11				8	54	84	46	62	36	○		○	糸切り	○	縦+横	○		○					径10			1					
	43	中世	1,130	264	15	215	115	60	119	62	30	5	7	12				9	49	85	47	71	44	○		○	糸切り	○	縦	○		○					径10			1					
	44	中世	1,380	324	15	274	120	55	124	60	90	2	3	5				11	50	85	42	64	37	○	△	○	糸切り	○微存	縦+横	○		○								7					玉縁先に粘土板傍(糸切り痕)が残る
	45	中世	1,400	326	16	274	119	59	121	60	60	1	4	7				10	52	欠け大	42	欠け大	欠け大	○	△	○		○	縦+横	○		○								1					軒丸32と組む
	46	近世	950	241	14	212	121	57	126	63	12	2	9	8	○			14	29	97	49	66	39	○	○		鉄線引き		縦	△	○	○		○				△						3	
	47	明治22頃	1,060	235	15	201	129	58	138	63	23	6	10	4	○			17	34	108	45	80	37	○			鉄線引き		縦						○							3		2	「泉州谷川田兵」刻印、No.35と同一
	48	昭和3	1,070	297	14	262	111	53	115	56	13	5	4	4	○			16	35	91	42	64	36	○			鉄線引き											径6	6	181	187	196		
	49	昭和3	1,170	232	15	207	146	69	145	66	14	6	14	3	○		○	17	25	116	52		33	○			鉄線引き								△		△							3	「下津港/泉瓦製造所/大村末吉」刻印、No.37と同一
	50	昭和36	1,050	239	15	209	131	56	131	60	33	8	15	5		○		14	30	105	46	70	36	○			プレス										△	径4						3	「ナラ瓦又」刻印、玉縁に水切り溝
	51	昭和47頃	2,620	394	18	342	159	80	164	84	16	5			○			22	52	78	65	100	41	○	○	○	鉄線引き										△	径5					40	本堂所用瓦を転用、No.39と同一

（玉縁凹面の面取り調整について）
□：外角2段階の面取り調整
○：1段階の平坦な面取り調整
△：調整度合いの小さいもの

		南面	北面	東面	西面	隅棟
下層	小計(本)	237	223	280	207	40
	合計(本)	987				
上層	小計(本)	190	181	191	196	51
	合計(本)	809				

表4-8　多宝塔平瓦一覧

（単位mm）

	分類	時代	重量	全長	厚	反り	幅			谷深さ		面取(幅×高)						粘土板の拵え	離れ砂の有無	凹面			凸面				釘穴	線穴	葺き面別構成員数				備考
												頭		尻		傍				痕跡		調整	痕跡		調整								
	番号	区分	(g)				頭	尻	落ち	頭	尻	幅	高	幅	高	幅	高	四周糸面	(ｺﾋﾞｷ)		布目痕	台痕	ナデ	台痕	紐痕	ナデ	その他			南面	北面	東面	西面	
（下層）	1	近世	1,810	270	15	5	223	240	17	20	23	2	1					○		△			○								399			谷浅
	2	昭和3	2,070	264	18	2	243	250	7	35	36	12	8	2	1			○					○						径5	456			491	谷深
	2'	昭和3																○					○						径5	130			116	谷深、左右勝手(片傍に水返し付き)
	3	昭和3	2,020	264	16	5	235	250	15	23	22	3	2					○					○									483		谷浅
	3'	昭和3																○					○						径5		128	132		谷浅、左右勝手(片傍に水返し付き)
	4	昭和36	—	266	18	3	(210)	(250)	—	—	—	15	9					○	ﾌﾟﾚｽ				○								5			片傍を割り欠いて使用
	5	昭和47	1,880	261	16	7	221	238	17	20	20	1	1	2	1			○					○	○	○					4			4	本堂所用瓦を転用
（上層）	11-1	（当初）	1,450	274	14	3	174	190	16	32	30	9	3						糸切り	○		○	○	○	○			径8		449	414	106		薄手、軒平11'と組む
	11-2		1,760	275	17	4	182	197	15	20	25	8	8			2	1		糸切り	○		○		○	○			径10						厚手、軒平11'と組む(大門No27と同種)
	11'	（当初）	1,670	282	15	5	183	196	13	30	27	9	4			2	1		糸切り	○		○	○		○							10		軒平11と組む(大門No28'と同種)
	12-1	中世	1,540	286	14	2	180	190	10	30	31	14	3			3	2		糸切り	○		○	○		○	○						13		薄手
	12-2		1,900	288	16	3	185	205	20	27	23	8	5					○	糸切り	○			○			○								厚手、両側面に粘土板傍(糸切り痕)が残る
	13	当初	1,980	302	19	3	175	199	24	25	27	12	7	5	3				糸切り	○			○		○			径11				23		軒平13と組む(大門No26と同種)
	14	当初	2,280	305	21	2	196	210	14	26	21	11	6						糸切り	○			○	○	○	○ﾀﾃ		径13				7		軒平15と組む(大門No22と同種)
	15	当初	2,390	315	21	2	191	212	21	23	23	9	6	3	2				糸切り	○			○		○	○		径11				53		軒平15と組む(大門No21と同種)
	16	中世	2,160	310	20	4	185	211	26	24	21	16	8	5	2				糸切り?	○			○		○			径11				1		軒平14と組む(大門No19と同種)
	16'	中世	2,440	311	20.5	1	191	207	16	22	21	12	6	2	2	2	2	○	糸切り	○		○	○ｸﾀﾃ	○	○							12		釘穴は中央寄りに穿たれる
	17	中世	1,570	255	19	−2	173	187	14	22	23	15	6	4	2	4	2	○					○		○	○ｸﾀﾃ						8		頭部刻印、面取り三日月型
	17'	中世	1,460	259	18	1	178	196	18	20	21	18	5	4	2	4	2	○					○	○	○	○ｸﾀﾃ						1		頭部刻印、面取り三日月型、凹面尻手に突起
	18	中世	1,670	272	19	0	186	206	20	22	24	12	4			2	2						○			○						12		頭部面取り三日月型、反りなし
	19	中世	2,140	290	20	3	194	215	21	25	29	17	7										○ﾖｺ			○ｸﾀﾃ						61		燻し層の残り良い
	割欠	中世																														25		
	20	昭和3	1,690	276	17	2	185	198	13	27	30	11	8					○					○			○		径5		45	55	107	488	
	21	昭和3	(1,660)	275	17	2	200	205	5	35	35	11	8					○					○			○		径5						左右勝手(片傍に水返し付き)

（表中の括弧付きの数値は、割れ欠け等により完形時との差が大きいものを示す。）

		南面	北面	東面	西面
下層	小計(枚)	590	532	615	611
	合計(枚)	2348			
上層	小計(枚)	494	469	439	488
	合計(枚)	1890			

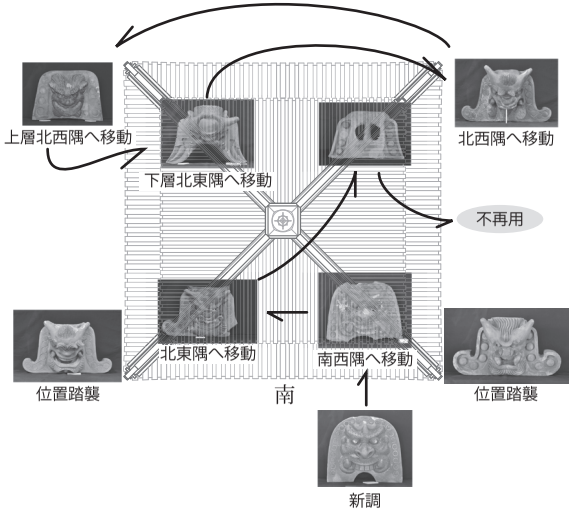


図4-1　多宝塔昭和修理鬼瓦配置換状況

写真4-7　廃棄されていた鬼（左）と上層北西隅鬼の比較

第三項　大門の屋根瓦

大門の瓦

大門には中世期瓦が、平瓦三、七九〇枚のうち一、四〇〇枚、丸瓦一、九三〇本のうち四五〇本と数多く残っていた。寸法別に分類すると次の通りで、特に平瓦は軒平瓦よりも種類が多く、特徴的な残存状況であった。

イ　大門建立当初と比定した軒平瓦・軒丸瓦と対応する平瓦・丸瓦の割合が少ない。

ロ　イよりも大振りな平瓦は三五〇枚（中世期平瓦全体の二五％）、小振りな平瓦は八四〇枚（同六〇％）と大半を占めた。

ハ　イよりも大振りな丸瓦は二一〇本（中世期丸瓦全体の四七％）、小振りな丸瓦は一一〇本（同二五％）と大半を占めた。

軒平瓦

大門の軒平瓦は二〇種よりなる。

軒平瓦1番、2番は寸法や製作技法から当初と比定出来る。瓦当文様が四周に界線を廻した連珠文で、珠文数は十個、瓦当巾二五〇㎜前後、瓦当高さ五六㎜。1番は三枚あり、全長三三六㎜、2番は二枚で全長二九三㎜である。このうち2番のうちの一枚で、1番の尻側を素地の段階で切り縮めて谷深さを調整した後に釘穴をあけ直したことが確認でき、意図的に作り分けられたことがわかる。顎裏に曲線部分が残る段顎で、二種五枚のうち四枚で瓦当下縁の面取りが確認できた。2番では瓦当左右縁を面取りしたものも存在する。

その他の中世期軒平瓦は、連珠文軒平瓦が三種九枚、均整唐草文軒平瓦が二種七枚、波状文軒平瓦が一種二枚存在する。連珠文軒平瓦3～5番は、多宝塔上層の連珠文軒平瓦13～15番と同一の瓦である。

唐草文軒平瓦6番二枚のうち一枚は、二方に水返しの付いた掛平瓦を調整したものであった。瓦当は中心飾りに半截菊花を据えた均整唐草文。瓦当巾二四〇㎜、瓦当高さ五二㎜、全長三一七㎜。尻手の釘穴は中央寄りにあけられている。顎裏には曲線部分を残すが、瓦当下縁の他、瓦当下面から平瓦凸面の両傍にかけて面取りが続いている。寸法面や製作技法面から、軒丸瓦3番と組む中古の補足瓦と比定された。

唐草文軒平瓦7番は、当初瓦と形状・寸法が近く、大門用の補足瓦として特に拵えられた可能性がある。曲線部分の残らない段顎で、表裏全面を丁寧にナデ仕上げする。瓦当下縁の他に尻手凸面側も面取りしている。釘穴は矩形。多宝塔軒平瓦18番でも述べた通り、同時期の補足瓦の可能性がある。

波状文軒平瓦8番は、曲線部分の残らない段顎で、瓦当部、平瓦部いずれにも面取りは施さず、表裏ともにナデ痕が明瞭な強いナデ仕上げとし、焼成時の変形が大きい。

近世以降の中古補足瓦として古いものは、群を成さず単品でしか残っていない。江戸時代後期から明治修理までの補足瓦は、中心飾りに橘を据えた均整唐草文軒平瓦が五種一一枚存在する。このうち、瓦当面に「谷川喜」の刻印のある軒平瓦三枚は、近隣所在の重要文化財福勝寺本堂の、江戸時代末期補足瓦と同じと考えられた。残る軒平瓦は、一種五枚と小振りな単品もの三枚であった。

明治修理補足瓦である軒平瓦19番は、瓦当文様が界線部分を凹ませた連珠文

表4-9　大門中世平瓦の構成

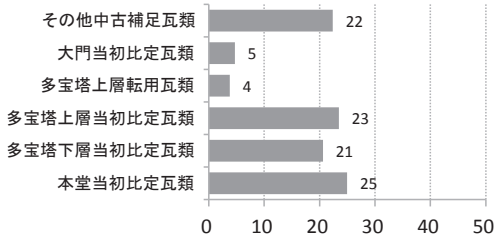
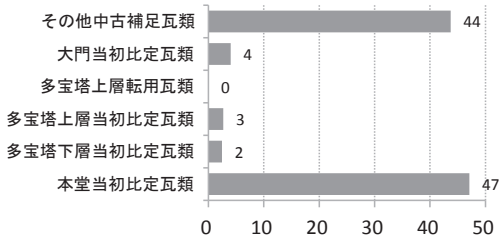


表4-10　大門中世丸瓦の構成



で、珠文数は一五個、瓦当巾二五〇㎜前後、瓦当高さ五七㎜、全長は軒用が二八七㎜、螻羽用が二五七㎜。凸面尻手の櫛掻き目の付け方に二手ある。最も古式とみられる軒平瓦3番を元に、瓦割に合わせて珠文数を調整したのだろう。

軒丸瓦

大門の軒丸瓦は二一種よりなる。

軒丸瓦1番は当初比定軒平瓦に対応するもので五本残る。瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、珠文数は三二個、瓦当径一七〇㎜、全長三七五㎜。尾は内区圏線に繋がる。釘穴は胴部に一個ある。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には布目が全面に残る。吊り紐は中央やや上方に位置し、紐の垂れ下がりは大きい。胴部側縁の面取りは大きく（側縁／側面＝三／二）、玉縁傍の面取りは肩端に達する一連のものとなり、玉縁先も丁寧に面取りされている。胎土中に腐り礫を含む。

その他の中世期軒丸瓦は、三種六本と少ない。軒丸瓦4番は多宝塔軒丸瓦3番と同種瓦で残存数四本、軒丸瓦3番は多宝塔軒丸瓦8番と同種瓦で残存数一本、軒丸瓦2番は多宝塔軒丸瓦9番と同種瓦で残存数一本であった。

近世期の軒丸瓦として古いものは、軒平瓦と同じで単品で残存する。時代が降って、軒丸瓦8番三本と軒丸瓦9番七本は、いずれも左巻き三ッ巴文、珠文数一四個で、離型剤にキラ粉を用いる。凹面は成形時のゴザ目痕と調整時の内叩き、仕上げ時の布目痕など共通点が多い。

軒丸瓦10番は本来隅用で、明治修理時では北西隅に葺かれたとみられるが、戦後に西面へ葺き直されていた。凹面は成形時のゴザ目痕をナデ消した後に内叩きを施して釘穴があけられている。寸法や側縁の面取り具合、風食具合等から、丸瓦30番と同時期の瓦と思われた。

江戸時代後期から明治修理までの軒丸瓦は、軒丸瓦13番一〇本と隅軒丸瓦一本がまとまって存在する。左巻き三ッ巴文、珠文数一六個で、離型剤にキラ粉を用いる。凹面には成形時の布目痕と抜き取り紐痕が残り、側面の調整台圧痕はナデ消される。

明治修理の補足瓦である軒丸瓦15番は、軒先と螻羽を合わせ一四五本ある。瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、珠文数は一六個、瓦当径一六一㎜、全長三六九㎜。なお大門の後に修理された国宝善福院釈迦堂も、同じ軒丸瓦が補足されている。

平瓦

明治修理の補足平瓦は南北面降棟内側に、再用平瓦は東西面と南北面降棟外側にそれぞれ葺き分けられ、総数三、七九〇枚のうち明治瓦は二、一二〇枚である。西面は中世期平瓦のみで構成され、寸法・形状で分類すると二三種類もある。大振りの平瓦は頭巾八寸、尻巾九寸、長さ一尺一寸五分前後、厚さ七分五厘前後、重さ三・五〇kg前後で、小振りで最多数の平瓦は頭巾六寸、尻巾六寸八分、長さ一尺前後、厚さ七分、重さ二・四〇kgであった。頭巾に二寸余りも違いはあるが、仕様や風食具合等からは大きな時期差を感じない。

大振りな中世期平瓦は、1～7番の一二種で三五〇枚残存していた。

平瓦8番は軒平瓦1番に対応する瓦とみられ、残存数一一枚と少ない。

小振りな中世期平瓦には、大門軒平瓦5番（＝多宝塔軒平瓦15番）に対応する平瓦22番と大門軒平瓦3番（＝多宝塔軒平瓦13番）に対応する平瓦26番が約三〇〇枚ずつ存在する。これら対応平瓦の中には、分割線入り平瓦（未半截）や瓦当部分を欠き取った分割線入り軒平瓦（隅隣り用、未半截）、箆書き入り平瓦も含まれる。

箆書き入り平瓦は18番の一枚で、凹面見え隠れ位置に「ヒラカワラノニキ（用）／三千八百マイ」と書かれていた（写真180）。

分割線入り平瓦は、22番と同種のものが五枚（そのうちの一枚は分割線なし）、26番と同種のものが一枚ある。いずれも成形した平瓦の広端側の瓦傍を削って両木口の巾や谷深さを調整し、広端側にも頭部面取りが施されていた。

分割線入りの旧軒平瓦も平瓦22番と同種で、西面で一枚確認した。この瓦の瓦当接合方法は「顎貼付」で、平瓦部分に刻み目を付けて顎部を接合するのは、多宝塔軒平瓦13番＝大門軒平瓦3番と共通であった（写真342）。寸法と残存する瓦当面での連珠文や界線から、大門軒平瓦5番＝多宝塔軒平瓦15番と同種の隅隣り用であることが判明し、この二種の連珠文軒平瓦が同時期の製瓦であることが想定された。

さらに小振りな中世期平瓦として、多宝塔軒平瓦11番に対応する平瓦28番が七枚、多宝塔軒平瓦11′番に対応する平瓦27番も四六枚存在した。

近世期平瓦は一一種で、東面南寄りの平葺き一〇列分の約二〇〇枚と少なく、多くは棟積で割熨斗瓦に転用されていた。頭巾七寸四分、尻巾七寸八分、長さ八寸八分、厚さ六分前後を中心に、似たもの二種が大半を占め、その他は数枚単位での使用であった。平瓦41番では、頭部木口に菊目の刻印を確認した。

明治修理での補足平瓦51番は、凸面尻手に三組の櫛目を付け、その付け方には二手が確認できた。螻羽用には、片傍へ水返しを付けた二の平瓦を用いていた。

丸　瓦

丸瓦は、北面東寄りに大振りな中世瓦、東西面と南北面降棟外側に近世以前の再用瓦、残る南北面に明治補足瓦を配し、総数一、九三〇本のうち八八五本が明治補足瓦である。再用丸瓦は、東面で中世三種、近世二二種、西面で中世八種、近世一五種、南面で近世四種、北面で中世八種、近世一〇種であった。

大振りな中世期丸瓦は、1～5番の七種二一〇本で、残存する中世期丸瓦の約半数を占める。いずれも精錬された胎土で、礫を多くは含まず、焼き締まりも良好であった。胴部側縁の面取りは小さい（側縁／側面＝一～二／二）。玉縁傍の面取りは、大きく平坦なものと外角にも面取りした二段階のものが存在する。いずれも肩へ幾分か及び、玉縁先は未調整のものが主で、調整していても軽くなでる程度である。吊り紐の高さには中央上寄りと中央下寄りの二手が存在する。頭部凹面の面取り巾は二寸程度で、吊り紐が下寄りに位置する瓦では二寸～三寸とややばらつきもみられた。こうした特徴は個体内で混在しており、製作技法面での二分化はできない。右記から、頭径五寸五分、胴長一尺五分～一尺一寸、玉縁長二寸五分、胴厚七分五厘の規格で製作された一手であると判断した（瓦重量三・〇〇～三・五〇kg）。

丸瓦7番は軒丸瓦1番に対応するとみられ、残存数は九本と少ない。胴部側縁の面取りは大きく（側縁／側面＝三／二）、玉縁傍の面取りは平坦で片端に達する一連のものとなり、玉縁先も丁寧に調整されている。吊り紐は上方に位置し、紐径は四・五㎜。6番や8′番も特徴の似た瓦である。これらの瓦を含めても中世期丸瓦全体の四％にすぎない。

小振りな中世期丸瓦には、多宝塔軒丸瓦1番に対応する丸瓦12番（＝多宝塔丸瓦3番）が一一本、多宝塔軒丸瓦2番に対応する丸瓦14番（＝多宝塔丸瓦5番）が一二本確認できる。その他、軒丸瓦3番及び4番に対応する丸瓦も若干数確認できた。

近世期丸瓦は、凹面に内叩き調整の無いものが一九種、あるものが一六種存在する。27番と44番は同種とみられて、内叩き調整の過渡期と考えられた。軒丸瓦と対応する丸瓦も多い。全体としては二つの量的なまとまりが確認できて、近世期における屋根葺替修理が二度は存在すると推察された。丸瓦21番では、肩に菊目の刻印を確認した。丸瓦42番は、南面に「谷川孫八」の刻印があるものが一本、西面に刻印が無いもの九本が確認できて、刻印による類例から一八世紀後半以降の小修理がうかがえる。

明治修理での補足丸瓦は61番で、凹面三箇所に櫛目、玉縁に線穴がある。

降棟下の袖丸瓦はすべて明治期に新調され、各箇所一二本、計四八本、玉縁や凹面に番付の漢数字が箆書きされていた。いっぽう近世期の袖丸瓦も転用されたものが、南面東側で七本確認できた。袖をはつって丸瓦に拵え直したもの

表4-11　大門軒平瓦一覧（切隅を含む）

（単位mm）

分類番号	構成員数（枚）	時代区分	対応平瓦	重量 (g)	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	中心飾り	内外区界線	珠文の径	幅 A(上)	幅 (下)	谷深 B	高 H	顎深 h	瓦当厚 顎底 E	下面 F	比率 F/E	瓦当外区 上区高 a	下区高 b	縁区幅 c	瓦当内区 幅 d	高 e	深 f	面取り 上区 高	幅	下区 高	幅	後縁 高	幅	全長 L	粘土板の拵え (ｺﾋﾞｷ)	平瓦部 厚 G	反り g	尻手 幅 C	谷深 D	面取り 高	幅	瓦留穴の有無（△は後補） 釘穴	線穴	備考
1	3	当初	8	3,800	連珠文、10個		四周		248		35	56	32	35	34	0.97	16	12	12.5	223	28	8	3	12	1	1	3	2	336	糸切り	25	3	238	25	6	20	○径13		顎貼付
2	2	当初	(8)	2,990	連珠文、10個		四周		250		35	56	29	36	34	0.94	16	12	12.5	225	28	9	1	12	2	1	2	2	293	糸切り	20	3	236	35			○径12		No.1の尻手を切り縮めて谷を調整、掛平用か
3	5	当初（多）	26	2,620	連珠文、13個		内区浮出	6	198	206	32	57	38	33	32	0.97	17	12	11	184	28	9	9	9			1	1.5	300	糸切り	22	6	183	21			○径10		多宝塔に同種瓦24枚、顎貼付
4	2	中世	19	2,290	連珠文、15個		四周	4.5	210		25	49	30	29	28	0.97	20	9	11.5	187	20	7	8	8	0.5	0.5	1	1	297	糸切り	18	2	192	23	4	15	○径14		多宝塔に同種瓦1枚、護摩堂に類似瓦あり
5	2	当初（多）	22	2,995	連珠文、16個		四周	4.5	220		34	57	39	36	35	0.97	19	10	11	198	28	8	6	7			2.5	3	315	糸切り	22	3	200	32	5	12	○径13		多宝塔に同種瓦2枚、胎土中に礫を多く含む、顎貼付
5'	1	当初（多）	(22)	(2,460)	(顎部切除)		四周		220	－	37	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	6	－	－	－	－	308		23	4	200	28	6	15	○径11		旧軒平瓦、瓦当切除後平瓦に転用、顎貼付(掻き目)
6	1	中世	20	3,120	均整唐草文	半截菊花			230	240	32	52	17	33	31	0.94	17	10	4	222	25	6	6	8	2	3	1.5	1.5	317		22	3	219	27	2	8	○径10		
6'	1	中世		3,500	均整唐草文	半截菊花			235	240	33	50	15	34	32	0.94	15	10	6	223	25	7	5	9	1.5	1.5	2.5	2.5	310		25	4	218	22	－	－	○径9		旧掛平瓦、水返し部切除後軒平瓦に転用
7	5	中世		3,465	均整唐草文	蓮華			263		41	51	26	38	33	0.87	13	9	10	230	29	7	1	15	1.5	3	4	3	329		19	2	258	39			◇9角		多宝塔に類似瓦1枚
8	2	中世		2,730	波状文				236	250	38	43	26	29	23	0.79	10	10	23	190	23	5							291		18.5	9	238	31					
9	1	近世		2,330	均整唐草文	三葉			244	238	20	47	30	25	15	0.60	9	9	36	172	29	6							277		19	0	226	20				○径6	
10	1	近世	41	2,800	均整唐草文	橘			265		25	42	26	26	15	0.58	8	8	49	167	26	5	3	3					288		19	4	250	28				△	
11	1	近世		2,795	均整唐草文				270		22	40	24	26	18	0.69	8	8	59	152	24	3	1	1					297		19	0	260	21				△	
12	1	近世		2,680	均整唐草文	半截菊花			275	263	27	43	26	26	14	0.54	9.5	9.5	48.5	166	24	6	5	2					301		19	0	(260)	－				△	
13	1	近世	43	2,275	均整唐草文				250		19	50	33	23	13	0.57	10.5	10.5	41.5	167	29	7							277		17	2	244	14				△	
14	2	近世	44	1,930	均整唐草文				236		18	44	32	22	15	0.68	11	11	46.5	143	22	5	1.5	1.5					264		18	1	226	16				△	多宝塔に同種瓦9枚
15	1	近世	45	1,770	均整唐草文				240		14	36	22	24	14	0.58	7	7	49	142	22	5	1.5	1.5	1.5	1.5			264		17	2	(230)	(15)	1.5	1.5		△	多宝塔に同種瓦1枚
16	1	近世		2,050	均整唐草文				240		14	42	25	24	13	0.54	9.5	9.5	50/40	150	23	5	4	1.5					267		18.5	1	230	17				△	多宝塔に同種瓦8枚
17	3	江戸後	48	2,710	均整唐草文				262		31	41	24	30	20	0.67	8.5	8.5	66	130	24	5	1	3	1	3			288		19	2	248	31	1	3		□6角	瓦当刻印「谷川喜」、阿弥陀堂に類似瓦あり
18	5	近代	50	2,700	均整唐草文				268		20	47	28	30	15	0.50	10	10	61.5	145	27	5	1.5	1.5	1.5	1.5			290		20	3	254	21	1.5	1.5			
19	139	明治44	61,62	2,980	連珠文、15個		四周	9	250	260	26	57	44	38	23	0.61	11	11	15	220	35	9	7	7	1	2	2	3	287	鉄線引き	18	2	235	20	4	3	○径10		明治解体修理、凸面尻手に櫛掻き
19'	56	明治44		2,530	連珠文、15個		四周	9	249	247	20	59	41	45	25	0.56	17	9	13	222	33	8	7	8	1	2	1	2	257	鉄線引き	15	2	243	26	2	2	○径10		明治解体修理(掛平瓦)、凸面尻手に櫛掻き
20	3	昭和36	64	(2,930)	均整唐草文	三ツ葉葵			273		45	53	35	35	21	0.60	26.5	26.5	136.5	223	33	11							323	プレス	19	2	欠け大	欠け大					北東隅軒平瓦、東妻北流掛平瓦に使用

（表中の括弧付きの数値は、割れ欠け等により完形時との差が大きいものを示す。）

表4-12　大門軒丸瓦一覧

（単位mm）

分類番号	構成員数（本）	時代区分	対応丸瓦	重量 (g)	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	巴文の巻き方	外区圏線	珠文数（個）	珠文の径	直径 R	外区径 r1	内区径 r2	厚 a	外縁高 b	瓦当周縁の面取り 前縁	後縁	離れ砂の有無	全長 (A+B) L	丸瓦部 胴長 A	玉縁長 B	胴厚 c	玉縁厚 d	反り e	胴尻 幅 C	高 F	玉縁元 幅 D	高 G	玉縁先 幅 E	高 H	粘土板 拵え (ｺﾋﾞｷ)	板長 (A−a)	胴部の面取り 凹面内角 幅	高	凸面外角 傍	肩	瓦留穴の有無(△は後補) 釘穴 胴	玉縁	線穴 胴	玉縁	備考
1	5	当初	7	4,030	三ツ巴文	左巻き		32	4	170	130	60	30	11	○	○		375	324	51	25	16	8	157	85	115	63	93	45	糸切り	294	15	15	○	○	径15				
2	1	中世		2,995	三ツ巴文	左巻き		25	6	150	110	76	30	15	○		○細	325	286	39	24	20	11	154	79	112	52	84	29	糸切り	256	15	10	○	○	径10				多宝塔に同種瓦1本
3	1	中世	19	2,475	三ツ巴文	左巻き		28	7	152	108	78	22	7	○		○	312	272	40	22	16	13	132	73	95	50	欠け大	欠け大	糸切り	250	10	10	○	○	径14				多宝塔に同種瓦1本
4	4	中世	13'	3,100	三ツ巴文	右巻き		16	7	144	107	70	28	11		○	○	356	300	56	23	18	7	145	85	110	58	80	30	糸切り	272	3	10			△	径12			多宝塔に同種瓦8本
5	1	近世	31	2,490	三ツ巴文	左巻き		16	8	160	114	(74)	23	4		○		302	262	40	21	19	8	150	76	120	51	90	20	鉄線引き	239	16	7	○		径13				
6	1	近世	21	2,650	三ツ巴文	左巻き		16	9	163	114	(73)	20	7		○		330	279	51	21	18	8	150	75	115	47	77	24	鉄線引き	259	15	12	○		径12				
7	1	近世	32	2,380	三ツ巴文	左巻き		16	9	160	120	(68)	21	6	○	○		290	254	36	21	20	11	145	69	116	46	75	25	鉄線引き	233	15	6			径13				
8	3	近世	25	2,120	三ツ巴文	左巻き		14	14	158	108	(62)	19	8	○	○		302	270	32	17	21	5	156	73	120	47	84	29	鉄線引き	251	10	5	○		径9				本堂に類似瓦あり
9	7	近世	45	2,190	三ツ巴文	左巻き		16	14	156	102	(62)	20	7	○	○		304	275	29	17	21	5	156	70	120	48	94	29	鉄線引き	255	12	1	○	○	径9x2			△	
10	1	近世	30	2,330	三ツ巴文	左巻き		16	8	151	108	(73)	20	5		○		360	360	－	18	－	6	145	65	－	－	82	20	鉄線引き	340	14	12	○	－	径14	－		－	北西隅巴を転用
11	1	近世	35か	2,090	三ツ巴文	左巻き		15	13	145	100	(66)	16	7		○		362	324	38	17	16	8	136	62	103	40	77	25	鉄線引き	308	11	4	○	○	径15x2		△	△	
12	1	近世		2,130	三ツ巴文	左巻き		15	10	155	99	(62)	17	7	○			359	325	34	15	12	4	138	60	108	45	68	36	鉄線引き	308	6	3	○		径15x2		△	△	
13	10	近世	39	2,520	三ツ巴文	左巻き		16	13	154	110	(68)	27	8				346	312	34	18	17	4	151	65	116	41	75	20	鉄線引き	285	13	3			径9x2		△		主に東妻南流掛丸瓦で使用、南東隅巴と同種
14	4	近世	23	3,300	三ツ巴文	左巻き		16	12	178	129	86	23	7	○			417	370	47	21	17	9.5	165	70	132	50	95	28	鉄線引き	347	11	6	○		径14x2		△	△	
15	145	明治44	61	3,370	三ツ巴文	左巻き		16	7	161	134	92	32	10	○	○		369	328	41	20	16	0	156	75	116	52	69	20	鉄線引き	296	7	7	○	○	径9	径9			明治解体修理、凹面に櫛掻き
16	1	大正10		3,180	三ツ巴文	左巻き		32	6	170	134	102	30	13	○	○		415	374	41	18	18	4	155	76	125	56	85	25	鉄線引き	344	18	2	○	○	径14		△	△	本堂昭和修理時整備(本堂中古瓦を代用)
17	1	昭和3頃		2,960	三ツ巴文	左巻き		28	4	143	115	83	34	11		○		354	310	44	19	14	9	145	90	109	56	76	25	鉄線引き	276			○	○	径10	径10	△		多宝塔昭和修理時整備(下層補足瓦を代用)
18	1	昭和36		3,150	三ツ巴文	左巻き		11	10	175	130	85	21	10	○	○		351	295	56	19	14	10	157	70	121	60	94	37	プレス	274			○	○	径11		径3	径5	災害復旧(昭和36年第二室戸台風被害)
19	18	昭和36		2,450	三ツ巴文	左巻き		20	8	150	110	78	21	7	○	○		297	263	34	18	15	0	147	71	119	50	89	28	プレス	242			○	○				径5	災害復旧(昭和36年第二室戸台風)
20	5	昭和47頃		5,400	三ツ巴文	左巻き		26	5	171	132	105	30	11	○	○		431	354	77	25	22	23	170	81	136	59	95	32	プレス	324			○	○			径4	径4	本堂昭和修理時整備(本堂補足瓦を代用)
21	21	昭和55		5,220	三ツ巴文	左巻き		26	5	170	128	100	31	11	○	○		433	385	48	22	26	8	171	86	125	57	93	33	プレス	354			○	○	径13		径5	径5	災害復旧(昭和54年秋台風被害)

表4-13　大門隅軒丸瓦一覧

（単位mm）

分類番号	構成員数（本）	時代区分	対応丸瓦	重量 (g)	瓦当部 瓦当文様 文様の種類	巴文の巻き方	外区圏線	珠文数（個）	珠文の径	直径 R	外区径 r1	内区径 r2	厚 a	外縁高 b	全長 A+B L	丸瓦部 胴長 A	玉縁長 B	胴厚 c	玉縁厚 d	反り e	胴尻 幅 C	高 F	玉縁元 幅 D	高 G	玉縁先 幅 E	高 H	粘土板 拵え (ｺﾋﾞｷ)	板長 (L−a)	胴部の面取り 凹面胴傍 幅	高	凸面外角 傍	肩	瓦留穴の有無(△は後補) 釘穴 胴	玉縁	線穴 胴	玉縁	備考
(10)	0	近世	(30)																																		北西隅、修理前欠失、No.10が相当
13'	1	近世	39	3,080	三ツ巴文	左巻き		16	13	167	111	68	86	6	320	320	－	－	－	29	－	－	－	－	－	－	鉄線引き	－	－	－	－	－	径7	－		－	南東隅、No13と同笵
15'	1	明治44	61	4,040	三ツ巴文	左巻き		16	7	190	134	93	58	9	362	362	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	鉄線引き	－	－	－	－	－	11x21	－		－	南西隅、明治解体修理、No15と同笵
18'	1	昭和36		3,590	三ツ巴文	右巻き		25	8	170	131	104	65	10	364	364	－	－	－	17	－	－	－	－	－	－	プレス	－	－	－	－	－	径8	－		－	災害復旧(昭和36年第二室戸台風)

表4-14　大門平瓦一覧

（単位mm）

分類	時代	重量	全長	厚	反り	幅			谷深さ		面取(幅×高)					粘土板の拵え	離れ砂の有無	凹面			凸面				釘穴	葺き面別構成員数				備考
											頭		尻		四周			痕跡		調整	痕跡		調整							
番号	区分	(g)				頭	尻	落ち	頭	尻	幅	高	幅	高	糸面	(ｺﾋﾞｷ)	有無	布目痕	台痕	ナデ	台痕	紐痕	ナデ	その他		南面	北面	東面	西面	
1	中世	3,540	350	24	1	239	274	35	39	40	14	7				糸切り	○			○	○尻	○	○		径13扁平	3	47	20	1	
1'	中世	3,810	356	22	2	250	276	26	43	42	15	6				糸切り	○			○		○	○			1				
2	中世	3,540	340	23	2	235	288	53	40	37	14	6				糸切り	○			○	○	○	○		径14	1			60	
2'	中世	3,460	345	26	4	243	275	32	30	38	12	5				糸切り	○			○			○			1	2	2	3	
3	中世	3,570	342	22	1	250	275	25	37	40	12	3				糸切り	○			○		○	○		径12		7	3	1	
4	中世	3,570	338	25	1	243	270	27	36	38	10	4				糸切り	○			○		○	○		径13	11	31	28	36	
4'	中世	3,460	338	25	1	240	275	35	36	35	15	6				糸切り	○			○		○	○				1		2	
5	中世	3,420	343	21	1	234	256	22	47	42	15	4				糸切り	○	○		○化粧		○	○		径12圧痕	6			7	
6	中世	4,000	338	26	3	240	256	16	40	50	15	6				糸切り	○	○	○	○		○	○		径12		3	8	9	
6'	中世	3,390	338	22	4	240	260	20	40	50	10	5				糸切り	○	○	○	○		○	○						3	
7	中世	3,160	342	22	0	236	250	14	33	29	18	6	3	3		糸切り	○		○	○	○傍	○	○		径12	10	10	7	12	
7'	中世	2,690	347	17	3	234	252	18	29	28	15	2	3	2		糸切り	○	○		○	○傍		○			6		3	3	
8	当初	3,490	331	26	5	218	246	28	40	34	24	6				糸切り	○			○		○	○		径12		2	9		軒平1・軒丸1・丸7と組む
9	中世	3,310	330	22	4	225	260	35	46	44	12	4	4	1		糸切り	○			○		○	○		径13扁平	4			21	尻部面取りは三日月型
10	中世	3,460	320	25	1	216	238	22	28	28	17	7				糸切り	○	○	○	○		○	○	布目			1	4		
11	中世	3,100	322	21	1	340	336	−4	33	27	6	2	10	5		糸切り	○			○		○	○粗	布目					1	凸面布目痕は指痕と一致
12	中世	3,160	338	22	2	220	240	20	33	33	15	5	11	2		糸切り	○		○	○	○					1			16	尻部面取りは三日月型
13	中世	3,090	310	25	3	225	245	20	33	34	10	6	5	4		糸切り	○			○		○	○		径13		1			釘穴は中央寄り
14	中世	2,700	307	20	3	226	232	6	27	25	10	3	4	1		糸切り	○	○	○	○	○	○	○		径10			1		釘穴は中央寄り
15	中世	3,280	334	24	4	212	244	32	38	39	22	6	3	1		糸切り	○			○		○			径13扁平		12	10	10	
15'	中世	2,830	331	22	2	213	250	37	40	33	20	3	3	2		糸切り	○			○		○	○						1	
16	中世	2,870	335	22	2	224	246	22	37	35	12	3	2	2		糸切り	○		○	○		○	○		径13扁平			1	21	歪み大
17	中世	2,870	324	24	3	214	228	14	26	29	17	5			○	糸切り	○		○	○	○		○		径10	1	3	20	47	尻部面取りは三日月型
17'	中世	2,800	324	22	−3	207	226	19	35	30	13	5	4	2	○	糸切り	○	○				○		布目					2	
18	中世	2,320	314	21	8	196	215	19	38	34	14	5			○	糸切り	○			○ｸﾀﾃ		○	○		径12		13	28		凹面に篦書き文字「ﾋﾗｶﾜﾗﾆｷ三千八百ﾏｲ」
18'	中世	3,160	315	26	4	206	220	14	29	24	16	6	5	3	○	糸切り	○			○	○傍	○	○					1		頭口に横線
19	中世	2,400	303	22	2	195	210	15	27	24	13	5			○	糸切り	○	○		○		○太	○		径15	2			73	凸面紐痕ナデ消し、軒平4・軒丸3・丸19と組む(多宝塔No.16と同種)
19'	中世	2,530	311	21	2	196	212	16	31	30	15	6	3	4	○	糸切り	○	○	○	○	○	○太							2	
20	中世	2,510	320	22	5	200	220	20	33	33	12	8	4	3	○	糸切り	○			○		○			径11	2	4	5	7	軒平6・軒丸4・丸13'と組む
20'	中世	2,790	320	21	2	202	218	16	37	30	12	4	2	2	○	糸切り	○					○						1		
21	中世	2,430	312	22	8	195	218	23	30	24	11	10	4	3	○	糸切り	○								径10	2	2	23	13	多宝塔No.15と同種
22	中世	2,360	309	21	1	194	213	19	24	26	12	6			○	糸切り	○					○太	○		径13	13	28	97	68	凸面紐痕ナデ消し、軒平5と組む(多宝塔No.14と同種)
23	中世	2,120	304	22	3	178	202	24	23	26	13	7	1	1	○	糸切り	○					○			径10	7	22	72	84	
23'	中世	1,860	305	19	5	180	203	23	29	23	9	5	3	2	○	糸切り	○	○					○						5	
24	中世	1,850	302	19	3	184	196	12	23	24	10	4	1	2	○	糸切り	○			○		○	○		径11		29	30		
24'	中世	1,780	302	17	7	186	206	20	27	20	8	5	2	2	○	糸切り	○	○		○							1	4	3	
25	中世	2,190	312	20	0	186	206	20	29	25	13	7	3	3	○	糸切り	○					○			径11				73	
25'	中世	2,560	322	21	4	185	204	19	21	29	15	5	6	2	○	糸切り	○		○		○								1	
26	中世	1,800	298	18	3	180	200	20	26	24	11	6	3	2	○	糸切り	○			○		○			径11	1	24	45		軒平3と組む(多宝塔No.13と同種)
27	中世	1,600	275	18	0	175	190	15	24	25	7	3			○	糸切り	○					○			径10				44	多宝塔No.11と同種
27'	中世	1,450	268	17	7	174	190	16	20	31	6	3			○	糸切り	○		○	○			○						2	
28	中世	1,540	281	16	4	184	196	12	21	23					○	糸切り	○			○	○				径9				6	
28'	中世	1,580	280	18	2	176	190	14	28	29	16	3			○	糸切り	○		○	○	○								1	多宝塔No.11'と同種
29	中世	1,530	260	16	10	172	180	8	20	18	6	2			○	糸切り	○			○			○		径9				8	
30	中世	1,680	277	19	1	208	196	−12	18	21	18	5	4	2									○						2	
31	中世	1,320	256	16	2	186	200	14	24	25	12	3	2	2			○			○	○	○	○						8	
41	近世	2,490	285	22	2	238	252	14	29	30	3	2			○					○		○	○					3		頭側木口に菊目刻印、軒平10と組む
42	近世	2,720	286	22	5	227	240	13	27	22					○					○			○					1		
43	近世	2,010	273	18	6	233	242	9	23	26	3	2	1	1	○					○	○	○	○					79		軒平13と組む
43'	近世	2,030	277	19	6	225	244	19	23	25	3	2			○					○	○傍	○	○		径8潰れ			6		
44	近世	1,810	263	16	2	222	238	16	18	19	3	2			○					○			○					90		軒平14と組む
44'	近世	1,850	262	18	7	226	238	12	25	23	4	2			○					○	○傍		○	櫛目				2		
45	近世	1,880	260	16	2	226	238	12	22	13	2	2			○					○		○	○					24		軒平15と組む
46	近世	1,880	275	18	7	217	237	20	25	23	4	2			○					○			○					3		
47	近世	2,040	274	19	3	220	228	8	22	24	5	4			○					○			○					2		頭部面取りは三日月型
48	近世	1,950	288	17	3	238	250	12	23	21	3	2			○					○			○					1		軒平17と組む
49	近世	2,090	300	20	3	242	260	18	24	25	3	2			○					○			○					1		
50	近世	2,400	304	20	5	255	272	17	23	18	4	1			○					○			○					1		軒平18と組む
51	明治44	2,400	292	19	2	240	254	14	22	24	9	5			○	洗線引き				○			○	櫛目		1179	938	1		明治解体修理、凸面尻手の櫛目に2手
52	明治44	2,540	252	21	2	235	245	10	(20)	23	4	1				鉄線引き				○			○			26	26			掛二の平瓦、左右勝手(片傍に水返し付き、高17)
53	昭和3頃	2,100	264	19	6	243	250	7	34	39	12	7			○	鉄線引き				○	○		○					11		南東降棟・隅棟補修時
54	昭和36	3,040	306	19	7	260	278	18	36	35					○	ﾌﾟﾚｽ				○	○傍		○				2			多宝塔No.4と同種

小計(枚)　1277　1209　647　656
合計(枚)　3789

表4-15　大門丸瓦一覧

（単位mm）

分類	時代	重量	全長	胴厚	胴長	頭幅	頭高	尻幅	尻高	胴部の面取り							玉縁厚	玉縁長	玉縁元幅	玉縁元高	玉縁先幅	玉縁先高	玉縁凹面の面取り			粘土板の拵え	凸面		凹面							釘穴		線穴（△：後補）		葺き面別構成員数				備考
										凹面頭		凹面傍		凸面外角													成型時	ナデ	成型時痕跡（△：2次）			調整方法（△：有無）												
番号	区分	(g)								幅	高	幅	高	傍	頭	肩							傍	肩	先	(コビキ)	縄目痕	調整	布目	コザ目	吊紐	ナデ	内叩き	櫛掻き	胴部	玉縁	胴部	玉縁	南面	北面	東面	西面	
1	中世	3,520	417	26	349	168	79	169	87	80	9	15	15				18	68	129	67	100	55	○	△		糸切り	○	横	○		○					径10				15			
2	中世	3,350	417	24	339	162	77	170	82	60	8	9	15				15	78	126	62	90	53	○	△		糸切り	○	横	○		○					径11				136			
2'	中世	3,410	392	23	320	161	77	165	79	60	7	12	18				17	72	128	61	85	49	○	△		糸切り	○	横	○		○									19			
3	中世	3,220	404	25	325	159	75	157	81	65	12	7	10				17	79	119	61	75	46	○			糸切り	○	横	○		○					径11						1	
4	中世	2,990	382	23	315	155	77	163	82	75	8	6	7				12	67	125	64	77	45	□			糸切り	○	横	○		○					径11				32			
4'	中世	3,550	392	24	323	155	82	165	83	60	7	7	14				18	69	123	63	87	56	□			糸切り	○	横	○		○									4			
5	中世	3,340	395	25	313	156	79	173	72	55	9	6	10				19	82	130	62	92	48	○	△		糸切り	○	横	○		○					径10				3			
6	中世	2,720	354	24	300	157	76	152	78	50	9	10	15				12	54	112	58	62	43	○	△	○	糸切り	○	縦	○		○					径10				4	2		
7	当初	2,670	346	21	295	160	79	158	80	40	5	10	18				12	51	114	60	68	45	○	○	○	糸切り	○	縦	○		○					径10						9	軒丸1・軒平1・平8と組む
7'	中世	3,060	353	22	300	163	83	170	77	80	4	20	25				11	53	123	55	60	38	○	△		糸切り	○	横+縦	○		○									3			
8	中世	2,570	356	20	291	158	77	158	80	45	4	8	12				18	65	120	62	89	43	○	○		糸切り?	○	縦	○		(○)	△指				径12				4			
8'	中世	2,460	354	20	298	151	76	155	78	75	10	11	15				18	56	117	60	79	51	○	○	○	糸切り	○	縦	○											15			
9	中世	2,460	357	20	292	155	71	158	80	50	5	8	11				12	65	112	60	74	44	○	○	○	糸切り	○	横	○		○									1		34	
11	中世	2,610	340	22	289	153	80	157	84	75	7	10	18				17	51	120	66	75	49	○	○	○	糸切り	○	縦	○		(○)	△指									2		
12	中世	2,240	337	22	270	144	68	149	73	70	9	8	7				16	67	112	56	70	43	○	△		糸切り	○	横	○		(○)	△指				径13				1		10	多宝塔No.3と同種、礫を多く含む
13	中世	1,970	337	20	277	140	65	142	72	65	7	8	13				15	60	104	53	76	42	○		○	糸切り	○	横	○		○	△指				径11					11		
13'	中世	2,150	331	21	268	128	74	149	77	75	6	10	14				15	63	108	59	72	43	○			糸切り	○	横			○											2	軒丸4・軒平6・平20と組む
14	中世	2,190	326	20	263	142	66	155	78	60	4	8	11				13	63	118	59	76	42	○	△		糸切り	○	横	○							径12						12	多宝塔No.5と同種、礫を多く含む
14'	中世	1,960	322	15	263	140	75	155	80	35	4	4	10				16	59	113	60	80	47	○			糸切り	○	横	○			△									3		
15	中世	2,030	329	21	267	140	67	149	76	50	8	7	7				14	62	108	57	81	46	○			糸切り	○	縦	○		○											14	
16	中世	2,080	324	21	260	142	76	144	76	60	4	12	12				14	64	105	57	67	42	○			糸切り	○	横	○		○					径12					31	19	
16'	中世	1,830	322	19	262	135	67	147	72	65	5	5	7				12	60	106	53	80	41	○			糸切り	○	横	○		(○)	△									7		
17	中世	2,050	314	19	251	127	70	144	77	60	6	10	10				15	63	106	58	85	44	○			糸切り	○	縦	○		○	△										2	
18	中世	1,830	286	21	237	139	75	140	78	60	6	8	13				11	49	106	59	72	47	○	○	○	糸切り	○	縦	○		○											1	
19	中世	1,560	287	18	252	137	64	133	67	55	8	11	12				13	35	94	50	76	45	○	○	○	糸切り		横+縦	○												1		軒丸3・軒平4・平19と組む
割欠	中世																						○			糸切り														45		3	
20	近世	2,100	316	19	278	151	74	149	74	35	7	7	12				17	38	117	58	84	48	○	○	○	鉄線引き	○	縦													2		
21	近世	2,350	325	21	280	165	70	160	81	35	11	12	11				16	45	123	63	90	51	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○	○	胴外角								1			胴肩に菊目刻印、軒丸6と組む
22	近世	2,050	310	21	262	154	75	160	83	30	8	13	8				15	48	122	65	90	49	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○	○	△								1			
23	近世	1,630	308	15	263	148	69	154	76	25	5	14	15				15	45	121	60	87	45	○	○	○	鉄線引き		縦+横	△	○										1	1		軒丸5と組む
24	近世	1,940	303	18	270	152	71	152	77	30	4	12	6			○	14	33	114	60	79	47	○	○	○	鉄線引き		横	△	○	○	△工具								1		9	
25	近世	1,530	297	16	258	157	66	159	72	25	5						13	39	127	57	86	42	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○	○									2		22	軒丸9と組む
26	近世	1,490	272	14	243	157	72	147	75	18	5	9	7				13	29	117	60	92	50	○	○	○	鉄線引き		縦	△	○		胴外角								4		12	
27	近世	2,180	291	21	256	154	73	157	77	30	13	20	15			○	18	35	119	60	92	45	○	○	○	鉄線引き		縦		○	○									3			丸44と同種
28	近世	1,870	286	16	250	163	72	158	78	23	6	15	13	○			15	36	124	63	89	51	○	○	○	鉄線引き		縦	△	○		○									17		
29	近世	1,810	293	19	247	146	65	153	75	35	6	17	12	○			17	46	115	58	85	42	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○										2	7	5	
30	近世	1,470	284	18	240	143	61	142	62	30	6	9	11			○	12	44	108	48	70	37	○	○	○	鉄線引き		横+縦	○		○												軒丸10と組むか
31	近世	1,720	284	18	249	146	69	147	71	25	7	10	8	○	○	○	18	35	117	56	80	42	○		○	鉄線引き		縦		○											62		軒丸8と組む
32	近世	1,740	279	18	244	145	70	150	72	20	7			○			14	35	114	56	74	39	○	○	○	鉄線引き		縦		○												42	軒丸7と組む
33	近世	1,260	265	16	229	132	62	133	65	25	6	12	5		○	○	12	36	102	52	79	42	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○	○											11	
34	近世	1,700	322	18	287	130	65	141	67	30	8	13	11		○	○	13	35	112	53	85	41	○	○	○	鉄線引き		縦	△	○		△									1		
35	近世	1,220	274	16	236	136	60	140	65	23	4	12	13	○	○		10	38	113	49	75	38	○	○	○	鉄線引き		縦													1		軒丸11と組むか
36	近世	1,260	264	17	226	133	61	136	64	15	5	11	11	○			13	38	109	52	77	37	○	○	○	鉄線引き		横+縦	△	○											3		
37	近世	1,110	254	14	216	132	60	139	67	30	4	12	8	○			10	38	112	54	80	40	○	○	○	鉄線引き		縦	△	○		△指									6		
38	近世	1,000	237	13	207	125	61	134	62	30	4	11	8				8	30	104	49	80	38	○		○	鉄線引き		縦	○		○										2		
39	近世	990	225	14	197	141	58	145	60	18	5	12	4	○			15	28	113	45	75	35	○	○	○	鉄線引き		横		○	○		○								5		軒丸13と組む
41	近世	1,670	284	18	249	149	68	152	72	25	6	16	10			○	15	35	117	55	85	42	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○									5	丸24と似る
42	(江戸後)	1,480	284	15	244	156		160	68	10	2	13	2	○		○	17	40	124	51	84	68	○		○	鉄線引き		ミカキ					○		径10.5				1			9	胴に「谷川孫八」刻銘
43	近世	1,330	270	14	230	145	71	145	71	13	2	10	9	○	○		15	40	113	57	92	48	○	○	○	鉄線引き		ミカキ		○	○		○					△		33	37	
44	近世	1,400	269	16	240	154	71	158	70	23	5	13	10	○		○	17	29	119	55	84	43	○	○	○	鉄線引き		ミカキ		○	○		○						3	10		丸27と同種
45	近世	1,620	263	18	240	144	72	153	73	14	6	10	3	○	○	○	22	23	121	55	84	45	○		○	鉄線引き		縦		○			○						1		21		軒丸12と組むか
46	近世	1,470	266	17	230	153	67	150	73	12	7	10	3	○		○	22	36	115	58	90	47	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○						9		20		
47	近世	1,660	271	18	233	155	67	165	75	25	6	10	6	○		○	27	38	128	57	83	37	○		○	鉄線引き		ミカキ		○	○		○						1		22	57	
48	近世	1,380	257	17	221	142	64	153	69	26	5	15	9	○	○	○	16	36	122	53	80	37	○	○	○	鉄線引き		ミカキ		○			○							1		13	
49	近世	1,590	260	17	223	145	66	145	70	28	4	14	12			○	19	37	118	56	83	40	○	○		鉄線引き		縦+横		○			○									1		
50	近世	1,410	259	18	227	135	60	148	70	12	4	12	6	○		○	16	32	115	50	73	36	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○		径10							3	
51	近世	1,000	238	20	210	140	57	150	63	30	8	7	3	○		○	13	28	115	48	77	34	○	○	○	鉄線引き		縦	○	○			○						1		43		
52	近世	970	240	17	209	140	60	140	65	8	7	10	4	○	○	○	17	31	109	50	76	34	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○								24	1	
53	近世	1,130	234	17	207	130	59	130	63	13	5	13	5	○		○	18	27	96	47	82	39	○	○	○	鉄線引き		縦		○			○								1		
54	近世	870	228	15	194	144	46	135	58	16	6	7	4	○		○	15	34	100	43	70	33	○		○	鉄線引き		ミカキ		○			○								17	1	
55	近世	760	210	16	177	115	54	121	60	18	6	12	8	○			14	33	91	45	欠け大	34	○	○	○	鉄線引き		縦		○		△	○								1		
割欠	近世																						○	○	○	鉄線引き							○						4	6	9	1	
60	明治期	950	223	14	198	130	55	130	56	17	6	11	4	○		○	12	24	98	42	72	31	○	○	○	鉄線引き		縦+横						○							1		
61	明治44	2,110	327	18	283	148	67	158	80	17	3	4	5	○			13	44	118	61	68	44	○	△	○	鉄線引き		縦+横		○		△		○				径10	615	262	7	1	北面にて瓦当欠失軒丸瓦1本を転用
62	昭和3頃	2,310	328	18	281	153	81	154	90	20	9			○	○	○	12	47	120	70	85	65	△		○	鉄線引き												径6		2			多宝塔下層所用瓦(No.56)を使用
63	昭和36	2,650	349	18	298	153	82	159	75	45	3	7	5	○		○	13	51	122	57	94	40	○			フレス		縦										径7	5	10			凹面「昭和卅六年修補」刻印瓦ほか3種

（玉縁凹面の面取り調整について）
□：外角2段階の面取り調整
○：1段階の平坦な面取り調整
△：調整度合いの小さいもの

小計(本)　637　581　371　339
合計(本)　1928

が二本、本来の形状のまま東妻南流れの刀根丸瓦へ使用したものが五本であった。

鬼　瓦

鬼瓦は北東隅棟鬼を除き、古代鬼面風に造られた明治修理の補足品である。

明治修理の大棟鬼瓦には、「若山／東瓦町／瓦製造所／林徳次郎」の刻印の他、東側鬼瓦側面には「明治四拾四年七月製」の篦書きがある。降棟・隅棟も含め、同様の鬼面を持った側張り仕上げの鬼瓦であったが、北西隅鬼のみ裏側の補強張りの仕様が異なる。

北東隅棟に唯一残る近世期の鬼瓦は、明治修理で唯一再用されたもので、大門精算書記載の補足瓦員数とも合致する。

鳥衾瓦・衾瓦

鳥衾瓦は、明治修理補足瓦と、大棟と南東隅棟に昭和三年頃の補足瓦三本、北東の降棟（瓦当欠失）・隅棟に昭和三六年の補足瓦二本で構成される。

明治修理の補足瓦には、「鬼瓦職／和歌山市東瓦町／山村亀太郎」と「和歌山市東瓦町／林徳二郎」の刻印二種があった。昭和三年頃の補足瓦には「下津港／泉瓦製造所／大村末吉」の刻印がある。

衾瓦も明治修理以前のものは残存せず、大棟と南東の降棟・隅棟は昭和三年頃の補足瓦となっていた。

明治修理の補足瓦は陣笠形で、鳥衾瓦の形状とは合っていない。北東隅棟のみ平瓦部の長いものに作り分けていた。明治修理の精算書に鳥衾瓦の記載は無いが、鬼瓦と同様に再用瓦を用いた可能性もある。

熨斗瓦・面戸瓦

熨斗瓦は、台熨斗・肌熨斗に明治補足瓦を使用し、割熨斗・捨熨斗には明治補足熨斗瓦や近世期平瓦を半截したものが主体で、中世期の割熨斗瓦や半截平瓦も若干数確認した。

中世期の割熨斗瓦は二枚あり、そのうちの一枚はほぼ完形で残っていた。平瓦を元に成形したとみられ、分割面からは分割線を鎌で付けたこともわかった。長さ三〇四㎜、狭端巾一〇〇㎜、広端巾一一二㎜、厚みは半截前の中央部で一四㎜、端部で一八㎜となる。中世期平瓦を半截して拵えた割熨斗瓦も二枚確認でき、完形品はほぼ同寸であった。短縮品は長さ八寸五分程度で、近世期平瓦や明治補足熨斗瓦に合わせて調整されたものと考えられる。

明治補足熨斗瓦は、長さ八寸五分で、凹面に分割線と櫛掻き目を施す。昭和三年頃の棟積補修では、多宝塔昭和修理の下層補足平瓦を半截したものが使用されていた。

面戸瓦は大棟用と隅棟用の二種があり、いずれも明治修理の補足瓦であった。

第四項　周辺地域の中世期建造物の屋根瓦

長保寺伽藍内の中世期瓦類との対比を目的とした類例調査を実施し、既刊報告書や現状屋根の確認、株式会社瓦宇工業所保管瓦類の実測及び観察を行った。

長保寺本堂（延慶四年・一三一一）の屋根瓦

長保寺本堂の屋根には、正面中央と向拝軒先に当初と推測される瓦類が集めて葺かれている。

当初と推測される軒平瓦一枚が、瓦宇工業所に保管されている。瓦当巾二七〇㎜前後（両脇区がはつられており、推定寸法）、瓦当高さ六九㎜、瓦当厚三五㎜、全長三五四㎜、尻手に釘穴を一個有する。瓦当文様は中心飾りに蓮華を据えた均整唐草文で、四周に界線を付ける（現状は両側界線が欠失）。顎底の補足粘土は曲線を成すが、瓦当高さが大きいこともあり、顎裏の直線部分が長い。凹面は糸切り痕が残る程度のナデ仕上げ、顎部分のヨコナデは強め。胎土中には腐り礫を含まず、表面に大粒の礫も確認できない。大門の当初比定平瓦とも寸法的に対応する。

薬王寺観音堂（貞和三年・一三四七）の屋根瓦

薬王寺観音堂の屋根には、昭和四四年の解体修理において、多宝塔隅軒丸瓦25番及び26番と同系とみられる軒丸瓦が西面で三本再用されている（写真389）。瓦宇工業所には、修理の際に降ろされた同種の軒丸瓦が一本、軒平瓦も二種三枚が保管されている。

この軒丸瓦は、瓦当径一二八㎜、胴部尻巾一四四㎜、瓦当厚三七㎜、全長三五八㎜。釘穴は玉縁に一個で、胴部にも中古釘穴一個を有する。凸面はタテナデで、縄叩き目も残る。凹面には糸切り痕や布目痕、吊り紐痕が残る。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一／二）、玉縁傍の面取りは肩中程まで及ぶ平坦なもので、玉縁先は調整されていない。珠文の偏りは共通するが、笵型の乾燥割れによる縦方向の筋は存在しないことから、多宝塔隅軒丸瓦よりも先行する瓦と考えられた。

軒平瓦のうち古手の方は、長保寺本堂と同じ形式の蓮華唐草文で、四周に界線は付かない。瓦当巾二三〇㎜、瓦当高さ五三㎜、瓦当厚三〇㎜、全長三一八㎜、尻手に釘穴を一個有する。顎裏はほぼ垂直で、顎底の補足粘土は曲線を成し、タテナデ後にヨコナデする。胎土中には三～五㎜大の白色礫が散見される。二の平葺足の痕跡は瓦当より三寸と四寸五分で確認できる。

軒平瓦のうち新手の方は、連珠を二段に配した瓦当文様で、彫りは浅い。瓦当巾二一八㎜、瓦当高さ五〇㎜、瓦当厚四〇㎜、全長三〇〇㎜、尻手には釘穴なし。段顎で、瓦当は厚い。顎裏中程に調整台の圧痕が残る。平瓦部凸面全体をタテナデし、凹面はタテ＋ヨコナデするが、布目も残る。頭部面取りは端部でなくなる三日月型である。

道成寺本堂（天授四年・一三七八）の屋根瓦

道成寺本堂の当初比定軒瓦は、既刊修理工事報告書で記されているので、ここでは仕様に関する所見を中心に述べる。

軒平瓦の顎裏は垂直、顎底の補足粘土は曲線を成し、タテナデ後のヨコナデは顎裏から二寸までで、尻手には釘穴がある。凹面はタテナデで、凸面にも糸切り痕と調整台の圧痕が残る軽いナデが入る。瓦当面にもナデを施すが、瓦当下縁の面取りはあるものと無いものが存在する。焼き絞まりが非常に良く、胎土中には小粒の礫や腐り礫を若干含んでいる。

軒丸瓦の凸面は縄叩き目が微かに残るタテナデで、凹面には糸切り痕と布目痕が残る他、吊り紐痕をナデ消した様な指ナデ部分も存在する。釘穴は胴部と玉縁に一個ずつ有する。胴部側縁の面取りは小さく（側縁／側面＝一／二）、玉縁傍の面取りは肩中程まで及ぶ平坦なもので、玉縁先の調整は丁寧である。胎土や焼成具合は軒平瓦と同質である。

広八幡神社楼門（文明七年・一四七五）の屋根瓦

広八幡神社楼門は、既刊修理工事報告書で軒瓦が詳しく紹介され、寸法面や瓦当文様から判断して、軒平瓦1番は多宝塔15番（＝大門5番）、軒平瓦6番は多宝塔11番、軒平瓦7番は大門1番と同種とみられる。瓦宇工業所では、軒平瓦12番と軒丸瓦2番を調査した。

軒平瓦12番は、瓦当巾二四一㎜、瓦当高さ五八㎜、瓦当厚三五㎜、全長は欠失のため不明。瓦当文様は中心飾りに蓮華を据えた均整唐草文で、四周に界線を廻す。顎底の補足粘土は多く、顎高さが小さいためか、顎裏はタテケズリのみで、平瓦部凸面には凹面調整台の圧痕が深く残る。

軒丸瓦2番の瓦当文様は左巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がる。珠文数二九個。瓦当径一三五㎜、胴部尻巾一二〇㎜、瓦当厚三一㎜、全長三四〇㎜。釘穴は胴部と玉縁に一個ずつある。凸面はタテナデで、縄叩き目は残らない。凹面には糸切り痕や布目痕、調整台の圧痕が残る。玉縁傍は外角を二段階に面取りし、肩の面取りは片方のみにあり、玉縁先は未調整である。

法蔵寺鐘楼（室町中期）の屋根瓦

鐘楼は当初勝楽寺に建立されたものが、元禄年間に広八幡神社へ移築され、明治初年に法蔵寺へ再度移築されている。現状は背面に再用軒瓦が集められている。軒丸瓦は三種二九本が再用され、左巻き三ッ巴文、珠文数一〇個の近世期軒丸瓦が二七本と多い。残る二本のうち一本は、巴が陰陽反転した左巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がらず、珠文数は二二個である。瓦当文様から、広八幡神社楼門の軒丸瓦6番と同種とみられる。もう一本は、右巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がらず、珠文数は二一個である。軒平瓦も、背面両隅を除いた二八枚を、中心飾りに半截菊花文を据えた均整唐草文で統一している。瓦宇工業所には、これよりも古手の軒平瓦一枚がある。

この軒平瓦は、瓦当巾二二八㎜、瓦当高さ四八㎜、瓦当厚二五㎜、全長は欠失のため不明。瓦当文様は中心飾りに花文を据えた均整唐草文で、四周に界線を付ける。顎裏は曲線的で、顎底をヨコナデする他はタテケズリのみ、平瓦部凸面には調整台の圧痕が残る。頭部の面取りはない。類例調査した中で多宝塔11′番と最も似た仕様の瓦である。

浄妙寺多宝塔（鎌倉後期）の屋根瓦

建立時期や建物形式、地域的にも最も参考となるが、昭和一〇年の解体修理で軒瓦はすべて新調されている。その復元軒丸瓦の瓦当文様は右巻き三ッ巴文で、尾は内区圏線に繋がらない。珠文数一八個。天地を逆転させると多宝塔5番と似ている。復元軒平瓦の瓦当文様は連珠文で、珠文数二二個、四周界線付きであった。

護国院多宝塔（文安六年・一四四九）の屋根瓦

和歌山市にある護国院多宝塔の当初比定瓦として、瓦宇工業所に軒平瓦一枚が保管されている。瓦当文様は蓮華文を中心飾りに据えた均整唐草文で、唐草の反転は四回、四周に界線を付ける。多宝塔軒平瓦17番と似た文様構成である。瓦当巾一九五㎜、瓦当高さ四三㎜、瓦当厚二六㎜、全長二八九㎜、尻手に釘穴が一個ある。曲線部分の残る段顎で、凹面は糸切り痕が若干残るナデ仕上げ。

第五項　多宝塔所用瓦の編年（芦田淳一氏寄稿）

今回の多宝塔及び大門の屋根瓦葺き替え工事に伴う瓦調査では、多宝塔で軒丸瓦三一種類、軒平瓦一九種類、大門で軒丸瓦二一種類、軒平瓦二〇種類を確認した。

これらの資料のうち中世期の造営に関わった軒瓦は、多宝塔で軒丸瓦一三種類、軒平瓦九種類、大門で軒丸瓦四種類、軒平瓦八種類を数え、また両堂舎間で同笵瓦を確認できるなど建立に関して複雑な様相を呈している。

現存する主要堂舎の建立年代に関する史資料は、『国宝長保寺本堂修理工事報告書』（昭和47年）に掲載されている、史料①室町時代天正期に書写された応永廿四年（一四一七）の奥書をもつ「慶徳山長保寺縁起并勧進状之写」、史料②江戸時代天和三年（一六八三）に成立したとする「長保寺記録抜書」と、史料③天和三年に実施された修理の棟札「長保寺大門並食堂鎮守八幡宮棟札写」が参考になる。これらの史料によれば、多宝塔を除く主要堂舎である本堂・大門の中世期の建立状況は、本堂が史料②から延慶四年（一三一一）の建立、大門が史料①③から嘉慶二年（一三八八）の建立とし、応永廿四年には妙法院宮御宸筆の扁額が掛けられたことがうかがえる。一方、多宝塔は、上層心柱に墨書を確認でき、正平一二年（一三五七）の建立が明らかで、前記二堂の建立年代よりその信頼性は高い。

従って、瓦編年は多宝塔所用瓦を中心に、まず建立に関わる軒瓦・丸・平瓦を規格や形状の変化、残存数を参考に抽出する。次に、その技法的特徴を基準として、本堂及び大門の所用瓦の年代を推察する。

a　分　類

多宝塔所用瓦のうち、中世期に属する軒瓦の形状に注目してみると、軒丸瓦では①玉縁部凹面側縁と、②胴部凹面側縁の面取り調整に違いを確認できる。a型式①玉縁部凹面側縁の凹面側をやや抉る形で肩口の一部まで面取り、さらに外側端縁を直線的に面取る、②胴部凹面側面と側縁比が2:1〜1:1である特徴をもつ31番。b型式①玉縁部凹面側縁の凹面側を抉る形で肩口の一部まで面取り、②胴部凹面側面と側縁比が2:1〜1:1である特徴をもつ下層1、2番。c型式①玉縁凹面側縁部の外側を抉る形で肩口全体まで面取り、②胴部凹面側面と側縁比が1:1〜1:2である特徴をもつ3、4、5、6、7、8、9、10、11、32番。これら三種類に分類できる（図4-2・表4-16）。

軒平瓦では①顎裏面の形状とその後の②表面調整に違いを確認できる。a型式①裏面全体が曲線的な段顎で、②顎裏面調整にタテケズリ後ヨコナデを施す11番、そして②顎裏面調整にタテケズリを施す11′番。b型式①裏面の2/3が直線を示し、平瓦との立ち上がり部分に曲線を残す段顎、②顎裏面調整にヨコナデを施す13、14、15、17番。c型式①裏面全体が直線的な段顎で②顎裏面にヨコナデを施す12、16、18番。これらの三種類に分類できる（図4-2・表4-17）。

これら軒瓦のうち、丸瓦・平瓦を含む残存個体数が多く、型式的に古いものは、軒丸瓦ではa型式の31番（五本、丸瓦は一七五本）、b型式の1番（一三本、丸瓦は一四本）、2番（三本、丸瓦は六本）、軒平瓦ではa型式の11番（四枚、平瓦は一三枚）、11′番（四五枚、平瓦は九六九枚）、b型式の13番（二四枚、平瓦は二三枚）、15番（二枚、平瓦は六〇枚）を抽出できる。

これらの個体の前後関係については、同笵瓦での型式変化が参考になる。軒平瓦11番と11′番では、同一箇所周辺で笵傷が増加する11′番が第2笵であることは間違いなく、その顎形態は顎部接合のための補足粘土全体が曲線を示す11番（第1笵）から、接合の補足粘土は全体に付着するが、顎面に近い部分がやや直線に変化しはじめる11′番（第2笵）に変化している。また軒丸瓦31番と32番では、同一部分での笵傷だけでなく、さらに巴文部分で笵の彫り直しを確認でき、その変化は、31番（第1笵）では玉縁部側縁の面取り手法がa型式であったのが、32番（第2笵）ではc型式へと変化していると共に、胴部凹面の側面と側縁比では2:1から1:2へと変化している。そして、31番に伴う丸瓦にはa、b両型式が併存している（表4-18〜4-19）。

このように、多宝塔所用軒瓦のうち型式的に古く、残存数の多い軒瓦の同笵瓦において、第1笵から第2笵への時間的経過の中で、a→b→cといった型式変化を明確に捉えることができたことは、多宝塔や本堂・大門の建立年代を推察する瓦編年の基準資料となり得るといえる。そして、残存個体数からはa型式の瓦群を建立、b型式の瓦群を修造に伴う瓦と推察でき、中世期の多宝塔造営に最も関わり深い個体群だといえる。

しかし、瓦は修造時の政治・経済状況などの諸事情で、規格外の堂舎に転用される場合が多々みられ、多宝塔所用瓦であることを確認しておく必要がある。

b　規　格

多宝塔が建立されたとする一四世紀から一五世紀の期間で、瓦葺多宝塔の支割と瓦割との関係から軒平瓦の瓦当幅の規格寸法を考えてみたい[注一]。ただし、長保寺多宝塔の場合、上層の方が下層に比べ枝割が2㎝幅広いという特異な構造をもつことから、上層・下層ごとの枝割寸法に近似するデーターを参考にする[注二]。総間・軒の出と長さ、下層の垂木数と枝割寸法の部分で同様の規格を示すのは浄妙寺、上層の枝割寸法では浄土寺・護国院である（表4-20）。その瓦割寸法はほぼ220㎜前後を示すが、互いの軒平瓦の間隔は原寸に対して15㎜（五分）ほど用いており、実際は浄妙寺212㎜、浄土寺205㎜、護国院201㎜と推察できる。この寸法に対して、長保寺多宝塔所用軒平瓦は、軒平瓦13番がこれに近い209㎜の寸法をもち、多宝塔用に製作された瓦であると判断できる。対して、上

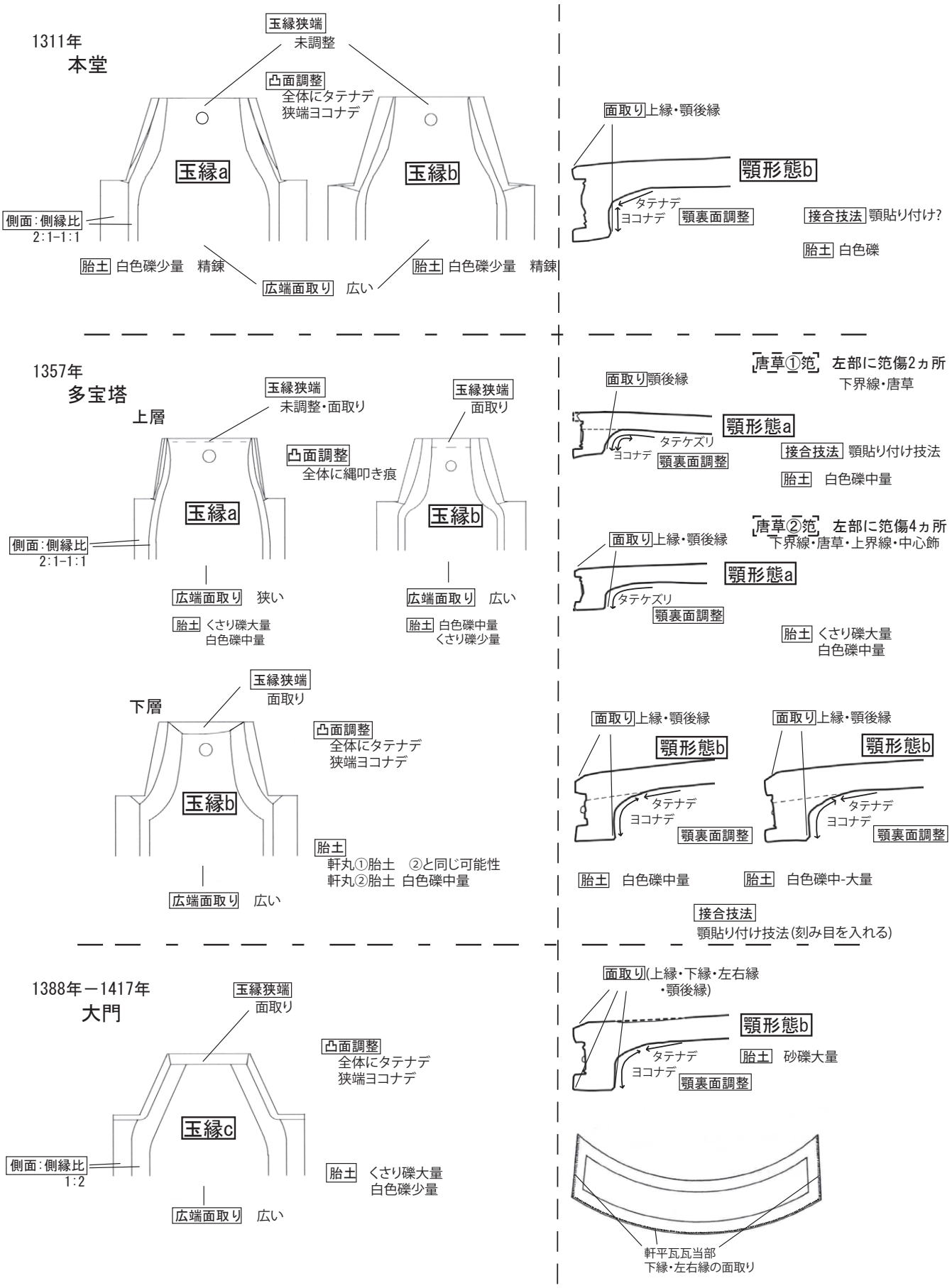


図4-2　本堂・多宝塔・大門所用瓦の特徴

層の軒平瓦11′番は197㎜とやや小型であることがうかがえる。

また、これらの軒平瓦に対応する軒丸瓦は、胎土の類似と瓦当文様・型式変化から、軒丸瓦2番と軒平瓦13番（文様が古式で、白色礫を中量含む）、軒丸瓦1番と軒平瓦15番（文様が新しく、白色礫を中量含む）、軒丸瓦31と軒平瓦11番・11′番（クサリ礫を大量に含む）が組み合うと推察できる。

c　編　年

次に、多宝塔a・b型式のいずれの瓦群が一三五七年の建立に関わった瓦であるのか、またa・b・c各型式の年代を長保寺内の造瓦技術の変遷から検証する。一三一一年建立とされる本堂所用瓦の特徴は、①丸瓦の玉縁部凹面側縁の面取り手法ではa・b両型式が併存している。②本堂建立に伴う軒丸瓦の文様は、巴の頭は尖り気味だが非常に大きく盛り上がり尾が一回転している[注三]。③軒平瓦の顎形態は、顎裏面全体の三分の二が直線部分を有する段顎のb型式で、顎裏面の調整にヨコナデを施している[注四]。これらと同様の特徴を確認できるのは、多宝塔修造瓦と推定したb型式の瓦群で、胎土に白色礫を含むことや、軒丸瓦1番の瓦当文様も巴全体が大きく盛り上がる点など共通項が多くみられ[注五]、本堂と多宝塔に関わる造瓦活動が継続的に行われていたことを示唆する（図4-3・4-4）。

また、多宝塔丸瓦a型式は、本堂所用丸瓦a型式の造瓦技術と類似するが、①丸瓦胴部凸面は未調整のままで全体に縄叩き痕を確認できること、②玉縁部側縁外側端縁の面取りが直線的で肩部の手前で終わっていることや、③軒瓦・丸・平を含む胎土にクサリ礫を含むという違いが認められること、そして、④軒平瓦の顎形態は裏面全体が曲線的な段顎のa型式であること、⑤軒丸瓦31番は巴文全体が平坦で、頭が尖り気味であること、⑥軒丸瓦31番の瓦当先端は反りも少なく、瓦全体の厚みも薄いことなど、古式的要素を数多く確認できる（図4-3[4]）。従って、多宝塔a型式の瓦群は本堂所用瓦に先行し、若干時期を画するものと判断できる[注六]。そして、a型式瓦群の年代は、一三世紀後半と推察できる[注七]。因って、多宝塔建立の一三五七年頃の造瓦技法として捉えられるのは、b型式の瓦群である[注八]。

c型式については、本堂・多宝塔所用瓦の中では主体瓦とはならず、大門で多くを確認できる。大門建立に伴う軒瓦は、残存数が少ないが、軒丸瓦1番と軒平瓦1番のセットと考えられる[注九]。その大きな特徴は、丸瓦部分では玉縁部凹面側縁の外側端縁を肩口まで面取り、胴部凹面の側面・側縁比が1:2を示すことである。その瓦当文様は、軒丸瓦1番の巴の尾は1/2強回転、軒平瓦1番は連珠が一〇個と多宝塔の軒瓦に比べ文様が退化している（図4-3[9]）。しかし、その反面、軒丸・丸瓦では瓦当外縁と裏面端縁、胴部・玉縁部の端縁、軒平瓦では瓦当周縁部のすべての端縁に面取りを施すなど端縁の面取り調整が非常に発達している[注一〇]。また、瓦の胎土も砂礫類を多く含む特徴をもつことから、本堂・多宝塔造営とは時期を画し、大門の建立時期とされる一三八八年から一四一七年頃の造瓦技術として間違いない。

以上の造瓦技術の特徴は、単なる型式変化の面からだけでなく一四世紀代の長保寺伽藍の造営事業からもa→b→cという変遷を裏付けできるものであり、一四世紀代の瓦編年を考察する上で指標となり得る貴重な資料であることがここに確認できる。

今回の多宝塔・大門の修理に伴う瓦調査は、本堂建立を含めた中世期の長保寺造営事業の一端をうかがえる貴重な資料を確認できただけでなく、長保寺の瓦編年を指標とすれば、県下の由緒が不明な中世寺院建立の考察の一助になることは間違いなく、非常に価値ある一群の瓦資料であったことをここに付け加えておく。

表4-16　多宝塔軒丸瓦計測表

型式	文様			個体数	全長	胴部	玉縁	瓦当径	瓦当厚	粘土切断痕	面取り			玉縁形態
	巴の巻き	珠文数	径								瓦当外縁	瓦当後縁	胴部面取り	
1	左三ツ巴文	29	5	13	350	287	63	138	32	糸切り		○	2:1	b
2	左三ツ巴文	27	5	3	351	287	64	137	30	糸切り		○	1:1	b
3	右三ツ巴文	16	7	8	353	293	60	143	28	糸切り		○	1:1	C
4	左三ツ巴文	21	7	4	314	278	36	142	24	糸切り	○		1:2	C
5	右三ツ巴文	18	8	1	314	276	38	141	24	糸切り	○		1:2	C
6	右三ツ巴文	17	6	5	291	255	36	138	21	糸切り	○		1:1	C
7	右三ツ巴文	14	9	2	293	258	35	145	21	糸切り	○		1:1	C
8	左三ツ巴文	28	7	1	309	266	43	146	21	糸切り	○		1:1	C
9	左三ツ巴文	25	8	2	331	286	45	153	30	糸切り	○		1:2	C
10	左三ツ巴文	24	6	1	341	297	44	146	19	糸切り	○		1:2	C
11	右三ツ巴文	12	9	2	282	253	29	150	23	糸切り	○		1:1	C
31	左三ツ巴文	24	5	5	338	288	50	112	26	糸切り			1:1	a・b
32	左三ツ巴文	24	5	2	320	271	49	116	27	糸切り			1:2	C

単位:mm

表4-17　多宝塔軒平瓦計測表

型式	文様	個体数	全長	瓦当			狭端			顎形態	顎裏面調整	凸面	
				幅	孤深	高	幅	孤深	厚		ヨコナデ	タテケズリ	タテナデ
11	宝珠唐草文	4	279	206	33	39	191	26	14	a	○	○	
11'	宝珠唐草文	45	274	197	33	34	185	24	14	a		○	
12	宝珠唐草文	1	278	218	20	42	184	16	19	c	○		○
13	連珠文	24	298	209	33	56	184	22	19	b	○		○
14	連珠文	1	297	212	28	40	208	25	16	b	○		○
15	連珠文	2	314	208	35	56			21	b	○		○
16	宝珠唐草文	1	280	200	20	35	200	18	19	c	○		○
17	蓮華唐草文	1	303	209	31	46	194	25	18	b	○		○
18	蓮華唐草文	1	275	210	20	46	190	23	20	c	○		○

単位:mm

表4-18　堂舎別主要軒丸瓦調整表

堂舎	番号	玉縁	胴部				瓦当		胴部	玉縁	釘穴	
		側縁形態	凹面側面側縁比	凸面調整			外縁	裏面端縁	狭端縁	狭端面取	胴部	玉縁
本堂				縄叩き痕	タテナデ	狭端ヨコナデ						
	丸瓦A	a	1:1	△	○	○				×		○
	丸瓦B	b	1:1	△	○	○				×		○
多宝塔	31	a	2:1	○	×	△		×		○		○
	31	b	1:1	△	○	△		×		×		○
	32	c	1:2.5	×	○	○		×		○		○
	1	b	1:1	△	○	△		○		○		○
	2	b	1:1	△	○	△		○		○		○
大門	1	c	1:2	×	○	○	○	○	○	○	○	

○は全体、△は一部で簡単な調整、×は未調整

表4-19　堂舎別主要軒平瓦調整表

堂舎	番号	接合技法	顎形態		顎裏面	凸面		凹面		瓦当				釘穴
					ヨコナデ	タテケズリ	タテナデ	タテナデ	ヨコナデ	上縁	顎後縁	下縁	左右縁	
本堂	蓮華唐草文	顎貼り付け?	段顎(裏面直線)	b	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○
多宝塔	11	顎貼り付け	段顎(裏面直線)	a	○	○	×	○	△	×	○	×	×	×
	11'	不明	段顎(裏面直線)	a	×	○	×	○	△	○	○	×	×	○
	13	顎貼り付け	段顎(裏面直線)	b	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○
	15	顎貼り付け	段顎(裏面直線)	b	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○
大門	1	不明	段顎(裏面直線)	b	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○

○は全体、△は一部で簡単な調整、×は未調整

表4-20　多宝塔瓦割寸法一覧表

寺院	時代	軒平瓦瓦割(下層)		推定瓦割り		総間	総枝数	一枝寸法		軒の出	軒の長さ
				尺	mm			下層	上層		
浄妙寺	13末-14初	軒平瓦	2枝1枚	0.748	227	14.21	38	0.374	0.345	5.55	25.31
浄土寺	1329	軒平瓦	7枝5枚	0.7266	220	21.8	42	0.519	0.448	7.88	37.56
法道寺	1368	軒平瓦	5枝3枚	0.8366	254	16.06	32	0.502	扇垂木	7.95	31.96
宝塔寺	1439	軒平瓦	5枝2枚	0.75	227	9.6	32	0.3	0.299	4.75	19.1
護国院	1449	軒平瓦	3枝2枚	0.714	216	16.18	34	0.476	0.45	7.59	31.36
長保寺	1357	軒平瓦	上11枝6枚	0.7	212	15.29	40	0.382		5.735	26.76
			下3枝2枚	0.672	204				0.448		

単位:尺

表4-21　五間堂軒軒瓦規格一覧表

寺院名	年代	規模	種類	瓦当径/幅	全長	瓦当比
太山寺本堂	1305	7間9間	軒丸瓦	180	450	1.66
			軒平瓦	299	387	
明王院本堂	1321	5間5間	軒丸瓦			
			軒平瓦	223	307	
浄土寺本堂	1327	5間5間	軒丸瓦	182	395	1.59
			軒平瓦	289	385	
西郷寺本堂	1353	7間8間	軒丸瓦	153		1.54
			軒平瓦	237	282	
道成寺本堂	1357	7間5間	軒丸瓦	207	453	1.53
			軒平瓦	318	409	
西国寺本堂	1386	5間5間	軒丸瓦	148	334	1.62
			軒平瓦	240		
利生護国寺本堂	1375-80	5間4間	軒丸瓦	161		1.75
			軒平瓦	280	345	
鶴林寺本堂	1397	7間6間	軒丸瓦	180	344	1.56
			軒平瓦	280	337	
本蓮寺本堂	1429	5間5間	軒丸瓦	144	369	1.77
			軒平瓦	255		
長保寺本堂	1311	5間5間	軒丸瓦	173		1.6
			軒平瓦	276	355	

単位:mm

永六年（一三九九）に修理された北円堂所用軒平瓦では、完全な段顎で、瓦当周縁の下縁だけでなく左右縁を面取りしていた。従って、大門所用瓦は一四〇〇年前後のものと判断できる。

第六項　長保寺伽藍中興時の屋根瓦に関する考察

瓦の名称について

考察にあたって、瓦名称を鉤括弧付きで表記したい。軒平瓦は唐草文や連珠文と称して、唐草文は中心飾りの種類で呼び分ける。軒丸瓦はいずれも三ッ巴であるが、珠文外側（外区）の圏線の有無を表記する。瓦名称の後ろに付した数字は、瓦当面の珠文数を表す。

多宝塔建立時（正平一二年・一三五七）の屋根瓦

建立時の瓦の組み合わせを、寸法や仕様、胎土から検討し、次の知見を得た。

①上層東面に移されていた軒平瓦のうち、寸法や胎土から、下層の当初比定軒丸瓦「三ッ巴29」と組み合う軒平瓦「連珠文16」を比定した。

②上層軒平瓦「連珠文13」と下層軒丸瓦「三ッ巴27・外区圏線付」は、軒平瓦「連珠文16」や軒丸瓦「三ッ巴29」よりも若干小振りであるが、胎土中に大粒の白色礫を含む点や、軒平瓦の仕様に共通点が多く、いずれも同時期の造瓦と考えられた。

③①・②の当初比定瓦は、本堂建立時の瓦と製作技法に大きな違いはない（図4-3・4-4）。

④昭和修理で下層に移設された旧上層隅軒丸瓦は、薬王寺観音堂の当初比定軒丸瓦と同じ笵型「三ッ巴24・外区圏線付」を使用し、笵の状態から長保寺多宝塔所用瓦が後作と判断される（図4-3[5]～[7]、写真388，390）。

⑤上層の中世瓦の大半を占める平瓦・丸瓦と対応する軒平瓦「宝珠唐草文」二種四九枚と軒丸瓦「三ッ巴24」五本は、胎土中に腐り礫を含み、軒平瓦顎裏

注記

注一　屋根瓦を建物全体を構成する意匠の一つと捉えた場合、その寸法は軒先の構成部材やその寸法に規定されるものと推察する。

注二　一般的に、多宝塔の上下層の一枝寸法はほぼ同寸法、あるいは若干上層が狭い。

注三　現本堂の南側軒先に残っているもので、昭和修理の際、当初瓦とされたものである。

注四　注三に同じ。表4-21より五間堂の所用瓦として相応しい規格と判断する。

注五　多宝塔b型式の軒平瓦13番、15番には瓦当部の接合技法として、接合面に刻み目を付ける顎貼付技法を用いる特徴がみられる。

注六　本堂完成は一三一一年以降と考えたい。長保寺の造瓦技術の系統は、同時期の大和では、段顎に移行しはじめる時期であり、接合技法も瓦当貼付に変化している点からすれば、技術面では中世期を通じて顎貼付技法を用いる和泉の影響下にあると考えられる。また和泉系瓦の技法編年の指標である日置荘遺跡出土資料において、一三世紀の軒平瓦の特徴として多宝塔軒平瓦11番と同様の顎形態で（顎面が幅狭いE類に相当）、裏面調整にタテナデを施し、接合技法には顎貼付技法を用いるものがあげられている。多宝塔造営は、上下層における垂木の枝割寸法が特異な点から、造営が中断、あるいは設計変更など長期に及んだ可能性がある。また、今回の調査では、下層屋根の亀腹部分の下地板に、風食と現状より低い位置での棟の取り付き痕跡が確認されており、板葺か檜皮葺であった可能性が指摘されている。

注七　多宝塔心柱の墨書に「下壇遷築所奉修造之也」とあり、古材が確認出来れば、前身建物からの瓦の転用が考えられる。

注八　鬼瓦銘から天授四年（一三七八）に瓦葺が完成と考えられる道成寺本堂では、軒丸瓦の玉縁側縁の面取りはb型式、軒平瓦はb型式の顎形態をもち、瓦当接合技法に顎貼付技法を用いている。さらに軒平瓦には、一部瓦当下縁に面取り調整を確認できることから、長保寺多宝塔所用瓦のうちb群瓦は一三七八年以前の技法であると裏付けられる。

注九　本堂・多宝塔所用軒平瓦の規格、造瓦技法と比較した場合、中間的な規格・後出の技法に位置することから、大門の所用瓦と判断する。

注一〇　瓦当周縁の面取りについて、筆者が以前調査整理を行った大和興福寺所用軒平瓦では、顎後縁の面取りは建治三年（一二七七）の落雷による焼失後の再建期に定着。顎形態は裏面が曲線を呈するものであった。そして、応

の形状や軒丸瓦凹面の調整具合から、①～④のいずれよりも古いと考えられた。

⑥⑤の軒平瓦「宝珠唐草文」は、釘穴がないもの（A）四枚と、Aよりやや小さい釘穴があるもの（B）四五枚の二種がある。笵傷からみて、同笵の可能性が高く、AがBより先行すると考えられた。

⑦⑤の軒丸瓦「三ッ巴24」は、隅隣り用が一本あることから、同様の隅軒丸瓦もあった可能性が高い。下層の隅軒丸瓦が平用と同じ瓦当面であるのに対して、上層の隅軒丸瓦は④で述べた異なる瓦当面であり、上下層で製作過程の違いがうかがえた。

大門建立時（嘉慶二年・一三八八）の屋根瓦

建立時の瓦の組み合わせについて、⑧～⑫の知見を得た。

⑧軒平瓦「連珠文10」の顎裏の形状や調整具合は、多宝塔当初比定軒平瓦「連珠文16」「連珠文13」と似ており、道成寺本堂（天授四・一三七八）の当初比定軒平瓦とも似る。同時に、軒平瓦「連珠文10」の瓦当下縁には面取りが施されており、一三九〇年頃よりも遡らない製作技法である。

⑨軒平瓦「連珠文10」は、軒先用と蟻羽用とを造り分けている。

⑩寸法面や仕様面から、軒平瓦「連珠文10」と組み合うとみた軒丸瓦「三ッ巴32」では、本堂や多宝塔の当初比定軒丸瓦及び丸瓦と比べ、玉縁傍の面取りが肩（胴部）に及ぶ一連のものとなる点、玉縁先の調整が丁寧になる点、胴部側縁の面取りが大きくなる点など、調整方法の違いがある。このうち、玉縁先の調整が丁寧になる点は、道成寺本堂の当初比定軒丸瓦及び丸瓦と共通する。

⑪大門の中世期平瓦の中には、多宝塔「連珠文16」「連珠文13」「宝珠唐草文A」「宝珠唐草文B」など、多宝塔建立当初の所用瓦と考えられる主要な対応平瓦類一式が多く存在する。また、「連珠文16」「連珠文13」に対応する平瓦には、分割線入り平瓦及び隅隣り用軒平瓦、篦書き入り平瓦も含まれる。

⑫平瓦篦書き「ヒラカワラノニキ（用）／三千八百マイ」の文字が見え隠れとなる様に仮に葺足三寸とすると、瓦割は八寸で屋根面積八四㎡に相当する。多宝塔下層屋根面積は七〇㎡、亀腹下を含めると八〇㎡であり、篦書き内容との関連もうかがえる。

長保寺伽藍内における屋根瓦の製作及び使用状況

多宝塔は正平一二年建立時に、本堂建立時と同じ頃に製作された瓦を使用しつつ、隅用の軒平瓦や平瓦は新たに製作するなど、多宝塔下層屋根瓦を厚手のもので整え、軒平瓦「連珠文16」－軒丸瓦「三ッ巴29」とそれに伴う平瓦・丸瓦が製作されたと考えられた。近世期においても下層で多量の補足瓦が生じていることから、下層所用瓦は傷み易い傾向があることも推察された。

上層には転用瓦とみられる軒平瓦「宝珠唐草文A・B」－軒丸瓦「三ッ巴24」とそれに伴う平瓦・丸瓦を使用し、不足分は軒平瓦「連珠文13」－軒丸瓦「三ッ巴27・外区圏線付」とそれに伴う平瓦（丸瓦は不明）で補ったと想定できた。隅に平とは異なる瓦当面の軒丸瓦を用いている点は、「三ッ巴27・外区圏線付」も瓦当文様が古式であることと合わせて、上層補足瓦類の使用状況を示唆すると考えられた（図4-3[3]）。

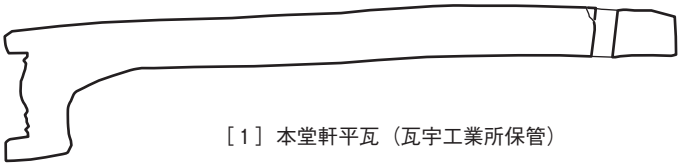
嘉慶二年には、大門所用瓦として軒平瓦・軒丸瓦が新たに製作されるが、平葺は本堂及び多宝塔用の平瓦・丸瓦が中心であった。平と妻とで大きさの異なる瓦を葺き分けた可能性もある。

多宝塔上層に葺かれていた「宝珠唐草文」軒平瓦―「三ッ巴24」軒丸瓦の転用元は、別建物か前身建物かは、定かにできなかった。

多宝塔上層の「宝珠唐草文」軒平瓦二種も、釘穴の有無を屋根勾配と関連づけて、Aを下層所用瓦、Bを上層所用瓦と考えることもできるのかもしれない。いずれにしても、大門での「宝珠唐草文」対応平瓦の存在は、大門当初屋根瓦の多様性を裏付けるものと考えられた。

本　堂　延慶４年（1311）

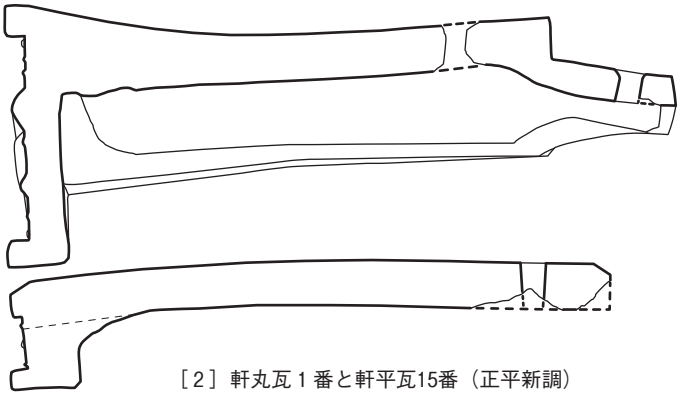
※拓影・実測図のうち、［１］～［４］及び［７］～［９］、［11］、［13］、［14］は芦田淳一氏による。



［１］本堂軒平瓦（瓦宇工業所保管）

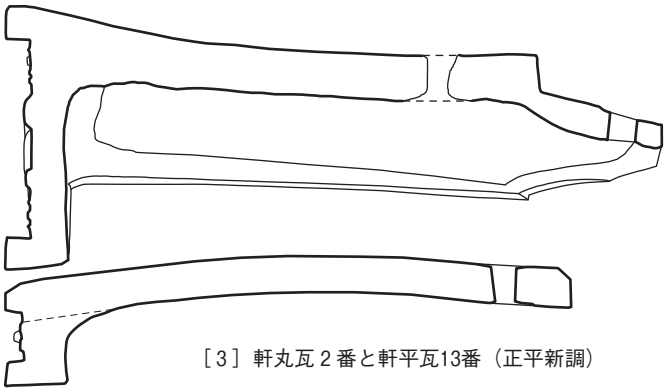
多宝塔　正平12年（1357）

下層所用瓦

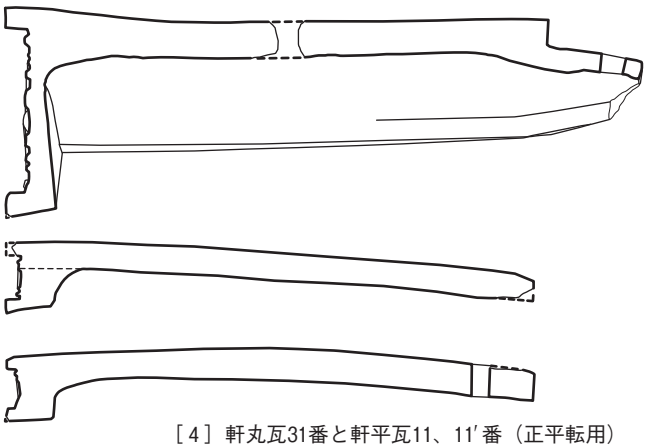


［２］軒丸瓦１番と軒平瓦15番（正平新調）

上層所用瓦



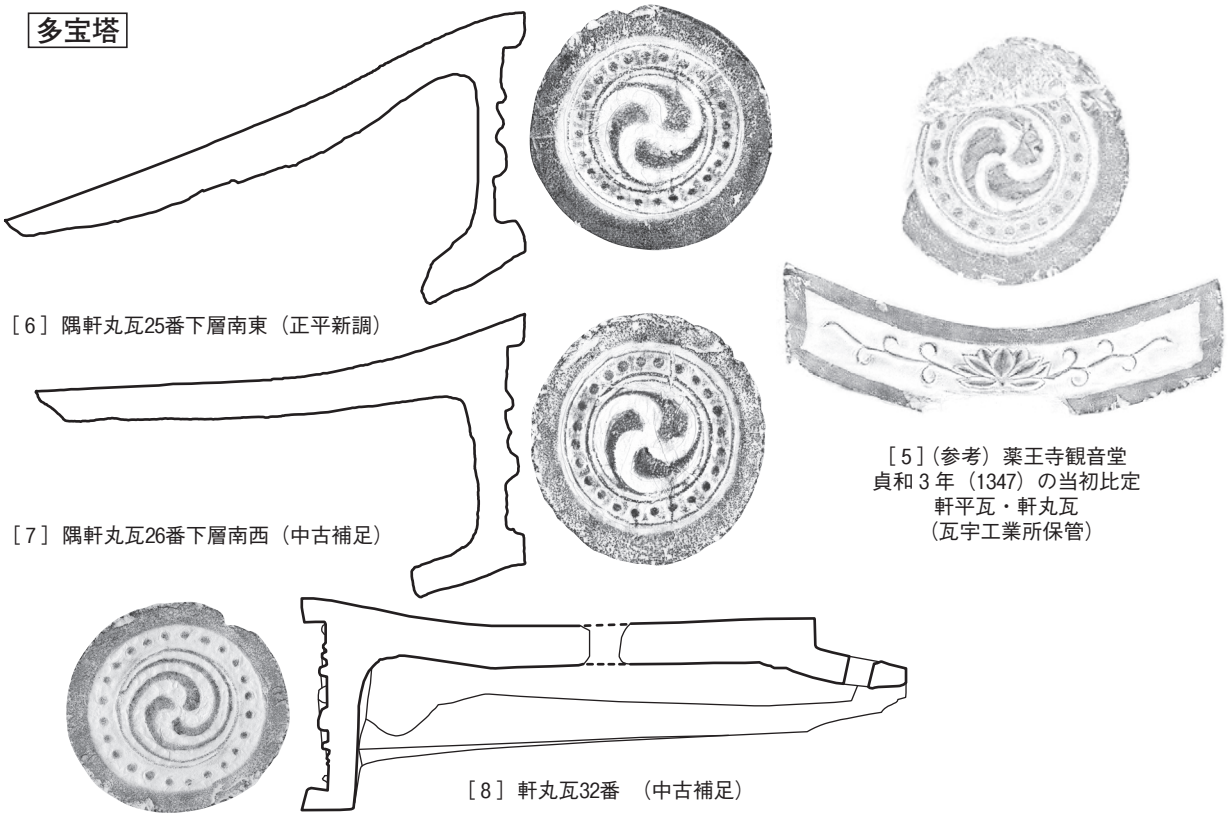
［３］軒丸瓦２番と軒平瓦13番（正平新調）



［４］軒丸瓦31番と軒平瓦11、11′番（正平転用）

図4-3　瓦拓影・実測図　縮尺1/5（次ページ以降に続く）

多宝塔



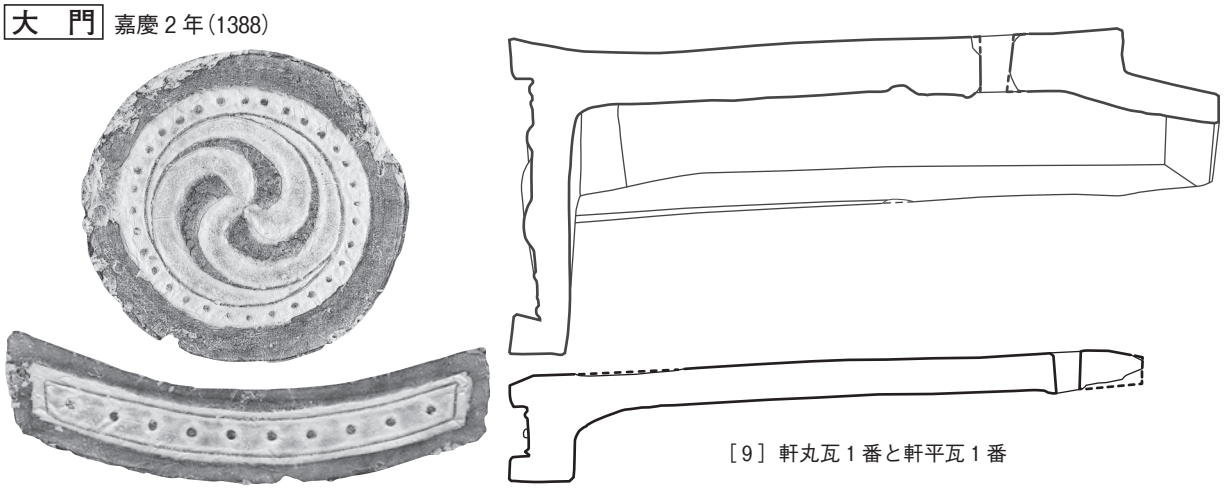
［6］隅軒丸瓦25番下層南東（正平新調）

［7］隅軒丸瓦26番下層南西（中古補足）

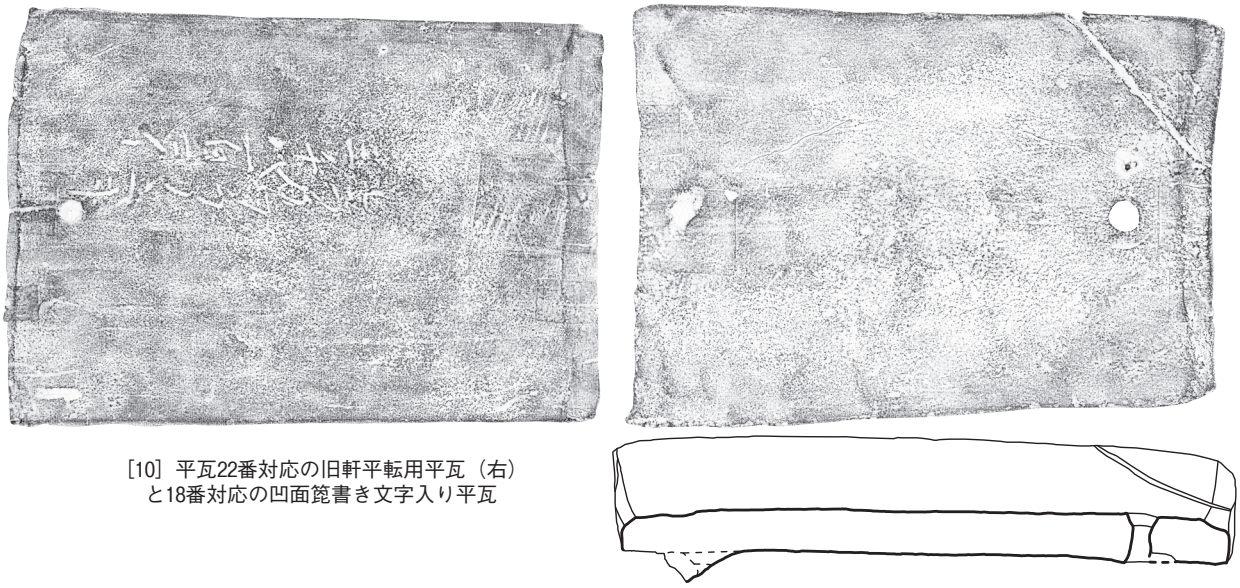
［5］(参考）薬王寺観音堂
貞和３年（1347）の当初比定
軒平瓦・軒丸瓦
（瓦宇工業所保管）

［8］軒丸瓦32番　（中古補足）

大　門 嘉慶２年(1388)

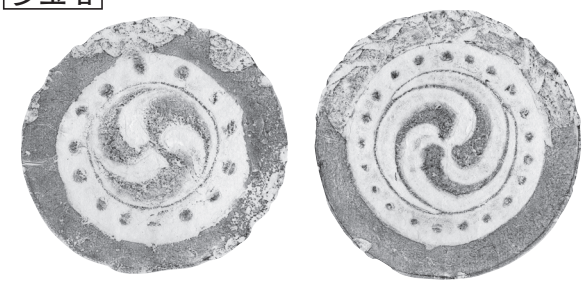


［9］軒丸瓦１番と軒平瓦１番



[10] 平瓦22番対応の旧軒平転用平瓦（右）
と18番対応の凹面箆書き文字入り平瓦

多宝塔



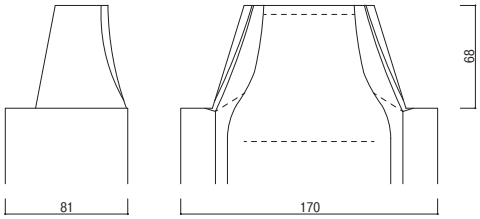
[13] 中世期軒丸瓦７番（左）と４番（右）

[14] 近世期軒平瓦１番

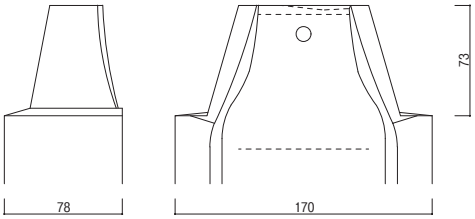
[11] 中世期軒平瓦12番

[12] 中世期軒平瓦14番（上）と17番（下）

本堂　延慶４年（1311）

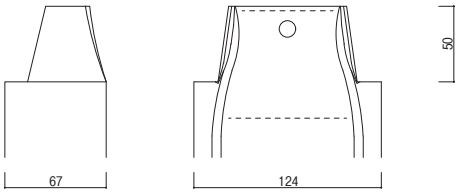


丸瓦１番



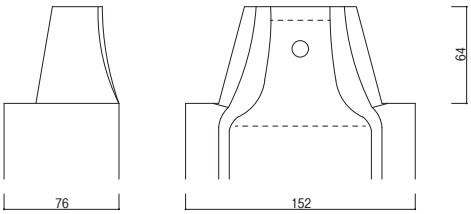
丸瓦２番（＝大門 1番）

多宝塔上層　正平12年以前



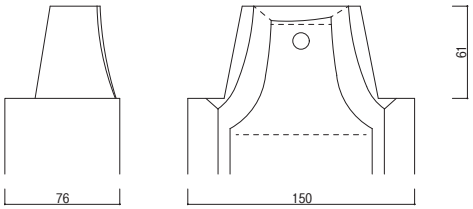
丸瓦41番

多宝塔上層　正平12年（1357）



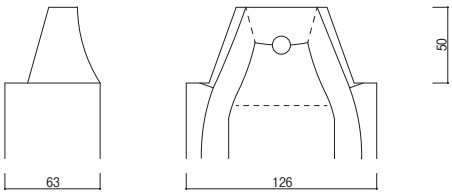
丸瓦３番（＝大門丸瓦12番）

多宝塔下層　正平12年（1357）



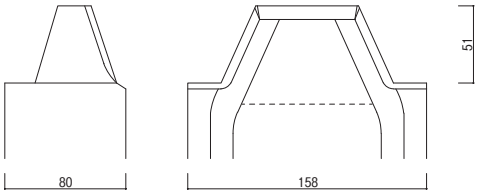
丸瓦５番（＝大門丸瓦14番）

多宝塔上層　正平12年以降



丸瓦45番

大門　嘉慶２年（1388）



丸瓦７番

図4-4　長保寺丸瓦の玉縁調整の変遷　縮尺1/5

第五章　資　料

第一節　近代の文化財解体修理資料

今回修理を行った各建造物は、いずれも近代の文化財指定後、解体修理されたものである。大門は明治四三～四四年（一九一〇～一九一一）、多宝塔と鎮守堂は昭和二～三年（一九二七～一九二八）に修理がなされた。しかしながら、いずれも修理工事報告書が刊行されることなく、現在にいたっており、当時の修理内容や経緯については詳らかではなかった。

このたびの修理にあたり、和歌山県立博物館の竹中氏のご教示により、長保寺から和歌山県立博物館に寄託されている古文書の調査を行った結果、当時の修理関係書類の多くを見いだすことが出来た。書類は事業立ち上げの請願に始まり、修理設計書、事業精算書などのほか、各種帳簿、書簡など、多岐にわたるもので、修理の経緯をうかがうことの出来る貴重な資料であると考えられる。

本章ではこれらの資料群の中から、特に重要と考えられる、大門修理事業精算書、多宝塔・鎮守堂修理事業精算書を書き下し、後世の資料として掲載する。

第二節　大門明治修理精算書

長保寺大門修理工事精算設計書

本修理工事ハ明治四十参年十一月五日ヨリ着手シ豫定ノ期限ヲ以テ仝四十四年八月三十一日竣工ヲ告ケタリ修理以前ニ於ケル状態ハ多年修理保護ヲ怠慢ニシアリタルノ結果破損多大殊ニ白蟻發生シ用材ノ大部分ヲ蟲蝕シ一層損傷欝大ニスルニ至レリ修理工事施行方法ニ関シテハ原設計ノ精神ニ基キ施行シタルモ尚實行ニ當リ其形式構造装飾及材料ニ渉リ工程毎ニ精密ニ之レヲ督査考究シ新ニ交換填補ス可キモノハ創設當時ノ形式手法ヲ厳守シ継手仕口ニ至ル迄一々當時ノ手法ニ範リ施工セシメタリ又建物地形ハ白蟻豫防工事トシテ雨落溝内全部ニコンクリートヲ打立テ尚在来用材ニハ殺虫液ニ硫化炭素ヲ注入シ新古材共蟲蝕豫防劑「クレオゾール」ト貳拾四度軽油ヲ混合シ之レヲ塗抹セリ其他詳細ハ別紙出来精算設計書并ニ設成實側繪圖面等ニ依リ明瞭ナルモ左表ニ各部類豫算全額ヲ對照シ其増減ニ関スル事由ヲ開陳ス

長保寺山門修理工事工程表

種別	着手年月日	竣成年月日	備考
着手準備	明治四十三年十一月五日	仝年十一月廿一日	
諸材料購入	仝年十一月廿一日	四十四年七月廿二日	
仮建物新設	仝年十一月廿二日	四十三年十二月廿日	
實側製図	仝年十一月十八日	四十四年六月三十日	
建物取解	仝年十一月廿日	四十三年十二月廿八日	
腰廻リ柱根継頭貫虹梁嵌板其他修理	四十四年一月五日	四十四年二月廿日	
階上軸部椽勾欄幣軸唐戸天井其他	仝年一月十五日	仝年三月廿五日	
斗栱支輪軒化粧廻リ其他修理	仝年二月十六日	仝年五月十五日	
木屋組野廻リ土居葺	仝年四月廿五日	仝年六月十日	
其他修理	四十四年六月十一日	仝年七月五日	
屋根瓦葺立	仝年六月一日	仝年六月廿日	
壁塗其他	仝年七月三日	仝年七月廿一日	
地盤コンクリート雨落溝其他排水工事	仝年八月一日	仝年八月十五日	
素屋根取解キ跡掃除共			
決算報告	仝年八月十六日	仝年八月廿一日	

右之通リ豫定ヲ以テ實行仕分候也

明治四十三年十一月十三日

修理工費収入表

科目	豫定額	實収入	比較 増	比較 減	備考
國庫交付金	六、五八九、一一〇	六、五八九、一一〇			
寺院負担金	七五〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇			
古材及不用品賣却	五一一、五三〇	五一九、九一〇	八、三八〇		
預金利子	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、七二八	七二八		
計	七、九五〇、六四〇	七、九五九、七四八	九、一〇八		

収入支出對照表

科目	設計豫定	實施科目	支出額	比較 増	比較 減	備考
木材費	二、八六六、九六〇	木材費	二、九〇七、四四〇	四〇、四八〇		木材費ハ員數増加セシヲ以テ増額セリ
金物費	九九、九〇〇	金物費	五五、七四〇		四四、一六〇	金物費ノ減額シタルハ需要ノ減少ニ依ル
瓦費	二七八、二〇〇	瓦費	三〇〇、七八〇	二二、五八〇		瓦費ノ増加シタルハ員數増加ニ依ル
葺工費	一〇四、八〇〇	雑品費	二九一、四九〇	八四、六九〇		雑品費ノ増加シタルハ豫算外ノ地盤コンクリート施工シタルニ依ル
塗工費	四八、〇〇〇					
石材費	五四、〇〇〇					
工料費	一、九二五、二五〇	工料費	二、一二二、九九〇	一八七、七四〇		工料賃ノ増加シタルハ需要員數ノ増加ニ依ル
仮建物	六四七、〇〇〇	仮建物	七三三、三一〇	八六、三一〇		仮建物費ノ増加ハ建物坪數増加ニ依ル
雑之部監督費	一、三一五、〇〇〇	監督費	一、五四八、八九〇	一三三、八九〇		監督費ノ増加シタルハ係員六名ニ慰労手當ヲ給シタルニ依ル
計	七、三九、一一〇		七、九五〇、六四〇	差引 六一、五三〇	四四、一六〇	

備考豫定額ハ支出ノ増加ニ伴ヒ時々追加又ハ更正ヲナシ施行セシモ當初設計ト對照ノ便宜上收支出共原設計豫定ヲ掲グ

修理實施仕様概要

一、建物周圍ニ水盛遺形ヲ取設ケ在来ノ柱根ノ高低ヲ精密ニ調査シ置キ而シテ屋根大棟鬼板隅棟ヨリ順次取解キ瓦ハ附近ノ場所ニ積重ネ用材ハ使用ニ堪エルモノト然ラザルモノト分別シ再使用ス可キ分ハ番號ヲ附シ釘仕舞ヲナシ順序能ク物置小屋ニ收納養生ヲナシ置キタリ

一、柱新規取換ノ分ハ在来ノ寸法仕口ニ倣ヒ仕拵ヘ仝根継ヲ施ス分ハ外部ニ見ヘ能継手ヲナシ高低無之様柱石ニ口引ヲナシ

建込ミ地腰及腰樌飛樌等補足ノ部ハ在来ノ寸法ニ削リ上ゲ柱ニ刺通シ楔飼堅メヲナセリ

一、階上及階下共頭樌ノ補足ノ部ハ在来ノ如ク削リ上ゲ夫々取附仝椽腰組斗栱并ニ軒斗栱等ハ欠損ノ處ハ矧木ヲナシ補足ノ部ハ原形ニ則リ新調シ通肘木枠肘木秤肘木尾樋ノ欠損ノ箇所ハ矧木又ハ埋木ヲナシ新規補足ノ分ハ在来ノ寸法形ニ倣ヒ仕拵ヘ組堅メヲナス

一、階上椽板ハ全部新調ニ付在来ノ寸法ニ削リ上ゲ張立木口壱定ニ切揃ヘ鉋削リヲナシ勾欄及寶珠柱共新調ニ付原形ノ如ク組堅メ内部格縁天井欠損ノ處ハ矧木ヲナシ腐朽ノ部ハ新規取換裏板張立ヲナセリ

一、階上柱受臺輪ハ全部新調ニ付在来ノ寸法ニ仕拵ヘ隅々ハ相欠キ留メ組合セ中仕切取合ハ蟻掛ニナシ水平ニ据付柱根貳枚枘ニナシ建込ミ椽上地覆長押共全部新調ニ付就レモ在来ノ寸法ニ削リ仕上ゲ隅々ハ目違ニ入レ留メニ組合セ通リ能ク取附ヲナシタリ

一、軒地樋飛檐樋仝裏板木負茅負裏甲等欠損ノ箇所ハ矧木又ハ埋木ヲナシ新調ノ部ハ原形ノ如ク仕拵ヘ取附仝尾樋及支輪ハ前仝様矧木新調ヲナシ化粧隅木丸桁破風板前包懸魚等腐朽ニ付在来ノ形チニ倣ヒ全部新調ヲナシ取附ヲナス

一、屋根木屋組ハ別紙圖面ノ通リ全部新調シ軒拮木尻ハ銕ボールトヲ以テ木屋樞受梁又ハ捨桁ヘ堅牢ニ釣リ堅メ軒通リ能ク出来ヲナセリ

一、野隅木ハ全部腐朽取換ニ付在来ノ形チニ倣ヒ仕拵ヘ架渡シ野棰ハ圖面ノ配置ニナシ母屋桁毎ニ釘打取附野地板ハ両傍共殺ギ合セ壱寸以上重ネ張立ヲナシタリ

一、金剛柵ハ腐朽全部新調ニ付在来ノ形ヲ嚴守シ仕拵ヘ地覆上端ヘ枘刺トナシ腰樌外部ハ押ヘ胴縁ヲ用ヒ入念取附ヲナス

一、補足新調材ハ凡テ古色丹塗ヲ施シ新古調和能クナシ又見ヘ掛リヲ避ケ修理ノ年号ヲ焼印ニテ押捺ナシタリ

屋根瓦葺ノ部

一、軒唐草及巴ハ壱枚毎ニ銅線ヲ以テ釣リ堅メ巴瓦ハ尻留釘ヲ用ヒ平瓦ハ葺足六枚毎ニ丸瓦四枚毎ニ就レモ銅線ヲ以テ釣リ堅メ大棟及下リ棟隅棟等ノ鬼板ハ七番ノ銅線ニテ充分堅牢ニ繋キ堅メ仝棟使用ノ肌熨斗ハ通リ参枚目毎ニ銅線ニテ繋キ堅メ葺重熨斗貳枚目毎ニ前仝様千鳥ニ釣堅メ仝棟鴈振壱枚毎ニ鳥衾ハ尻釘留トナシ葺地ムラ無ク葺立ヲナス

一、瓦葺土ハ粘土ヲ撰ミ新古土ヲ混合シ藁苆充分入レ四度以上練リ返シ使用セリ

一、野地瓦下柿葺ハ杁赤身勝チノ長八寸五分巾三寸以上ノモノニテ貳寸足ニ葺立壱尺五寸明キニ檜壱寸貳分厚七分ノ土留木舞ヲ取附ヲナス

地形ノ部

一、柱礎石下ハ四尺方深サ三尺五寸壷堀ヲナシ割栗石目潰砂利入レ充分搗キ堅メタル上深サ貳尺八寸ノ堰板刺込ミコンクリート打立而シテ在来ノ礎石并ニ新規石共既成コンクリート上端ヘ馴染能クモールタルヲ以テ据付ヲナス

一、周圍雨落溝石垣ハ在来ノ石一旦掘起シ割栗石目潰砂利入レ搗キ堅メタル上在来ノ如根石据付上端通リ能ク切均シ目漆喰ヲナシ雨落内全部ハ地盤壱尺八寸通リ鋤取割栗石目潰砂利平均壱尺通リ搗キ込ミタル上コンクリート九寸通厚打立上端ハモールタルヲ以テ塗立ヲナセリ

仮建物ノ部

一、素屋根足代ハ両流レ造桁行八間六分梁行六間五分軒高貳拾八尺六寸柱掘建要所ハ亜鉛引釘金ヲ用ヒ其他ハ縄搦ミ屋根亜鉛波板葺四方筵囲ヒ軒足代ハ素屋根内軒下タ貳尺五寸ノ處ニ巾五尺通リ板敷並ベ登リ桟橋取設ケ昇降ヲ便ニシ建設ヲナス

一、職工作事場ハ桁行八間梁行参間仝木挽小屋ハ桁行参間五分梁行参間就レモ両流シ造リ柱掘建軒高拾貳尺屋根柿葺三方板囲ヒ建設ヲナス

一、湯沸小屋ハ桁行貳間梁行壱間五分柱掘建軒高八尺屋根板葺三方壁塗トナセリ

一、監督事務所ハ桁行参間梁行貳間両流レ造リ柱掘建軒高拾壱尺屋根柿葺三方壁塗内部床板張リ正面中敷居硝子障子及入口硝子入レニナス

一、竹矢来ハ高八尺柱間拾尺毎ニ掘建圣参寸ノ丸竹ヲ以テ菱形ニ縄搦ミニナシ巾拾尺ノ出入門ヲ設ケ扉錠前付ニ建設ヲナス

長保寺大門修理工事精算設計書

一金七千九百五拾九圓七拾四銭八厘

収入總額

内譯

金六千五百八拾九円拾壱銭	國庫下賜金
金七百五拾円	寺院負担金
金五百拾九圓九拾壱銭	不用品及古材賣却金
金壱百円七拾貳銭八厘	預金利子

一金七千九百五拾圓六拾四銭

修理工費支出總額

内譯

金貳千九百七圓四拾四銭	木材費
金参百圓七拾八銭	屋根瓦費
金五拾五圓七拾四銭	金物費
金貳百九拾壱圓四拾九銭	雑品費

金七百参拾参圓参拾壱銭　仮建物費
金貳千壱百壱拾貳円九拾九銭　工料費
金壱千五百四拾八圓八拾九銭　監督費
計金七千九百五拾圓六拾四銭
差引九圓拾銭八厘

木材ノ部

一金貳千九百七圓四拾四銭

内譯

名稱	品目	長短	寸法	員數	單價	小計
柱	欅	拾壱尺	弐壱尺壱寸八分	五本	参拾四圓拾九銭	壱百七拾圓九拾五銭
仝根継	仝	拾四尺切道	弐壱寸	壱本	四拾八圓六拾四銭	四拾八圓六拾四銭
仝断	仝	五尺	弐寸	壱本	拾五圓九拾七銭	拾五圓九拾七銭
地覆	檜	五尺八寸	五寸六分四寸貳分	拾貳挺	壱圓七拾八銭	貳拾壱圓参拾六銭
仝断	仝	五尺八寸	参寸八分四寸貳分	貳挺	壱圓五拾参銭	参圓六銭
腰懸	檜	拾五尺	参寸八分五寸八分	四挺	四圓参拾貳銭	拾七圓貳拾八銭
仝断	仝	八尺四寸	仝寸	四挺	貳圓四拾銭	九圓六拾銭
金剛柵格	仝	四尺六寸	貳寸参分壱寸貳分	百四拾七本	拾六銭	貳拾参圓五拾貳銭
仝胴押へ胴縁	仝	五尺八寸	四寸貳分壱寸六分	八本	五拾壱銭	四圓〇八銭
仝断	仝	五尺	仝寸	五拾本	拾八銭	九圓
嵌板	仝	五尺八寸	巾壱尺五分厚八分	拾八枚	六拾六銭	拾壱圓八拾八銭
飛檜	仝	拾四尺六寸	五寸七分参寸八分	壱挺	四圓拾参銭	四圓拾参銭
仝断	仝	拾貳尺	仝寸	壱挺	参圓四拾銭	参圓四拾銭
仝断	仝	八尺	仝寸	参挺	貳圓貳拾銭	六圓六拾銭
頭檜	仝	拾貳尺	七寸七分四寸八分	貳挺	六圓貳拾五銭	拾貳圓五拾銭
仝断	仝	拾参尺	仝寸	壱挺	六圓五拾五銭	六圓五拾五銭
仝断	仝	八尺参寸	仝寸	貳挺	参圓九拾六銭	七圓九拾八銭
階下枠肘木	仝	拾四尺四ッ切	四寸参分参寸五分	四挺	貳圓七拾五銭	拾壱圓
仝造出シ隅肘木	仝	拾五尺三ッ切	七寸九寸	壱挺	拾貳圓参拾六銭	拾貳圓参拾六銭
仝繪様肘木	仝	拾四尺三ッ切	四寸参分参寸五分	七挺	貳圓九拾五銭	貳拾壱圓六拾五銭
仝秤肘木	仝	拾五尺切道	仝寸	四挺	貳圓九拾五銭	拾壱圓八拾銭
仝通リ肘木	仝	拾貳尺	仝寸	四挺	貳圓参拾六銭	九圓四拾四銭
仝仝断	仝	拾壱尺	仝寸	拾五挺	貳圓拾六銭	参拾貳圓四拾銭
仝隅肘木	仝	七尺五寸	四寸六分四寸参分	参挺	壱圓九拾銭	五圓八拾貳銭
仝仝断	仝	拾五尺	四寸六分四寸参分	四挺	参圓八拾七銭	拾五圓四拾八銭
椽根太通リ肘木	仝	拾貳尺	仝寸	拾挺	貳圓参拾六銭	貳拾参圓六拾銭
笈束	仝	拾五尺切道	七寸七分参寸五分	壱挺	参圓九拾壱銭	参圓九拾壱銭
方斗	仝	七尺切道	七寸七分四寸七分	壱挺	参圓参拾銭	参圓参拾銭
巻斗	仝	拾五尺切道	五寸七分四寸七分	七挺	五圓貳拾五銭	参拾六圓七拾五銭
格組天井組格	仝	拾五尺切道	壱寸七分貳寸	拾壱本	六拾六銭	七圓貳拾六銭
仝天井裏板	仝	仝尺切道	巾四寸五分厚四分	参拾五枚	四拾八銭	拾六圓八拾銭
仝断	仝	仝尺切道	巾七寸五分厚四分	四枚	五拾五銭	貳圓貳拾銭
椽板	仝	四尺	巾四寸五分厚壱寸貳分	壱百七拾枚	貳拾四銭	四拾四圓八拾銭
勾欄寶珠柱	仝	拾五尺切道	参尺壱寸	八拾枚	壱圓五拾銭	九圓四拾六銭
仝地覆	仝	参拾貳尺	四寸参寸六分	壱挺	六圓〇貳銭	六圓〇貳銭
仝断	仝	貳拾壱尺	仝寸	貳挺	四圓八拾八銭	九圓七拾六銭
仝断	仝	拾参尺	仝寸	貳挺	参圓拾参銭	六圓貳拾六銭
仝平桁	仝	参拾貳尺	四寸貳寸貳分	壱挺	参圓六拾八銭	参圓六拾八銭
仝断	仝	貳拾壱尺	仝寸	貳挺	貳圓四拾壱銭	四圓八拾貳銭
仝断	仝	拾参尺	仝寸	壱挺	壱圓五拾銭	参圓〇貳銭
仝架木	仝	参拾貳尺	圣貳寸貳分	壱挺	貳〇貳銭	貳圓〇貳銭
仝断	仝	貳拾壱尺	仝寸	貳挺	壱圓参拾貳銭	貳圓貳拾貳銭
仝断	仝	拾参尺	圣貳寸貳分	貳挺	八拾貳銭	壱圓六拾四銭
仝桝枧及尺枧共	仝	拾五尺切道	四寸参寸四分	四挺	貳圓拾五銭	拾圓
二階柱受土居盤	仝	拾五尺	壱尺四分七寸壱分	六挺	拾九圓五拾銭	壱百拾七圓
仝断	仝	拾五尺	壱尺四分六寸八分	貳挺	拾参圓七銭	貳拾六圓拾四銭
仝断	仝	拾壱尺	五寸八分六寸八分	壱挺	四圓八拾貳銭	四圓八拾貳銭
階上柱	欅	四尺	圣壱尺八分	参本	拾参圓九銭	拾参圓六銭
腰懸	檜	拾壱尺	五寸参寸貳分	参挺	貳圓参拾銭	六圓九拾銭
仝断	仝	拾四尺	仝寸	四挺	貳圓九拾貳銭	貳拾六圓八拾銭
仝断	仝	七尺	仝寸	五挺	四圓四拾貳銭	壱圓四拾六銭
頭檜	仝	拾参尺	四寸六寸五分	四挺	四圓四拾貳銭	貳拾貳圓拾銭
仝断	仝	七尺五寸	仝寸	四挺	貳圓五拾五銭	拾圓貳拾銭
腰長押	仝	貳拾六尺	七寸七分五寸六分	貳挺	拾四圓六拾六銭	貳拾九圓参拾貳銭
仝断	仝	拾五尺	仝寸	貳挺	八圓四拾六銭	拾六圓四拾銭
上長押	仝	拾六尺	六寸四分六寸貳分	六挺	四圓四拾八銭	拾参圓四拾八銭

名稱	品目	長短	寸法	員數	單價	小計
仝断	仝	拾五尺	仝寸	七挺	七圓七拾八銭	拾五圓七拾六銭
仝断	仝	拾壱尺	仝寸	拾挺	五圓七拾銭	拾壱圓四拾銭
幣軸	仝	参尺	参寸八分四寸	壱挺	六拾銭	六拾銭
方立	仝	貳尺五寸	参寸貳寸貳分	貳挺	参拾六銭	七拾貳銭
小脇板	仝	貳尺五寸	巾壱尺厚壱寸壱分	参挺	参拾壱銭	六拾貳銭
組物尻挟ミ枠	檜	七尺	五寸参寸	拾貳本	壱圓参拾七銭	拾六圓四拾四銭
造出シ隅枠肘木	仝	拾尺三ッ切	九寸七寸七寸四分	壱挺	八圓七拾銭	八圓七拾銭
造リ出シ枠肘木	仝	拾五尺	四寸四分参寸四分	五挺	貳圓八拾七銭	拾四圓参拾五銭
造リ出シ隅肘木	仝	拾五尺	九寸七寸四分	七挺	拾参圓貳拾銭	九拾貳圓四拾銭、九拾壱円四拾銭、九拾壱円四拾貳銭、トハル
通シ肘木	仝	拾五尺	四寸参分参寸四分	貳挺	貳圓八拾七銭	六拾六圓壱銭
仝断	仝	九尺	仝寸	拾挺	壱圓七拾貳銭	貳拾圓六拾四銭
仝断	仝	拾八尺	仝寸	貳挺	参圓四拾四銭	六圓八拾八銭
秤肘木	仝	拾五尺切道	仝寸	貳挺	五圓五拾四銭	拾壱圓八拾銭
仝断	仝	貳尺九尺	仝寸	六挺半	貳圓八拾六銭	拾八圓五拾九銭
方斗	仝	四尺切道	七寸八分四寸八分	壱挺	壱圓九拾銭	壱圓九拾銭
笈枧	仝	五尺切道	五寸七分参寸五分	壱挺	壱圓参拾銭	壱圓参拾銭
巻斗	仝	拾五尺切道	四寸七分五寸七分	四挺	五圓貳拾五銭	貳拾壱圓
隅尾梼	仝	拾五尺	五寸六分八寸五分	壱挺	九圓拾六銭	九圓拾六銭
仝断	仝	拾五尺	五寸六分八寸	壱挺	八圓七拾九銭	八圓七拾九銭
拳鼻	仝	八尺切道	七寸五分参寸四分	壱挺	貳圓六拾七銭	貳圓六拾七銭
軒天井格	仝	拾五尺切道共	壱寸七分八寸	拾参本	六拾六銭	八圓五拾八銭
仝裏板	仝	六尺五寸切道共	巾四寸五分厚四分	五拾五枚	拾五銭	八圓貳拾五銭
支輪	仝	九寸五分	巾六寸参分厚貳寸	武拾六本	拾五銭	参圓九拾銭
仝裏板	仝	拾四尺切道共	巾七寸厚壱寸貳分	六枚	壱圓五拾参銭	九圓拾八銭
仝断	仝	拾四尺切道共	中六寸厚五分	六枚	五拾五銭	参圓参拾銭
丸桁	檜	参拾四尺	五寸八分九寸貳分	貳挺	貳圓七拾貳銭	四拾七圓四拾四銭
仝断	仝	貳拾参尺	仝寸	貳挺	拾六圓	参拾貳圓
化粧隅木	仝	拾八尺	五寸七分壱尺壱寸	四挺	拾四圓七拾五銭	五拾九圓
仝飛椽隅木	仝	拾五尺	五寸七分七寸	四挺	七圓八拾貳銭	参拾壱圓貳拾八銭
地梼	仝	拾五尺切道共	貳寸貳分貳寸九分	六拾五本	壱圓四拾五銭	九拾四圓貳拾五銭
飛椽梼	仝	七尺五寸切道共	仝寸	六拾八本	七拾貳銭	四拾八圓九拾六銭
化粧裏板	仝	拾五尺切道共	巾四寸厚四分五分	壱百拾枚	四拾貳銭	四拾六圓貳拾銭
面度板	仝	拾五尺切道	巾参寸貳分厚五分	参拾五銭	参拾五銭	壱圓七拾五銭

木負	仝	拾五尺	五寸 参寸五分	貳枚
仝隅木負	仝	拾五尺反リモノ	仝寸	八挺
茅負	仝	拾五尺	五寸六分 参寸五分	壱挺
仝断	仝	六尺	仝寸	壱挺
隅茅負	仝	拾五尺反リモノ	仝寸	六挺
木口裏甲尻留	仝	拾五尺	貳寸 五寸	拾挺
木口裏口	仝	拾五尺切道	中壱尺 厚壱寸九分	貳拾参挺
瓦座	仝	拾五尺	壱寸八分 貳寸	拾四本
妻虹梁	仝	拾壱尺	五寸五分 八寸	貳挺
仝指桁	仝	七尺五寸	五寸五分 四寸五分	四挺
仝肘木	仝	六尺二ッ切	四寸参分 参寸四分	壱挺
仝蟇梁	仝	七尺五寸	貳寸貳分 貳寸八分	拾六本
破風板	檜	拾尺	四寸五分 厚四分	四枚
蟇裏板	仝	七尺五寸	中壱尺 厚七分	貳枚
仝胴嵌板	仝	拾五尺切道	中貳寸六分 厚五分	参枚半
小壁嵌板	仝	拾五尺切道	貳寸貳分 尺貳寸	拾四枚
壁胴縁	仝	拾五尺切道	壱寸五分角	五本
仝断	仝	拾貳尺切道	参寸五分 壱寸壱分	拾貳本
掛魚	仝	拾四ッ切	中九寸五分 厚貳寸貳分	壱枚
指桁尻指	仝	六尺	五寸 六寸	四挺
丸桁拮	栂	貳拾尺	六寸 六寸五分	四挺
仝断	檜	拾五尺	五寸 六寸五分	拾挺
仝桔木枕	仝	参尺貳切	七壱尺 厚四寸	壱挺
土居	仝	拾五尺	五寸 七寸	拾壱挺
牛引	仝	拾八尺	尺壱寸 八寸	壱挺
母屋桁	仝	拾五尺	五寸 六寸	貳拾六挺
端母屋	仝	拾五尺	四寸五分角	拾挺
棰掛	仝	拾貳尺	四寸 五寸	貳挺
野棟	仝	拾五尺	五寸五分 六寸五分	貳挺
棟棰	仝	七尺五寸	五寸 六寸	五挺
木屋棰	仝	拾五尺切道	四寸五分角 七寸	拾挺
桔木	仝	拾六尺	五寸五分 七寸	拾六本

隅桔木	仝	貳尺	六寸 七寸	貳挺
仝断	栂	貳拾貳尺	五寸五分 六寸五分	拾挺九拾八銭
野隅木	檜	拾五尺	五寸 八寸五分	四挺
野棰	仝	拾五尺切濃共	壱寸六分 貳寸五分	八挺七拾七銭
野地板	仝	拾参尺	中八寸以上 厚六分	貳拾参坪
仝断	栂	仝尺	仝寸	貳拾五坪
土留木舞	檜	拾五尺	壱寸三分 六分	七拾五本
化粧隅木鼻雨覆	仝	五尺四ッ切	七寸六分 参寸貳分	壱挺
刻木用	仝	拾参尺切道	壱尺角	壱挺
				拾七圓

屋根瓦ノ部
一金参百圓七拾八銭
内譯

名稱	品目	長短	寸法	員數	單價	小計
軒巴	漉シ土本磨	壱尺	矛五寸 厚七分	壱百拾四本	拾五銭	拾七圓拾銭
仝唐草	仝	九寸五分	中八寸 垂貳寸	壱百四拾四枚	拾銭	拾四圓四拾銭
隅唐草	仝	九寸五分	仝寸三角形	四枚	拾銭	四拾銭
隅巴	仝	壱尺	矛六寸 厚七分	参本	参拾五銭	壱圓五銭
平瓦	仝	九寸五分	中八尺 厚六分	貳千四百枚	五銭	壱百貳拾圓
丸瓦	仝	九寸五分	矛五寸 厚七分	九百本	五銭	四拾五圓
妻掛巴	仝	九寸	矛六寸 厚七分	七拾七本	拾六銭	拾貳圓参拾貳銭
妻掛唐草	仝	八寸五分	中八寸 厚六分	左右四拾六枚	拾貳銭	五圓五拾貳銭
仝二ノ平	仝	仝寸	仝寸	左右五拾枚	五銭	貳圓五拾銭
厂振	仝	仝寸	中七寸 厚七分	貳拾七枚	七銭	壱圓八拾九銭
隅鬼	仝	足元壱尺四寸五分	南サ八寸 厚貳寸貳分	四個	参個	拾貳圓
下リ棟鬼	仝	足元壱尺六寸五分	南サ八寸 厚貳寸貳分	四個	貳個	六圓五拾銭
大棟鬼板	仝	足壱尺八寸	南壱尺参寸 厚四寸	貳個	六百参拾枚	参銭
尉斗瓦	仝	八寸五分	中八寸 厚六分	六百参拾枚	参銭	拾八圓九拾銭
袖丸	仝	八寸	矛四寸 厚六分	四拾四本	六銭	貳圓六拾四銭 貳円四拾銭ト十ル
厂振	仝	八寸五分	中六寸 厚七分	壱百参拾壱枚	六銭	七圓八拾六銭
面度	仝	五寸五分	矛四寸四分 厚仝寸	壱百五拾貳個	参銭五厘	五圓参拾貳銭 五円六拾七銭ト十ル
隅面度	仝	七寸参分	仝寸	七拾貳個	四銭	貳圓八拾八銭

金物ノ部
一金五拾五圓七拾四銭
内譯

名稱	品目	長短	寸法	員數	單價	小計
洋釘	鐵	壱吋		壱貫匁	五拾九銭	五拾九銭
仝断	仝	壱吋半		壱貫匁	四拾貳銭	四拾貳銭
仝断	仝	壱吋七分五厘		壱貫五匁	四拾四銭	六拾六銭
仝断	仝	貳吋		七貫五百匁	四拾六銭	参圓四拾五銭
仝断	仝	参吋		拾貫	四拾七銭五厘	四圓七拾五銭
仝断	仝	参吋半		五貫	四拾貳銭	貳圓拾銭
仝断	仝	四吋		四貫	四拾貳銭	壱圓六拾八銭
仝断	仝	四吋半		六貫	四拾貳銭	貳圓六拾七銭
仝断	仝	六吋		六貫	四拾四銭五厘	貳圓六拾七銭
仝断	仝	六吋		六百匁	五拾銭	参拾銭
鎹	仝	長五寸	四方角 瓜長壱寸五分	拾貫参百六拾匁	五拾銭	五圓拾八銭
洋釘	仝	五吋		四貫	四拾参銭	壱圓七拾貳銭
仝断	仝	五吋		参貫	四拾八銭	壱圓四拾四銭
平鎹	仝	貳寸	厚貳分 巾参分	壱百八拾挺	五厘	九拾銭
仝断	仝	貳寸五分	仝分	五厘	四拾参銭	四拾貳銭
折釘	仝	五寸五分	貳分用	壱百九拾五本	八厘	壱圓五拾六銭
仝断	仝	四寸五分	壱分五厘用	四百本	四厘五毛	壱圓八拾銭
仝断	仝	七寸五分	貳分用	壱百参拾本	壱銭	壱圓参拾銭
板鎹	仝	参尺	巾五寸 厚貳分	貳枚	九拾銭	壱圓八拾銭
ボールト銅線	仝	長壱尺以上参尺迄 拾七番	矛六分女捻座付	参貫八百匁	拾参貫	七拾銭
				貳圓九拾銭	九圓拾銭	拾壱圓貳銭

雑品ノ部
一金貳百九拾壹圓四拾九銭
内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
セメント	礎石ト夕コンクリート及捆付 地盤コンクリート共	四拾樽	参圓参拾四銭	壱百参拾六圓九拾四銭
砂利	コンクリート混合用	立参坪九合	七圓五拾銭	貳拾九圓貳拾五銭
川砂	前仝断裏合及モールタル用	立貳坪九合	九圓	貳拾六圓拾銭
割栗石	礎石ト夕及地盤搗込用	立壱坪八合	五圓	九圓
黄土	古色塗及種木口用	五貫	貳拾六銭	壱圓参拾銭
光明丹	仝断	貳拾斤	拾八銭	参圓六拾銭
水干胡粉	仝断	五貫	五拾七銭	貳圓八拾五銭
晒煮皮	仝断	壱貫匁	拾七銭	壱圓七拾銭
仝断	仝断	参百匁	貳拾壱銭	六拾参銭
ヤシャ液	仝断	拾参封度	参拾八銭四厘六毛	五圓
刷毛	仝断	貳枚	拾貳銭	貳拾四銭

仝断	仝断	壱枚	拾六銭	拾六銭
仝断	仝断	参枚	拾壱銭	参拾参銭
漆	彫刻物附着用	四拾匁	拾銭	四拾銭
正圓紫	古色塗用	八拾五枚	参銭	貳圓五拾五銭
割墨	古色塗用	壱袋		貳拾四銭
ハケツ	仝断用	壱個	拾八銭	
クレーゾール	白蟻殺蟲液	五封度	参拾壱銭	壱圓五拾五銭
甘四度軽油	仝断	壱斗入貳鑵	壱圓貳拾五銭	貳圓五拾銭
二硫化炭素	仝断	拾封度	参拾八銭五厘	参圓八拾五銭
瓦葺土	屋根瓦葺用	立貳坪	四圓	八圓
亜鉛板	隅瓦ト夕張立用	壱枚		八拾五銭
藁縄	古材結束用	八束	貳拾五銭	貳圓
細縄	木鉾揺キ用	四束	貳銭	八拾銭
藁縄	仝断用	六拾抱	四銭八厘	貳圓八拾銭
土居葺	屋根瓦ト枚並粉板貳寸五分足柿葺	五拾坪	七拾七銭	参拾八圓五拾銭
筵	材料費生用其他用	五拾枚	八銭五厘	四圓貳拾五銭
仝断	仝断	参拾枚	九銭五厘	貳圓八拾五銭
クレゾール	白蟻殺蟲液	六封度	四拾六銭	貳圓七拾六銭
眞中針金	土篩縛ヒ其他用	六拾四匁	参銭厘	貳拾参銭 弐拾壱銭六厘ト九ハ

仮建物ノ部

一金七百参拾参圓参拾壹銭

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
素屋根	桁行八間六分梁行六間五分軒高貳拾八尺六寸柱掘建縄搗屋根亜鉛板葺四方建	五拾五坪九合	六圓八拾銭	参百八拾圓拾貳銭
軒足代	素屋根巾五尺五寸通リ板敷並ベ及狩リ桟橋共	参拾坪	壱圓五拾銭	四拾五圓
作業小屋	桁行八間梁行参間五分軒高拾貳尺柱掘建屋根柿葺三方板圍ヒ	貳拾八坪	五圓五拾銭	壱百五拾四圓
木挽小屋	桁行参間五分梁行参間其他前仝断	拾坪五合	五圓五拾銭	五拾七圓七拾五銭 五拾七円七拾五銭トナル
湯沸場	桁行貳間五分梁行壱間半軒高八尺屋根板葺三方壁	参坪	五圓九拾銭	拾七圓七拾銭
監督事務所	桁行参間梁行貳間軒高拾壱尺柱掘建屋根柿葺三方壁正面硝子障子入	六坪	七圓五拾銭	四拾五圓 四拾八円トナル
竹矢来	八尺毎ニ杙丸太掘建柔三寸ノ丸竹ヲ以テ菱形二縄搦ミ巾拾尺出入門扉鏡前付共	四拾八間貳分	七拾銭	参拾参圓七拾四銭

工料ノ部

一金貳千壱百拾貳圓九拾九銭

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
大工	着手水盛ヨリ竣工迄大工二係ル一切ノ手間賃金	貳百四拾四人参分	八拾五銭	貳百拾六円拾五銭五厘 貳圓七圓六拾五銭五厘

監督費ノ部

一金壹千五百四拾八圓八拾九銭

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
工事監督		拾ヶ月	六拾圓	六百圓
工事主任		貳ヶ月貳拾五日分	五拾圓	壱百四拾圓参拾貳銭
仝断		七ヶ月六ヶ日分	五拾五圓	参百九拾五圓六拾四銭
備品	製圖用器械其他事務所用品一式			貳拾九圓五六銭
消耗品	製圖用紙其他炭油筆紙墨事務所用品一式			七拾圓貳拾銭
通信費	通信事務ニ係ル一切			七圓六拾五銭
旅費	材料購入其他要件出張旅費			七拾六圓四拾九銭
寫眞	四ツ切伴在来ノ形撮影	貳組	四圓五拾銭	九圓
慰勞	工事関係者六名ニ對スル慰労金			壱百八拾五圓
残務整理	残務整理者手當			貳拾圓
寫眞	出来形撮影四ツ切伴	参組	五圓	拾五圓

備品明細書

一金貳拾九圓五拾六銭

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
テーブル	監督事務用	貳脚	貳圓七拾五銭	五圓五拾銭
椅子	仝断	四脚	壱圓	四圓
製圖器械	仝断	壱組	六圓五拾銭	六圓五拾銭

T定規	仝断 長三尺五寸	壱枚	六拾銭	六拾銭
三角定規	仝断 長六寸	貳枚	拾銭	貳拾銭
仝断	仝断 壱尺	貳枚	貳拾貳銭	四拾四銭
仝断	仝断 八寸	貳枚	拾八銭	参拾六銭
仝断	仝断 尺五寸	壱枚		五拾銭
圖盤	仝断 巾二尺六寸長三尺五寸	壱枚	拾八銭	壱圓貳拾銭
バケツ	仝断	参個	拾七銭	五拾壱銭
石油ポンプ	石油小出鑵	壱個		四銭
手洗盟	仝断	壱個		拾銭
書箱	仝断	壱個		参拾参銭
柱時計	仝断	壱個		壱圓
鍊瓶	仝断	壱個		貳圓五拾銭
釘抜	仝断	壱個		参拾銭
焼印	仝断	壱個		壱圓五拾銭
英吉利斯	仝断 拾吋	壱個		壱圓拾銭
懐中電燈	仝断	壱個		壱圓
印	事務長職員	壱個		参拾八銭

消耗品明細書

一金七拾圓拾参銭

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
消護讀	製圖用 消リ出シ	貳本	拾五銭	参拾銭
仝断	仝断 棒ゴム	壱打		六拾銭
鉛筆	仝断 一FI	貳打	五拾銭	壱圓
仝断	仝断 ⅡB	参打	参拾銭	九拾銭
繪具	仝断	壱個		壱圓参拾銭
手帳	仝断	壱冊		拾五銭
墨	仝断	貳挺	六拾銭	壱圓貳拾銭
筆	監督事務所用	拾五本	五銭	七拾五銭
朱墨	仝断	壱挺		拾五銭
朱肉	仝断	貳匁	拾壱銭	貳拾貳銭
肉入	仝断	壱個	六拾枚	拾参銭
製圖用紙	製圖用模造ワートマン	六拾枚	拾六銭	九圓六拾銭
礬水引	仝用 四ッ盤	貳百枚	壱圓七拾五銭	参圓五拾銭
石油	事務所用	五鑵	壱圓九拾銭	九圓五拾銭
仝断	仝断	五升	貳拾銭	壱圓
堅炭	仝断	七拾九俵	参拾貳銭	貳拾五圓貳拾八銭
仝断	仝断	貳拾俵	参拾五銭	七圓
草箒	仝断	貳本	四銭	八銭
洒木綿	仝断	参尺	貳銭	六銭
ピン	仝断	百本	四厘	四拾銭
麻裏草履	仝断	貳足	拾貳銭	貳拾四銭

茶	仝断	貳斤	拾貳錢	貳拾四錢
帳簿	半紙罫百五拾枚綴	壱冊		參拾錢
仝断	美濃五拾枚綴	參冊	貳拾五錢	七拾五錢
仝断	仝壱百枚綴	貳冊	四拾錢	八拾錢
半切紙	事務所用	四本	四拾八錢	四拾八錢
半紙罫紙	仝断	五百枚	拾八錢	九拾錢
半紙半罫	仝断	貳百枚	拾錢	貳拾錢
半紙	仝断	五束	參拾壱錢四厘	壱圓五拾七錢
美濃紙	仝断	貳百枚	參拾五錢	七拾錢
大肰袋	仝断	百枚	參拾錢	參拾錢
仝嵐	仝断	百枚		六錢
仝小肰袋	仝断	百枚		拾五錢
電池	仝断	壱個		貳拾五錢
摘枚	仝断	壱本	五錢	五錢
茶呑茶碗	仝断	五個	貳錢四厘	拾貳錢

通信費

一金七圓六拾五錢

内譯

名稱	摘要	員數	單價	小計
切手	通信用	貳百參拾枚	參錢	六圓九拾錢
葉書	仝断	五拾枚	貳錢五厘	七拾五錢

旅費ノ部

一金七拾六圓四拾九錢

内譯

名稱	摘要	回數	金額
工事主任	赴任		七圓六拾錢
仝断	木材賣入高野口出張		六圓貳拾九錢
仝断	木材賣入大坂出張汽車賃八拾哩貳圓四拾錢車馬賃拾二里貳圓拾六錢日當四日分四圓四拾錢宿泊參泊分四圓五拾錢		拾參圓六錢
仝断	仝件眞和歌山出張車馬賃拾貳里貳圓拾六錢日當貳日分壱圓四拾錢宿泊壱圓貳拾錢	壱回	四圓七拾六錢
仝断	仝断仝所出張車馬賃宿泊日當共仝断	壱回	四圓七拾六錢
仝断	仝断仝所出張車馬賃拾貳里貳圓拾六錢日當三日分貳圓拾錢宿泊貳分貳圓四拾錢	壱回	六圓六拾六錢
仝断	仝断仝所出張車馬賃拾貳里貳圓拾六錢日當二日分壱圓四拾錢宿泊壱壱圓貳拾錢	壱回	四圓七拾六錢
仝断	仝断仝所出張車馬賃拾貳里貳圓拾六錢日當一日分七拾錢	拾回	貳拾八圓六拾錢

第三節　多宝塔・鎮守堂　昭和修理精算書

長保寺　特別保護建造物　多宝塔並鎮守堂修理工事精算書

長保寺多寶塔及鎮守堂修理工事費收支一覧表

収入之部

金壹萬九千五百七拾參圓四錢也

總收入高

内

金九千五百貳拾貳圓也　國庫補助金

金九千五百圓也　寺院負擔金

金五百參拾貳圓九錢也　銀行預金利子

金拾八圓九拾五錢也　雜收入

支出之部

金壹萬七千五百九拾九圓四拾五錢也　總支出高

内

金八千八百貳拾參圓拾八錢也　多寶塔精算高

内

金貳八百貳拾貳圓四拾八錢也　木材費

金參百八拾五圓六錢也　金物費

金四拾五圓參拾九錢也　塗工費

金五百七拾九圓四拾四錢也　葺工費

金貳百七拾八圓貳拾貳錢也　雜費

金壹千五百參拾五圓六拾錢也　損料費

金參千百七拾六圓九拾九錢也　工料費

金壹千貳百參拾八圓參拾七錢也　鎮守堂精算高

内

金參百圓五拾五錢也　木材費

金貳百參拾圓參拾參錢也　葺工費

金七拾八圓四拾九錢也　雜費

金七拾圓也　損料費

金五百五拾九圓也　工料費

金七千八拾參圓九錢也　監督費精算高

内

金七千八拾參圓九錢也　監督費

金四百拾四圓八拾壹錢也　木柵精算高

内

金貳百八拾六圓八拾壹錢也　木材費

金拾八圓也　雜費

金壹百拾圓也　工科費

金壹千九百七拾參圓五拾九錢也　收支差引剩餘金

特別保護建造物長保寺多寶塔修理工事實施仕様書

一、多寶塔　壹棟

寸尺

方拾五尺貳寸九分

初層軒高拾壹尺壹寸壹分

重層軒高貳拾參尺壹寸五分

棟高礎石上端ヨリ露盤下迄貳拾九尺七寸壹分

寶珠頂上迄四拾四尺〇九分

構造裝飾

方參間孑寶塔屋根本瓦葺重層軒二重繁棰斗栱和様四手先尾棰付

詰組支輪軒格天井臺輪附圓形上長押総圓柱各間嵌板周圍廻椽勾

欄腰組三ツ斗初層軒二重繁棰斗栱和様三ツ斗出組支輪附斗栱間

蟇股頭貫上下長押各脇之間腰長押総圓柱四方廻椽正面石階三級

各面中央板唐戸両脇間腰長押下嵌板内長押上連子窓内部折上小

組格天井床拭敷四天柱内後部ニ須彌壇ヲ設ク

外部總丹塗内部素木造
相輪鐵製

實施方針

一、原設計修理方針ニ基キ左ノ通リ實施シタリ

一、工事着手ト同時ニ必要ナル假建物ヲ建設シツ、建物ノ實測調査ヲ了シ詳細ナル圖面ヲ調製シタリ

一、實測調査終了ト同時ニ相輪及屋根瓦ヲ取卸シ木部ハ重層屋根野地ヨリ一々番號ヲ記シ順次取解ノ上再用ト新補ノ區分整理ヲナシ全部解体保存小屋ニ積置タリ

一、右材ハ耐久力ニ支障ナキ限リ継木埋木矧木等ノ工ヲ施シ可成的之シカ保存ニ努メタリ

一、取替材ハ在来ノ寸法形状等ヲ精密ニ調査ノ上其洋式ヲ嚴重ニ踏襲シ舊形ヲ維持シタレモ小屋組材ノ如キ外観ニ觸レサルモノニシテ構造ノ方法不合理ノ為メ欽陷ヲ生セサル箇所ニ於テハ補強材ヲ加ヘ耐久ノ方法ヲ講シタリ

一、取替材ハ凡テ見ヘ隠レニ於テ修補年ヲ烙記シ見ヘ掛リハ適當ノ古色塗ヲ施シタリ

一、相輪腐朽再用ニ堪ヘサルモノハ舊形ニ倣ヒ補鋳シタリ

一、修理前後ノ寫真ヲ撮影シタリ

左仕様

假建物ノ部

一、簀屋根ハ方六間半寳形造屋根亞鉛引波形鐵板葺軒下周圍葭簾圍ヒ軒高参拾尺軒出四尺上下足場登リ桟橋付トシタリ

一、材料ハ杉檜丸太米松北海松等ヲ使用シタリ

一、總テ亞鉛引鐵線拾七八番線ヲ使用シ要所ハ拾貳筋掛以上其他拾筋掛トシタリ

一、側柱真々六尺四寸両端三尺五寸ニ割合セ入側柱仝様根入貳尺五寸掘建テ軒桁當リ八寸内轉ヒニ通リ能ク建揃ヘ布丸太地上六尺高ヨリ軒桁迄三尺ニ割合セ火打布及根太受布丸太筋違四方ニ線搦ミ控柱四十五度ノ角度ニ各柱毎根入三尺以上地下ニテ根搦杭打チ堅ク線結ヒトシタリ

一、小屋組ハ西洋式合掌組陸梁井筒ニ組合セ隅陸梁及火打梁投掛梁共ボールト鎹締組堅メ合掌上部四角枠角材ヲ以テ作リ束建テ合掌枘差シ鼻栓打チ大鎹止メ尻手鼻桁受トシ側柱ニ堅ク結付ケ方杖狭束等釘止メ母屋桁丸太三尺内部ニ線結ヒ屋根波形鐵板軒出四尺トシ葺足重ネ横ハ溝貳筋重ネ押縁巾二寸厚五分ヲ以テ釘打止メトシタリ

相輪足代取設ケ相輪取卸シノ上棟包ヲ完全ニ前同様ニ為シタリ

軒下周圍ハ葭簾圍ヒ布丸太毎押縁巾二寸厚四分ヲ以テ釘打止メトシタリ

一、軒足代ハ上下層貳重ニシテ根太受丸太ヲ入側柱通リ及内部一通リ井筒組トシ内部ハ假建柱ヲ設ケ根太貳尺五寸以内ニ配シ線搦ミ歩敷板長貳間巾七寸厚正八分上下層各七板並ヘ敷詰メトシタリ

一、登リ桟橋上下貳ヶ所巾三尺五寸登リ木両側ニ取付ケ根太前同様取付ケ敷板四枚並ヘ釘打止メ辷リ止メ長三尺巾二寸厚八分ヲ一尺二寸明キ釘打止メトシタリ

一、暴風豫防ノ為メ四隅ニハ径四分ノワイヤ平ハ八番ノ亞鉛引鐵線六筋トシ三尺毎十七八番線ニテ線結付ケ陸梁ニ添ハシテ反對側ヘ引通リ陸梁鼻及軒桁ニ巻付ケ四拾五度ノ角度ニ地下三尺以上掘下ゲ根搦杭打チ線巻付タンバックボールト締メトシタリ

一、工作小屋桁行八間梁間三間軒高八尺屋根切妻造亞鉛引波形鐵板葺總テ杉丸太ヲ使用シタリ

一、桁行柱真々八尺梁間四尺五寸ニ割合セ根入一尺五寸掘建ヲ垂直ニ建揃ヘ前面開放三方布丸太三通リ軒桁丸太四方線結ヒ小屋合掌組控柱毎上部合掌迄廻ハシ線結ヒ柱ニ堅ク締付ケ母屋丸太三尺間ニ配シ線結ヒ屋根亞鉛引波形鐵板葺押縁打トシ棟ハ板包ミ釘打チト為シ三方新厚造圍ヒトシタリ

一、材料置小屋桁行五間梁二間材料右同様トシタリ

桁行柱真々六尺梁間三尺ニ割合セ前記工作小屋同様建設シタリ

内部三方巾三尺ノ棚貳段取設ケ板敷詰メトシタリ

一、職工人夫休憩所方一間半材料右同様トシタリ

柱掘建テトシ入口一ヶ所取設ケ板戸釣リ其他地上五尺五寸通リ荒壁塗リトシタリ

一、便所ハ寺院既設ノモノヲ使用シ小便所壷陶器製口径貳尺ノモノヲ伏込ミタリ

一、竹矢来延長七拾間柱杉丸太真々七尺以内ニ高六尺五寸根入一尺五寸ニ掘建テ控柱貳本置ニ根生ケ込ミ上部柱ヘ線結ヒ布丸太三通リ線結ヒ竹ハ目通リ直径一寸内外ノ丸竹ヲ以テ五六寸明菱組貳拾番線結ヒ高サ六尺ニ切揃ヘトシタリ

一、門ハ工場出入口ハ柱真々九尺五寸事務所入口ハ四尺トシタリ

工場出入口門柱三寸五分押角ヲ根入貳尺ニ掘建テ楣両端柱ニ枘差シ鼻栓打トシ控柱丸太ヲ内部ニ傾斜ニ根入ニ大釘打止トシ扉両開キ軸廻シ門締メ鍵付トシタリ

事務所出入口門右ニ準シ片開キ軸廻シ締リ鍵付トシタリ

右假建物出来上リタル後周圍排水溝ヲ堀リタリ

一、監督詰所ハ寺院ノ既設建物ヲ借入レ使用シタリ

右ノ建設シタル假建物ハ全部損料トシテ請負ハシメ工事竣成ト同時ニ取拂ノ上跡片付掃除共為サシメタリ

基礎工事ノ部

一、確實ナル水盛遺形ヲ取設ケ柱礎石高低一々調査シタルニ沈下ノ箇所六ヵ所アリタルヲ以テ礎石番號ヲ記シ一旦掘起シ貳尺五寸方深サ貳尺ノ壹堀ヲ為シテ割栗石及目潰シ砂利共數回ニ大胴搗ヲ以テ充分搗固メコンクリートセメント一、砂三、砂利六ノ調合ニテ貳尺五寸方厚一尺ニ打立テ礎石泥氣ナキ様水洗ヒノ上コンクリート及セメントモルタルヲ以テ根巻ヲ施シ水盛遺形ニ依リ水糸引通シ水平ニ据付ヲナシ周圍土埋戻シ小棒搗均シタリ

一、椽束石下一尺五寸深サ一尺五寸ノ壹堀ヲ為シ礫石一尺五寸厚七寸ニ搗固メコンクリート調合前同様打立テ束石作リヲ為シセメントモルタルヲ以テ水平ニ据付ヲナシタリ

一、雨落葛石下巾一尺深一尺四寸ノ布堀ヲナシ礫石及目潰砂利共深六寸ニ搗固メコンクリート堰板取設ケ調合前同様巾八寸厚六寸ニ打立テ葛石ハ全部新補上鑿切仕上ケセメントモルタルヲ以テ据付ヲナシタリ内外ノ土ヲ埋戻シ小棒搗均シタリ

一、正面石階段下巾一尺五寸深一尺三寸ノ布堀ヲナシ礫石及目潰砂利共巾一尺五寸厚六寸ニ搗固メコンクリート調合前同様巾一尺貳寸厚六寸ニ打立テ段石根巻及裏込ハセメントモルタルヲ以テ元ノ通リ据付ヲナシタリ

一、床下及雨落葛石内軒下全体土掘起シ地底充分搗均シ砂利敷均シコンクリート調合前同様防湿剤マノール混入厚四寸ニ打立テ天端ヘ充分叩キ均シ上塗厚五分通リセメントモルタル一、二ノ配合ヲ以テ塗上ケタリ

木工事及彫刻ノ部

一、檜材ハ高野産ノ丸太乾燥シタルモノヲ購入シテ現場ニテ挽立テ使用シタリ

一、楠材ハ地山産丸太ヲ購入シテ前同様現場ニテ挽立テタリ

一、欅及杉等ハ挽立材ヲ購入使用シタリ

一、軒廻リ隅木木負茅負裏甲化粧棰及各組物大斗肘木巻斗方斗等ノ曲線モノハ凡テ在来寸法形式ヲ嚴密ニ調査ノ上完全ナル型板ヲ作成シ一々型板ニ倣ヒ工作シタリ

一、初層圓柱拾六本ノ内壹本新材ヲ以テ取替ヘタリ圓材ヨリ八角形ニ挽立テ在来ノ寸法ニ倣ヒ足型貫及腰貫内法貫頭貫羽目板小穴等墨掛ケノ上穴彫リ小穴決リヲナシ脊割リヲ施シ十六角三十二角ト順次圓形ニ作リ上鉋削リ仕上ケヲナシタリ

床足堅迄腐朽蟲蝕セルモノ六本ハ床上ニテ貳尺ノ金輪継ト為シ足型貫穴彫リ羽目板小穴突キ前同様圓形ニ仕上ケタリ柱根石口ノ腐朽セルモノ五本ハ大鎌継見返シ面ヨリ流シ込ミ楔ノ栓打堅メ圓径ニ仕上ヲ矧木埋木等施シ水盛遺形ニ倣ヒ水糸引通シ壹本毎根石口仕合シ足堅貫腐朽再用ニ堪エサルモノ新補在来ノ寸法通リ木作リ腰板五ヵ所破損甚シキ為メ新補傍合決リ合釘入レ上鉋削上ケ四天柱押ヘ木全部蟲蝕腐朽セルヲ以テ新補隅合欠キ柱枘穴彫リ荒鉋仕上ケトシ四天柱ヨリ側柱ト順次建方ヲナシ各貫及羽目板小壁板等悉ク小穴入レ貫ハ差通シ内部内法長押在来ノマヽ同時ニ組堅メ頭貫破損部分矧木ヲ施シ元ノ通リ組合セ四隅目違破損セルヲ以テ内部天端見ヘ隠レニ於テ火打鐵金具ヲ逆目釘打チトシテ開カサル様ニ補加シ柱壹本毎立水ニ確定ナシ四方假筋違ヒ釘止メヲナシ各貫楔新材ヲ以テ作リ堅固ニ打立テタリ

一、初層側通リ及四天柱上組物小部分再用ニ堪サルモノ新補型板ニ倣ヒ精密ニ仕拵ヘ頭貫上ニ太枘植立テ大斗納メ枠肘木及隅肘木組合セ肘木上ニ三ヶ所太枘植立テ巻斗方斗秤肘木繋肘木等組合セ綿板在来ノマヽ同時ニ組込ミ實肘木上端ニ三ヵ所太枘植立テ丸桁在来ノ儘継手破損セサル様四方共組立テナシ支輪及同裏板破損シタルモノ型板ニ倣ヒ新補在来ノ通リ釘打止メ取付タリ

四天柱押ヘ木隅上端ニ太枘植立テ大斗納メ枠肘木組合セ巻斗方斗太枘止メ地棰受木在来ノ儘組堅メ側柱真通リ繋肘木上ニ束枘建立テトシテ地棰受木ヲ新補シタリ初曽地隅木ハ在来ノ儘飛檐隅木ハ貳丁新補丸桁及地棰受木ニ落掛リ各實ニ納メ目地隅木尻手水平ニ作リタル上ヘ上層柱受盤ヲ新補材隅合欠キ太枘止メ貳重受盤在来ノ儘　太枘止メ仝時ニ組堅メ心棒受木在来ノ儘両端柱受盤ヨリボールト締トナシ真柱上部ヘ腐朽ノ為メ参間材ヲ以テ新補継手襟輪付唄ノ口継ト為シ胴鐵輪参ヵ所及短冊金物四方ニ凡テ逆目釘トナシ根枘受木ニ仕合セ建方ナシ上部ニテ假留方ヲナシ置キタリ

一、上層柱ハ全部在来ノ儘再用シタリ腰貫ハ全部腐朽甚シキニヨリ新補ナシ組手合欠キ柱ト同時ニ組込ミ組手ハボールト締メ柱ヲ貫通シ腰組椽受兼用トシテ隅柱根ハ羽子板ボールトヲ以テ受盤ニ締堅メ其他ノ柱ハ根搦木新補シテ差堅メ圓臺輪破損ヶ所矧木ヲ施シ継手目違破損ノヶ所ボールト締トシ在来ノ通リ柱半分臺輪上ハ迄抜キ通シ組堅メ圓長押在来ノ儘継手破損ヶ所ボールト締メ柱ニ礎輪欠キ大釘止メ取付ケ臺輪長押間嵌板木在来ノ儘同時ニ組込ミトシタリ

一、上層組物ハ隅下リノ為メ狂ヒ甚シク通リ肘木隅肘木ノ折損再用ニ堪エサルモノ及大斗巻斗ノ腐朽セルモノハ在来ノ通リ新補シタリ凡テ太枘止メ通リ肘木ハ内部ニテ組手合欠キトナシ何レモ元ノ通リ順次組立テタリ尾棰受四天束新補通リ肘木上ニ束建テトシテ枠新補隅合欠キ落掛仕拵ヘ枘堅メトナシ尾棰ハ耐久力ナキモノ及腐朽セルモノ新補型板ニ倣ヒ木拵ヘ尻手枠ニボールト締メ丸桁ハ在来ノ儘隅下リノ為弓形ニ狂ヒタルヲ以テ中央貳本ノ尾棰下ハ穴ヲ彫リ丸桁天邊迄ボールト締メ尾棰下ハ穴埋木ヲ施シ水平ニ直シ隅々内部ニ於テ丸桁桔木杓子枘入レトシタリ支輪及同裏板破損ノモノハ繕ヒ及新補トモナシ型板ニ倣ヒ木作リ釘止メ取付ケ軒天井ハ在来ノマヽ元

ノ通リ釘打取付ケ同天井板新補釘打張立テタリ
一、初層小屋組全体ニ亘リ腐朽甚シク拮木枕及拮木ノ完全ナルモノ小部分再用シタルモ其他ハ新補シタリ側通リ丸桁真ニ拮木枕ヲ継手大鎌継トナシ隅ハ化粧隅木面ヲニテ胴突キ燧ボールト締下端大太枘止ニ置渡シ拮木尻枕隅燧ボールト締メ隅拮木下端勾配痒取リ化粧飛檐隅木上端ヨリ棰ノ寄蟻獨古引キ込栓打チ尻手地隅木下端ヨリボールト打抜キ締堅メ手拮木ハ枕ニ丸身仕合シ太枘止メ軒先勾配痒付茅負内部ニ杓子枘差シ大鎹両面打チ尻手拮木尻枕下端ヨリボールト締メ拮木振在来通リトシタリ拮木上端小屋束當リ釿斫リノ上小屋束足元平枘上部同断母屋桁天邊迄枘打抜キトナシ母屋桁ハ隅反リ付上端小返リ付ケ継手敷面鎌継トシ束枘差堅メ野隅木反リ付上端両小返リ付ケ隅拮木上ニ束建テニ取付ケ上部上層柱ニ大入レ釘打チ野地板在来ノ通リ堅張リ釘打チ張リ立テ出来セリ
一、上層小屋組腐朽甚シキ為メ野地板ノ少部分ヲ除ク外全部新補材ヲ以テ構架シタリ
尾棰枕及丸桁捶枕兼用ニ圓肘木上ニ置渡シ丸桁拮木ハ丸桁各隅組手ヨリ壹尺寸内外ヲ離シテ各内面ヘ杓木枘入レトシタリ丸桁真化粧隅木上端ヘ拮木枕及拮木尻枕ヲ置渡シ拮木枕拮木ヲ四方ニ構架シボールト釣リトナシ拮木振レハ在来通リトシ軒先下端勾配痒取リ枕ニ丸身仕合シ太枘止メ茅負内面ニ杓子枘入レ大鎹両面打チ尻手一本毎枕ヨリボールト締付隅拮木飛檐隅木上端ヨリ寄蟻獨古引鼻栓打尻手前同様ボールト締トシタリ
拮木上端小屋束當リ釿斫リノ上小屋束足元寄蟻上部枘母屋桁上端迄廻ハシ割楔打チ母屋桁上端小返リ付ケ継手敷面鎌継隅反リ付野隅木面テニ大入レ釘止メ鼻母屋桁隅反リ付各拮木面テヘ大入レ釘打チ野隅木反リ付上端両小返リ付隅拮木上ニ束建テト為シ上部露盤受ノ四天束ニ蔭入枘差鼻栓打チ露盤受四天束ハ隅拮木尻水平ニ削リ取リ平枘付建テ枠隅合欠キ組堅メ板受木四方ニ釘止メ野地板堅張リ釘打張リ立テ出来セリ
一、上下層軒廻リ、初層軒先ハ最モ腐朽破損甚シク四隅及中央四方共支柱ヲ以テ漸ク墜落ヲ防キタルモノニシテ新補材モ従ツテ比較的夛量ヲ要シタリ
一、地捶ハ全部ニ對スル一割五分新補飛檐棰ハ五割地棰化粧裏板ハ七割飛檐棰化粧裏板ハ九割木負茅負裏甲瓦座ハ全部新補シタリ
一、上層軒廻リ地棰飛檐棰各壹割新補地棰化粧裏板六割飛檐棰化粧裏板八割木負ハ裏甲瓦座ハ全部茅負ハ五割化粧地隅木壹丁飛檐隅木四丁共新補シタリ
一、上下層化粧隅木型板ニ倣ヒ木拵ヘ流シ勾配正確ニ納メ地棰再用ノモノハ矧木ヲ施シ新補材ハ型板ニ倣ヒ木拵ヘ捶割正確ニ丸桁及棰受上ニ大釘打チ棰間面戸板新古材取交ゼ嵌込ミ木負反リ型板ニ倣ヒ木拵ヘ足駄欠キ裏板決リヲナシ継手棰真ニテ小蟻継地捶毎釘打止メ隅木両面曲手追入レ忍ヒ釘打チ茅負反リ増シ等型板ニ倣ヒ木拵ヘ眉欠き裏板刃決リ棰釘穴彫リナシ継手見付鵙継上端箱鯱栓凿メ隅貳枚枘ニ組堅メ上端ヨリ込栓打チ上層茅負在来ノモノ継手破損ノヶ所ボールト両捻トナシ締付ケ内面及決リ腐朽ノヶ所矧木ヲ施シタリ
飛檐棰反リ付型板ニ倣ヒ木拵ヘ再用腐朽ノモ矧木ヲ施シ木負足駄欠ニ仕込ミ大釘打チ茅負上端棰釘穴彫リノケ所ヨリ釘打止メ各化粧裏板上鉋削リ仕上ケ木負茅負ノ刃決リ合シ棰ニ釘打張リ立テタリ
裏甲反リ型板ニ倣ヒ木拵ヘ継手及隅共目違入茅負上端ヘ馴染能ク大釘打チ内面茅負ト鎹引キトナシ瓦座ハ反リ型板ニ倣ヒ木拵ヘ隅留メ大釘打瓦繰リ共ナシ取付タリ
一、上層腰組ハ半分新補シタリ圓形作リ肘木及巻斗作リ出シ継手目違ヒ入リ忍ヒ釘打チ椽桁前同様圓形作リ継手目違入リ柱貫蟻枘差シ忍ヒ釘打チ椽耳板半分新補圓形作リ継手目違入リ椽桁ニ釘打チ椽板在来マヽ釘打張リ立テタリ
一、勾欄地覆平桁斗束間束ハ在来ノマヽ圓形ニ組立テ架木破損セルモノ取替ヘ在来ノ通リ取付ケタリ
一、龜腹受束新補上層柱毎腰貫ニ釘打取付ケ根元母屋桁ヘ取付ケ胴縁二タ通リ束ヲ欠キ込釘打チ龜腹板番號通リ釘打チ取付タリ
一、床大引腐朽材新補元ノ通リ配置シ大釘打チ床板小部分新補傍削直シ四天柱丸身仕合シ合釘入レ目鎹引忍釘打トシテ上端目違ナリ張リ立テタリ
一、須彌壇後面物入敷鴨居共磨滅甚シキ為メ新補ナシ一筋溝突キ忍釘打チ板戸在来ノマヽ片引ニ嵌込ミ樞落シ須彌壇後背柱内面ニ堅框在来ノ儘隠釘打取付ケ羽目板四方小穴嵌メトナシ須彌壇先ノ通リ置据ヘ後面内部ヨリ柱ニ忍釘打取付タリ
一、初層椽板受木新補側柱ニ欠キ込ミ大釘打チ椽束貳丁椽葛壹丁新補椽葛ハ束ニ輪ナキ込隅々束ニ蔭入蟻落シ隅叉首四丁共新補隅束ニ蟻落シ尻手柱ニ鯖ノ尾仕込楔打隅椽板新補吸付獨古引忍釘打チ其他椽板腐朽セルモノ取替ヘ傍糸面取リ太枘入レ目鎹引キ忍釘打チ木口通リ能ク上端目違ナリ張リ立テ出来セリ
一、外部切目長押及腰長押破損甚シキモノ新補在来ノ寸法通リ木拵ヘ再用破損シタルモノ矧木ヲ施シ柱ニ襟輪隅留メ和釘打チ内法長押在来ノ儘少部分破損ヶ所矧木ヲナシ同様取付ケタリ
添長押腐朽破損甚シキモノ新補柱丸身仕合シ隅留和釘打チ入口蹴放四丁共新補両端柱ニ大入レ釘打方立壹ヶ所新補其他矧木ヲ施シ上下枘付戸當リ在来ノ儘方立ト共ニ建堅メ内部無目在来ノ儘床板上端ニ密着ヨリ和釘打取付タリ幣軸壹ヶ所破損甚シキ為メ新補在来寸法ニ倣ヒ唐戸面取リ上部目違入隅留足

元添長押ニ大入レ内部幣軸在来ノ儘組堅メタリ
一、板唐戸三ヶ所破損甚シキ為メ在来ノ通リ新補シタリ貳枚矧キ壹ヶ所ハ壹枚板トナシ端喰入レ板枘差シ楔締メ定木縁吸付蟻獨古引トシ軸廻シ杓金物付両開キ締リ落シ樞金物付トシタリ
一、外部連子窓破損ノヶ所修補ノ上元ノ通リ嵌込裏面羽目板ヨリ隠釘打取付タリ
一、内部四天柱内法無目及長押共在来ノ儘元ノ通取付タリ天井ハ折上ノ小組及天井板破損ヶ所取替ヘ其他在来ノ儘組堅メ内部ヨリ釘打止メトシタリ
一、外部蟇股拾貳個ノ内六個破損セルヲ以テ完全ナルモノヲ手本トナシ専門彫刻家ニヨリテ修補為シ元ノ位置ヘ取付ケタリ
一、正面蔀格子在来ノモノ破損甚シキニヨリ寸法形状元ノ通リニ新補嵌込ミタリ

屋根土居葺及瓦製作葺方ノ部

一、上下層屋根土居葺ノ従来杉枌板葺ナルヲ以テ之カ修理ニ際シ新杉枌材ノ極乾燥シタルモノヲ撰定シ長九寸厚サ壹寸拾六枚割枌板ヲ以テ葺足壹寸五分ニ貳足毎竹釘二タ通リ六七分明キニ打締メ土留木杉材巾一寸七分厚六分登一尺毎釘打トシタリ
一、従来使用ノ瓦ハ其文様寸法一様ナラサルニヨリ一一調査ノ上破損再用ニ堪エサルモノハ最古ノモノニ倣ヒテ補足シ上層ニハ小型下層ニハ大型ノモノヲ用ヒタリ総シテ之等原型ハ何レモ専門彫刻家ニヨリ作製シタリ
一、瓦製作ニ要スル土質ハ善良ナルモノヲ撰定シ小石及塵等ヲ除キ「コカシ」土仕立テトシ充分足練リヲナシ型ニ依リ製作ノ上乾燥ヲ待テ入窯ナシ拾貳時間以上焼立テ後四五日間ヲ経テ取出シ善悪撰別ヲナシ完全ナル充分焼上リタルモノヲ使用シタリ
一、瓦葺ニ要スル込土ハ在来ノ古土ヲ一定ノ場所ニ置キ建物取解終了ト同時ニ新篩土ヲ加ヘ葺苫混入水ヲ以テ練リ置キ常ニ水ヲ溜メ随時練返シ瓦葺立テノ際追苫混入石灰練リ合セ使用シタリ
一、在来古瓦ハ使用ノ際水洗ヒヲナシ撰別使用シタリ
一、軒先唐草瓦ハ敷平入レ尻手銅線繋キ平瓦貳枚半掛ケ登リ五枚目毎尻手銅線ヲ以テ繋キ付ケ軒先巴瓦尻手銅線繋キ瓦鉄釘打トシ丸瓦登リ三本目毎尻手銅線繋トシタリ
一、隅鬼瓦拾番太銅線繋キ面戸瓦入レ肌熨斗一返捨熨斗入レ割熨斗貳返丸瓦伏セ隅反リ恰好良ク積立テタリ
一、龜腹下面戸瓦入レ熨斗ニ返積棟ノ露盤下同様熨斗三返積銅線繋キ何レモ込土充分使用葺上ケ跡掃除共為シタリ

龜腹漆喰塗工事ノ部

一、下地塗漆喰ハ苧苫壹貫匁布海草参百匁土佐石灰壹俵（六貫匁入）砂四舛ノ混合ヲ以テ塗立テ麻苧髪子長七八寸ヲ三寸乃至四寸明キ千鳥ニ打立テ塗込ミタリ
一、村直シ中塗喰ハ苧苫六百匁布海草貳百匁土佐石灰壹俵半砂三舛錦灰参俵（壹俵壹貫五百匁入）檫梠参百匁ノ割合ヲ以テ塗立テタリ
一、上塗ハ苧苫五百匁布海草貳百匁紙苫壹百五拾匁土佐石灰壹俵錦灰貳俵ノ混合ヲ以テ斑ナク磨上ケ出来シタリ

金物ノ部

一、相輪腐朽破損再用ニ堪サルモノ原形寸法ヲ厳襲シ鋳補シタリ八葉請花ノ花辨壹個破損シタルモノ酸素瓦斯ヲ以テ密着ナラシメ何レモ元ノ通リ組立テ出来セリ
一、板唐戸落樞ハ在来寸法形状ニ倣ヒ補足ナシ古色仕上ケトシ取付ケタリ
一、小屋組用鐵金物ハ製作ノ際錆止メヲ施シタリ

雑ノ部

一、新補材ハ随所適當ノ古色塗リヲ施シタリ
一、新補材ハ見ヘ隠レニ於テ昭和三年新補ノ焼印ヲ捺シタリ
一、腐朽蟲蝕ノ為メ取替ヘタル古殘材及古金物及古瓦等ハ鎮守堂ノ之レ等ト共ニ當寺ヘ無償交付ヲ受ケタリ
一、新殘材ノ木皮及監督事務所ノ備品ハ當寺ヘ買受ケ備品中破損使用ニ堪エサルモノハ廃棄處分シタリ
一、工事竣成ト同時ニ工場内跡片付地盤排水能ク地均シ掃除等為シタリ
一、以上記シタル仕様ニヨリ實施ヲナシ完全ニ修理ヲナシタリ
一、木工事ハ昭和三年一月十一日着手同年十二月十日竣工セリ

特別保護建造物長保寺鎮守堂修理工事実施仕様書

一、鎮守堂　　壱棟

寸尺

桁行柱真々	四尺四寸五分
梁間仝	四尺
向拝柱真々	四尺
軒高礎石上端ヨリ丸桁外角迄	七尺五寸二分五厘
棟高礎石上端ヨリ棟瓦頂上迄	拾貳尺貳寸五厘

構造装飾

一間社流造屋根桧皮葺棟瓦熨斗積軒二重繁棰斗栱和様三ッ斗正面及内陣斗栱間蟇股後面箕束妻虹梁大瓶束笈形付総円柱向拝方柱繁虹梁斗栱和様平三ッ斗斗栱間蟇股正面蔀戸三方嵌板切目長押内法長押付三方廻リ縁袖障子勾欄付正面木階五級登リ勾欄付内陣板戸幣軸付妻飾破風懸魚六葉付外部総円塗内部素木造

実施仕様

一、原設計及変更設計ノ方針ニ基キ前記夛寶塔仝様実施シタリ

仮建物ノ部

一、簀屋根ハ桁行拾六尺梁間貳拾尺軒高九尺二寸棟高拾五尺六寸切妻造リ屋根亜鉛引波形鉄板葺トシタリ

一、枚太丸ヲ用ヒ桁行柱真五尺三寸三分梁間四尺ニ根入一尺五寸以上垂直ニ掘建トナシ布丸太軒桁丸太貳タ通リ及筋違各面ニ線結ビトシ妻登ノ木取付棟木両端柱ニ線結ビ合掌貳タ通リ及母屋丸太三尺間ニ線結ビ扣柱側柱毎線結ビ付ケ屋根亜鉛引波形鉄板板葺押縁木釘打トシタリ

一、軒足代ハ根太受丸太ヲ架渡シ根太丸太貳尺間ニ配シ縄結ビ歩板巾三尺通リ敷詰メタリ

登リ桟橋巾三尺両側ニ登リ木線結ビ付ケ根太丸太貳尺明キニ線結ビ歩板敷詰メ釘止メ辷リ止メ一尺二寸明キ釘打チトシタリ

右仮建物ハ工事中損料請負トシテ架設セシメ工事竣成ト仝時ニ直ニ取払ヒ後片付トモナシタリ

基礎工事ノ部

一、在来ノ古石ハ軟質ノ為メ腐リ破レ損夛ク再用ニ堪ヘサルヲ以テ全部掘起シヲナシタリ

一、在来地盤均シタル上正確ナル水盛遺形ヲ取設ケ柱真其他ノ要点ヲ示シ柱通リ巾一尺深サ一尺三寸ノ布堀ヲナシ地底充分搗固メタル上礫石及目潰砂利ヲ巾一尺厚サ五寸ニ搗固メコンクリート榧板取設ケセメント一、砂三、砂利六ノ調合ヲ以テ巾八寸厚五寸ニ打立テ乾燥ヲ待テ布石巾七寸厚五寸ニ小叩仕上ゲセメントモルタルヲ以テ遺形水系ニ倣ヒ水平ニ据付ケ周囲土埋戻シ小棒搗均シタリ

一、椽束石下八寸方深サ八寸ノ壷堀ヲナシ礫石及目潰シ砂利八寸方厚サ四寸ニ搗固メコンクリート調合前仝様七寸方厚サ四寸ニ打立テ束石天端四寸五分方決リ付小叩仕上ゲセメントモルタルヲ以テ据付ケタリ

一、雨落葛石下巾一尺深サ一尺布堀リヲナシ地底充分搗固メ礫石及目潰砂利巾一尺厚サ四寸ニ充分搗固メコンクリート調合前仝様巾七寸厚サ四寸ニ打立テ葛石巾五寸厚サ五寸上鑿切仕上ゲ合端良クセメントモルタルヲ以テ水平ニ据付ケ周囲土埋戻シ小棒搗均シタリ

一、雨落葛石内及床下土掘起シ地底充分搗均シ小砂利敷詰メコンクリート調合前仝様マノール混入厚サ三寸ニ打立テ充分叩キ締メセメントモルタルセメント一、砂一・五ノ調合ニテマノール混入上塗リ厚サ五分通リ丁寧ニ塗上ゲタリ

木工事及彫刻ノ部

一、本建物ハ雨洩レ為メ小屋組軒廻リハ腐朽甚シキ状態ナリシモ化粧廻リハ比較的旧材ヲ保存セラレタリ

一、木材ハ凡テ夛寶塔ト仝用購入仕様シタリ

一、軒廻リ化粧棰及木負茅負裏甲破風組物ノ各部並ニ勾欄等ノ曲線モノハ凡テ型板ヲ作リ一々形板ニ倣ヒ工作シタリ

一、土台ハ腐朽甚シキ為新補後面隅ビンタ笹枘打抜キ楔打堅メ正面及中仕切土台ハ蔭入蟻落シ柱ノ平枘穴彫リノ上水平ニ据付ケヲナシタリ

一、木柱根枘腐朽セルモノハ雇枘トシ破損ノヶ所矧木ヲ施シ柱貫腐朽材取替ヘ柱ヲ貫通シ頭貫破損部分ヲ矧木ヲ施シ胴嵌板ハ後側一部分新補傍合決リ合釘入レ柱建舞ト仝時ニ組堅メ柱ヲ一本毎垂直ニナシ仮筋違止メトナシ貫楔締堅メ大斗肘木巻斗方斗ノ腐朽シタルモノ新補操形ノ曲線特ニ注意ヲ加ヘ工作ナシ何レモ大枘止メニ四方綿板在来ノ侭共ニ組堅メタリ

一、妻虹梁再用内部腐朽甚ダシキ所矧木ヲナシ丸桁腐朽甚シキモ絵様実肘木作リ出シノ構造ニシテ丸桁脊ノ三分一ハ完全ナルヲ以テ腐朽ヶ所取斫リ新材ヲ以テ矧木ヲ施シ両端反リ増シ付トナシ破風當リ蟻枘作リ出シ上端棰面戸小穴突キ妻虹梁下木丸桁ハ上木トシ隅笹組合セタリ大瓶束再用内部矧木ヲナシ鱗板壱ヶ所新補仝上組物在来ノ侭組立テ化粧棟木ハ丸桁仝様矧木ノ上両端反リ増シ元ノ通リ付ケ架渡シタリ

一、向拝柱根金輪継トシ根枘造リ出シ土台ニ垂直ニ建テ正面頭貫鼻彫刻一方取替ヘ柱ニ輪ナギ込渡リ枘鯱?栓打堅メ組物ハ前記本側仝様補足組堅メヲナシ繋虹梁再用腐朽ヶ所矧木ヲ施シ在来ノ通リ構架シタリ

向拝丸桁新補反リ増シ等本側仝様下バ角面取り繋虹梁下木丸桁上木ニ隅笹組堅メタリ

一、流レ破風板新補型板ニ倣ヒ仕拵ヘ上鉋削リ仕上トシ眉欠キ及木負茅負追入レ枘彫リ裏板決リ共ナシ拝ミ目違入リ立木正確ニ納メボールト締付ケ各丸桁ニ蟻落シ掛ケトナシ木負茅負新補反リ恰好型板ニ倣ヒ木拵ヘ木負ハ棰割正確ニ墨ヲナシ足駄欠キ及決リナシ茅負ハ眉欠キ及刃決リナシ上鉋仕上削ノ上両端流シ破風ニ追入レ忍ビ釘打チ地棰受木在来ノモノヲ繕ヒ両端大瓶束内部ヘ追入レ釘打チ地棰ハ六十四本ノ内参拾参本新補支外棰参拾貳本ノ内壱本新補裏側飛檐棰参拾貳本ノ内九本向拝打越棰参拾貳本ノ内拾七本仝飛檐棰参拾貳本全部新補シタリ

再用ノモノニシテ少部分腐朽セルモノハ矧木繕ヒヲナシタリ

新補棰ハ型板ニ倣ヒ木拵ヘ棰割正確ニ夫々釘打取付タリ

一、化粧裏板ハ支外棰裏板ノ一部分ヲ除ク外腐朽ノ為新補上鉋削リ仕上ゲ木負茅負破風ニ刃決リ仕合シ刃重ネ横張リ棰毎釘打張リ立テタリ

丸桁ヨリ内部内陣上ハ杉板ヲ以テ刃重ネ横張リニ野天井張リ

トシタリ
一、平及妻登リ裏甲全部新補型板ニ倣ヒ木作リ隅捻シ付笛目違入レトシ茅負上バニ釘止メ鎹引取付タリ
一、小屋組材ハ悉ク腐朽再用ニ堪ヘサルヲ以テ全部新補シタリ
一、各丸桁真化粧裏板上ニ土居桁置渡シ桔木軒先下バ勾配痒付ケ茅負杓子枘入レ土居桁ニ丸身仕合シ隅振レトナシ尻手棟木下ニテ堅固ニ笛方ナシ野棟木ハ上端両反リ付両小反リ付化粧棟木上端ヨリ束建テ組堅メ小屋束足元桔木ニ寄蟻上部手枘母屋桁上端両端反リ付及小反リ付束枘仕合シ割楔打堅メ野棰七寸内外ニ割合セ母屋桁毎大釘打野木舞小間返シニ釘打トシタリ
箕ノ甲野地甲棰上端丸身付ケ母屋桁毎及中間ニ壱本取付ケ野地板巾八分ニ挽割リ甲棰毎釘打チ出来セリ
一、床廻リ及内部長押蹴放立幣軸板唐戸廻リハ完全ニ付何レモ在来ノ通リ組立テ出来セリ
一、天井板ハ腐朽甚シキニ依リ新補上鉋削仕上ゲ刃重張リ巾揃ヘニ釘打チ張立テタリ
一、腰羽目板腐朽破損ノモノ新補傍合釘入レ堅張リ上下貫ニ釘打チトシタリ
一、椽束壱丁新補其他全部根本金輪継トナシ貫全部新補差通シ楔打堅メ椽葛在来ノマヽ輪ナキ込袖柱ニ大入忍釘チ隅指貳丁ノ打壱丁取替ヘ隅束ニ蟻落シ尻手柱ニ枘差シ釘打チ椽板受腐朽取替ヘ柱ニ大釘打チ小根太補足椽葛ニ進入シ釘打チ椽板全部新補隅目違入笛忍釘打チ目鎹引張立タリ
一、袖障子笠木及鏡板竹ノ節等在来ノ通リ組立テタリ
一、外部各長押在来ノ侭和釘打取付ケ添長押壱丁補足柱丸身仕合シ隅笛メ和釘打チ取付タリ
一、正面入口鴨居新補在来ノ通リ木拵ヘ柱丸身仕合シ胴突キ忍釘打チ欄間在来ノ侭嵌込ミタリ
一、登リ階段籔桁新補上部椽束ニ蟻落シ段刻ミナシ根元土台ニ枘入レ忍釘打チ木階破損甚シキモノ新補其他矧木ヲ施シ最下部ノ分ハ向拝柱ニ欠キ込ミ其他ハ籔桁ニ附蟻仕込ミトシタリ
一、椽勾欄ハ在来ノ地覆平桁ノ一部分ヲ小屋組中ヨリ発見シタルヲ以テ完全ナル部分ハ再用シ夫々継木ヲ施シ高サハ袖障子柱痕跡ニヨリ其他架木刎方及登リ勾欄ハ仝時代ノモノヲ調査研究ノ上新補シタリ
一、正面蔀格子破損甚シキニ依リ新補シタリ
一、蟇股ハ凡テ在来ノ侭取付ケタリ
一、懸魚及六葉ハ本建築ト仝時代ノ他ノ実例ヲ考証研究ノ上現寸図ヲ作リ再三訂正ノ上ソノ最モ調和宜シキモノニ従ヒ新規彫刻取付タリ
一、大瓶束両脇ノ笈形ハ壱個残存シタルモノニ依リ彫刻取付タリ

屋根桧皮葺及瓦棟積ノ部

一、屋根葺用桧皮ハ高野産上等皮ヲ用ヒタリ
一、軒付裏板ハ椹赤身柾乾燥材長七寸厚正六分隅増付巾貳寸以上傍竹合釘入レ裏甲外上角ヨリ出三寸トシ破風拝ミ及隅ノ出三寸二分乃至三寸三分トシ隅ハ恰好能ク捻付トシ尻手鉄釘打チ木口通リ能ク鉋削リヲナシテ軒付皮長七、八寸一ト手七八分合端能ク摺リ合シ竹釘長サ一寸五分ヲ以テ貳タ通リ五六分明キニ充分打締メ漸次積登リ三手毎ニ押縁打立テ隅々及破風上部共増付ケトナシ軒付厚ノ中間ニテ釣木貳尺間ニ小屋内ヨリ引付ケ釘打トナシ軒口通リ能ク切リ払イヲナシタリ
一、平葺皮ハ長貳尺五寸ヲ二ツ切トシ口巾四寸尾巾三寸ニ矧合セ葺足軒先貳分一通リ参分貳タ通リ四通リ目ヨリ四分足毎ニ竹釘長サ一寸二分ヲ以テ五六分明キ貳タ通リ充分打締メ押縁登リ一尺毎ニ釘打トシ箕甲道具皮ハ撥形ニ仕拵ヘ前仝様込皮入レ葺上ゲタリ
一、品軒ハ軒付仝様ニ積立テ上目皮貳枚重ネ両端押縁打チ拾七番銅線千鳥掛トシタリ
一、棟鬼瓦ハ夛寶塔ノ古鬼瓦ヲ参考トシテ製作シタリ
一、製作ハ凡テ夛寶塔仝様ニナシタリ
一、鬼瓦両端ニ築立テ拾番銅線引トナシ肌熨斗貳匹割熨斗三返トシ両反リ付二分透シ石灰ニ一、砂〇・四ニ交ゼ合シ込土トシテ使用ナシ鳥衾及衾瓦伏セ銅線繋ギ積立テタリ

雑ノ部

一、登リ勾欄親柱ノ疑宝珠ハ鉄製トナシ本建築ト仝時代ノ他ノ実例ヲ調査実測ノ上現寸図ヲ作リ古色仕上ゲニ調整シタリ
一、新補材ハ随所適当ノ古色塗ヲ施シタリ
一、新補材ハ見エ隠ニ於テ昭和三年修補ノ焼印ヲ捺シタリ
一、工事竣成ト仝時ニ周囲地均シ排水溝ヲ堀リ掃除トモナシタリ
一、以上記シタル使用ニヨリ実施ヲナシ完全ニ修理ヲナシタリ
一、本工事ハ昭和三年四月壱日着手仝年十二月十日竣工セリ

長保寺鎮守堂木柵建設実施仕様書

一、木柵　　壱ヶ所
延長八拾四尺　　高サ三尺五寸
一、木柵位置水盛遺形取設ケ根石ヲ集メ適當ニ堀リ石据付ヲナシ周囲土搗固メ均シタリ
一、用材ハ桧乾燥材小節モノヲ用イタリ
一、土台ハ三寸五分角上鉋仕上ゲ隅留合欠キ継手伏鎌継柱根枘穴堀リ水平ニ据付ケタリ
一、柱ハ三寸角仕上ゲ根平枘付三本置キ土台横面ヨリ込栓打チ上部頭巾切削リ貫穴三通リ彫リ貫キハ巾三寸厚八分仕上ゲ継

手柱真ニテ畧鎌継隅打抜キ柱ト仝時ニ建通シ込栓打チ正面中央両開キトシタリ

一、扣柱三寸角仕上ゲ上部駒頭貫締メ根ハ埋込ミトシタリ

一、木柵ノ内部ハ砂ヲ敷均シタリ

一、本工事ハ昭和三年十一月一日着手仝年仝月二十五日竣工セリ

修理工費及附帯工事費増減比較

費目	予算額	支出額	差引超過	差引残	備考
木材費	三、六八一 四六〇	二、八二三 四八〇		八五八 九八〇	木材ヲ安價ニ購入シ得タルニヨル
金物費	五六〇 〇〇〇	三八五 〇六〇		一七四 九四〇	相輪修補安價ナリシニヨル
塗工費	四一 四四〇	四五 三五〇	三 九五〇		亀腹漆喰塗最上ニナシタルニヨル
葺工費	三五六 〇〇〇	五七九 四四〇	二三三 四四〇		瓦補足多量ニ要シタルニヨル
雑費	五六 六〇〇	二七八 三三〇	三三一 六二〇		基礎工事ヲ施工シタルニヨル
損料費	一、七九二 五〇〇	一、五三五 六〇〇		二五六 九〇〇	指名競争入札ノ結果安價ニ請負シ者アリシニヨル
工料費	七、九四六 〇〇〇	三、一七六 九九〇		四、七六九 〇一〇	仝体ニ亘見込ダケ要セザリシニヨル
鎮守堂費	六、一六 〇〇〇	一、三三八 三七〇	六、三三 三七〇		設計変更ノ結果ハ基礎工事ヲ施シタルト損料増加ニヨル
附帯工事費		四一四 八一〇	四一四 八一〇		
監督費	三、九七二 〇〇〇	七、〇八三 〇九〇	三、一二一 〇九〇		旅費及寫真費幾ヶ慰労金慰労手当決算手帳寫料ノ増加ニヨル
計	一九、〇三三 〇〇〇	一七、五九九 四五〇	四、五九七 二八〇	六、〇五九 八三〇	差引残金四阡貳百七拾六圓貳拾八錢

金八阡八百弐拾参圓拾八錢也

彡寶塔総工費

内

金貳阡八百貳拾貳圓四拾八錢也　　木材費

内譯

名称	品目	長	寸法	員数	單價	小計
〃根継	桧	五尺三寸	七寸五ト八角	参丁	一五、〇六〇	四五、一八〇
初層円柱	桧	九尺五寸	七寸五ト八角	壱丁		二七、〇〇〇
〃飛檐棰	仝	五尺六寸	七寸五ト	参丁	一、六〇〇	三、一二〇
〃仝	仝	四尺	七四寸ヲ一寸七ト	仝	仝	四〇〇
〃仝	仝	六尺	仝	五丁	一、三四〇	六、七〇〇
〃仝	仝	七寸五尺	仝	参丁	一、六二〇	四、八六〇
〃地棰	仝	九尺五寸	三尺二寸切逃ヒ	二、二二〇	九 八五〇	一九、七〇〇
〃仝隅蓋	仝	三尺二寸切逃ヒ	中五寸二ト ヲ一寸七ト	壱丁		一 四二〇
〃支輪	仝	三尺五寸切逃	中五寸三ト ヲ一寸六ト	参丁	一 五〇〇	四 五〇〇
〃支輪板	仝	六尺二寸	中一尺 ヲ一寸八ト	拾貳丁	五 六四〇	六七 六八〇
〃飛檐隅木	仝	六尺五寸	中七寸五ト ヲ四寸	貳丁	九 八五〇	一九 七〇〇
〃仝	仝	七寸五尺	中五寸二ト ヲ一寸七ト	壱丁		一 四二〇
〃地棰	仝	九尺五寸	七三寸六ト ヲ二寸七ト	貳拾五丁	二 二二〇	五三 〇〇〇
〃仝	仝	七寸五尺	仝	参丁	一 六二〇	四 八六〇
〃飛檐棰	仝	五尺六寸	七四寸ヲ一寸七ト	百拾四丁	一 一三四〇	六 七〇〇
〃仝	仝	四尺	仝	五丁	一 九二〇	二一八 八八〇
〃仝	仝	貳尺五寸	仝	貳丁	一 八六〇	一 七一〇
〃仝	仝	四尺五寸	仝	参丁	一 七二〇	三八 三七〇
〃仝	仝	五尺	中一尺 ヲ一寸七ト	壱丁		一 四二〇
〃仝	仝	六尺五寸	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	一 五〇〇	四 五〇〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺 ヲ一寸五ト	壱丁		一 六七〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	一 五〇〇	四 五〇〇
〃仝	仝	五尺五寸	中一尺三寸五ト	壱丁		一 六七〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺五寸五ト	参丁	一 九〇〇	一 七四〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺三寸五ト	参丁	一 七〇〇	四 八六〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	一 七〇〇	四 八六〇
〃仝	仝	七寸五尺	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	一 七〇〇	四 八六〇
〃仝	仝	五尺二寸	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	一 七〇〇	四 八六〇
〃勾欄架木	桧	五尺二寸	中一尺二寸 ヲ一寸二ト	参丁	四 一〇〇	一三 三〇〇
〃縁耳枝	仝	仝	中一尺 ヲ一寸七ト	四丁	七 七八〇	三一 一二〇
〃柱受盤	桧	八尺七寸	七寸三ト角	三三 四〇〇	一五 八五〇	四七 五五〇
〃柱根搦木	補	五尺	中五寸五ト ヲ四寸	四丁	六 五七〇	二六 二八〇
〃柱腰貫	桧	九尺	中六寸 ヲ四寸	四丁	一〇 九二〇	四三 六八〇
〃仝	仝	四尺二寸	仝	四丁	五 〇五〇	二〇 二〇〇
〃中心柱継木	仝	二十尺	元口八寸五ト末口四寸	壱丁		三八 四一〇
〃一通持出肘木	補	四尺五寸	七三寸 ヲ二寸六ト	参丁	一 七七〇	五 三二〇
〃二通仝	仝	五尺五寸	仝	壱丁		二 一七〇
〃三通平持出肘木	桧	七尺五寸	仝曲付	壱丁		四 一五〇
〃三通配付持出肘木	補	六尺三寸	仝	六丁	二 四八〇	一四 八八〇
〃四通平持出肘木	桧	七尺二寸	仝曲付	壱丁		四 〇二〇
〃仝	仝	二尺	仝	五丁		三 四九〇
〃地棰裏板	仝	三尺	中四寸八ト ヲ四ト	百六拾七丁		六九〇
〃飛檐裏板	仝	二尺	中三寸八ト ヲ四ト	貳百五拾丁	一 一五五	三三〇
〃木負	仝	七尺五寸	中四寸 ヲ二寸八ト	八丁	七 三〇〇	五八 四〇〇
〃茅負	仝	七尺五寸	中三寸五ト ヲ三寸五ト	壱丁		一 四五〇
〃仝	仝	七尺五寸	仝	参丁	一〇 五五〇	三一 六五〇
〃仝	仝	七尺	仝	貳丁	七 四四〇	一四 八八〇
〃仝	仝	十一尺	中八寸 ヲ二寸	貳丁	六 八〇〇	一三 六〇〇
〃裏甲	仝	十八尺五寸	中八寸 ヲ二寸	壱丁		一四 九五〇
〃仝	仝	十七尺五寸	仝	壱丁		一四 一五〇
〃仝	仝	十七尺	仝	壱丁		一三 七四〇
〃仝	仝	十七尺五寸	仝	壱丁		一三 三五〇
〃仝	仝	十二尺	仝	貳丁	九 八八〇	一九 三六〇
〃裏甲	仝	十尺	仝	壱丁		八 九〇〇
〃瓦座	仝	十三尺	二寸角斜曳	八丁	一 三一〇	一〇 〇八〇
〃柱足堅貫	仝	十六尺五寸	七四寸 ヲ三寸二ト	四丁	一〇 六六〇	四二 六四〇
〃面戸板	仝	六尺	中一寸五ト ヲ七ト	四丁	五四〇	二 一六〇
〃天井板	仝	五尺五寸切逃	中八寸 ヲ正一ト	貳拾丁	四四〇	八 八〇〇
〃地棰受	杉	十四尺	四寸押角	六丁	二 〇〇〇	二 〇〇〇
〃桔木枕	仝	仝	中六寸 ヲ五寸	貳丁	四 〇五〇	八 一〇〇
〃仝	仝	十尺	仝	貳丁	三 〇四〇	六 〇八〇
〃野隅木	仝	十四尺	七四寸一寸五ト 反り付	四丁	一 七五〇	七 〇〇〇
〃鼻母屋	仝	仝	七四寸 ヲ三寸五ト 反り付	八丁	一 七五〇	一四 〇〇〇
〃母屋桁	仝	仝	四寸押角	拾六丁	二 〇〇〇	三三 〇〇〇
〃野地板	仝	仝	中五寸以上 ヲ正九ト	拾五丁	四 二五〇	六三 七五〇
〃土居葺押	仝	仝	中一寸七ト ヲ正六ト	五拾五丁	一 一五〇	八 二五〇
〃隅桔木	桧	仝	簓ス口寸	四丁	五 五〇〇	二三 〇〇〇
〃平桔木	仝	十三尺	仝	五丁	五 五〇〇	二七 五〇〇
〃仝	仝	十五尺	仝	参丁	四 五〇〇	一三 五〇〇
重層腰組肘木	補	五尺七寸	中一尺五寸五ト	参丁	一五 八五〇	四七 五五〇
〃椽桁	仝	仝	中一尺二寸七ト	四丁	七 七八〇	三一 一二〇
〃椽腰組受束	桧	五尺二寸	中一尺二寸 ヲ一寸三ト	参丁	四 一〇〇	一三 三〇〇
〃覆鉢受木	補	三尺七寸	四寸三ト三寸八ト	拾貳丁	二 五七〇	三〇 八四〇
〃柱受盤	桧	八尺七寸	七寸三ト角	四丁	三 四〇〇	九三 六〇〇
〃柱根搦木	補	五尺	中五寸五ト ヲ四寸	四丁	六 五七〇	二六 二八〇
〃柱腰貫	桧	九尺	中六寸 ヲ四寸	四丁	一〇 九二〇	四三 六八〇
〃仝	仝	四尺二寸	仝	四丁	五 〇五〇	二〇 二〇〇
〃中心柱継木	仝	二十尺	元口八寸五ト末口四寸	壱丁		三八 四一〇
〃一通持出肘木	補	四尺五寸	七三寸 ヲ二寸六ト	参丁	一 七七〇	五 三二〇
〃二通仝	仝	五尺五寸	仝	壱丁		二 一七〇
〃三通平持出肘木	桧	七尺五寸	仝曲付	壱丁		四 一五〇
〃三通配付持出肘木	補	六尺三寸	仝	六丁	二 四八〇	一四 八八〇
〃四通平持出肘木	桧	七尺二寸	仝曲付	壱丁		四 〇二〇

〃四通配付仝	楠	五尺八寸	仝	五尺八寸	仝	壱丁	五丁	二七〇
〃四通隅秤肘木	桧	三尺四寸	仝	五尺八寸	仝	壱丁	二七〇	一三五〇
〃五通配付持出肘木	楠	五尺八寸	仝	五尺八寸	仝	壱丁	五丁	一三五〇
〃仝天井受肘木	仝	三尺五寸	仝	三尺五寸	仝	壱丁	二七〇	一三六〇
〃仝天井受肘木	桧	十尺三寸	仝	九尺二寸	仝	壱丁	三九五〇	一〇四〇
〃仝平持出肘木	仝	九尺二寸	仝	九尺二寸	仝	壱丁	一〇七〇	一六五〇
〃平持出肘木	楠	三尺八寸	仝	三尺八寸	仝	壱丁	一	九九〇
〃平秤肘木	仝	一尺五寸	仝	一尺五寸	仝	壱丁		九九〇
〃隅秤肘木	楠	三尺六寸	仝	三尺六寸	仝	壱丁	四	二〇〇
〃円肘木	楠	三尺六寸	仝	三尺六寸	仝	壱丁	四	二〇〇
〃隅持肘木	仝	六尺五寸	仝	六尺五寸	仝	壱丁	一〇	二五〇
〃大斗	仝	八寸	仝	八寸	仝	壱丁	一	〇〇〇
〃鬼斗	仝	五寸六寸	仝	五寸六寸	仝	壱丁	九	〇〇〇
〃巻斗	仝	十二尺切遣ヒ	仝	十二尺切遣ヒ	仝	壱丁	一	一〇〇
〃平尾棰	仝	七尺	仝	七尺	仝	壱丁	八	八九〇
〃配付尾棰	仝	五尺五寸	仝	五尺五寸	仝	壱丁	一七	七八〇
〃支輪	桧	二尺八寸切遣ヒ	桧	二尺四寸切遣ヒ	仝	壱丁	拾貳丁	八五〇
〃仝裏板	仝	三尺八寸	仝	中九寸　ア一寸七下	仝	壱丁	五丁	二九三〇
〃軒天井板	仝	六尺五寸切遣ヒ	仝	中八寸　ア二下	仝	壱丁	八枚	七八〇
〃地隅木	楠	十二尺	楠	中七寸　ア三寸六下		壱丁		一五八〇
〃飛檐隅木	桧	六尺五寸	桧	中六寸五下　ア三寸八下	桧	壱丁	四丁	七五八〇
〃地棰	仝	四尺五寸	仝	三寸三下　ア一寸七下	仝	壱丁	五丁	一二六〇
〃仝	仝	三尺	仝		仝	壱丁	五丁	八五〇
〃飛檐棰	桧	五尺	桧	七寸五下　ア一寸七下	桧	壱丁	貳拾丁	一五〇〇
〃地棰裏板	仝	二尺七寸	仝	中四寸五下　ア四下	八拾四丁	百四拾貳丁	二四〇	二〇一六〇
〃飛檐裏板	仝	一尺八寸	仝	中　ア仝				
〃面戸板	仝	十尺	仝	三寸八分一寸	四丁	一	九二〇	一六〇
〃木負	仝	八尺五寸	仝	七四寸　ア二寸七下	八丁	四	六〇〇	三六八〇
〃茅負	仝	十一尺	仝	七三寸二下　ア三寸四下	四丁	八	九四五〇	二四〇二四〇
〃裏甲	仝	十一尺	仝	中八寸五下　ア二寸	八丁	九	一二〇	七五六〇〇
〃瓦座	仝	十二尺	仝	三寸斜曳	八丁	一	九二〇	七六八〇
〃丸桁桔木	杉	十五尺	杉	末口五寸	四丁	二	七五〇	一〇〇〇
〃仝桔木	仝	八尺	仝		四丁	一	七八〇	七一二〇
〃仝尻押へ	仝	四尺三寸	仝	四寸五下四寸	貳丁		七五〇	一五〇〇
〃桔木枕	仝	十四尺	仝	五寸五下角	四丁	四	〇〇〇	一六〇〇〇
〃隅桔木	楠	十四尺	楠	末口六寸	四丁	五	五〇〇	二三〇〇〇
〃平桔木	仝	十三尺	仝		四丁	五	九五〇	三九六〇〇
〃仝	仝	十一尺五寸	仝		八丁	四	九五〇	三九九五
〃仝	仝	九尺五寸	仝		四丁	三	七五〇	一五九八〇
〃枕桔木	仝	十三尺	仝	末口五寸	八丁	一	三三〇	一〇七五〇
〃鼻母屋	杉	十尺	杉	七四寸　ア三寸五下	貳丁	三	七五〇	七五〇〇
〃母屋桁及束	仝	十四尺	仝	四寸押角	拾丁	一	三三〇	一〇五六〇
〃小屋束	仝	四尺三寸	仝	四寸五下四寸	六丁		七五〇	二〇〇〇
〃野地板	仝	十四尺	仝	巾五寸以上　ア正九下	貳拾坪	四	二五〇	八〇〇〇
〃土居葺押	仝	十四尺	仝	巾一寸七下　ア正六下	七拾五丁		一五〇	一一二五〇
〃桔木尻枕	楠	六尺	仝	五寸角	四丁	七	五八〇	三〇三三〇

〃尾棰尻受	仝	五尺	四寸角	四丁	四〇五〇	一六二〇〇
〃須弥壇裏敷居	桧	五寸五尺	巾四寸　ア二寸	壱丁		二三二〇
〃鴨居	仝	仝	巾四寸　ア二寸六下	壱丁		二九〇〇
〃格子堅子及框	仝	六尺	九分角	拾五丁	二四〇	三六〇〇
〃仝	仝	五尺二寸	九下角	拾六丁	二二〇	三三六〇
〃裏板	仝	五尺二寸	巾二尺二寸　ア正三下	壱枚		一六四〇
型板	仝	十三尺	巾二尺二寸　ア五下	壱枚	七九〇	三九五〇
地棰受木	楠	五尺	四寸角	四丁	四〇五〇	一六二〇〇
計						二、八三三〇

金参百八拾五円〇六銭也　内譯　金物費

名称	摘要	員数	單價	小計
露盤	鋳鉄　巾二尺七寸五分　高八寸五分　厚三分　新調	壱個	四五〇〇〇	四五〇〇〇
覆鉢	仝　圣二尺七寸五分　高一寸一寸　厚五分　仝	壱個	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇
受花	仝　圣二尺五寸五分　高一尺七寸五分　厚二分　修繕	壱個	四〇〇〇	四〇〇〇
九輪筒	仝　下外圣九寸九分　高一尺九寸　上外圣八寸七分　厚二分　新調	壱個	一七〇〇〇	一七〇〇〇
〃	仝　下外圣八寸七分　高一尺一寸六分　上外圣八寸　厚三分　厚二分　仝	壱個	一二六〇〇	一二六〇〇
〃	〃下外圣八寸三分　高一尺九分　上外圣七寸　九分　厚二分　仝	壱個	一一五〇〇	一一五〇〇
〃	〃下外圣七寸九分　高一尺九分　上外圣七寸　三分　厚二分　仝	壱個	一〇五〇〇	一〇五〇〇
〃	〃下外圣七寸三分　高一寸九分　上外圣六寸九分　厚二分　仝	壱個	九六〇〇	九六〇〇
〃	〃下外圣六寸四分　高九寸四分　上外圣六寸四分　厚二分　仝	壱個	八八〇〇	八八〇〇
〃	〃下外圣六寸四分五〃　高九寸五分　上外圣寸　厚三分　仝	壱個	八一〇〇	八一〇〇
〃	〃下外圣六寸一分　高七寸七分　上外圣五寸一分　厚二分　仝	壱個	七五〇〇	七五〇〇
〃	〃下外圣五寸一分　高七寸七分　上外圣五寸一分　厚二分　全	壱個	七〇〇〇	七〇〇〇
〃	〃下外圣五寸一分　高九寸三分　上外圣五寸　厚二分　二重九輪及環付　仝	壱個	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
九輪	〃下外圣四寸六分　厚二分　水煙受付　仝	壱個	七五〇〇	七五〇〇
上部花弁受鉢	仝　圣一尺六寸七分　高三寸三分　厚三分　〃	壱個	一三五〇〇	一三五〇〇
水煙止輪	〃圣七寸二分　高二寸六分　厚三分	壱個	二五〇〇	二五〇〇
鎖止座	鉄外圣三寸二分　巾二分五〃　厚二分五〃　〃	壱個	一四〇〇	一四〇〇
落シ樞	〃長四寸五分　半内圣三寸八分　厚一分　〃	壱個	一〇〇〇	一〇〇〇
仝座金	〃長九寸　巾一寸四分　在来通り　古色任上	壱個	三五〇〇	七〇〇〇
鍵	〃長一寸五分　巾一寸　圣八厘　鋲付　仝	四個	一〇〇	四〇〇
〃　座金	〃長麺一尺三寸二分五〃角	壱個		四五〇
藁座金物　座金	〃二寸角　厚八厘　鋲付　古色任上	貳個	一五〇	三〇〇
仝　鋲	仝　在来金物　底金ヲ付着ス	四個	三〇〇	一二〇〇
〃	〃長一寸五分　頭圣三分八厘　古色任上	四拾個	〇一五	六〇〇

下軸釣金物	〃外圣一寸五分　厚六厘　鋲付　厚六厘　釣輪圣五寸五分　柱四分	八個	五〇〇	六〇〇	三〇〇	一〇〇〇	六〇〇	四〇〇
上藁座金物	〃外圣一寸五分　厚一分　仝　高三寸八分　厚五厘	六個	六〇〇	五〇〇	一〇〇	一〇〇	三六〇	一六〇〇
〃　〃	〃外圣一寸五分　厚一分　仝	貳個	五〇〇	一〇〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
上軸釣金物	〃外圣一寸二分　厚五厘　釣輪八寸　羽分五厘　厚一分	六個	五〇〇	三〇〇	一一〇	一一〇	三六〇	五九八〇
碁石金	〃圣一寸　厚一分五厘	八個	二〇〇	二〇〇	一六〇〇	一一〇	一一〇	一六〇〇
初層　土居隅締ボールド	〃径長一尺八寸　働キ一尺三寸　圣五分　両捻シ	四丁	三三〇	一三〇	一三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝　桔木尻枕〆	〃径長一尺五寸　働キ一尺　〃　〃	四丁	二九〇	一一〇	一一六〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃　桔木尻締ボールド	〃径長一尺二寸　働キ一尺　〃　〃	四丁	二六〇	五九八〇	一一〇	一一〇	二六〇	一一〇
仝　頭貫　隅　金物	〃長八寸　巾三寸　厚二分	四丁	三〇〇	一一〇	四〇〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝　仝用　逆目釘	〃長二寸　圣二分	壱拾六丁	〇一五	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
中心柱縄手　金物	〃内圣八寸五分　巾二寸　厚二分	参丁	一〇五〇	三一五〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝用　逆目釘	〃長二寸　圣二分	壱拾貳丁	〇一三五	三〇〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝用　添金物	〃長三尺五寸　巾一寸五分　厚二分	四丁	一〇五〇	四〇〇	四〇〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝用　逆目釘	〃長一寸五分　圣二分	壱拾六丁	〇一五	四〇〇	四〇〇	一一〇	一一〇	一一〇
上層桔木尻　締ボールド	〃径長一尺二寸　働キ一尺　〃　〃　圣五分　両捻	壱拾五丁	二六〇	三九〇〇	一一六〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺一寸　働キ八寸　〃　〃	壱丁	二三〇	二三〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺五寸　働キ一尺　〃　〃	四丁	二九〇	一一六〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝隅木尻　締ボールド	〃径長一尺七寸　働キ一尺三寸　〃　〃	四丁	三三〇	一二八〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝　台輪締　ボールド	〃径長一尺　働キ七寸　圣四分　両捻	四丁	一三〇	五一〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝隅柱根締　羽子板ボールド	〃径長一尺二寸五分　働キ一尺　巾一寸五分　圣二分　ボール圣四分	八丁	五〇〇	四〇〇〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃仝　締　ボールド	〃径長八寸　働キ　六寸　圣四分	四丁	二〇	四八〇	八八〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝長押継手　締ボールド	〃径長一尺九寸　働キ一尺五寸　〃　両捻	四丁	二三〇	八八〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝腰貫　締ボールド	〃径長一尺二寸　働キ九寸　圣五分　両捻	四丁	二四〇	九六〇	二四〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝丸桁　締ボールド	〃径長一尺九寸　働キ一尺五寸　圣四分　両捻	八丁	三三〇	一七六〇	三三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝茅負継手　締ボールド	〃径長一尺二寸　働キ八寸　圣五分　仝	壱丁	二三〇	二三〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃尾棰尻　締ボールド	〃径長一尺　働キ七寸　圣四分　両捻	貳丁	一三〇	二六〇	四六〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺一寸　働キ八寸　圣五分　仝	貳丁	三三〇	三三〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝茅負継手　〆ボールド	〃径長一尺三寸　働キ一尺　〃　〃	壱丁	二三〇	一〇四〇	二六〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝配付尾棰　締ボールド	〃径長一尺二寸　働キ一尺五寸　〃　〃	四丁	二六〇	一一〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺九寸　働キ一尺三寸　〃　〃	貳丁	三三〇	三五〇	一九〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺五寸　働キ一尺　〃　〃	貳丁	二九〇	一九〇	七八〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝土居桔釣　ボールド	〃径長一尺二寸　働キ一尺五寸　〃　〃	貳丁	三九〇	七八〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺　働キ一尺　〃　〃	四丁	二六〇	一〇四〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺二寸　働キ一尺　〃　〃	壱丁	二三〇	二三〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝桔木尻枕　〆ボールド	〃仝　寸　〃　〃	貳丁	二三〇	四六〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺九寸　働キ一尺三寸　〃　〃	貳丁	二六〇	二六〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
仝中心柱受　締ボールド	〃径長一尺五寸　働キ一尺二寸　〃　〃	貳丁	二九〇	一九〇	二三〇	一一〇	一一〇	一一〇
〃	〃径長一尺二寸　働キ一尺　〃　〃　圣三寸　厚一分二厘	四百丁	〇四〇	一六〇〇	二六〇	一一〇	一一〇	一一〇

合釘	〃 長二寸二分角	貳百本	〇〇五	一〇〇〇
長押用和釘	〃 長四寸七分 中三分 厚二分五厘	八拾四本	〇四〇	三二六〇
鎹	〃 長五寸五分 中五分 厚三分	壱百五拾本	〇八五	一二七五〇
鎹	〃 長三寸五分 中三分 厚二分	五拾本	〇四〇	二〇〇〇
鎹	〃 長四寸 三分角	貳拾本	〇三五	〇七〇〇
鎹	〃 長六寸 中三分 厚二分	五拾本	〇四〇	二〇〇〇
上下層 瓦止釘	〃 長八寸 圣二分丸	武百八拾本	〇一〇	五六〇〇
銅板	銅 長一尺二寸 巾一尺	壱枚	三五〇	三五〇
銅線	瓦繋用 拾番線	參百匁	四〇〇	一一〇〇
仝	〃 拾八番線	四貫七百四拾匁	四〇〇〇	一八九六〇
洋釘	曲尺 長六分	五百匁	百匁ニ付一〇〇	五六〇〇
〃	〃 一寸	八百匁	一メニ付七〇〇	一九二〇
〃	〃 一寸六分	參貫	六四〇	三三七〇
〃	〃 二寸	五貫	六七四	三三七〇
〃	〃 二寸五分	六貫	六四〇	三八四〇
〃	〃 三寸	八貫四百匁	六四七強	五四〇〇
〃	〃 三寸五分	五貫	六〇〇	三〇〇〇
修補コ手 板	署誌銅 長二尺 巾四寸五分 文字百 切二分彫彫金渡金	壱個	二六	四
〃	〃 四寸	六貫五百匁	六三三強	二六〇〇

金四拾五円参拾九銭也 内譯　　塗工費

名称	摘要	員数	單價	小計
亀腹 漆喰塗	白壁 下塗ヨリ中塗上塗迄 仕上 三回塗 材料手間共	貳坪	一六〇〇〇	三二〇〇〇
胡粉	化粧裏板塗 壱袋四百匁入	弐拾五坪	一二〇〇	五〇〇〇
三千本 膠	石混用	壱貫五百匁	二二三三三強	三三五〇
刷毛	古色塗用	五本	三六〇	一三〇〇
漆	古材修繕 朔付用	壱百匁	二〇〇〇	二〇〇〇
運賃	石ノ粉粉他三点 和歌山市駅ヨリ長保寺迄ノ運賃	壱式	一〇〇〇	一〇〇〇
小バケツ	古色塗用具	參個	一八〇	五四〇
空缶	仝	弐個	一〇〇	二〇〇

金五百七拾九円四拾四銭也 内譯　　葺工費

名称	摘要	員数	單價	小計
初層 唐草瓦	上層 長二尺 巾八寸 厚六分	六十四枚	一七〇	一〇八八〇
〃 隅 仝	〃 〃 〃	四枚	一七〇	六六〇
〃 巴瓦	〃 長九寸二分 圣四寸七分 厚七分	五拾個	四〇〇	二〇〇〇

仝 丸瓦	〃 長九寸 圣四寸七分 厚七分	三百六十個		一三〇
〃 平瓦	〃 長八寸五分 巾八寸 厚六分 谷深	千二百五十個	〇九一	一二三七五〇
〃 敷平瓦	〃 長六寸 巾八寸 〃〃	六十枚	〇六〇	四〇〇〇
〃 平瓦	〃 長八寸五分 巾八寸 〃 谷浅	六百五十個	〇九一	五九一五〇
〃 敷平瓦	〃 長六寸 巾八寸 仝	八十個	〇六〇	四八四〇
〃 面戸瓦	〃 長九寸五分 高二寸五分 仝	百四個	〇八五	八八四〇
仝 仝	〃 長七寸五分 高二寸五分 仝	四個	〇八五	三四〇〇
仝 熨斗瓦	〃 長八寸 巾五寸 〃	九十個	〇八〇	七二〇〇
上層 唐草瓦	〃 長九寸 巾六寸五分 仝	四十個	一七〇	六八〇〇
仝 隅瓦	〃 仝 仝	八個	一七〇	一一三六〇
〃 巴瓦	〃 長九寸 圣四寸 〃	百二十個	三三五	二七〇〇〇
〃 隅巴瓦	〃 長一尺一寸二分 圣四寸 仝	四個	六〇〇	二四〇〇〇
〃 丸瓦	〃 長八寸五分 圣四寸 仝	七百四十個	〇八五	六三九〇〇
〃 平瓦	〃 長九寸 巾六寸五分 厚六分	六百個	〇九〇	五四〇〇〇
〃 敷平瓦	〃 長六寸 巾六寸五分 〃	百個	〇六〇	六〇〇〇
〃 熨斗瓦	〃 長八寸五分 巾七寸五分 〃	八個	〇六〇	四八〇
〃 隅敷平瓦	〃 〃 〃	六十個	〇七五	四五〇〇
〃 鬼瓦	〃 高一尺 巾一尺二寸 厚二寸 鬼面	一個	五〇〇〇	五〇〇〇
〃 鳥衾	〃 長一尺五寸 巴圣四寸 厚六分	四個	五〇〇	六〇〇〇
〃 面戸瓦	〃 長八寸 高二寸五分 厚六分	百十二個	〇八五	九五二〇
〃 〃	〃 長五寸五分 高二寸五分 仝	十六個	〇八五	一三六〇
石灰	屋根土混合用 一俵六〆五百匁入	三十俵	五五〇	一六五〇〇
上下層土居葺	杉板長九寸 厚一寸ヲ十六枚割 寸五分 竹釘材 材料手間共 葺足一	三十四坪三合	二 八〇〇	九六〇〇

金貳百七拾八円貳拾貳銭也 内譯　　雑費

名称	摘要	員数	單價	小計
礎石下コンクリート	二尺五寸方 厚一尺 六ヶ所 一三六配合	三十七切五分	四五〇	一六八七〇百代切捨
椽束石下礎石	一尺五寸方 深七寸 十五ヶ所	二十三切六分三厘	一〇〇	二三六〇〃
仝 コンクリート	一尺三寸方 深六寸 十五ヶ所	十五切一分五厘	四五〇	六八一〇〃
雨落葛石下礎石	巾一尺 深五寸 延長十六間五分	五十九切四分	一〇〇	五九四〇
仝 コンクリート	巾八寸 深六寸 仝	四十七切五分二厘	四五〇	二二三八〇百代切捨
床下及軒下コンクリート下敷砂利	十六坪五合 厚二厘 撒布 圣二分以上一寸二分以下	全 三合三勺	三七〇	一二八四〇
仝 コンクリート	十六坪五合 厚四寸 マノール混合	全 一坪一合〇六方	一〇〇 〇〇〇	一二〇六〇〇
仝 上塗モルタル	上塗厚五分 一、二取合 マノール混合	面坪 十六坪五合	八〇〇	一三一〇〇
石階段下コンクリート	延長一間 巾一尺二寸 厚六寸	全 四勺	一〇〇〇	四〇〇〇
仝 礎石	巾一寸五寸 深六寸	十切八分	一〇〇	一〇八〇
セメント	石据用 四寸五分入六樽	貳樽	五五〇	二一〇〇〇
洗砂	仝	全 貳合	三六〇〇	七一〇〇

雨落葛石	小豆島産 荒石 巾六寸五分 高五寸五分	延長十六尺五分	拾	三〇〇〇
椽束石	花崗岩 高七寸 一尺方	拾五個	當寺ノ不用石材ヲ用フ	四九五〇〇
莚	コンクリート養生用	三十枚	一五〇	四五〇〇
藁	屋根土混合用	四十束	一六〇	六四〇〇
亀用タワシ	屋根瓦洗用	二十三個	〇七〇	一六一〇
草箒	右材掃除用	六本	一四〇	一四四〇
藁縄	右材及右材等保谷ニ付シバリ用	八貫三百匁	三〇〇	二四九〇

金壱千五百参拾五円六拾銭也 内譯　　損料費

名称	摘要	員数	單價	小計
葺屋根足代 桟橋共	方六間半 軒高二十尺廻廊囲ヒ 桟橋上下二重 材料損料架構手間共 足代	四十弐坪弐合五勺	二〇 〇〇〇	八四五 〇〇〇
工作小屋	桁行八間 梁間二尺 軒高八尺 仝	弐拾四坪	八 〇〇〇	一九二 〇〇〇
材料置場	桁行五間 梁間一間 仝 棚 重三架設り 仝	拾掉	一〇 〇〇〇	一〇〇 〇〇〇
職工人夫休憩所	方一間半 軒高七尺 荒壁塗 仝	弐坪弐合五勺	一〇 〇〇〇	二三 五〇〇
仝 便所	寺院ノ既設便所ヲ借入レ小便壷一個口圣二尺 陶器製三代替ヲナシタリ	壱個	五 〇〇〇	五 〇〇〇
矢来及門	矢来高六尺 門一間半二ヶ所 事務所入口門四尺一ヶ所 便所出口三尺一ヶ所 材料損料一架横手間共	延長七拾間	二 〇〇〇	一四〇 〇〇〇
予備杉丸太	長三間末口三寸以上 三十本 長三間 仝 三十本 工事中損料	六拾本	五〇〇	三〇 〇〇〇
仝 藁縄	臨時仮置場締用	弐拾貫	三〇〇	六 〇〇〇
諸道具損料	別紙明細書ノ通リ	壱式		一五 一〇〇
監督詰所	桁行五間 梁間二間半 寺院既設建物 借用料	拾弐坪五合	一四 四〇〇	一八〇 〇〇〇

金参千壱百七拾六円九拾九銭也 内譯　　工料費

名称	摘要	員数	單價	小計
木工	多宝塔修復ニ係ル木工手間 一式	〃	三〇〇〇	六五四〇〇〇
〃	〃	〃	二九〇〇	三九一五〇〇
〃	〃	〃	二八〇〇	二五一〇〇
〃	〃	〃	二七〇〇	三七五三〇〇
〃	〃	〃	二四〇〇	一九〇八〇〇
〃	〃	〃	二二〇〇	二〇四六〇〇
〃	〃	〃	五〇〇	二二七五〇〇
石工	多宝塔雨落葛石造リヨリ据付手間 延長十六尺五分	延長十六尺五分	二〇〇〇	三三〇〇〇
〃	椽束石造ヨリ据付手間	拾五個	一五〇〇	二三五〇〇

道具損料明細書

一金拾五円拾銭也

内譯

名称	摘要	員数	単價	小計
ブロック			七〇〇	
々　芋綱	相輪卸及揚方用	參目間		二　一〇〇
スコップ　鶴嘴　唐鍬　如蓮	々	參目間	一　〇〇〇	三　〇〇〇
モッコ　土籠　手箕	々	延目数四十日分	二五〇	六　〇〇〇
		延目数四十日分	一〇〇	四　〇〇〇

金壹千貳百參拾八円參拾七錢也

内

金參百円五拾五錢也

鎮守堂総工費

木材費

内譯

名称	品目	長	寸法	員数	単價	小計
土台	檜	九尺	七四寸五分　中五寸	貳丁	一〇　二三〇	二〇　四六〇
仝	々	五尺五寸	七四寸五分　中五寸	壱丁		六　三二〇
仝	々	六尺三寸	七四寸　中四寸七分	壱丁		五　九八〇
向拝柱根継	々	一尺六寸	四寸角	貳丁	一　三〇〇	二　六〇〇
椽束	々	一尺八寸	三寸二分角	壱丁		九　一〇
椽束根継	々	一尺五寸	三寸角	六丁	六八〇	四　〇八〇
仝　貫	々	六尺	中二寸八分　ァ八分	參丁	六八〇	二　〇四〇
丸根貫	々	六尺	中二寸五分　ァ一寸三分	貳丁	九八〇	一　九六〇
々	在来石階段撤直し手間	壱ヶ所	三	五〇〇		
瓦葺工	屋根瓦葺手間	六拾壱人	四	〇〇〇	一四四　〇〇〇	三
人夫	多宝塔修理三係ル人夫手間	拾八人	二	一〇〇	三九　六〇〇	五〇〇
々	々	拾八人	二	一〇〇	三七　八〇〇	
々	々	百七拾四人	二	〇〇〇	三四八　〇〇〇	
々	々	八拾人	一	九五〇	一五六　〇〇〇	
々	々	八拾四人七分五厘	一	九〇〇	一六一　〇二〇　百代切捨	
々	々	九人	一	八五〇	一六　六五〇	
々	蕃股修補手間	拾七人七分五厘	一	七〇〇	三〇　一七〇　百代切捨	
彫刻工	蕃股修補手間	六個	二二	〇〇〇	七二　〇〇〇	
々	初層巴瓦型	壱個	一〇	〇〇〇	一〇　〇〇〇	
々	々　唐草瓦型	壱個	七	五〇〇	七　五〇〇	
々	上層巴瓦型	壱個	一〇	〇〇〇	一〇　〇〇〇	
々	々　唐草瓦型	壱個	七	五〇〇	七　五〇〇	
運送料	蕃股修補ノゐメ長保寺ヨリ東京迄ノ送料				五　四〇〇	
々	瓦型彫刻ノゐメ石瓦ヲ長保寺ヨリ東京迄送料				三　四五〇	
々	在来石階段撤直し手間	壱ヶ所	三	五〇〇		
瓦葺工	屋根瓦葺手間	六拾壱人	四	〇〇〇	一四四　〇〇〇	三
人夫	多宝塔修理三係ル人夫手間	拾八人	二	一〇〇	三九　六〇〇	五〇〇
々	々	拾八人	二	一〇〇	三七　八〇〇	
々	々	百七拾四人	二	〇〇〇	三四八　〇〇〇	
々	々	八拾人	一	九五〇	一五六　〇〇〇	
々	々	八拾四人七分五厘	一	九〇〇	一六一　〇二〇　百代切捨	
々	々	九人	一	八五〇	一六　六五〇	
々	蕃股修補手間	拾七人七分五厘	一	七〇〇	三〇　一七〇　百代切捨	
彫刻工	蕃股修補手間	六個	二二	〇〇〇	七二　〇〇〇	
々	初層巴瓦型	壱個	一〇	〇〇〇	一〇　〇〇〇	
々	々　唐草瓦型	壱個	七	五〇〇	七　五〇〇	
々	上層巴瓦型	壱個	一〇	〇〇〇	一〇　〇〇〇	
々	々　唐草瓦型	壱個	七	五〇〇	七　五〇〇	
運送料	蕃股修補ノゐメ長保寺ヨリ東京迄ノ送料				五　四〇〇	
々	瓦型彫刻ノゐメ石瓦ヲ長保寺ヨリ東京迄送料				三　四五〇	
仝　巻斗	々	一尺六寸四ッ切	壱丁	一　六〇〇		
仝　大斗	々	五寸	壱丁			
向拝　丸桁	々	九尺五寸	壱丁	七	一七〇	三八〇
胴羽目板	々	一尺	壱丁	一	〇〇〇	一
向拝梁　虹梁継木	々	四尺二寸	壱丁		五〇〇	
仝	々	一尺四寸	壱丁			
仝	々	二尺二寸	壱丁	一	〇六〇	四〇〇
腰羽目板	々	二尺二寸	壱丁	一	八〇〇	一
木階上部蹴込	々	二尺二寸	壱丁	一	六〇〇	三
彫桁	々	檜	壱丁	一	六四〇	三二〇
木階	々	楠	貳丁	三	三八〇	六
仝	々	六尺	貳丁	三	四〇〇	六
椽板	々	八尺	貳丁			四
板受木	々	四尺	貳丁			九八〇
椽小根太	々	一尺五寸	拾丁		二一〇	二
椽隅叉首	々	二尺五寸	壱丁		七〇〇	
椽葛	々	三尺	壱丁		七三〇	
仝	々	中三寸　ァ寸六分	貳丁		八〇〇	一
仝　巻斗	々	一尺六寸四ッ切	壱丁	一	六〇〇	四九〇
仝　方斗	々	七寸　二ッ切	壱丁			
仝　実肘木	々	二尺七寸	壱丁			
仝　虹梁梁　彫刻	々	一寸四分	壱丁			
大斗	々	五寸	壱丁		三九〇	
巻斗	々	一尺六寸四ッ切	壱丁			
方斗	々	一尺二寸	壱丁			
棟桁継木	々	四尺	壱丁			
丸桁	々	九尺五寸	壱丁		六〇〇	二
支外面戸	々	二尺五寸	壱丁			
支外樋	々	三尺五寸	壱丁			二九〇
支外裏板	々	二尺五寸	壱丁		四〇〇	一
地樋	々	三尺七寸	壱丁		三〇〇	三
仝	々	一尺七寸	壱丁		一四〇	二
打越樋	々	四尺	十七丁	三三〇	五六一〇	五
裏側　飛檐樋	々	二尺	九丁	一六〇	一四四〇	一
向拝　仝	々	九尺五寸	三十二丁	一六〇	五二〇	五
地樋　裏板	々	九尺五寸	四枚	一〇六〇	二四〇	四
打越樋　仝	々	七寸五分　ァ三分	五枚	一〇六〇	五三〇	一
裏側飛檐　裏板	々	中九寸　ァ三分	壱枚			
向拝飛檐　仝	々	中八寸五分　ァ三分	壱枚			一
破風	々	九尺五寸	貳丁	一三	三三〇	二六
々	々	六尺	貳丁	六	二六〇	二
々　ヒ　裏甲	々	九尺五寸	貳丁		二一〇	四
々　ヒ　々	々	六尺	貳丁	一	三三〇	二
茅負	々	九尺五寸	貳丁	三	一六〇	六
木負	々	七寸　下二寸	貳丁	二	四四〇	四
々	々	七寸　下地二寸	壱丁			二
裏甲	々	十尺	貳丁		二三〇	四
鴨居	々	四尺	壱丁			三
椽長押	々	五尺	壱丁			一
勾欄　地覆	々	三尺五寸	壱丁			
々　平桁	々	三尺七寸	々		四六〇	
々　架木	々	三尺五寸	壱丁		三一〇	
々　々	々	六尺二寸	壱丁		三一〇	
々　平束及間束	々	三尺二寸	々			
登リ高欄地覆	々	十一尺切□追	壱丁		一六〇	
々　平桁	々	三尺	貳丁			
々　架木	々	三尺	貳丁			
宝珠柱	々	三尺	貳丁			
天井板	々	四尺	六枚	一	〇一〇	四六〇
懸魚	々	一尺六寸	弐丁	一	〇一〇	二
々	々	一尺八寸	四丁		七三〇	一
蔀戸　框	々	五尺	四丁	一	七〇	一
々　竪横子	々	五尺	拾五丁		一〇〇	一
形板	々	十尺	弐枚	五	〇五〇	一
々	々	十尺	參枚	二	五二〇	七
土居桁	杉	九尺五寸	弐丁	一	三七〇	二
々	々	九尺五寸	弐丁	一	二〇〇	一
野棟木	々	九尺五寸	弐丁	一	三八〇	二
桔木	檜	九尺五寸	參丁	一	八五〇	五
々	々	六尺	參丁			
母屋桁及束	々	九尺五寸	拾參丁		六三〇	八
野棟	々	九尺五寸	十五丁		三七〇	五
々	々	六尺	十五丁		三三〇	三
野木舞	々	九尺五寸	四拾五丁		二一〇	四
野地板	々	六尺三寸	壱坪	二	三〇〇	二
々	々	六尺三寸	四枚		三〇〇	一
野天井板	々	十尺	十枚		三〇〇	三
々	々	十三尺	參拾丁		〇六〇	一
桧皮押縁	々	一寸五分　二分	六枚		三〇〇	四〇〇
正方圖引付用板	々	十四尺	九枚			三

金貳百參拾円參拾參錢也

内譯

葺工費

名称	摘要	員数	単價	小計
屋根桧皮葺　平葺	高野産　長一尺五寸　足竹釘　二ッ切四分　打芽　用及隅共　材料手間	四坪七合一勺	二三〇〇	一〇八　七六〇　百代切捨
々　軒付	々　長八寸　仝	四坪三合三勺	一〇　五〇〇	八八　九一〇
々　品軒付	々　長四寸　仝	六合二勺	一六　〇〇〇	九　九一〇
棟　鬼瓦	水磨　高一尺　中一尺一寸	弐個	五　〇〇〇	一〇　〇〇〇

金七拾八円四拾九銭也　内譯　雑費

名称	摘要	員数	単價	小計
鳥衾	〃 長一尺 巾五寸 巴圣三寸八分	弐個	一五〇〇	三〇〇〇
肌駛斗	〃 長八寸 巾五寸 厚四分	四拾八枚	〇八〇〇	三八四〇
割駛斗	〃〃〃	參拾六枚	〇八〇〇	二八八〇
衾瓦	〃〃〃	拾弐枚	三〇〇	三六〇〇
洋釘	〃	弐百匁	〇七〇	一四〇
〃	曲尺 長一寸	五百匁	〇六四	三二〇
〃	〃 一寸五分	參貫	六七四	二〇二〇 壱代切捨
〃	〃 二寸	五百匁	〇六二	三二〇
〃	〃 二寸五分	壱貫	六四〇〇	六四〇〇
〃	〃 三寸	壱貫	六四〇〇	二二〇〇
疑宝珠	鉄製 色代ヒ 高三寸三分 圣三寸五分 古	弐個	六〇〇〇	二二〇〇
破風拝ミ締用ボールド	〃 長七寸 圣三分 雨捻	貳本	〇七五	一五〇
目鎹	〃 長三寸 巾四分 厚一分	四十五丁	〇三〇	一三五〇
鎹	〃 長三寸 二分角	二十丁	〇三〇	四〇〇
長押釘	〃 長三寸 全	三十丁	〇三〇	九〇〇
仝 金物	〃 巾九分 ァ一分 長三寸二分	弐丁	〇五〇	一〇〇
鍵	〃	壱丁	二〇〇	二〇〇
砥ノ粉	左官塗材料	壱貫匁	六〇〇	六〇〇
光明丹	〃	壱袋	五〇〇	五〇〇
刷毛	〃	參本	二〇〇	三六〇
筆	〃	六本	二五〇	九〇〇
雨落葛石下　礎石	中一尺 厚四寸 延長七間	十六切八分	一〇〇	一六八〇
〃 下　コンクリート	中七寸 厚四寸 仝	十一切七分六リ	四五〇	五 一九〇 壱代切捨
柱通り　礎石	中一尺 厚五寸 延長四間半	十三切五分	一〇〇	一三八〇
仝　コンクリート	中八寸 厚五寸 〃	十切八分	四五〇	四 八六〇 壱代切捨
椽足石下　礎石	八寸方 厚四寸 六ヶ所	一切五分三リ	一〇〇	五〇〇 壱代切捨
仝　コンクリート	七寸方 厚四寸 〃	一切一分七リ	四五〇	五一〇 〃
床下及軒下　コンクリート	厚三寸五分 向拝二坪 上塗モルタル塗	壱坪 一合一勺	一〇 三七〇	一一 四〇〇 〃
セメント	石膏付用	半樽	一樽五 五〇〇	二 七五〇
砂	仝	壱 壱合	三 六〇〇	三 六〇〇
修復工事　□誌銅板	長一尺 羽寸五分 厚一分 文字彫刻 金渡金	壱個	二六 〇〇〇	二六 〇〇〇
柱通　延石	花崗岩 巾七寸 厚五寸	延長四間半	寺院不用の石材ヲ用フ	
椽束石	仝 五寸方 厚五寸	六個		
雨落葛石	仝 巾五寸 厚五寸	延長七間		

金七拾円也　損料費

金五百五拾九円也　内譯　工料費

名称	摘要	員数	単價	小計
木工	〃 鎮守造修理ニ係ル木工手間	三人	三〇〇〇	九〇〇〇
〃	〃	四十五人	二九〇〇	一三〇五〇〇
〃	〃	二十八人	二七〇〇	七九六〇〇
〃	〃	二十七人	二二〇〇	五九四〇〇
〃	〃	二十五人	五〇〇	一二五〇〇
瓦葺工	〃	一人	四〇〇〇	八〇〇〇
人夫	〃 修復ニ係ル人夫手間	二十八人五分	二〇〇〇	五七〇〇〇
〃	〃	十人	一九〇〇	一九〇〇〇
石工	〃 石工手間	十三人	三五〇〇	四五〇〇〇
〃	〃	五人	三〇〇〇	一五〇〇〇
彫刻工	〃 獅子六薬彫刻手間	六個	六〇〇〇	三六〇〇〇
〃	〃 鬼瓦彫刻手間	三個	三五〇〇	一〇五〇〇

内譯

名称	摘要	員数	単價	小計
貸屋根足代桟橋共	桁行一六尺 梁間弐十尺 棟高十五尺六寸 軒高九尺三寸 材料損料 架構手間共	八坪七合五勺	八〇〇〇	七〇〇〇

金七千八拾参圓九銭也　内譯　監督費

名称	摘要	員数	単價	小計
工事監督　手當	昭和一年十二月ヨリ全三年十二月迄拾三ヶ月分 但シ一ヶ月弐拾円	拾三ヶ月	一〇〇〇〇	二六〇〇〇
現場主任　手當	昭和一年一月十二日ヨリ三十一日迄日割八十三円八十七銭全年一月ヨリ全年十二月迄十一ヶ月間 月百三十円ノ割	拾一ヶ月弐拾日間	一三〇〇〇	一五一三八七〇
仝　助手　手當	昭和一年一月十二日ヨリ三十一日迄日割五十二円六十銭全年一月ヨリ全年十二月迄十一ヶ月間 月八十円ノ割	拾一ヶ月弐拾日間	八〇〇〇	九三一六一〇
旅費	別紙明細書ノ通リ	壱式		一一一五七三〇
事務所雑費		壱式		一三六六一〇
製圖用費		壱式		九四九四〇
通信費	仝	壱式		一八三三〇
寫真費	仝	壱式		二三三〇
竣工慰労金	仝	壱式		一二〇〇〇
慰労手當		壱式		一五三〇〇
謄寫料	決算書謄寫料	壱式		五〇〇

金千百拾五円七拾参銭也　旅費

内譯

名称	摘要	員数	単價	小計
安間工事監督出張旅費	昭和三年十一月二十一日上事監督ノ為東京市ヨリ和歌山市経由浜中村ヘ往復旅費日当四日七十二銭 三泊十六円鉄道賃八一五哩三十三円七十二銭	壱回		六一七〇
仝	昭和三年十一月二十一日上事監督ノ為東京市ヨリ和歌山市田浜中村ヘ出張上往復旅費日当四日七十二銭 三十三円七十二銭日当六日十七円宿泊八一五哩	壱回		七六三〇
仝	仝年一月二十一日上事監督ノ為東京市ヨリ和歌山市経由浜中村ヘ往復旅費日当四日七十二銭 七十三銭日当五日十五円宿泊四二十五円	壱回		六八七〇
仝	仝年一月二十一日上事監督ノ為東京市ヨリ和歌山市経由浜中村ヘ往復旅費日当四日七十二銭 七十三銭日当五日十五円宿泊四二十五円	壱回		六八七〇
仝	仝年四月分ヨリ仝年十一月分迄 七三三哩三百三円四十八銭日当四十五日百三十五円宿泊十六泊百八十九円	九回	六九 七二〇	六二七 四八〇
仝	仝年三月十一日右ニ仝ジ	壱回		六八七〇
大畑委員出張旅費	昭和三年十二月十六日事務打合ノ為和歌山市ヨリ浜中村ヘ往復旅費鉄道賃二八哩五十二銭 日当一日只十五銭	壱回	二 三七〇	二 三七〇
仝	昭和三年五月十九日四月三十日十二月右仝 件鉄道賃八五八哩四円五十六銭日当仝三日二十五銭	壱回		七 一〇
松本現場主任赴任旅費	昭和三年一月十日京都市ヨリ浜中村ヘ赴任旅費鉄道賃五六八哩六円六十二銭日当一日三円五十銭赴任手當三十五円	壱式		四四 二〇
竹内現場助手赴任旅費	仝年十二月二十六日東京市ヨリ浜中村ヘ赴任旅費鉄道賃九六六哩十五円八銭日当三日五円赴任手當三十五円宿泊一哩四円	壱式		五九 〇八〇
松本現場主任出張旅費	昭和三年一月九日事務打合せノ為浜中村ヘ和歌山市ヘ往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日二十五銭	壱回		二 七七〇
仝	仝年一月廿一日一月廿一日五月二十九日伊都郡九度山町ヘ木材購入ノ為浜鉄道賃三五二八哩十三円四銭日当三日五円十銭車馬賃一里四五銭	參回	一回 五 二回 六	八七〇 三六〇
仝	仝年二月廿四日五月廿二日八月廿五日九月廿五日十月二十五日十月十六日十月十四日鉄道賃二〇〇一哩十円六十四銭日当七七円	七回	二 五二〇	一七 六四〇
竹内現場助手仝	仝年一月十一日三月廿八日四月三十六日六月二十五日十二月十四日鉄道賃一七一六哩九円十二銭日当六三五円八十五銭	六回	一回 二 五回 三七〇 二 五三〇	一四 九七〇
道尾委員　仝	仝年三月廿四日會計事務打合和歌山市ヨリ浜中村ヘ往復旅費鉄道賃八六哩一円五十二銭日当一八十五銭	壱回		二 三七〇
松本現場主任出張旅費	昭和三年十一月二十二日事務視察ノ為浜中村ヨリ那賀郡ヘ出張往復旅費鉄道賃五五二哩二円九十一銭車馬賃一里四十五銭日当二日三円七十銭宿泊一泊三円	壱回		一〇 二一〇
竹内現場助手仝	昭和三年八月二十六日簗島浄妙寺ヘ出張鉄道賃七哩四十銭日当三日五円十銭宿泊五円四十銭	壱回		一〇 九〇〇
仝	昭和三年十一月二十四日事務打合浜中村ヨリ和歌山市ヘ往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日一円	壱回		一〇 二一〇
福元委員総長出張旅費	昭和三年十二月十六日上事務改二付打合ノ為和歌山市ヨリ浜中村ヘ往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日三円	壱回		二 五二〇
松本現場主任出張旅費	昭和三年十一月十一日上事視察打合ノ為和歌山市ヨリ浜中村ヘ往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日九十銭	壱回		四 五三〇
寺本委員出張旅費	仝年十一月三十日上事視察打合ノ為和歌山市ヨリ浜中村ヘ往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日九十銭	壱回		二 四二〇
岩瀬庶務委員長出張旅費	仝日仝要件ニ付仝地ヘ出張往復旅費鉄道賃二八六哩一円五十二銭日当一日一円七十五銭	壱回		三 二七〇

金百参拾六圓六拾壱銭也　事務所雑費

内訳

名称	摘要	員数	単価	小計
時計	八日巻　尾長	壱個		一五〇〇
茶盆	丸形弁八十五分	壱個		〇六〇
書架綴器	金物製	壱個		三〇〇
ストーブ	鋳鉄	壱個		三〇〇〇
仝　火箸	仝	壱個		一五〇
仝　火掻き	仝	壱個		一六〇
仝　十能	仝	壱個		一七〇
椅子		四脚	一六〇〇	六四〇〇
スパナ	四分	壱個		四一〇
仝	五分	壱個		四八〇
仝	六分	壱個		六〇〇
タガネ	長六寸	壱個		四一〇
運賃	時計外十二点青森県弘前市最勝院ヨリ長保寺迄ノ送料	一式		四五〇
焼印	昭和三年修補	壱個		二五〇
バケツ	亜鉛引鉄板製	弐個	四〇〇	八〇〇
杓	仝　木柄付	壱個		一〇〇
五徳	鋳鉄	壱個		三三〇
茶呑茶碗	陶器	五個	〇三〇	一五〇
茶瓶	大	壱個		七〇〇
土瓶	小	壱個		二五〇
蝋燭	夜警用	弐斤	三五〇	七〇〇
木炭	樫一俵三ヌ入	拾八俵	一一五〇	二〇七〇
木炭	樫一俵三ヌ入	拾俵	一一〇〇	一一〇〇〇
木印	長保寺特別保護建造物修理工事委員総長印　二拾字	壱個		二〇〇〇
仝	委員部印　十九字	壱個		一九〇〇
仝	会計委員長　十九字	壱個		一九〇〇
仝	「長第　号」「受付　昭和　年　月　日　長第　号」十三字	弐個		五八五
仝	「委員総長」「会計委員長」「工事主任」「庶務委員長」「工事監督」「委員」	六個		一〇〇
支出簿	長保寺特別保護建造物修理工事費支出簿	壱冊		四〇〇〇
美濃封紙		五百枚	九〇〇〇	四五〇〇
支払会計専用		五百枚	百枚二付五六〇	二八〇〇
旅費請求用紙		五百枚	〃七〇〇	三五〇〇
人夫出役用紙		弐百枚	〃二五〇	四五〇〇
稟議用紙		参百枚	〃一〇〇	三〇〇〇
両面封紙		千枚	〃四〇〇	四〇〇〇
二重状袋	和歌山県部ト印刷　在内長保寺特別保護建造物修理工事委員	参百枚	〃一〇〇	三〇〇〇
複写紙		百五十枚	〇三〇	四五〇〇
骨筆		弐本	二〇〇	四〇〇
孝紐		壱玉	五〇〇	五〇〇

金九拾四圓九拾四銭也　製圖用費

内譯

名称	摘要	員数	単価	小計
アテナインキ		弐個	一〇〇	二二〇〇
西ノ内紙	白紙	参拾枚	〇三五	一〇五〇
美濃封紙	日本紙ノモノ	千枚	百枚二付一〇〇〇	一〇〇〇〇
状袋	ハトロン　和歌山県海草郡浜中村長保寺内長保寺特別保護建造物修理工事事務所ト印刷	参百枚	〃九〇〇	二七〇〇
複写用美濃封紙		五百枚	〃一二〇〇	六〇〇〇
晒木綿		壱反	七五〇	七五〇〇
出勤簿用紙		五枚	〇五〇	二五〇
工事報告用紙		百枚	〇二〇	二〇〇〇
工事工程報告用紙		三十枚	〇二〇	六〇〇
ホッチキス綴金		二個	二五〇	五〇〇
朱肉		壱斤		八〇〇〇
毛筆		拾本		三〇〇〇

金拾八圓参拾参銭也　通信費

内譯

名称	摘要	員数	単価	小計
丸ペン	軸付	参本		一五〇
紅花墨			二	六〇〇
画鋲	百個入	一箱	五五〇	五〇〇
消しゴム	ボクル印	四個	三五〇	一四〇〇
青寫真感光紙	長三十呎　巾三十吋	四本	一五〇	六〇〇
郵便切手	通信用	参百八拾枚	〇三〇	一一四〇〇
仝　葉書	仝	百弐拾枚	〇一五	八〇〇
電話料	通話料ノ内普通三〇遍話急報二通話	参拾弐通話	一〇〇〇 普通　二〇〇〇 急報	三四〇〇
為替料	前渡し金三十円ヲ長保寺現場主任松本軒吉宛送金弐拾円壱通拾参銭十円五十七銭郵便ト両替料	二通	一通　一通	二〇〇
書留為替料	松本現場主任ヘ前渡金送金一回鈴田分助一回磯村才治郎一回善紹世一回川勝磯吉一回杏上丑三助一回ノ物品購入代金送付	六通	二三〇	七八〇
運賃	文部省列逡工圖	一回	七五〇	七五〇

金貳千七百参拾圓也　寫真費

内譯

名称	摘要	員数	単価	小計
多宝塔正側面	修理前及修理后　四ッ切　印画台紙付三枚　原板共	貳組	八〇〇〇	一六〇〇〇
仝側面	仝　仝　仝	四組	八〇〇〇	三二〇〇〇
仝上下層細部	仝　仝　仝	四組	八〇〇〇	三二〇〇〇
仝内部	仝　仝　仝	貳組	八〇〇〇	一六〇〇〇
仝初層蟇股	カヒネ　印画台紙付三枚　原板共	参組	四〇〇〇	一二〇〇〇
仝組物	仝　仝	参組	四〇〇〇	一六〇〇〇
仝古瓦	仝　仝　正面及側面	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇
仝須弥壇	仝　仝	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇
仝同彫刻	仝　仝	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇
鎮守堂正面	修理前及修理后　四ッ切　印画台紙付三枚　原板共	貳組	八〇〇〇	一六〇〇〇
仝正側面	仝　仝　仝	貳組	八〇〇〇	一六〇〇〇
仝側面	修理后　仝	壱組	八〇〇〇	八〇〇〇
仝細部	修理前及修理后　仝	参組	八〇〇〇	二四〇〇〇
仝勾欄地覆平桁	修理前　仝	壱組	八〇〇〇	八〇〇〇
仝本側組物	カヒネ印画台紙付三枚　原板共	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇
仝向拝組物	仝　仝	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇
仝蟇股	仝　仝	貳組	四〇〇〇	八〇〇〇

内

金壱千貳百圓也　竣工慰労金

職名	摘要	金額
工事監督	竣工慰労金	五〇〇〇〇〇
工事主任	〃	四五〇〇〇〇
仝　助手	〃	二五〇〇〇〇

金壱千五百参拾圓也

慰労手當

職名	摘要	金額
委員総長	慰労ノ為	二七〇〇〇〇
庶務委員長	〃	二四〇〇〇〇
會計委員長	〃	二四〇〇〇〇
庶務委員	〃	二〇〇〇〇〇
仝	〃	一〇〇〇〇〇
仝	〃	一八〇〇〇〇
仝	〃	一〇〇〇〇〇
會計委員	〃	一六〇〇〇〇
仝	〃	四〇〇〇〇

新残材及事務所備品賣却精算書

一金拾八圓九拾五錢也　総收入額

内

金五圓也　新残材売却高

内訳

名称	摘要	員数	単價	小計
檜尾及楠新残材	長二間巾一間高三尺ニ整積　木皮	五石	一〇〇〇	五〇〇〇

金拾参圓九拾五錢也　事務所備品賣却高

内訳

名称	摘要	員数	単價	小計
折尺	長三尺	壱個	一〇〇	一〇〇
縮尺	五十分一　弐丁　四十分一　弐丁	四個	一五〇	六〇〇
曲杓	革製二尺	壱個	〇六〇	〇六〇
巻尺	長十一間	壱個	四五〇	四五〇
烏口	長四寸	壱本	一〇〇	一〇〇
T定木	長三尺七寸五分	弐個	〇六〇	二一〇
三角定木	四寸	壱組	〇三〇	〇三〇
青寫真焼付用硝子	長三尺　巾二尺　厚二分　木枠付	壱個	五〇〇	五〇〇
製圖板	長四尺　巾二尺六寸五分	弐枚	五〇〇	一〇〇〇
三角定木	長一尺五寸	壱組	一二〇〇	一二〇〇
仝	長八寸	壱組	二〇〇	二〇〇
仝	長四寸	壱組	二〇〇	二〇〇
烏口	長四寸五分	壱本	〇五〇	一〇〇〇
羽箒	大	弐本	一〇〇	一〇〇
硯石	長四寸五分　巾三寸	弐個	〇三〇	〇六〇
文鎮	丸形　圣二寸四分　壱個　三百五十匁付	八個	一〇〇	八〇〇
時計	八日巻　尾長	壱個	一〇〇〇	一〇〇〇
ストーブ	鋳鉄	壱個	一五〇〇	一五〇〇
仝用火箸	鉄	壱個	一〇〇	一〇〇
仝用火掻	仝	壱個	一〇〇	一〇〇
仝用十能	仝	壱個	一五〇	一五〇
椅子		四脚	八〇〇	三二〇〇
スパナ	四分	壱個	二〇〇	二〇〇
仝	五分	壱個	二〇〇	二〇〇
仝	六分	壱個	二〇〇	二〇〇
タガネ	長六寸	壱個	二〇〇	二〇〇
青寫真用水洗盤	亜鉛引鉄板製　長三尺五寸　巾二尺五寸　深四寸五分	壱個	二〇〇	二〇〇
バケツ		弐個	一〇〇	二〇〇
杓		壱個	〇三〇	〇三〇
五徳		壱個	一五〇	一五〇

廃棄備品明細書

一金拾四圓七錢也

内訳

名称	摘要	員数	単價	小計
焼印	昭和三年新調	壱個	二五〇〇	二五〇〇
茶盆	丸形八寸五分	壱個	〇六〇	〇六〇
書類綴器	金物製	壱個	三〇〇	三〇〇
茶器茶碗	陶器	五個	〇三〇	一五〇
茶瓶	大	壱個	七〇〇	七〇〇
土瓶	小	壱個	二五〇	二五〇
小バケツ	古色漆用器	参個	一八〇	五四〇
空罐	仝	弐個	一〇〇	二〇〇
木印	委員総長　委員工事主任　庶務委員長　工事監督　會計委員長	六個	一字二付	二四〇〇
仝	長保護建造物修理工事會計委員長 長保護建造物修理工事委員部ノ印 長保護建造物修理工事委員総長ノ印 長修第　號 受修第　号　昭和　年　月　日	六個	〃 一二六強	六　九七〇

古残物処分明細書（寺院へ無償支付）

一金参拾八圓九拾錢也

内譯

名称	摘要	員数	単價	小計
古残材	長二間　巾四尺整積　巾四間	弐拾五石	五〇〇	二二五〇〇
古露盤	破損シタルモノ	壱個	二〇〇〇	二〇〇〇
〃九輪筒	仝	九個		
〃九輪	仝	壱個	一〇〇〇	一〇〇〇
古平瓦		七百弐拾枚	〇一二〇	七二〇〇
〃丸瓦		九百個	〇一二〇	九〇〇〇
〃唐草		百個	〇一二〇	一二〇〇
〃巴瓦		百八拾個	〇一二〇	三六〇〇
割駄斗		百六拾枚	〇一二〇	一六〇〇

附帯工事精算書

一金四百拾四圓八十錢也　総工費

内　木材費

金貳百八拾六圓八拾壱錢

内訳

名称	品目	長	寸法	員数	単價	小計
土台	檜	拾三尺	三寸五分角	五丁	七三二〇	三六一〇〇
仝	仝	拾弐尺	仝	参丁	七三二〇	二二六六〇
柱	仝	四尺	三寸角	八拾壱丁	一七〇〇	一三七七〇〇
仝	仝	四尺	三寸　一寸七分	六丁	一〇六〇	六三六〇
仝貫	仝	拾三尺	巾三寸　厚七分	拾八丁	一六〇〇	二八八〇〇
仝	仝	九尺	仝寸	六丁	一二〇〇	七二〇〇
控柱	仝	五尺	三寸角	弐拾参丁	二一三〇	四八九九〇

金拾八圓也雑費

内譯

名称	摘要	員数	単價	小計
砂	木柵内部敷用	壱五合	三六〇〇	一八〇〇

金百拾圓也工料費

内譯

名称	摘要	員数	單價	小計
木工	木柵建設ニ係ル木工手間	拾九人	三〇〇〇	五七〇〇〇
仝	仝	拾弐人	二七〇〇	三二四〇〇
仝	仝	拾人	五〇〇	五〇〇〇
人夫	木柵建設ニ係ル人夫手間	四人	二〇〇〇	八〇〇〇
仝	仝	四人	一九〇〇	七六〇〇

金百拾圓也工料費

内訳

名称	摘要	員数	單價	小計
木工	木柵建設ニ係ル木工手間	拾九人	三〇〇〇	五七〇〇〇
仝	仝	拾弐人	二七〇〇	三二四〇〇
仝	仝	拾人	五〇〇	五〇〇〇
人夫	木柵建設ニ係ル人夫手間	四人	二〇〇〇	八〇〇〇
仝	仝	四人	一九〇〇	七六〇〇

工事資金銀行預金利息

昭和二年十一月十日迄ノ利息

金参拾貳圓六拾七錢也

昭和三年十一月十日迄ノ利息

金貳百五拾七圓拾貳錢也

昭和三年十一月十日迄ノ利息

金壱百九拾七圓六拾七錢也

昭和四年三月十二日迄ノ利息

金四拾四圓六拾参錢也

計金五百参拾貳圓九錢也

特別保護建造物多寶塔及鎮守堂修理並鎮守堂木柵建設竣工御届

和歌山縣海草郡濱中村　天台宗　長保寺

當寺特別保護建造物多寶塔及鎮守堂修理工事並鎮守堂木柵建設之義昭和参年十二月十一日全部竣工致豫テ工事依托仕置候和歌山縣知事野手耐殿ヨリ引渡相成候付別紙精算書相添此段以連署及御届也

昭和四年五月十四日　　右長保寺住職　瑞樹定海

長保寺末寺総代　福蔵院住職　野口貫孝

仝　神光寺住職　一柳恵章

右寺檀徒候補　徳川頼貞代　加藤　杲

文部大臣　勝田主計殿

一、中心柱ノ発見シタル墨書左ノ通リ

長保寺御塔修営□舊□□□勧進諸人固下檀

遷□所奉修造之也　是倫聖朝安穏國土奉平

御本家領家當寺別當并預所六□供僧諸僧

等

将又勧進弘法経僧衆施主結縁助成之族先師

弘眞祐深□□一□□父母六親人民等

一切如来心神秘密前身□

執事盛檜

補瓦葺□ヵ

勧進盛人□□正平十二年丁酉十月三日

寺□……□□敬白

ヒ勹□□　日諸檀施主六□供僧衆徒等

勧進聖人ネ氵門徒阿闍梨□□

大工　藤原有浜　□□□□□

鍛冶　沙弥□圓

藤原光眞

勧進増

□祐□□□□

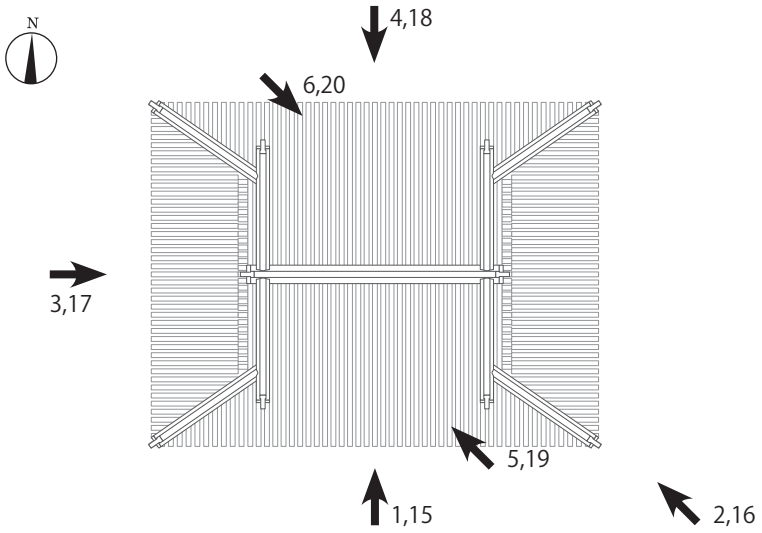
大工……

□四枡左衛門□

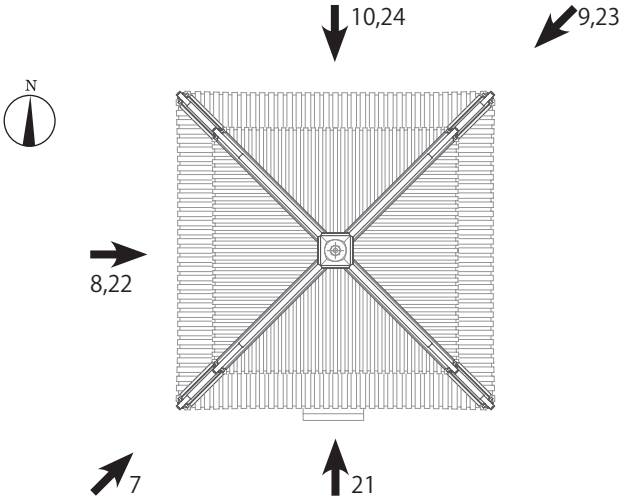
写

真

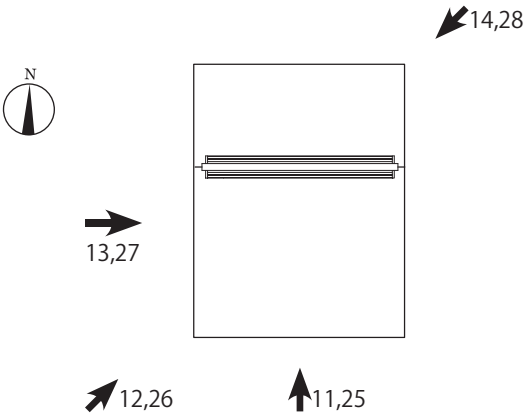
写真撮影位置図



大　門



多宝塔



鎮守堂

1　正面全景

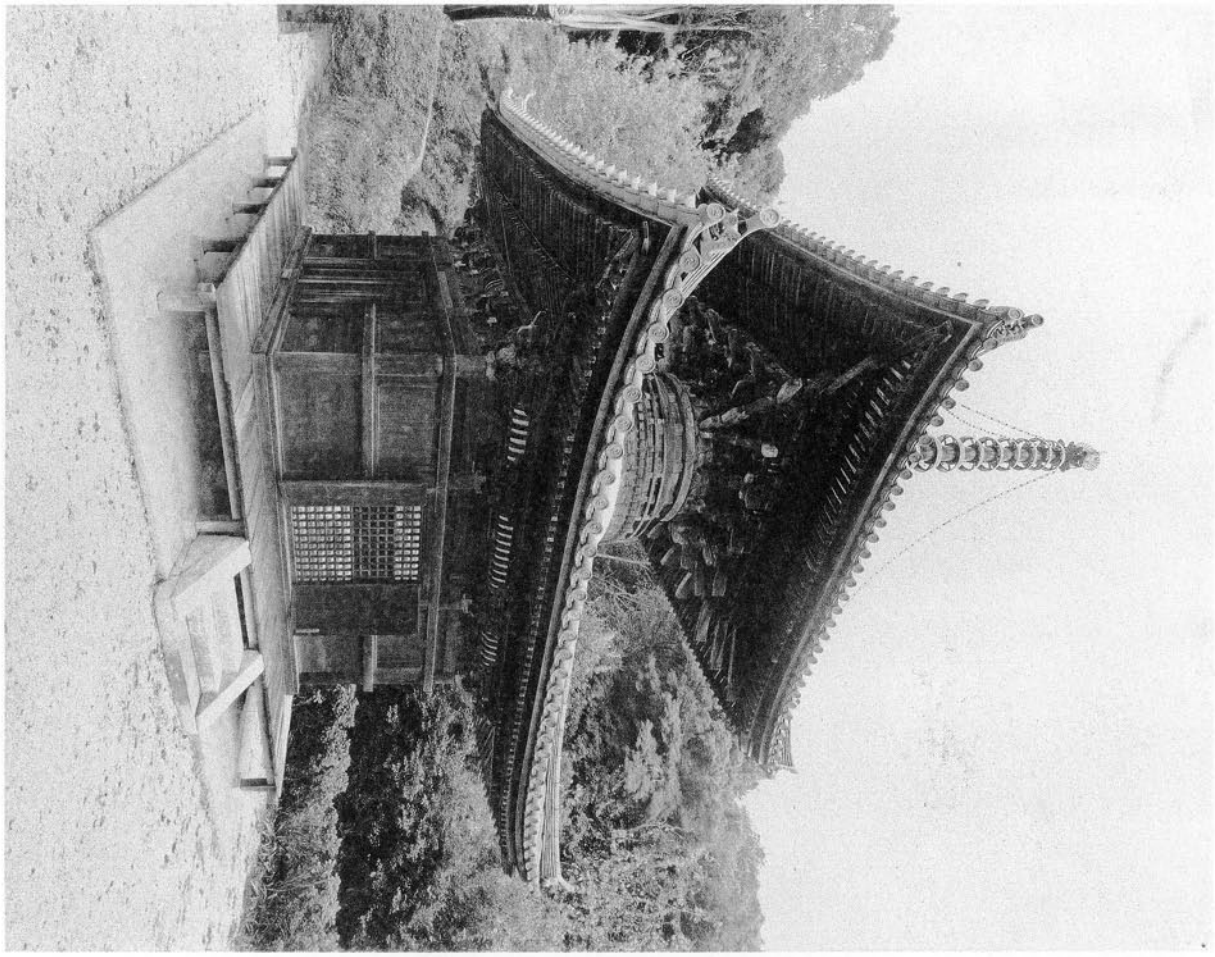
2　南東より見る

3　西より見る

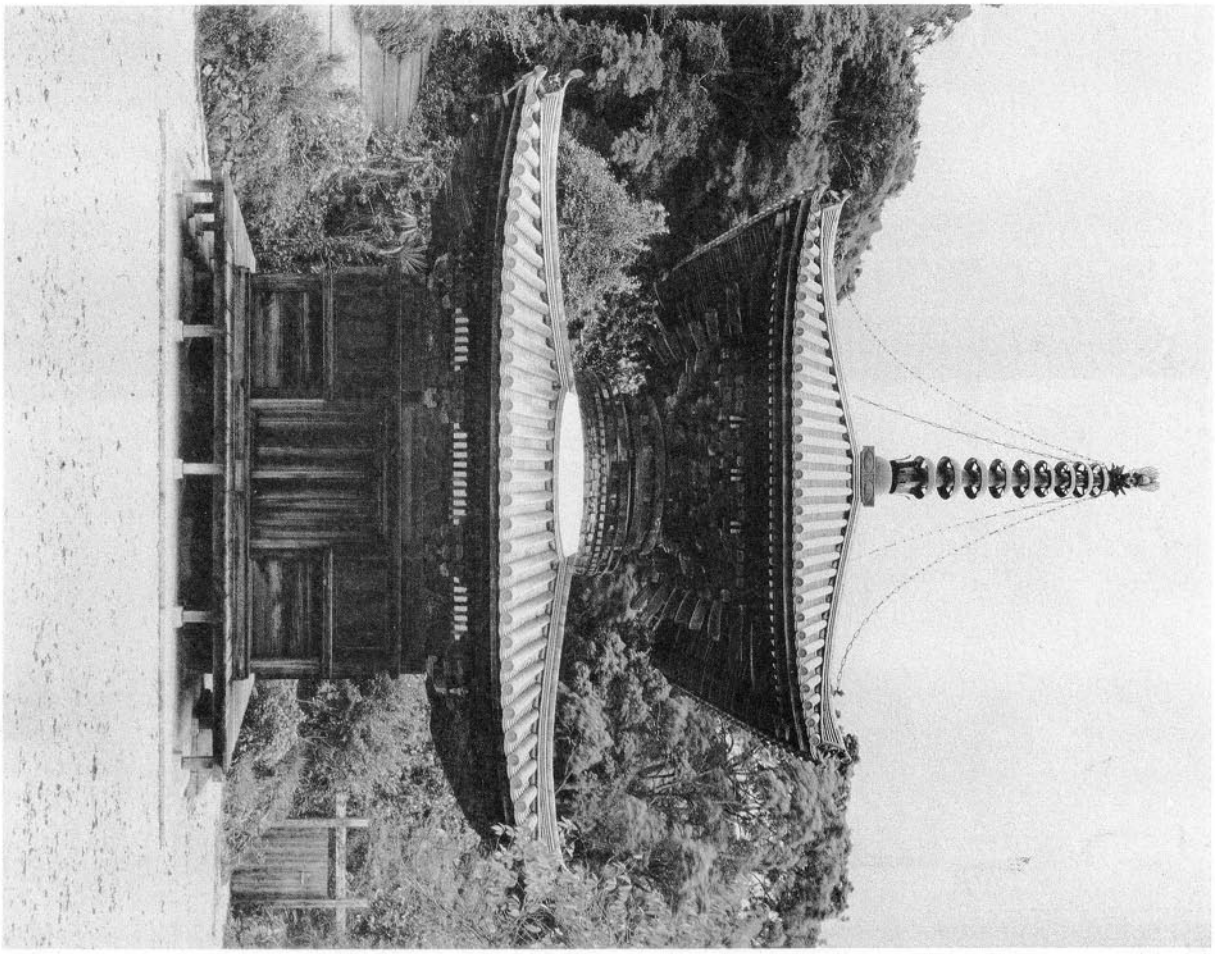
4　北より見る

5　南東より内部を見る

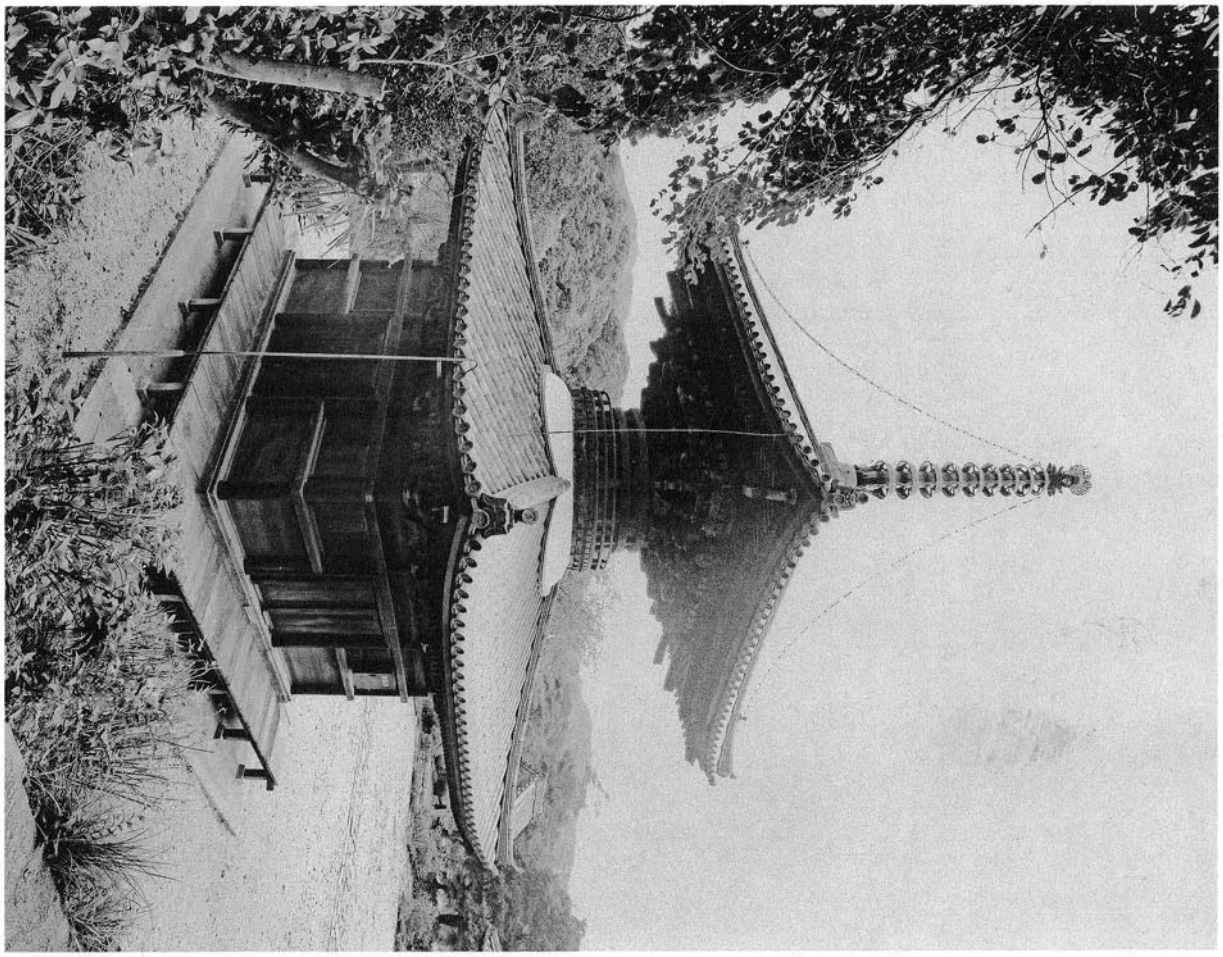
6　北西より内部を見る



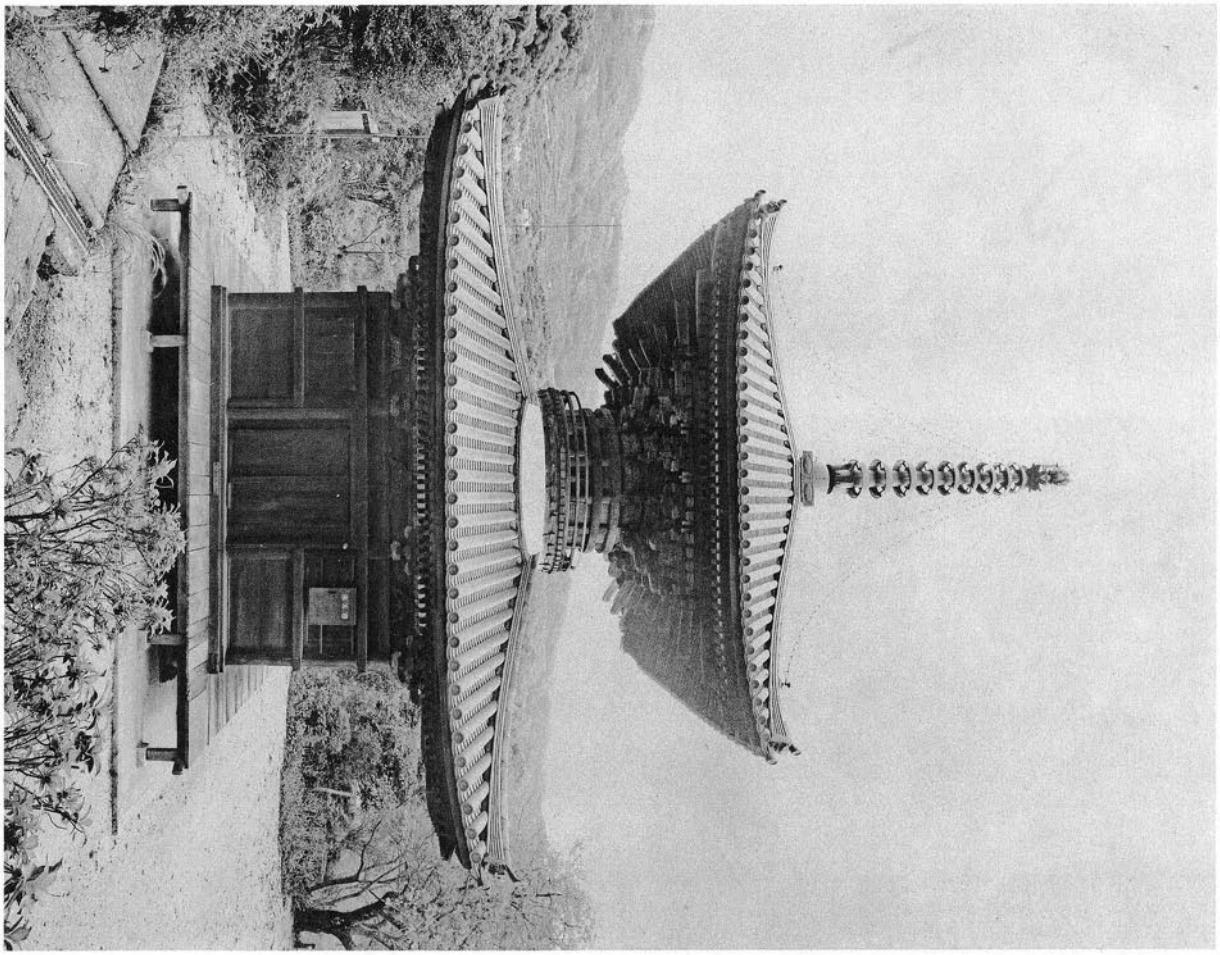
7　南西より見る



8　西より全景を見る



9　北東より見る



10　北より見る

11　正面全景

12　南西より見る

13　西より見る

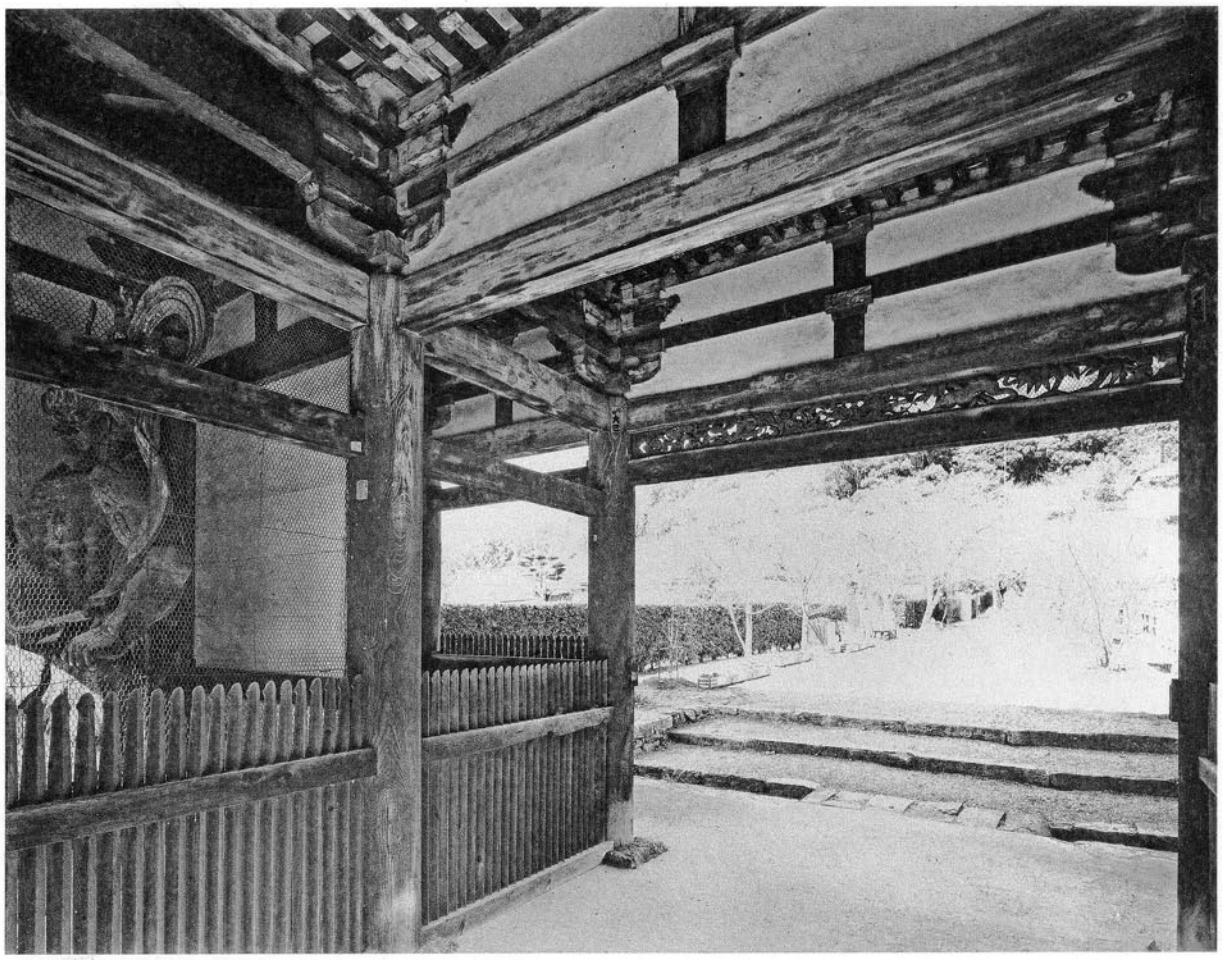
14　北東より見る

15　正面全景

16　南東より見る

17　西より見る

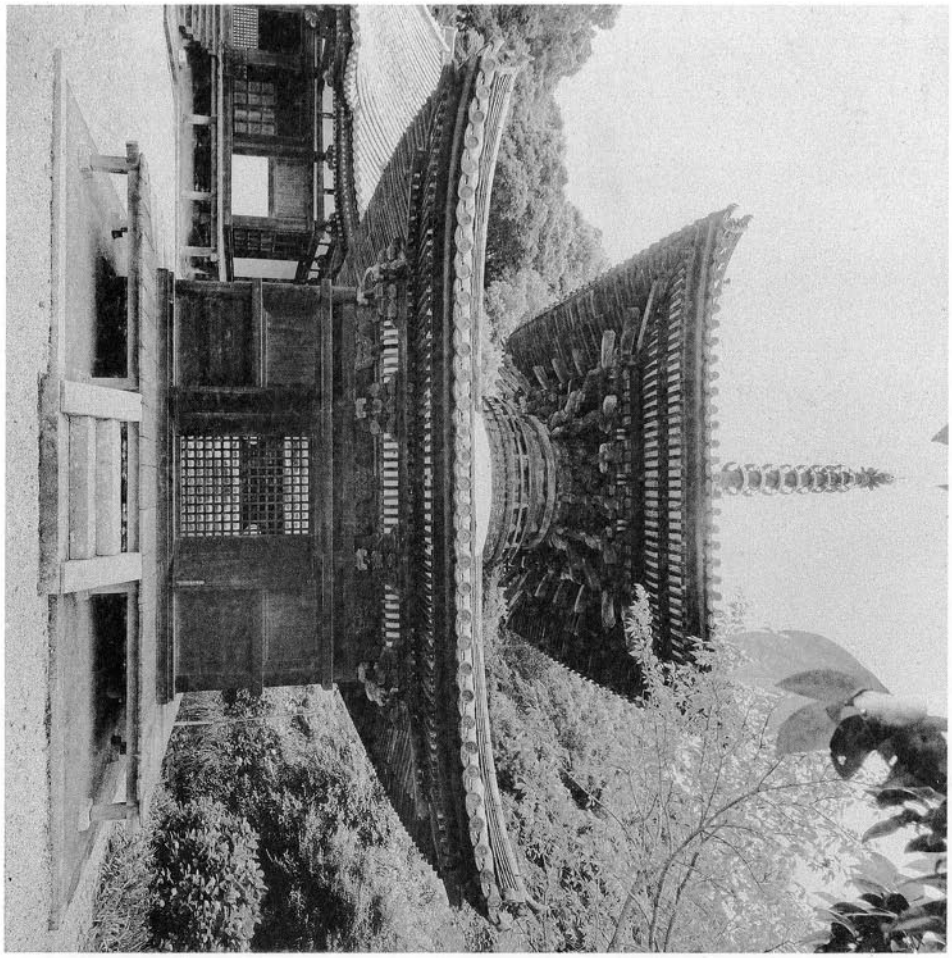
18　北より見る



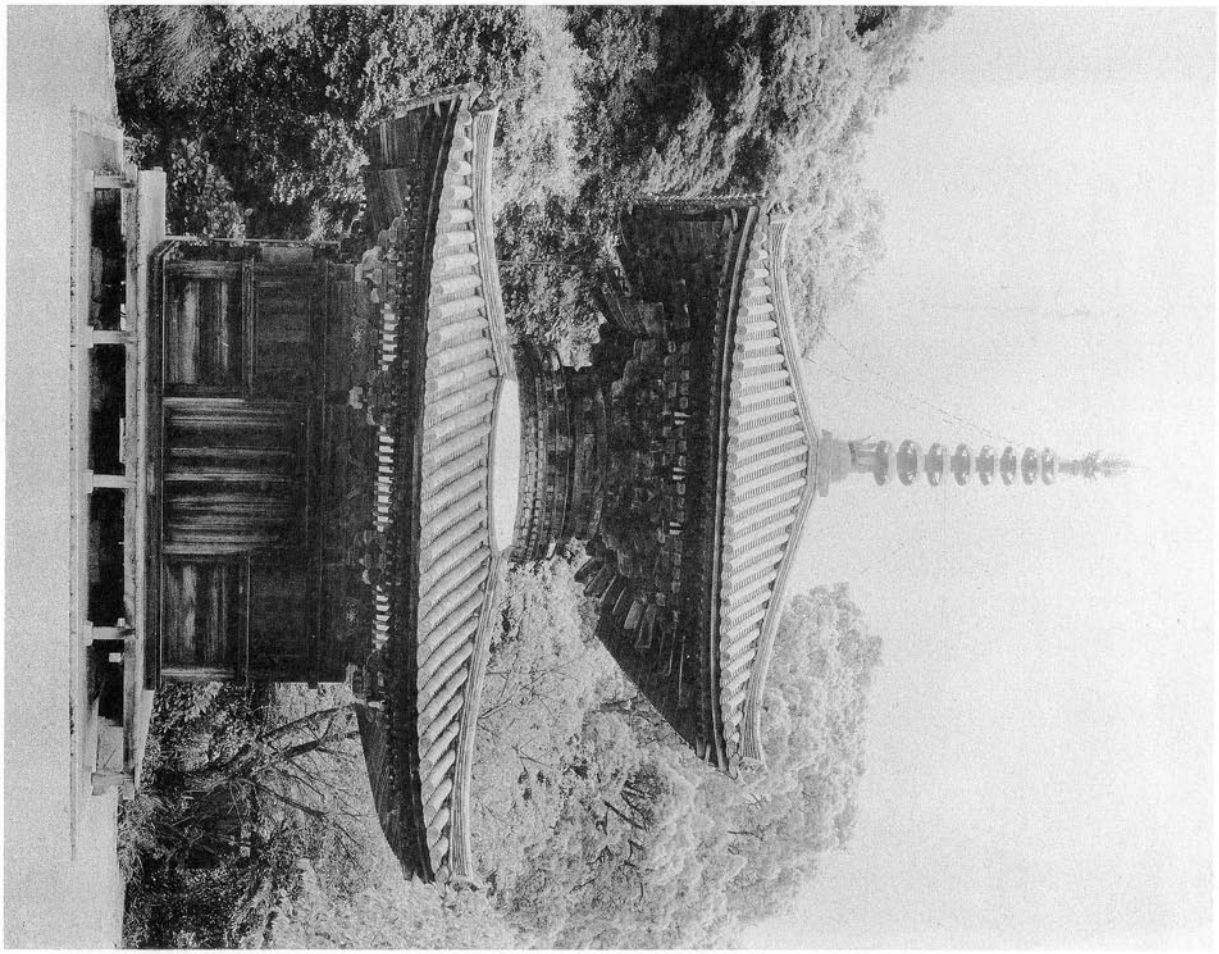
19　南東より内部を見る

20　北西より内部を見る

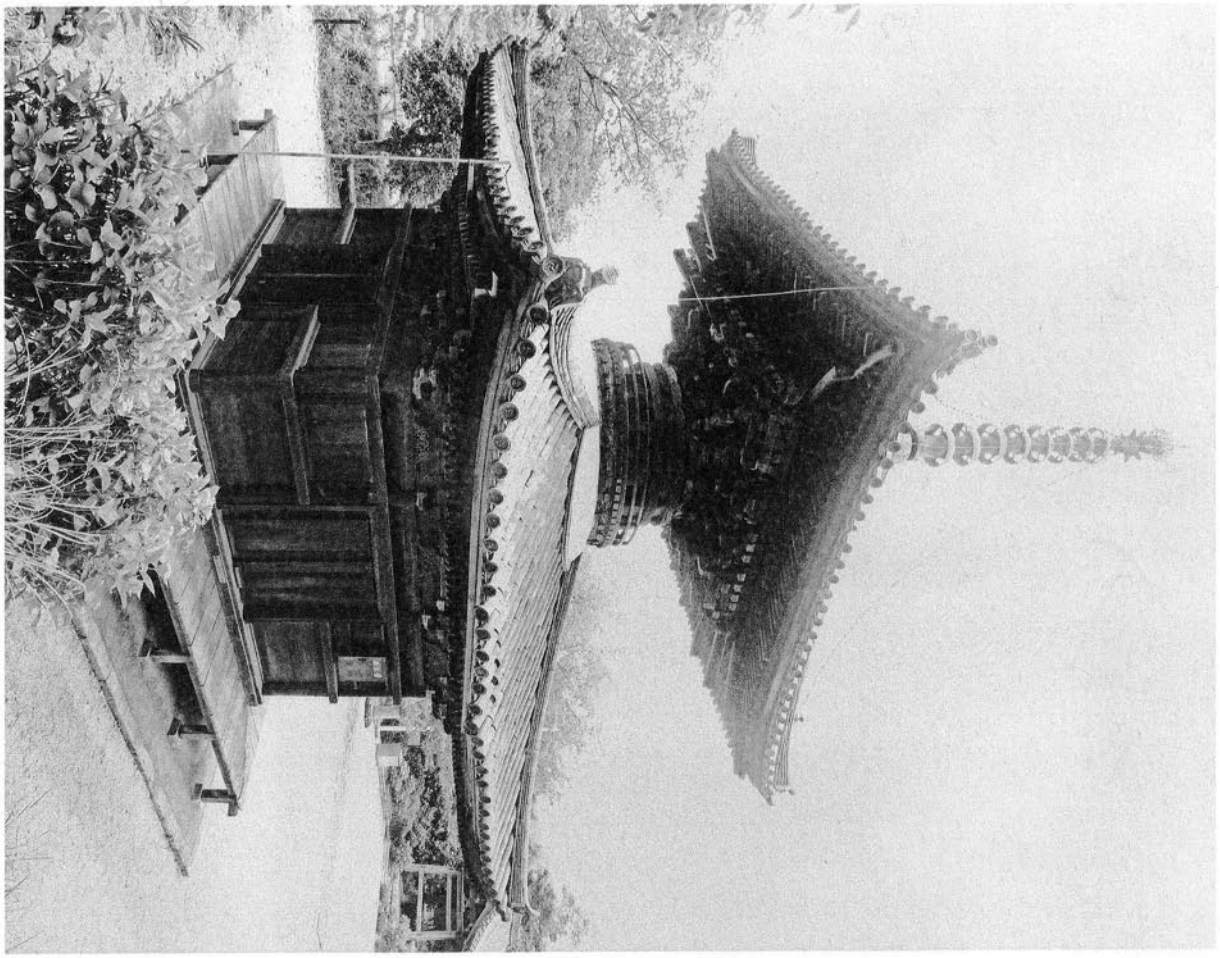
修理前　多宝塔



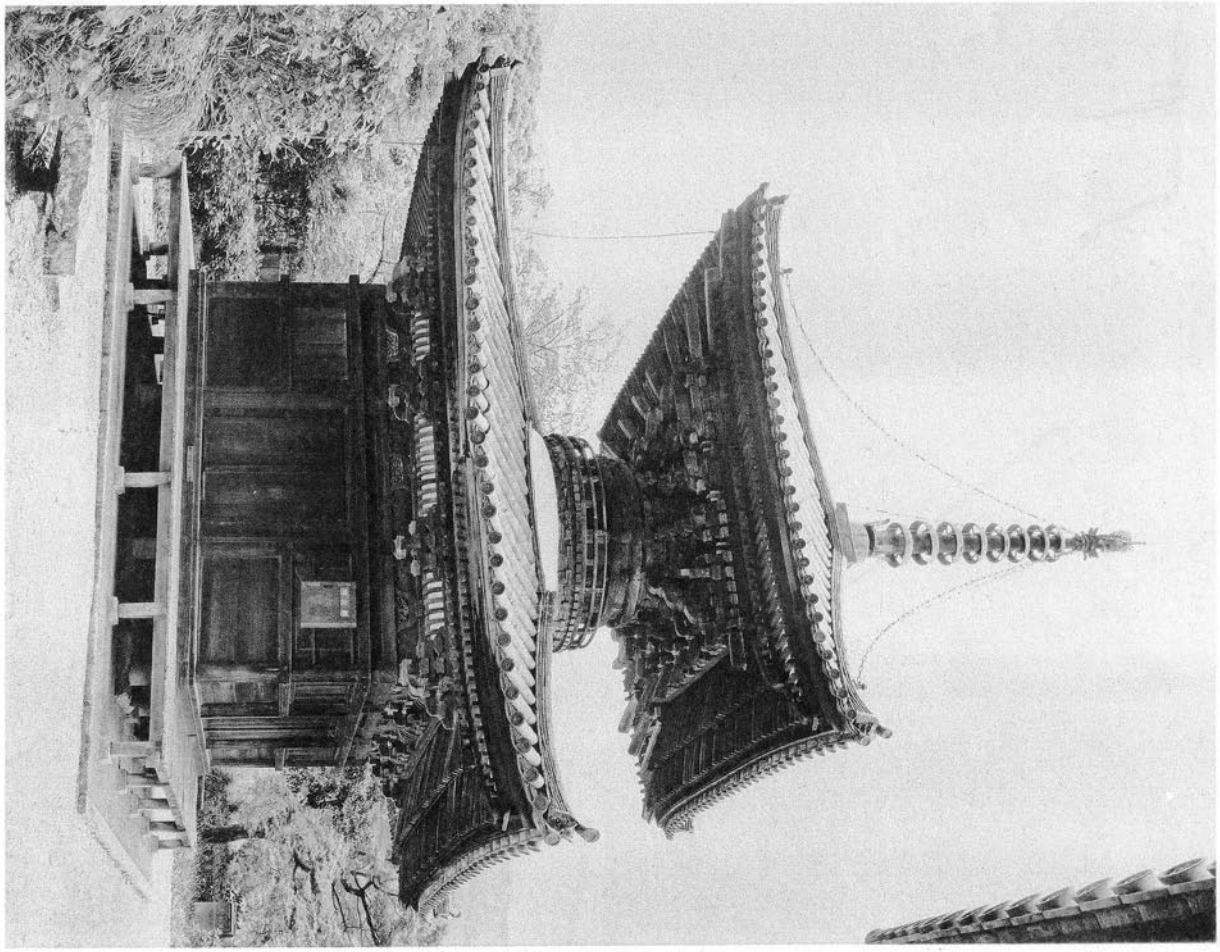
21　正面全景



22　西より見る



23　北東より見る



24　北より見る

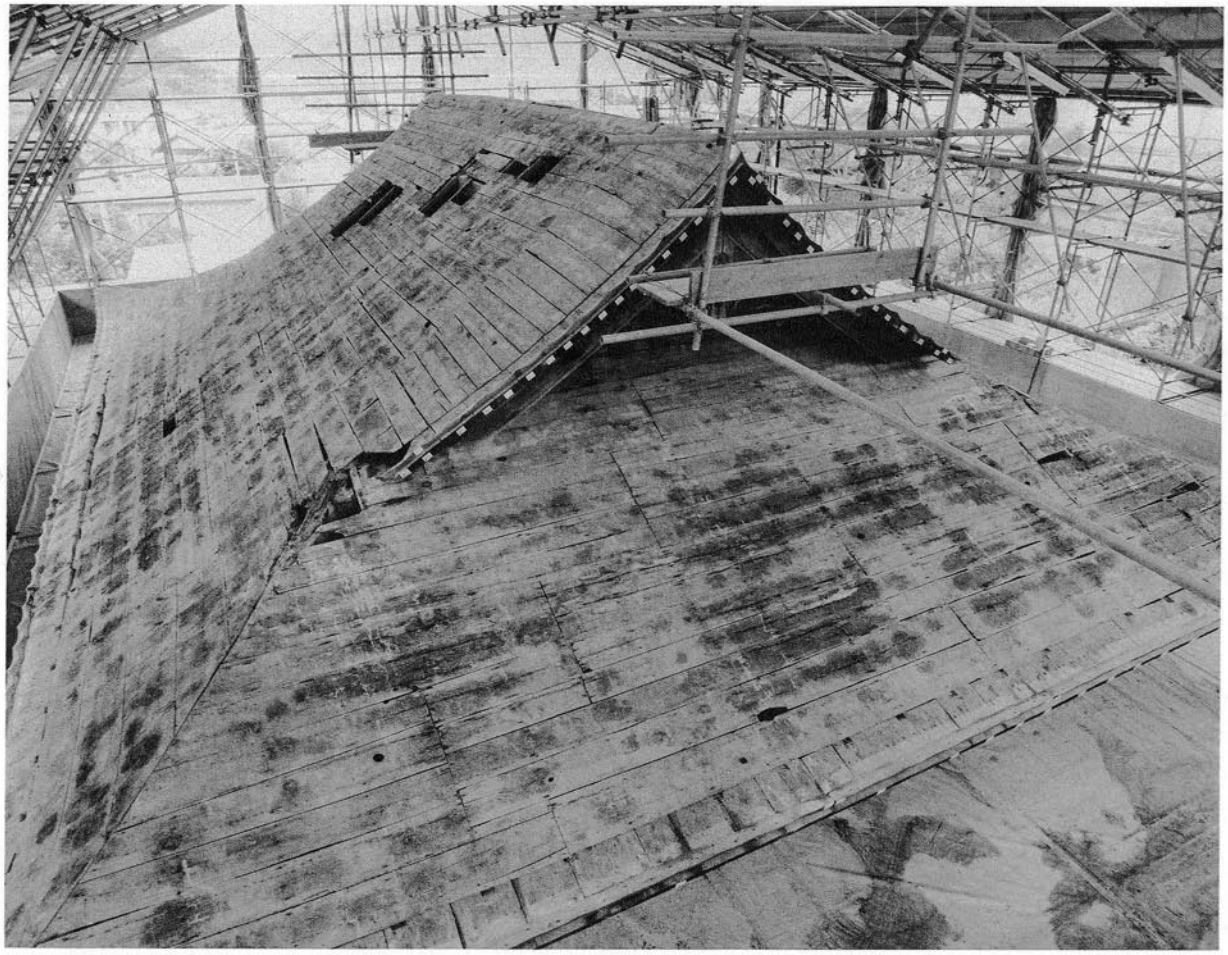
25　正面全景

26　南西より見る

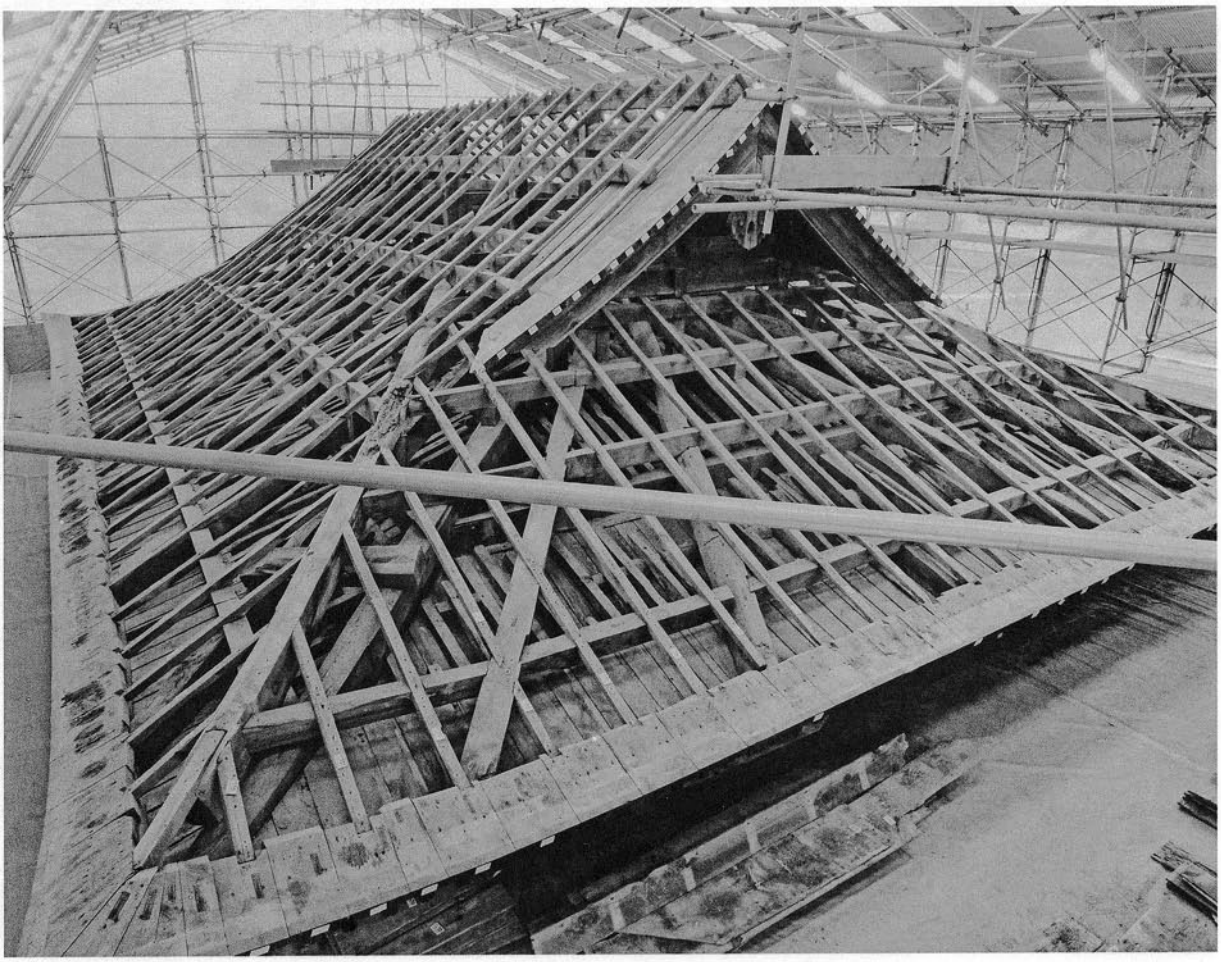
27　西より見る

28　北東より見る

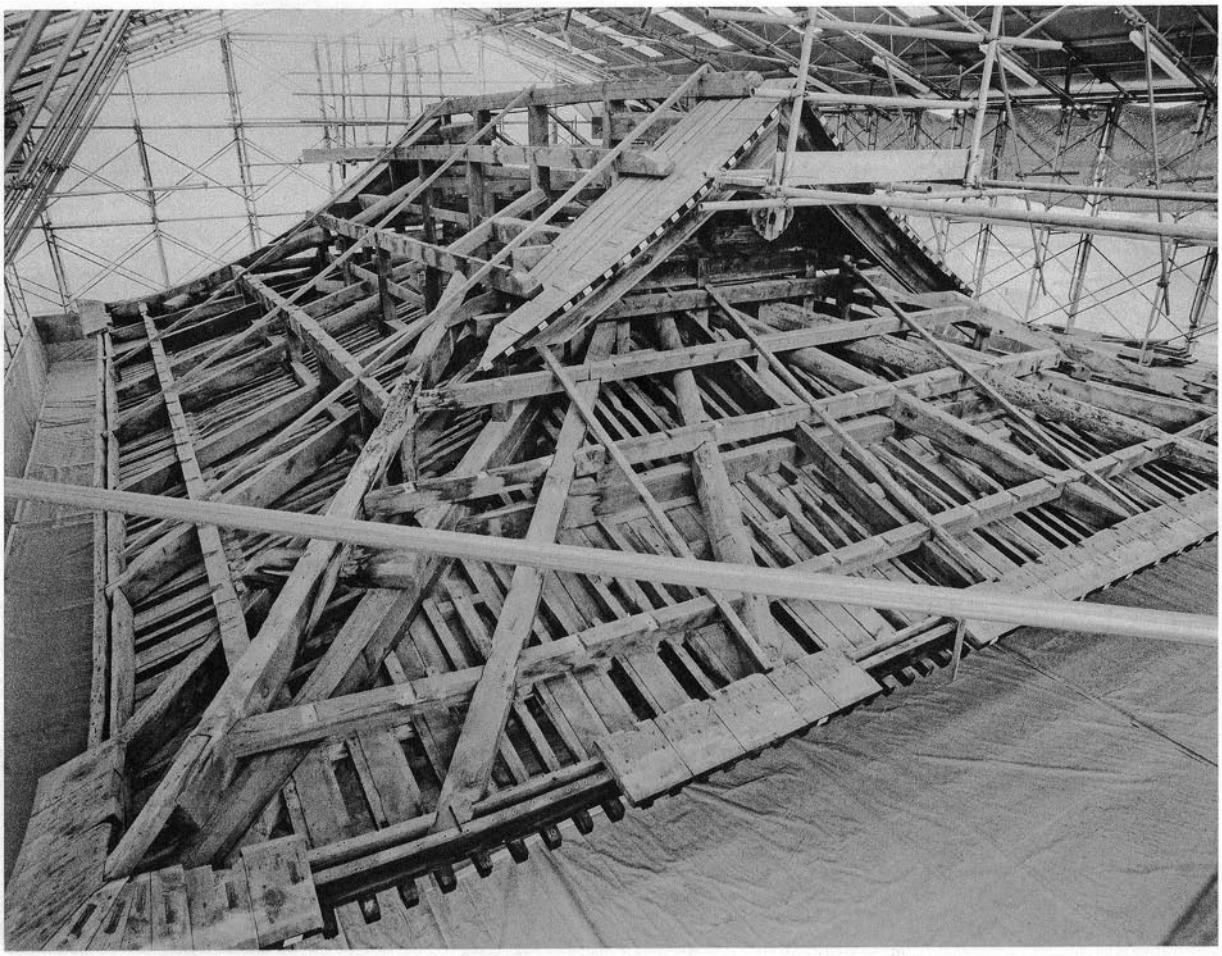
29　修理前の屋根の状況（南東より見る）



30　野地板の状況（南東より見る）

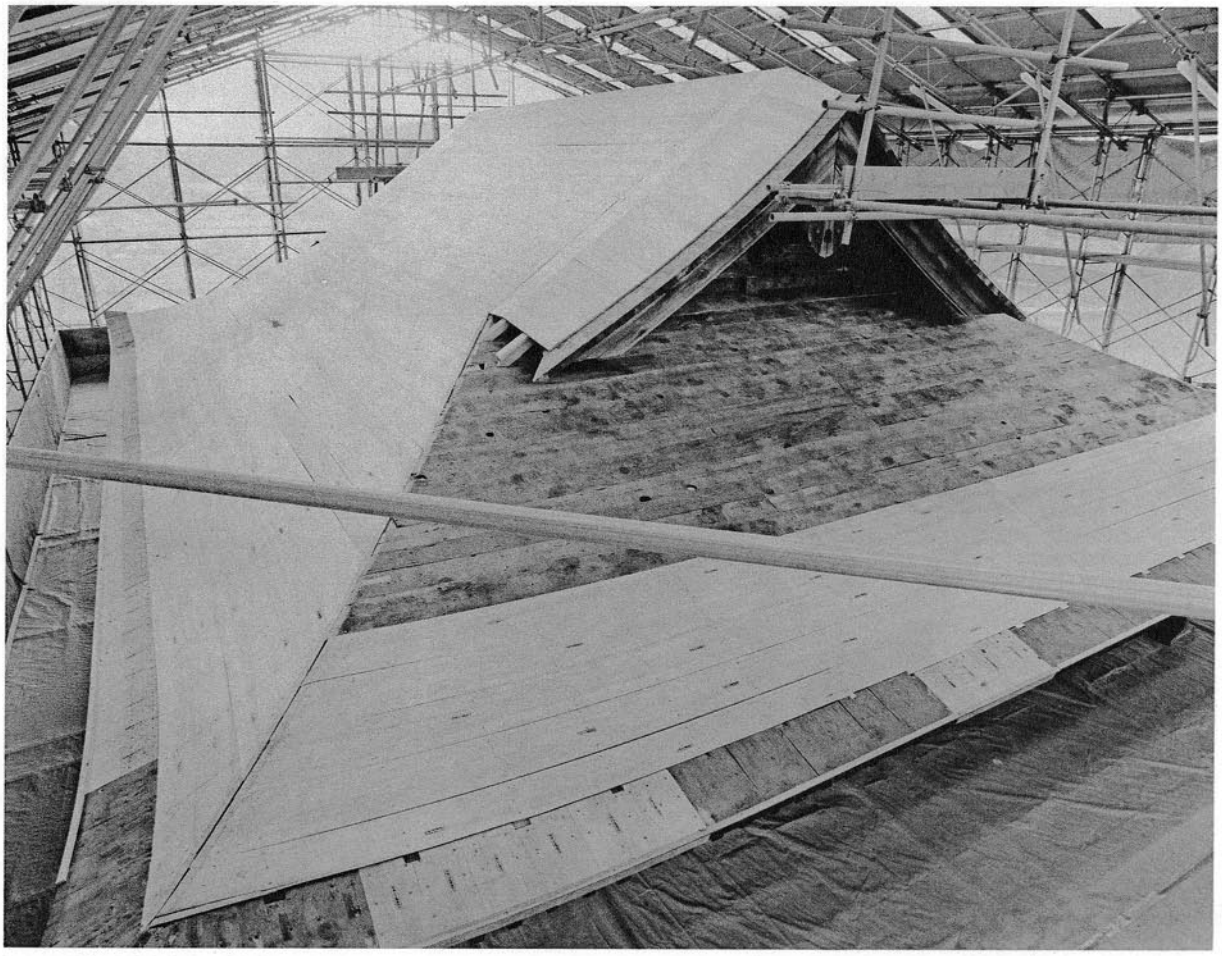


31　野垂木の状況（南東より見る）

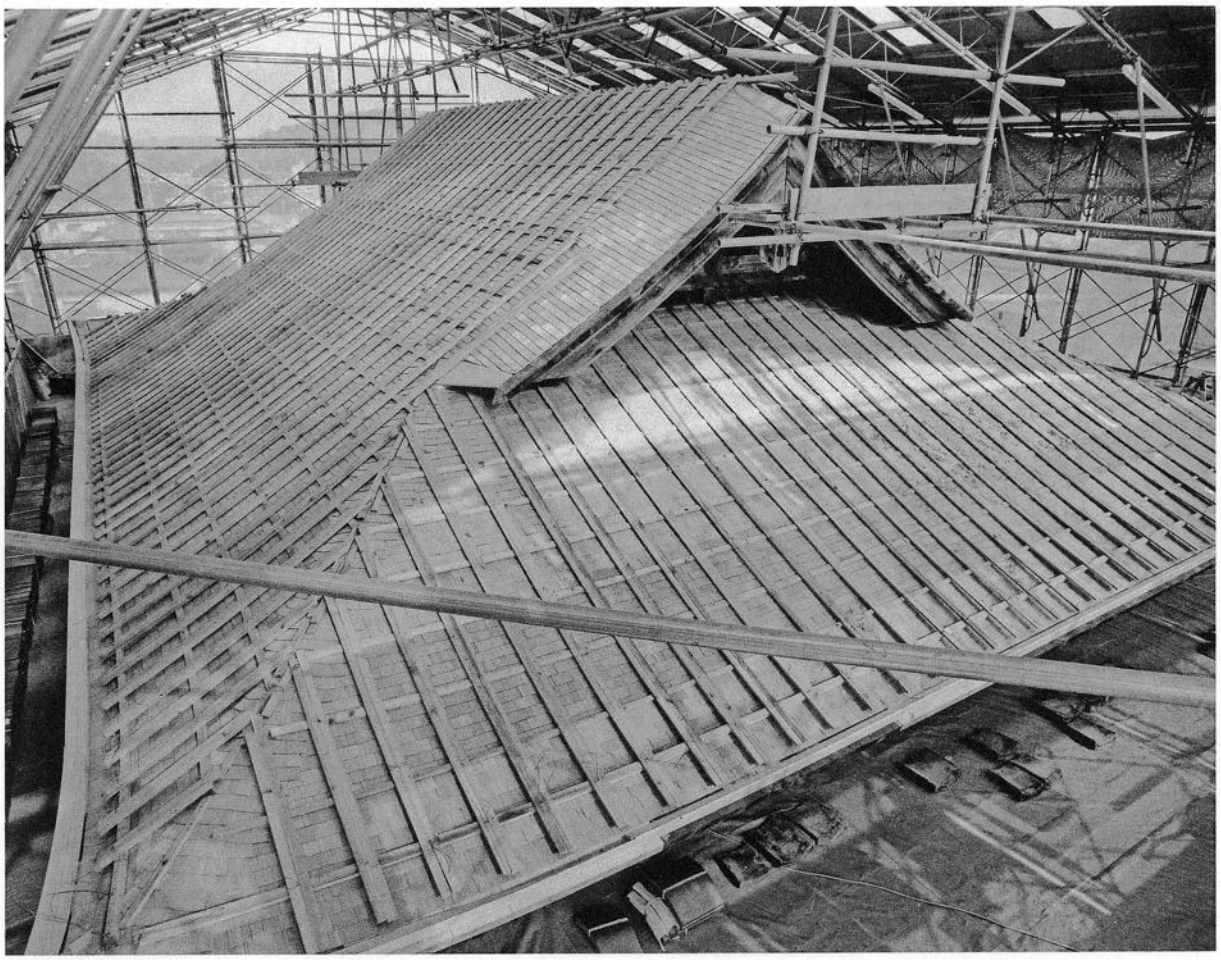


32　修理範囲解体完了（南東より見る）

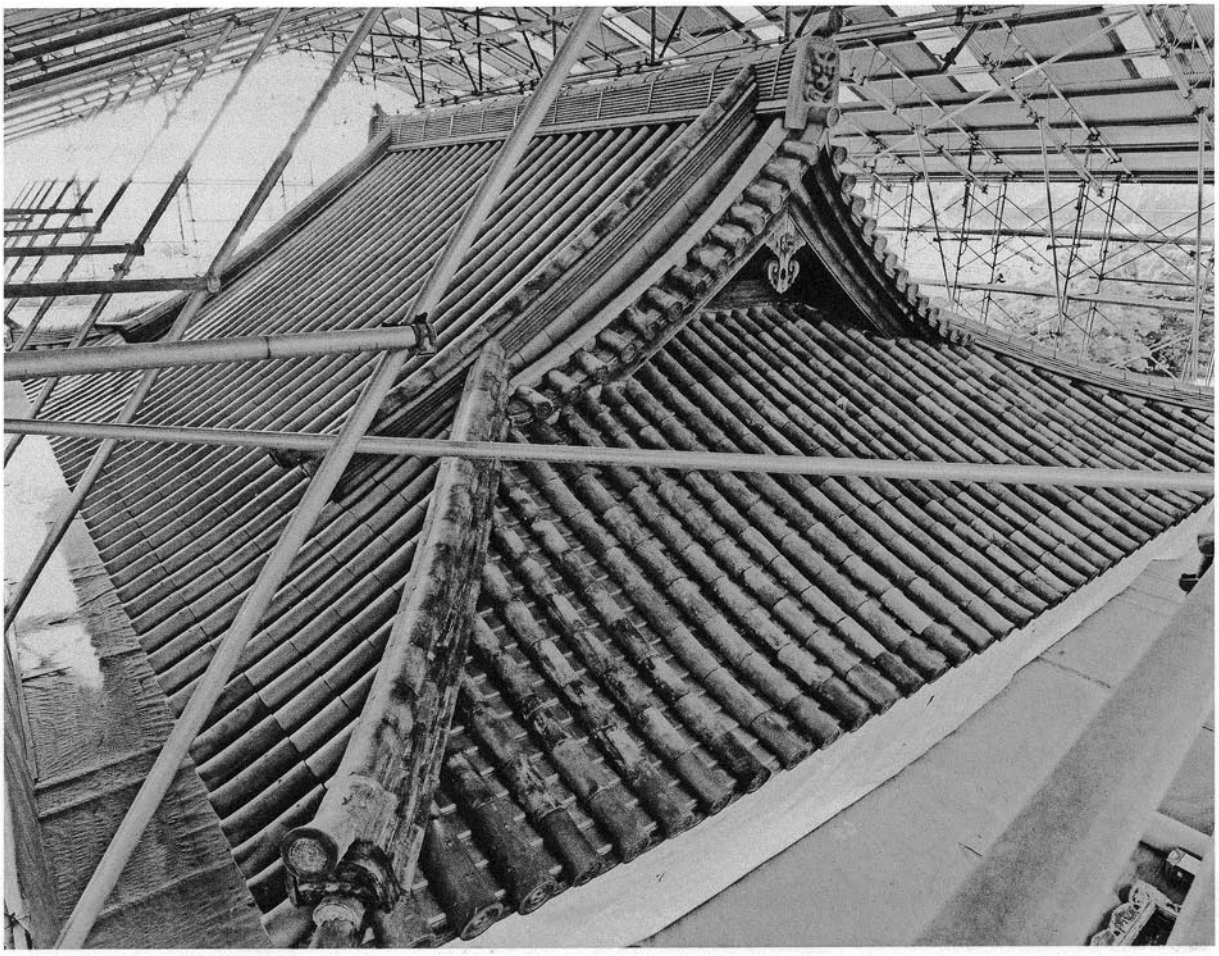
33　野垂木まで修理完了（南東より見る）



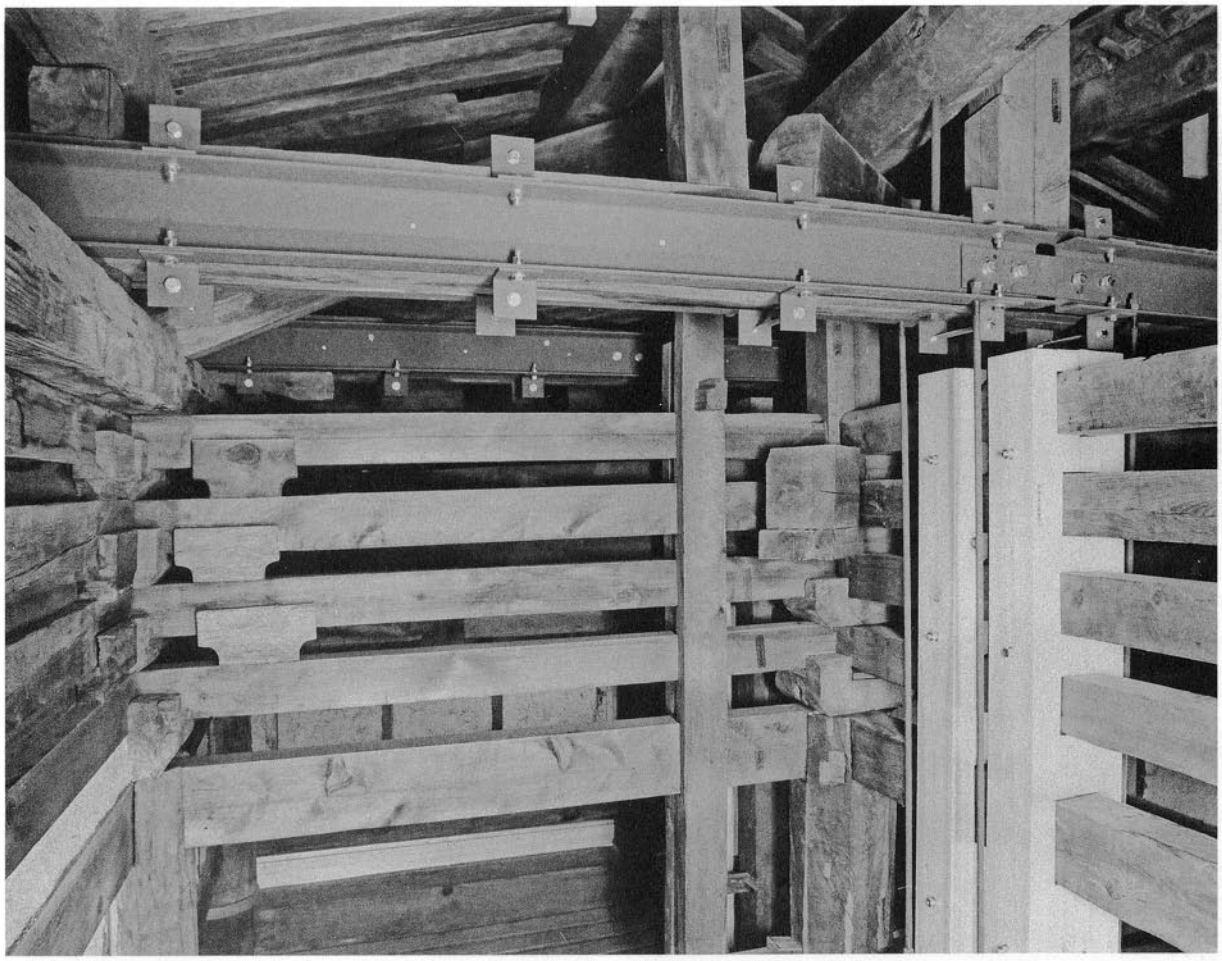
34　野地板張り完了（南東より見る）



35　空葺下地の瓦桟打ち完了（南東より見る）



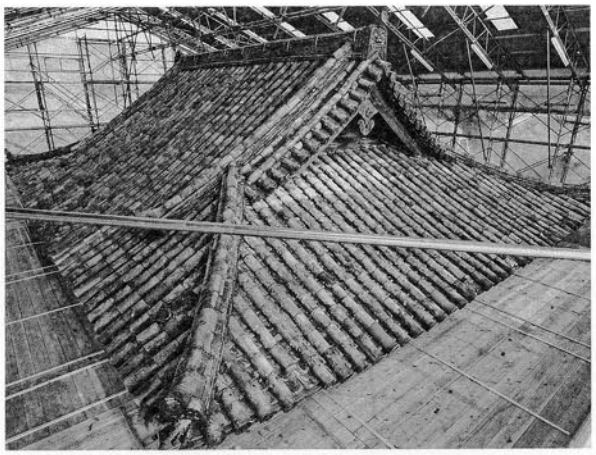
36　屋根葺完了（南東より見る）



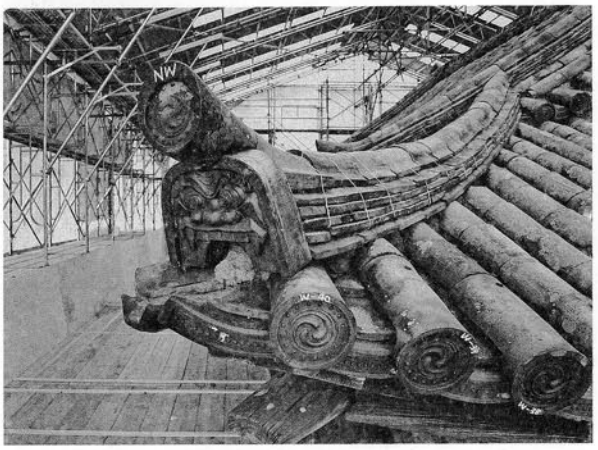
37　丸桁桔補強金具施工完了

38　明治修理の屋根葺仕様（北面部分解体）

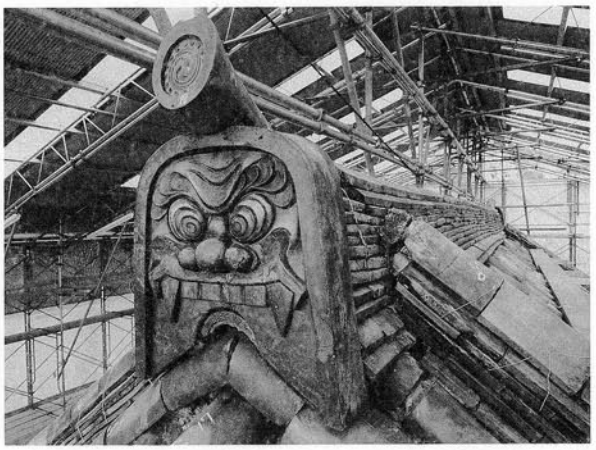
40　解体前妻面の状況（西妻）



39　解体前の屋根の状況（北西より見る）



42　北西隅棟（隅棟で唯一明治の施工が残る）

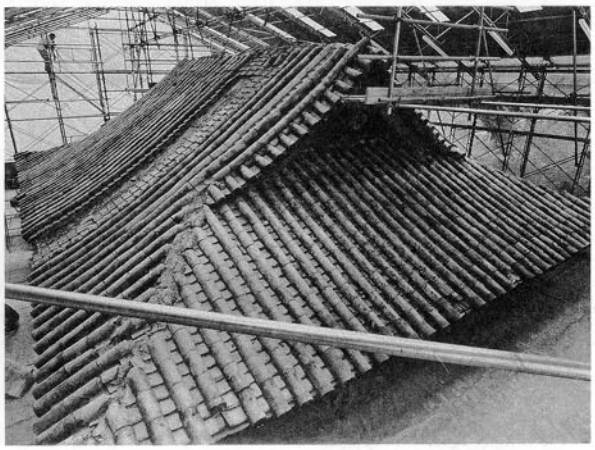


41　鬼瓦の納まり（西妻）

44　鬼瓦据え付け状況（東側）

43　大棟積の状況（衾瓦は昭和初期修理）

46　丸瓦葺土（白色は明治修理以降の修理）



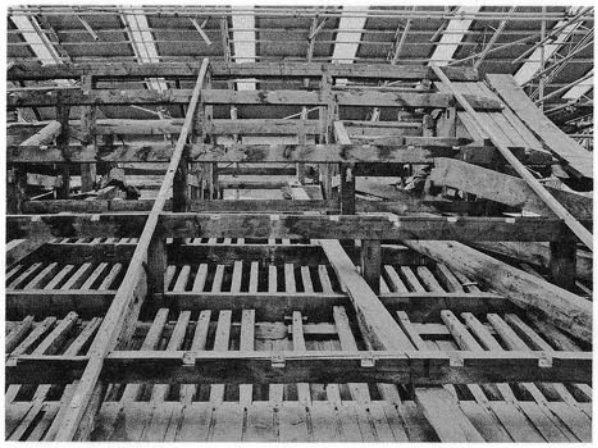
45　棟積解体完了状況（北西より見る）

48　中世平瓦は大小の瓦を葺き混ぜる（東面）

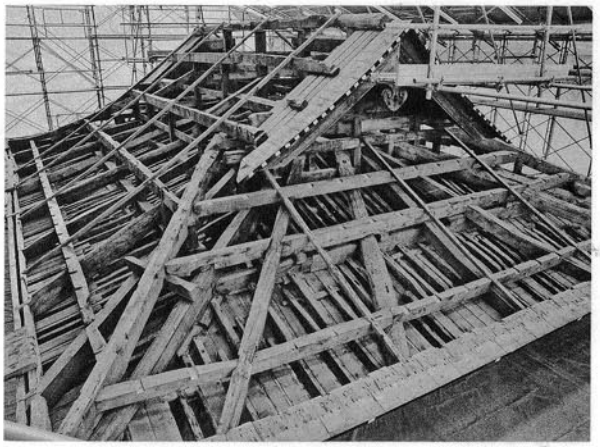
47　平瓦の状況（東面）

50　土居葺の隅背葺

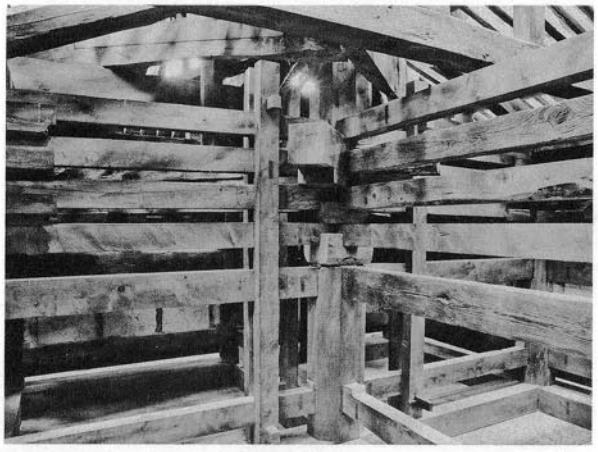
49　土居葺。蓑甲は葺地に下駄を履かせる



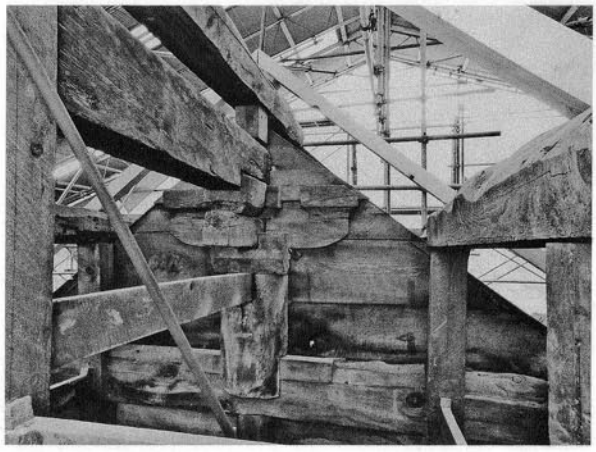
52　小屋組の状況（南より見る）



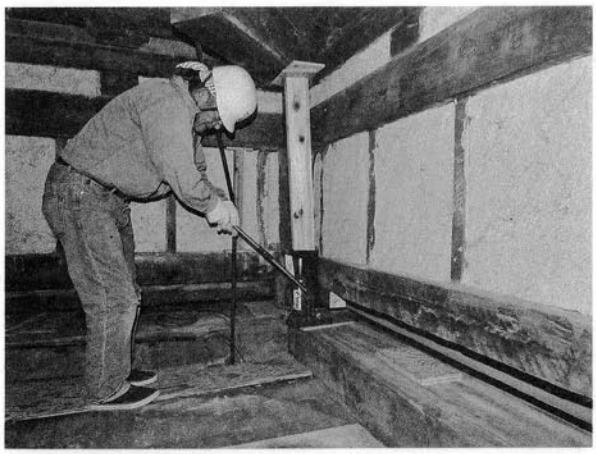
51　小屋組の状況（北西より見る）



54　小屋内の状況（北西より見る）

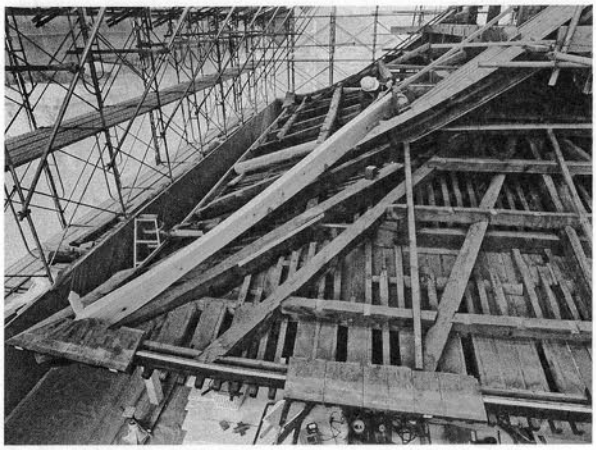


53　妻飾裏面の状況（西妻を見る）



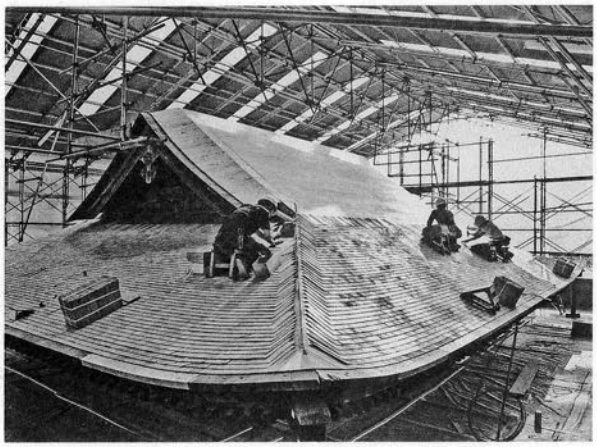
56　上層揚屋の状況

55　屋根瓦解体の状況

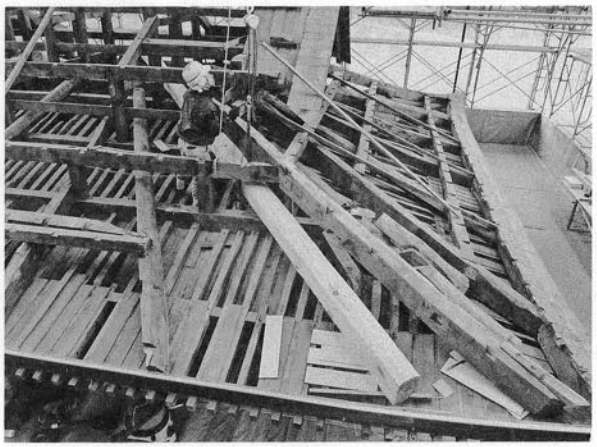


58　南東野隅木の取替状況

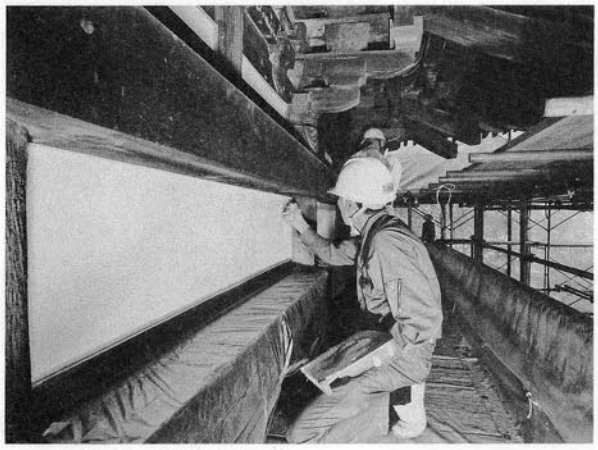
57　上層を揚屋し柱に木製飼物を挿入



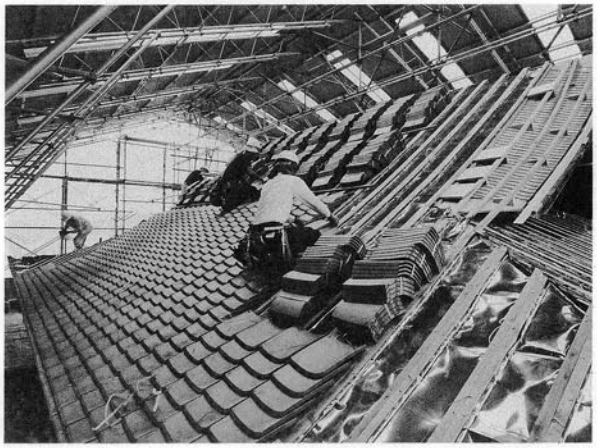
60　土居葺の施工状況



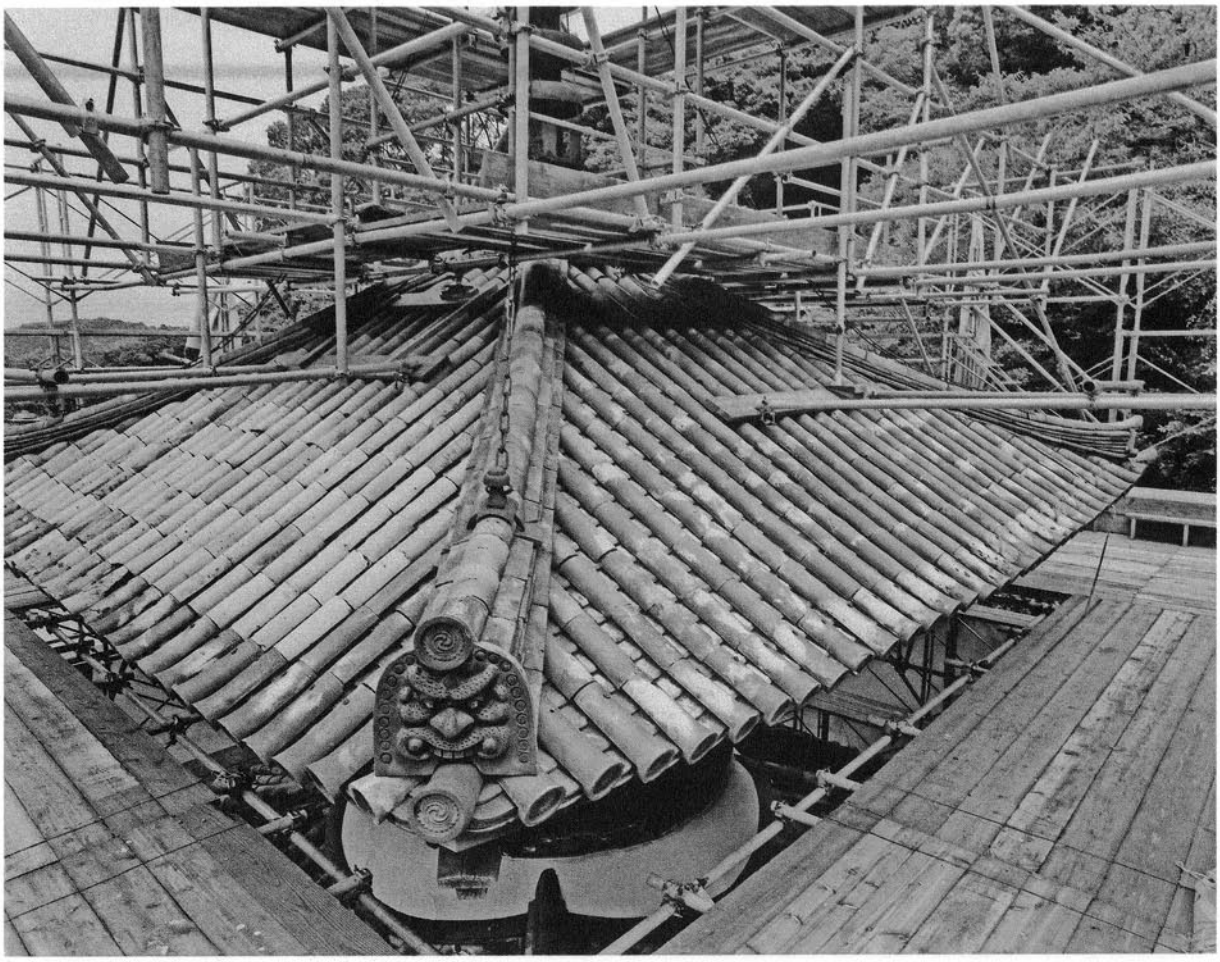
59　北西桔木の取替状況



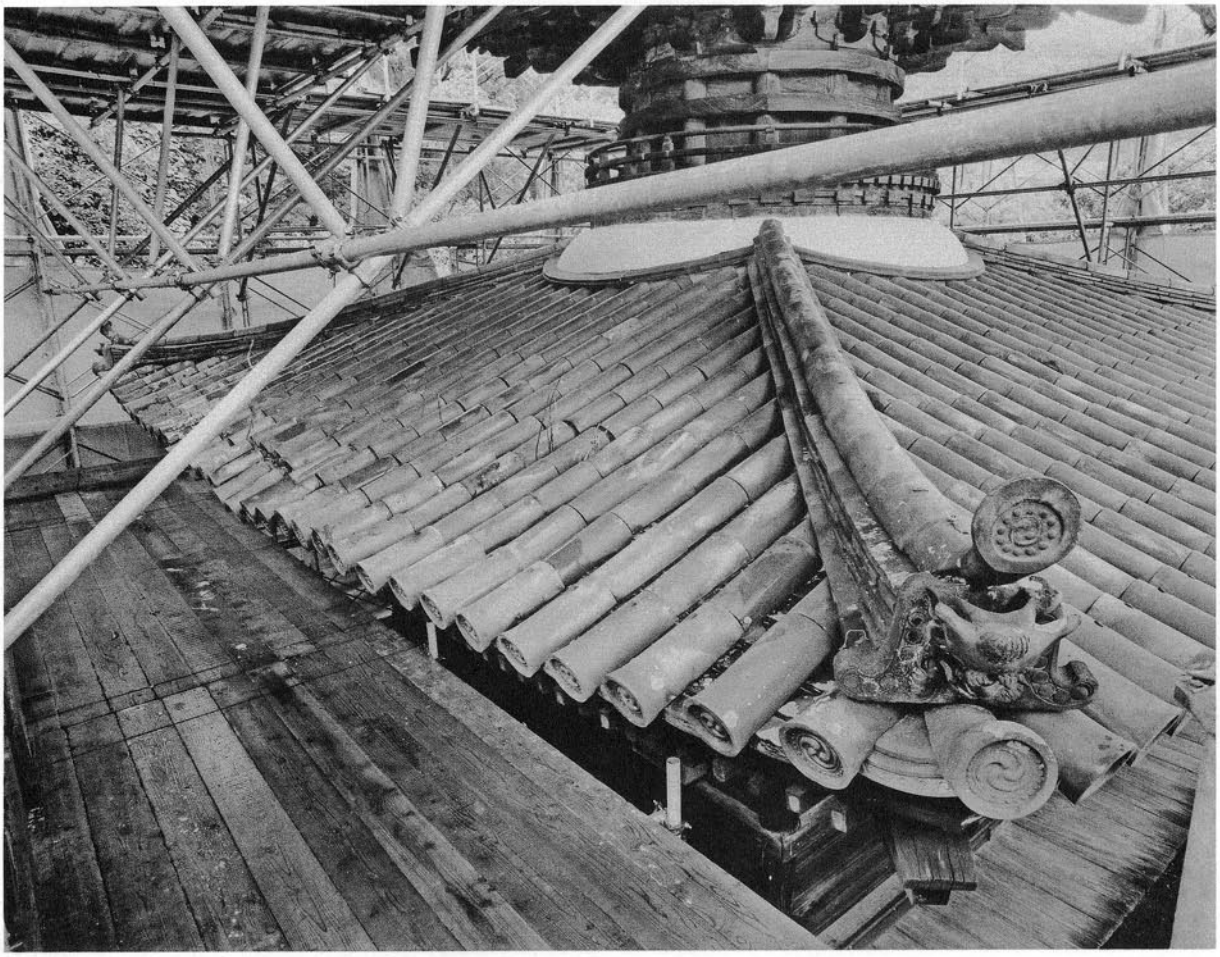
62　土壁の漆喰塗り直し状況



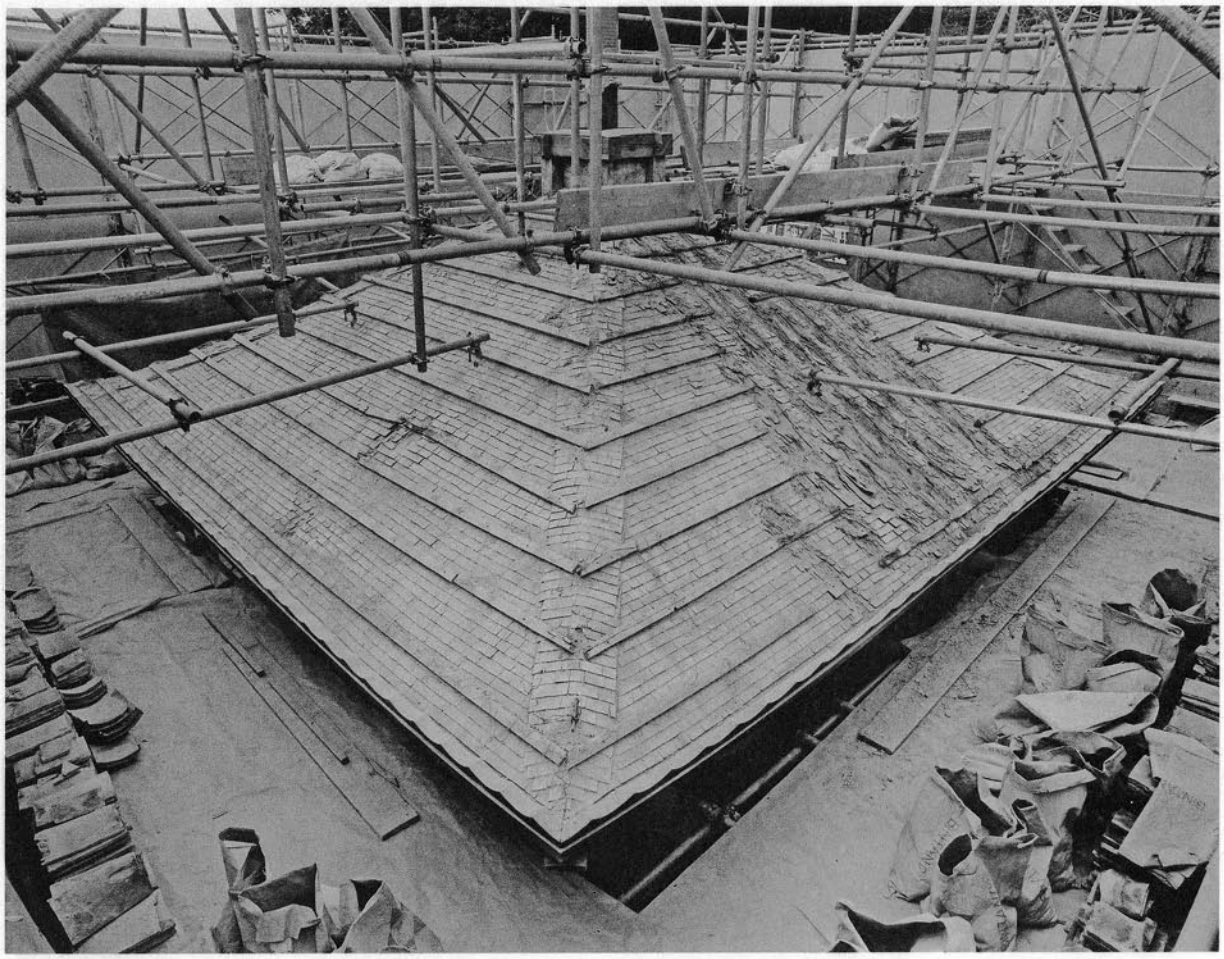
61　屋根葺状況（空葺下地には銅板を入れた）



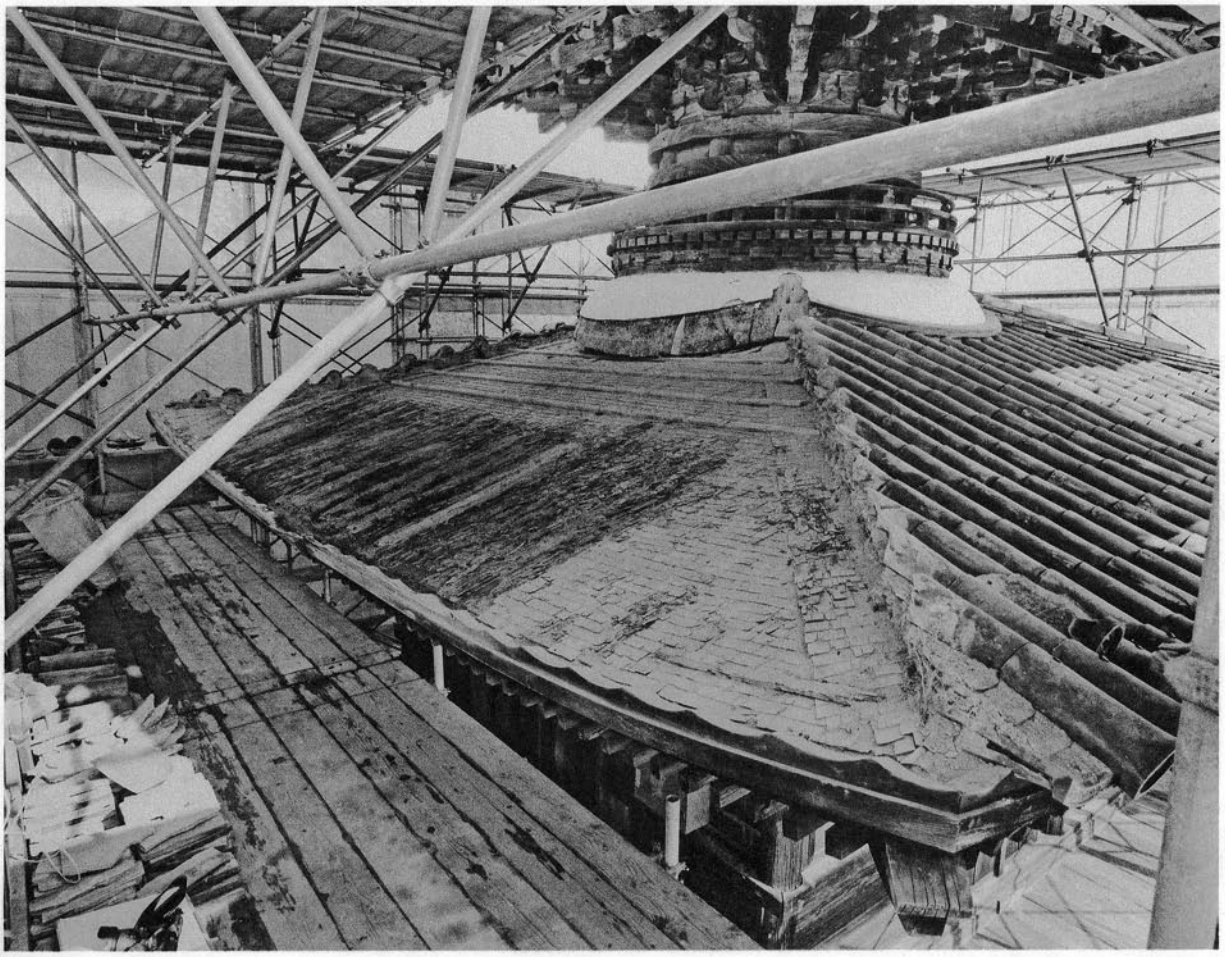
63　上層屋根の修理前の状況（南東より見る）



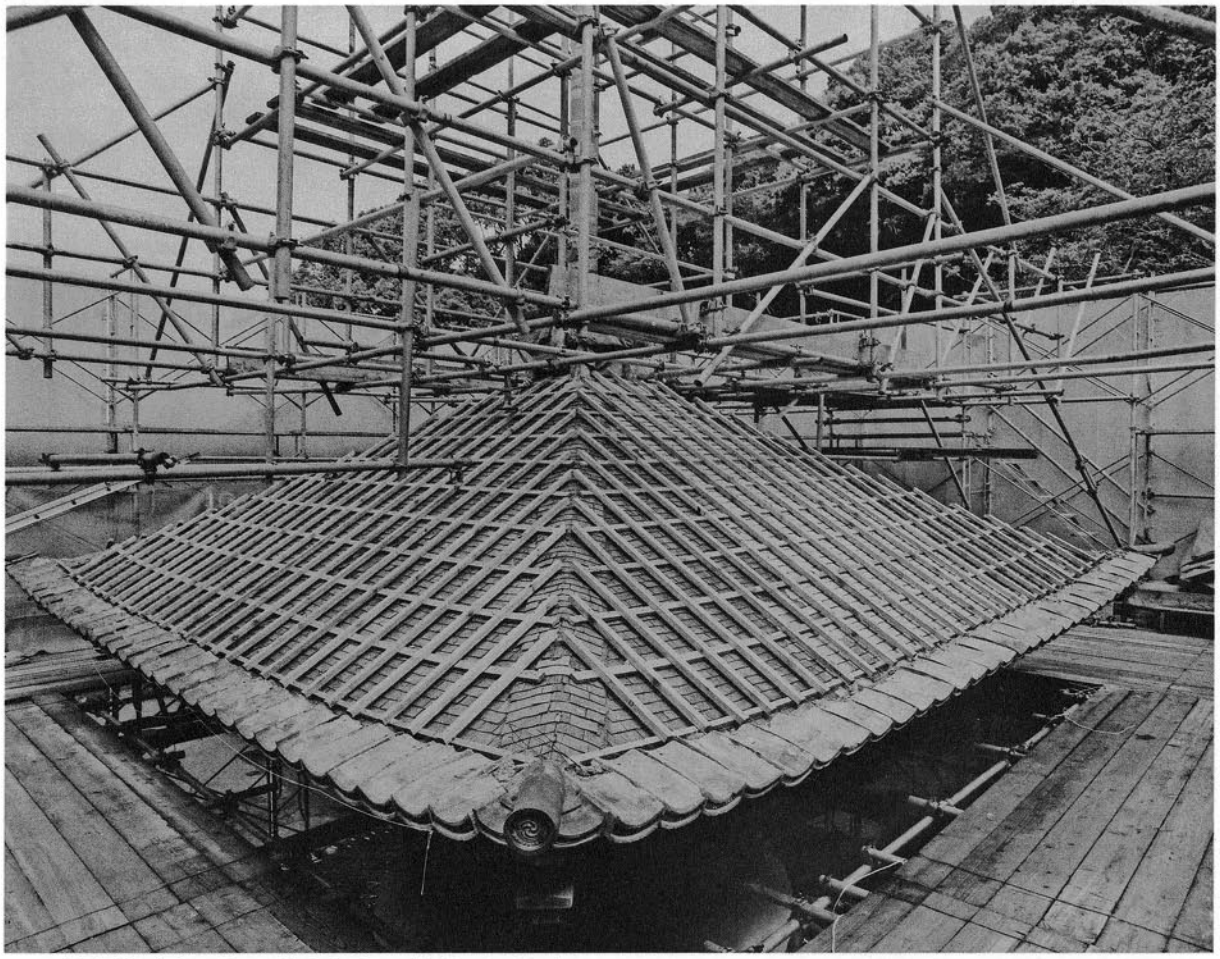
64　下層屋根の修理前の状況（北西より見る）



65　上層屋根土居葺の状況（南東より見る）

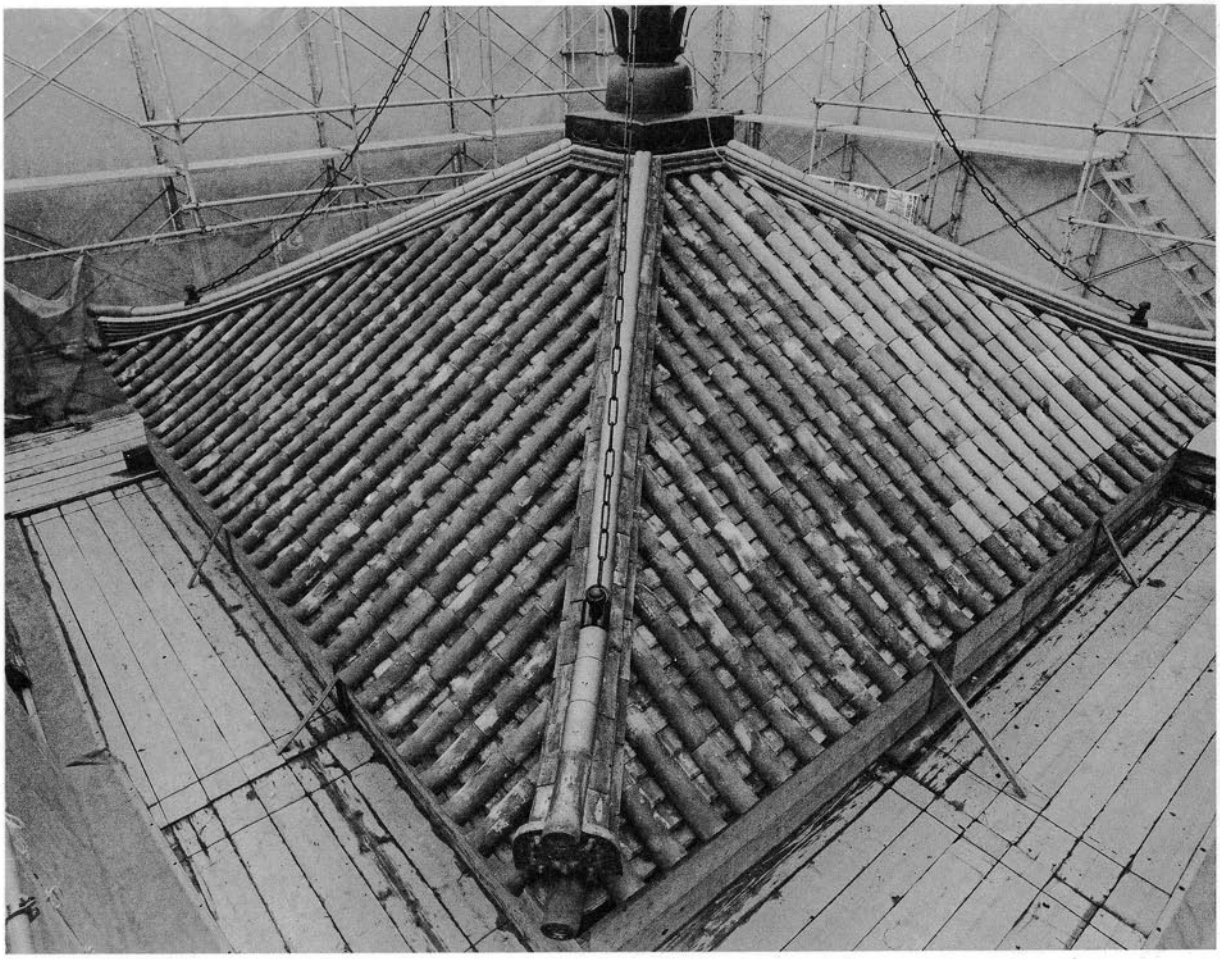


66　下層屋根土居葺の状況（北西より見る）



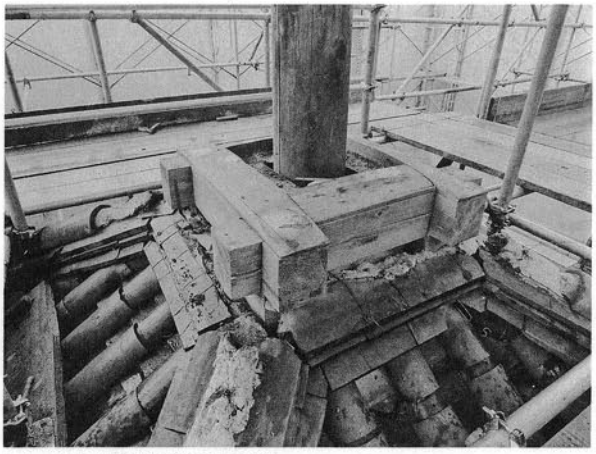
67　上層屋根空葺下地の瓦桟打ち完了（南東より見る）

68　下層北面屋根の解体完了状況（北西より見る）

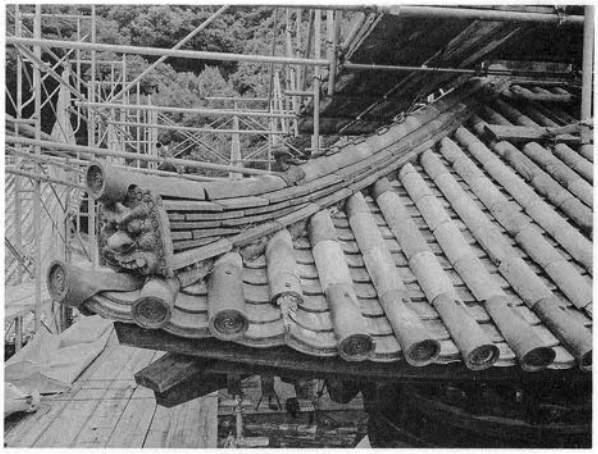


69　上層屋根葺完了（南東より見る）

70　下層屋根葺完了（北西より見る）

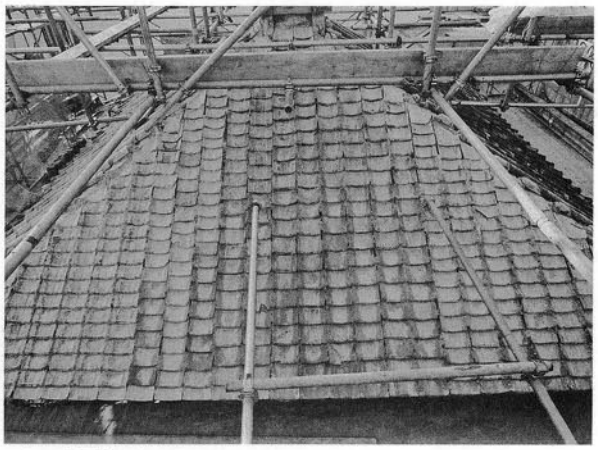


72　相輪露盤解体後の状況

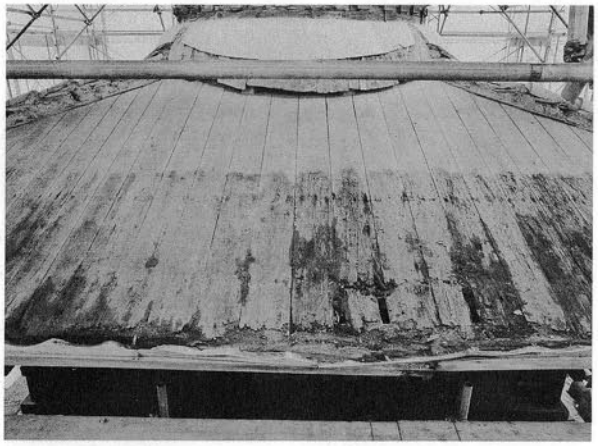


71　上層南西隅棟解体前

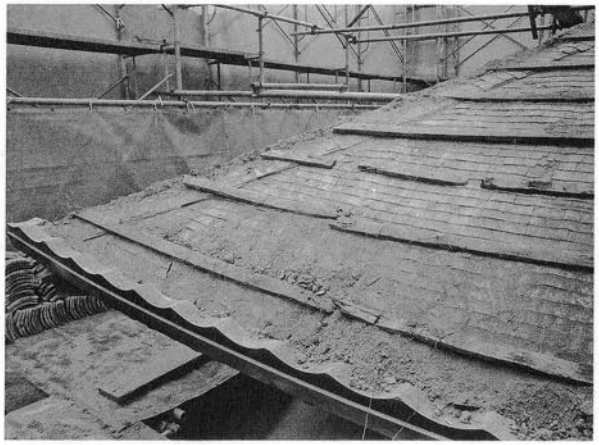
74　上層軒唐草瓦は尻が欠けたものも使われていた



73　上層東面平瓦の状況



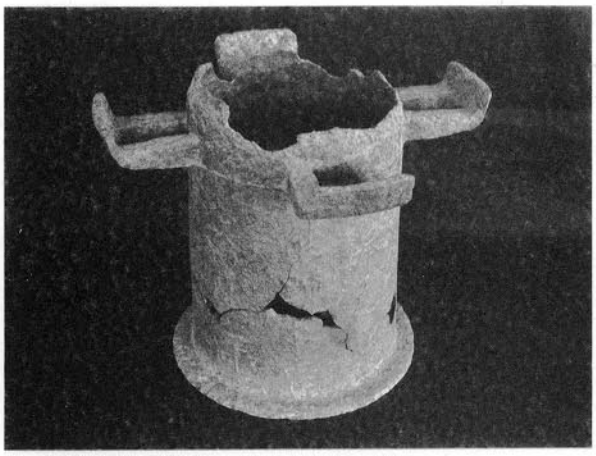
76　下層北面野地板の状況（上層雨落から外が腐朽）



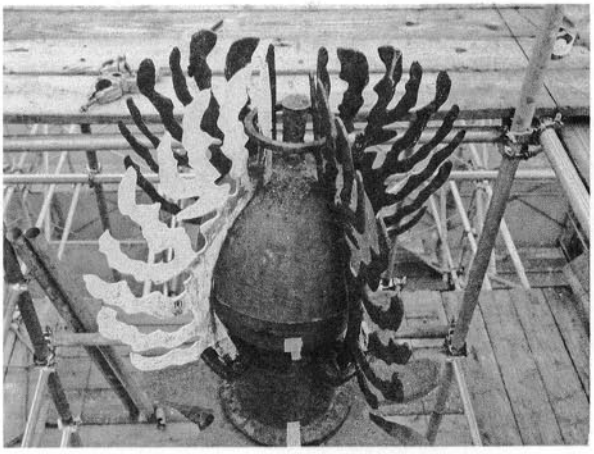
75　土居葺の隅背葺

78　亀腹下地は厚板を竪張りする仕様

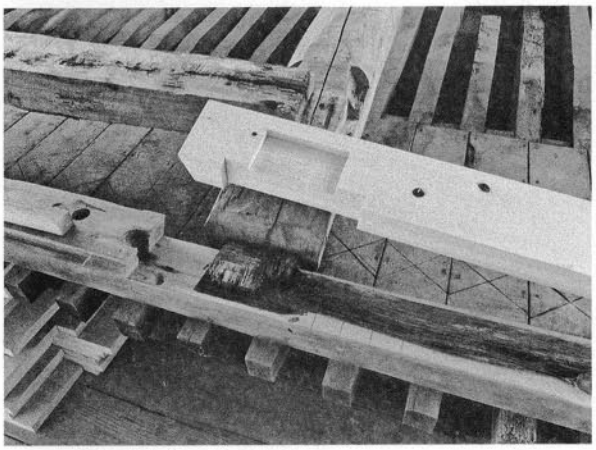
77　下層南面屋根の解体状況



80　相輪火炎受擦管の古材（長保寺蔵）



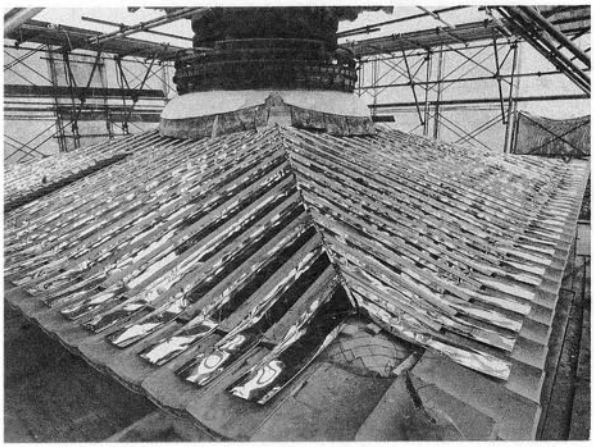
79　解体前相輪の状況（銅製火炎は昭和修理以降の補足材）



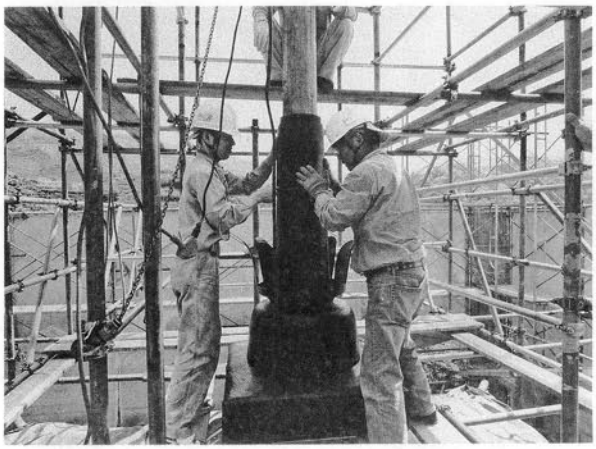
82　下層北面茅負の矧木修理

81　上層屋根瓦解体状況

84　下層平瓦葺の完了

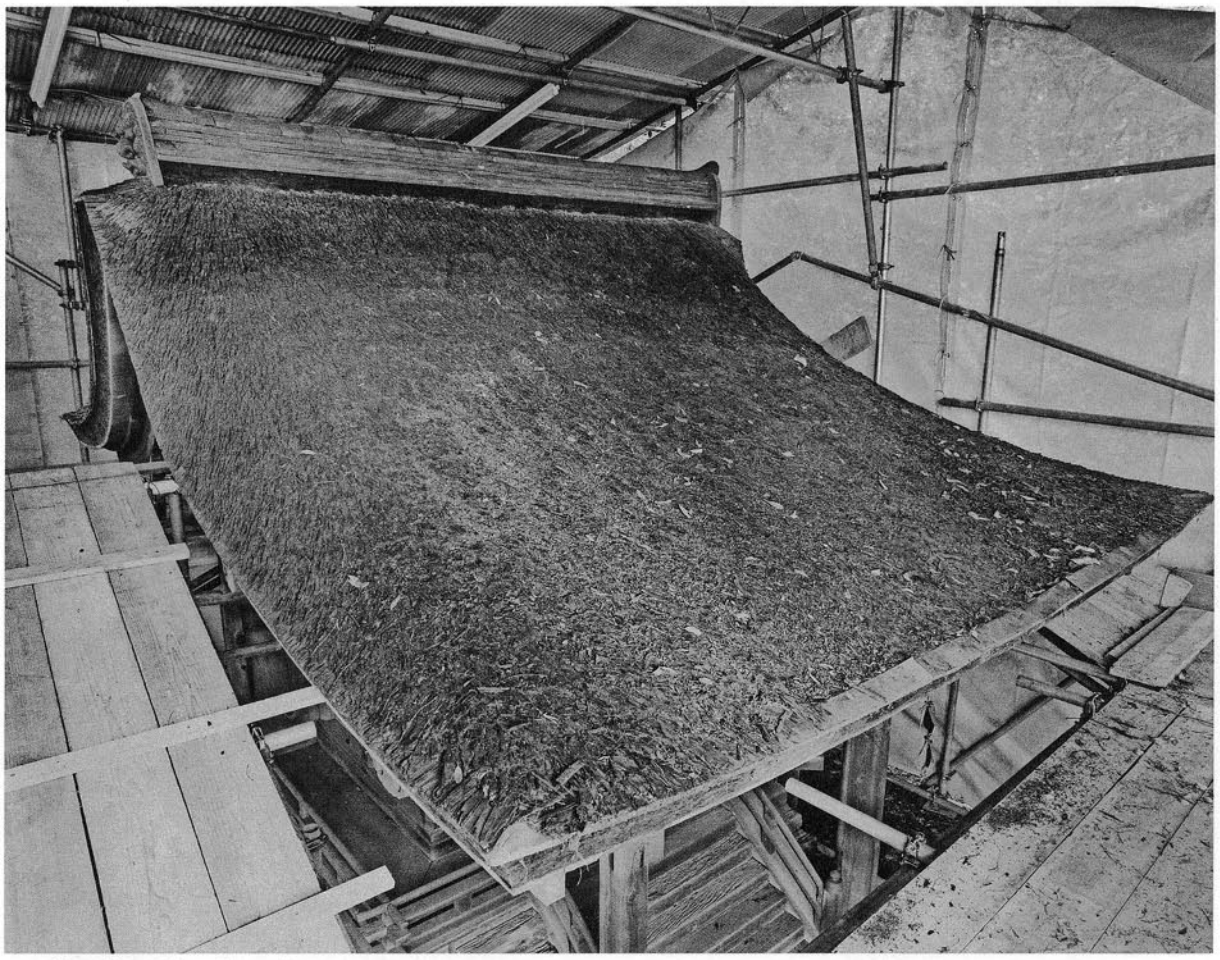


83　下層空葺下地銅板敷き込み状況

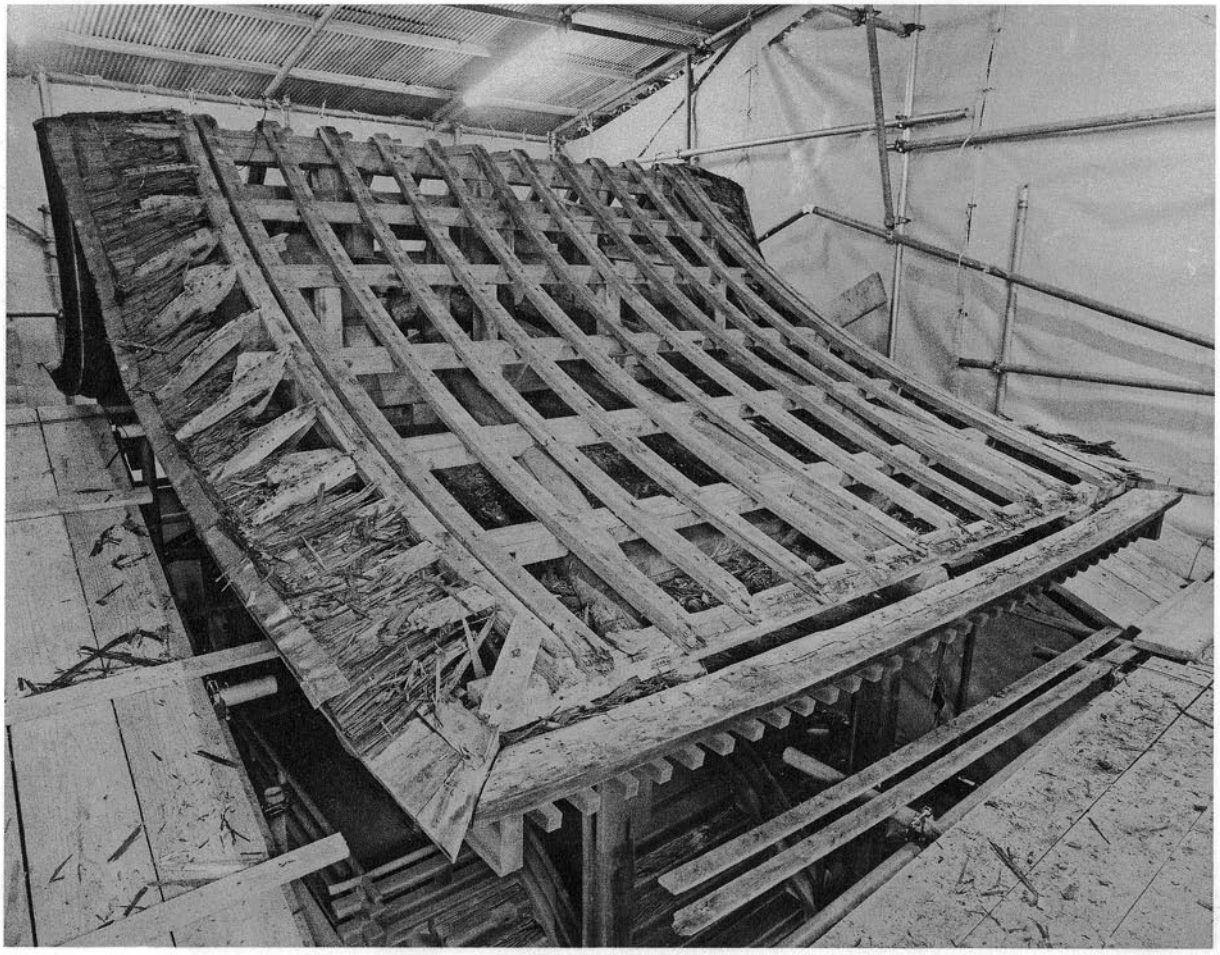


86　相輪組み付け状況

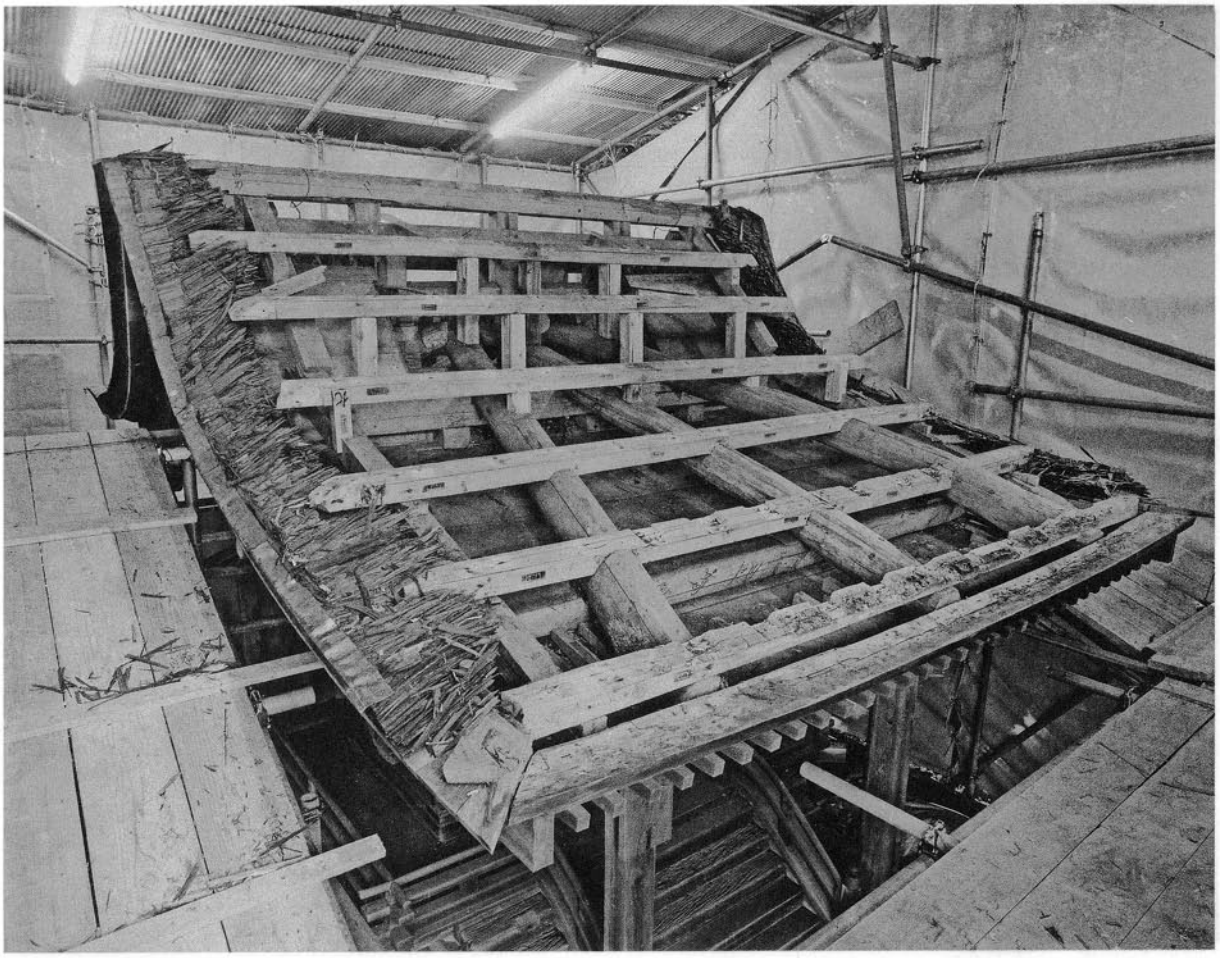
85　相輪補足材鋳型製作状況



87　修理前の屋根の状況（南西より見る）

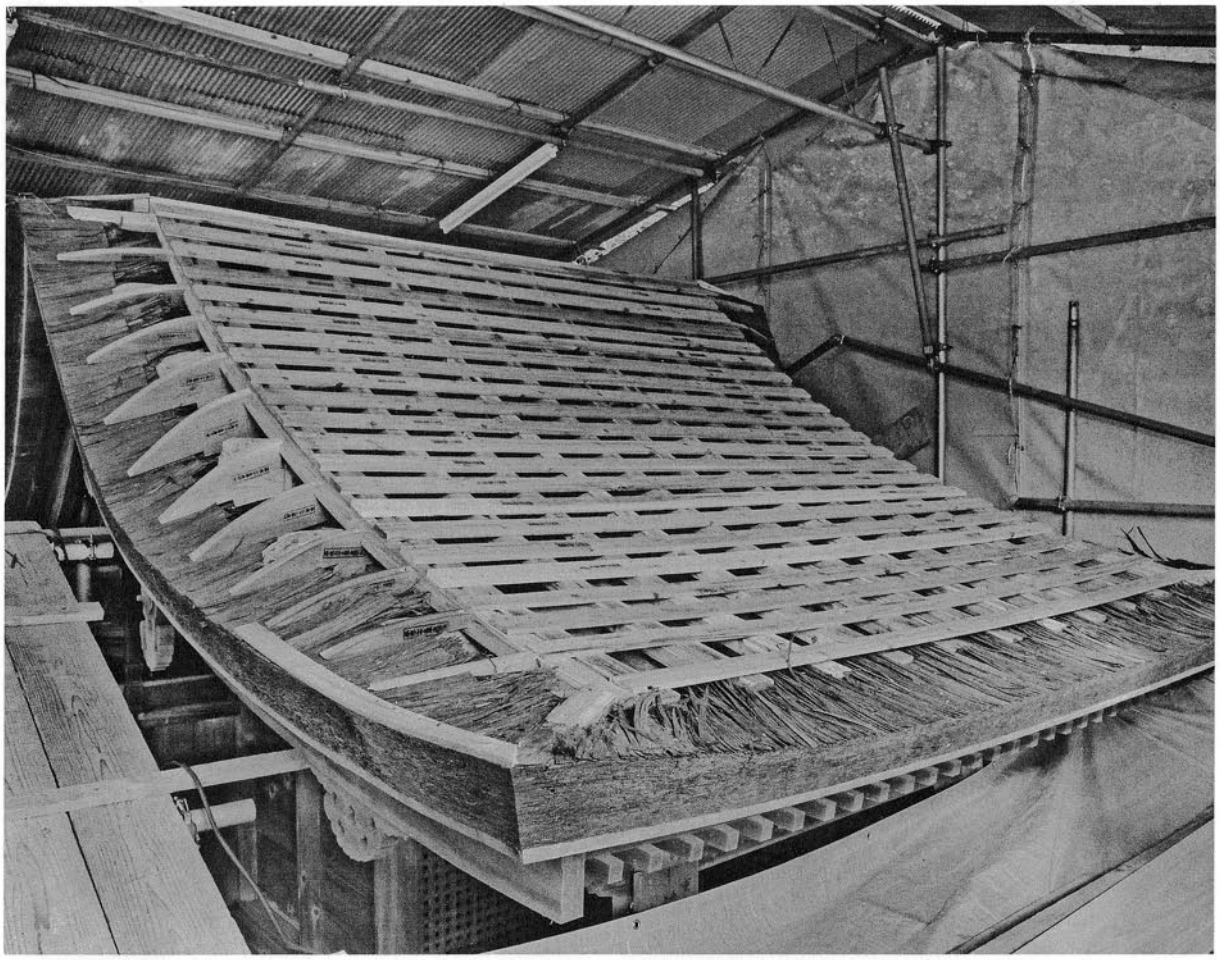


88　野垂木の状況（南西より見る）

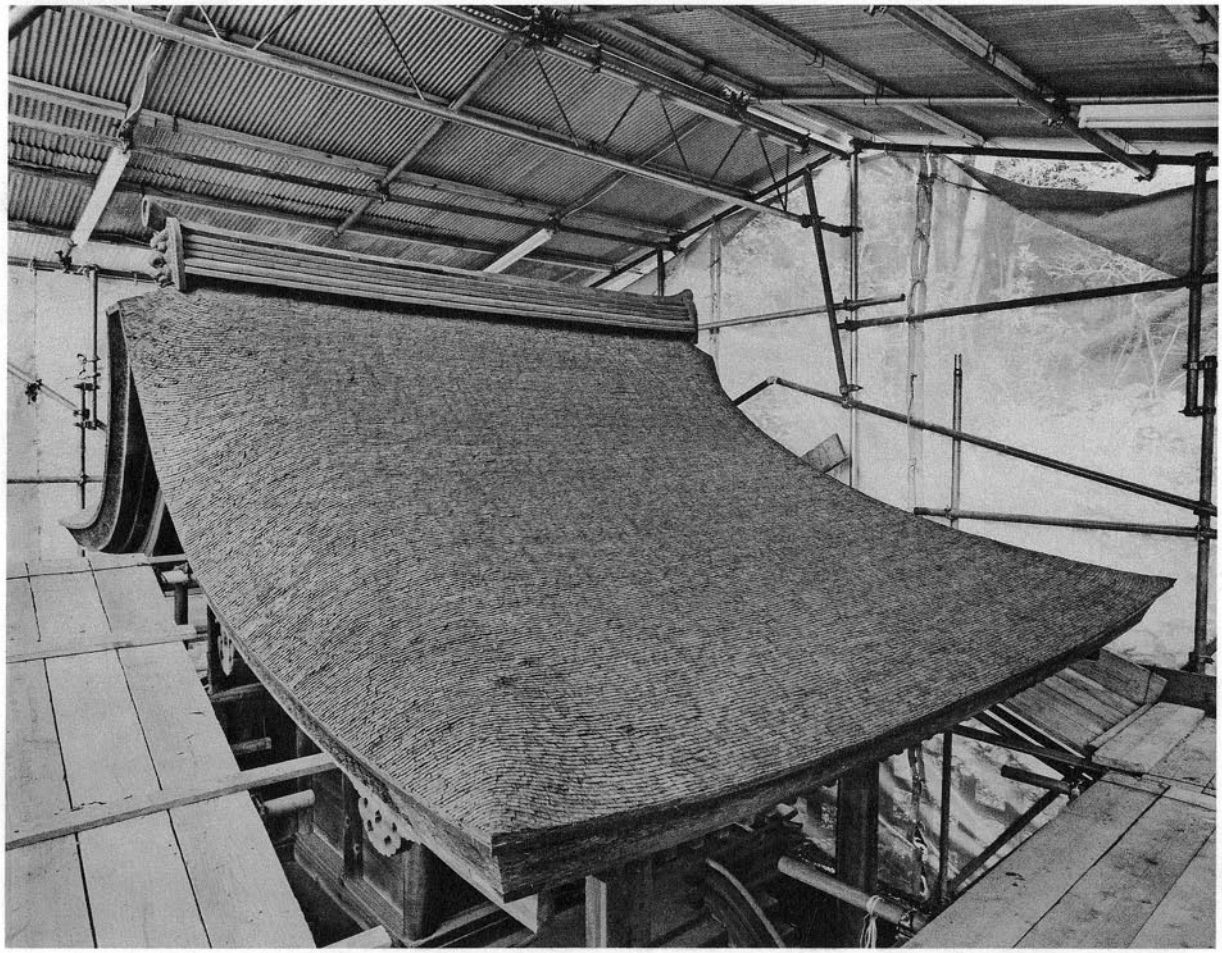


89　修理範囲解体完了（南西より見る）

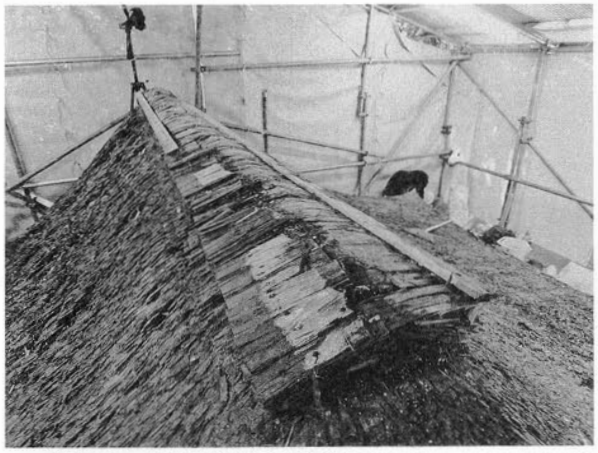
90　修理範囲解体完了（北東より見る）



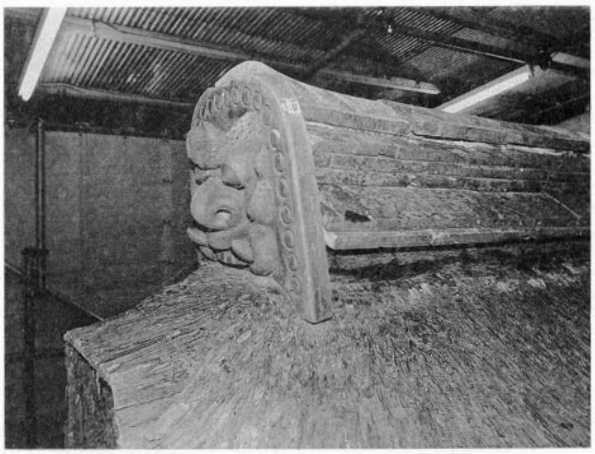
91　屋根野地修理完了状況（南西より見る）



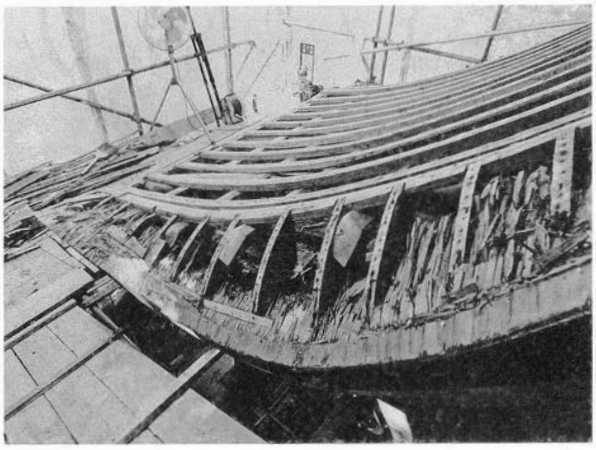
92　屋根葺完了（南西より見る）



94　品軒積の状況（昭和54年修理の施工）

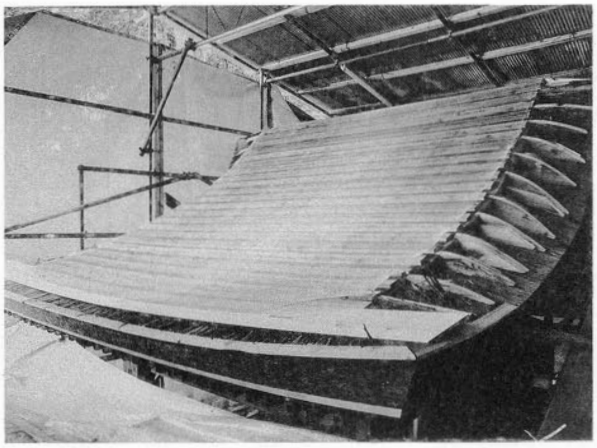


93　解体前の鬼瓦据え付け状況（西側）



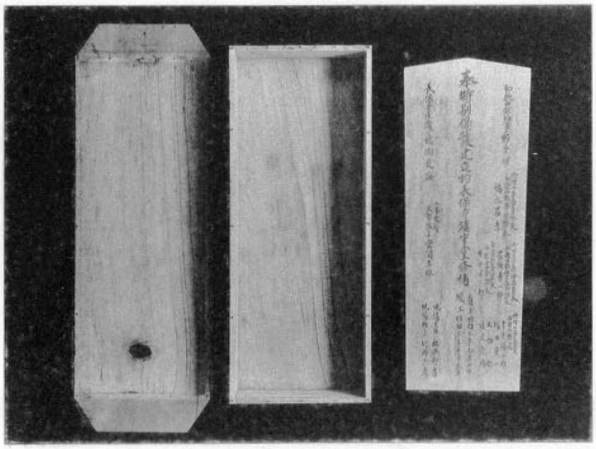
96　蓑甲の状況（南東部）

95　野垂木は鋸目を入れて屋弛みを造る



98　ムササビ対策として野木舞上にステンレス網を張った

97　野垂木打ち

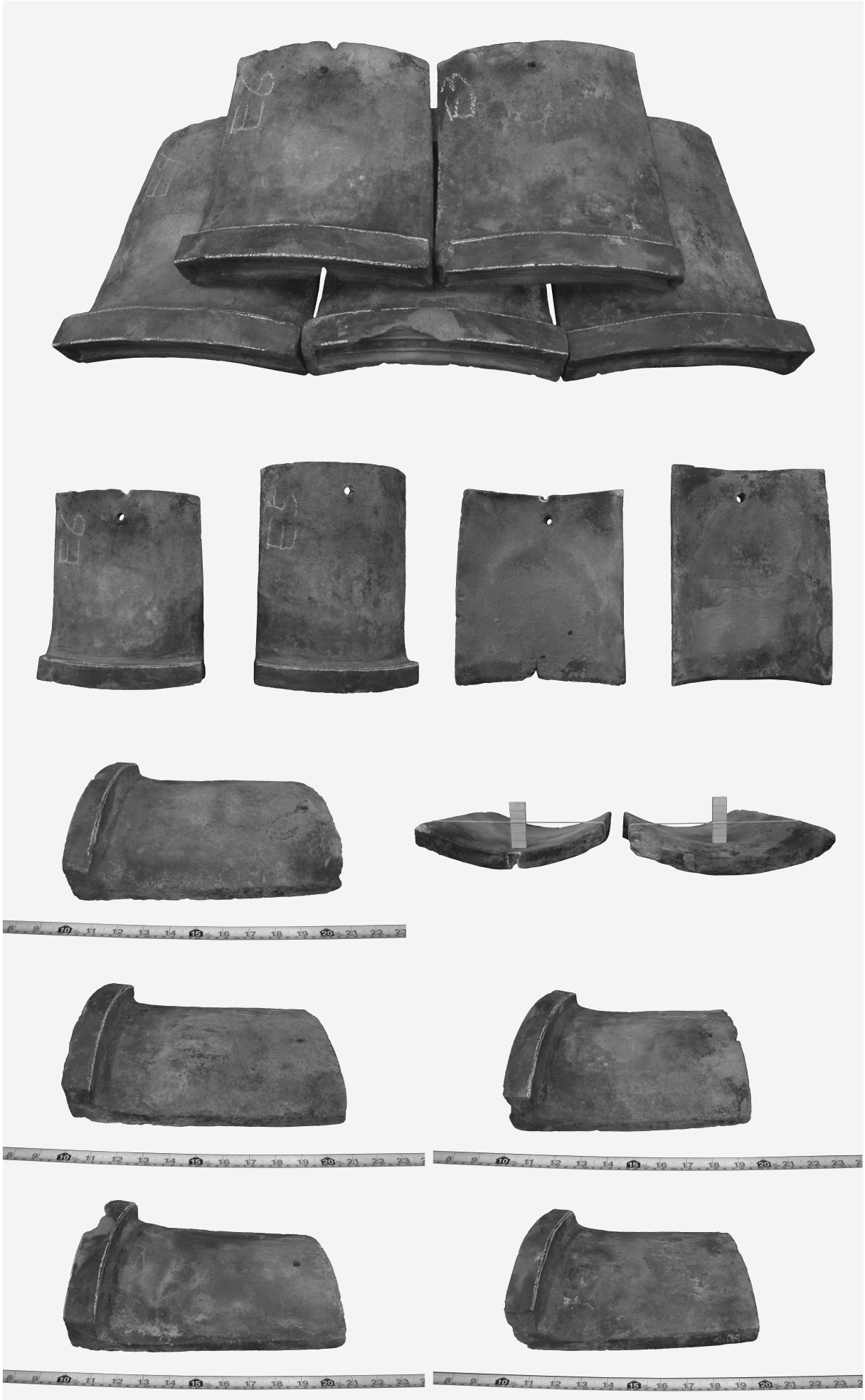


100　小屋内にあった昭和３年修理の棟札

99　檜皮葺の施工状況

101　大門　軒平瓦１

102　大門　軒平瓦２



103　大門　軒平瓦１・２の詳細

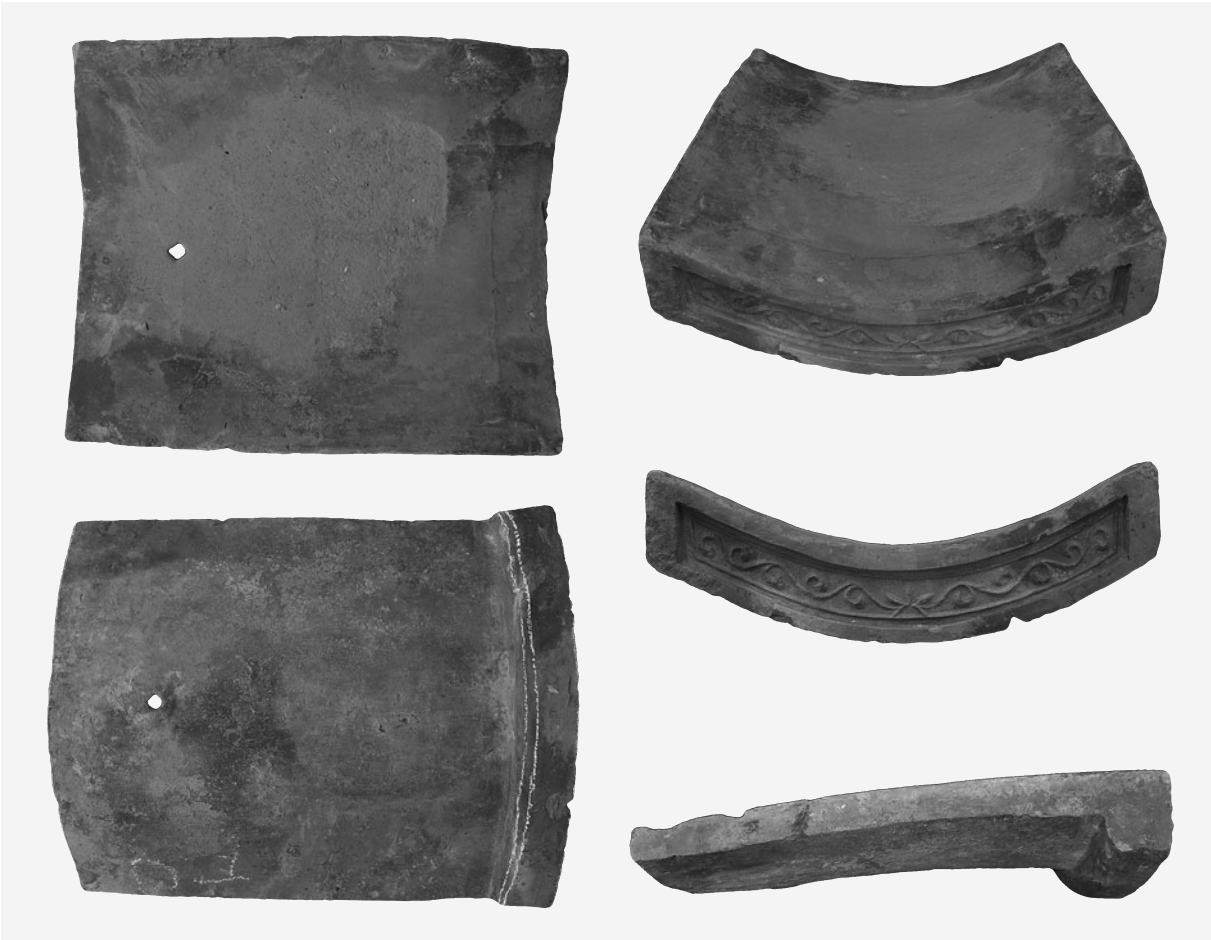
104　大門　軒平瓦３

105　大門　軒平瓦４

106　大門　軒平瓦５

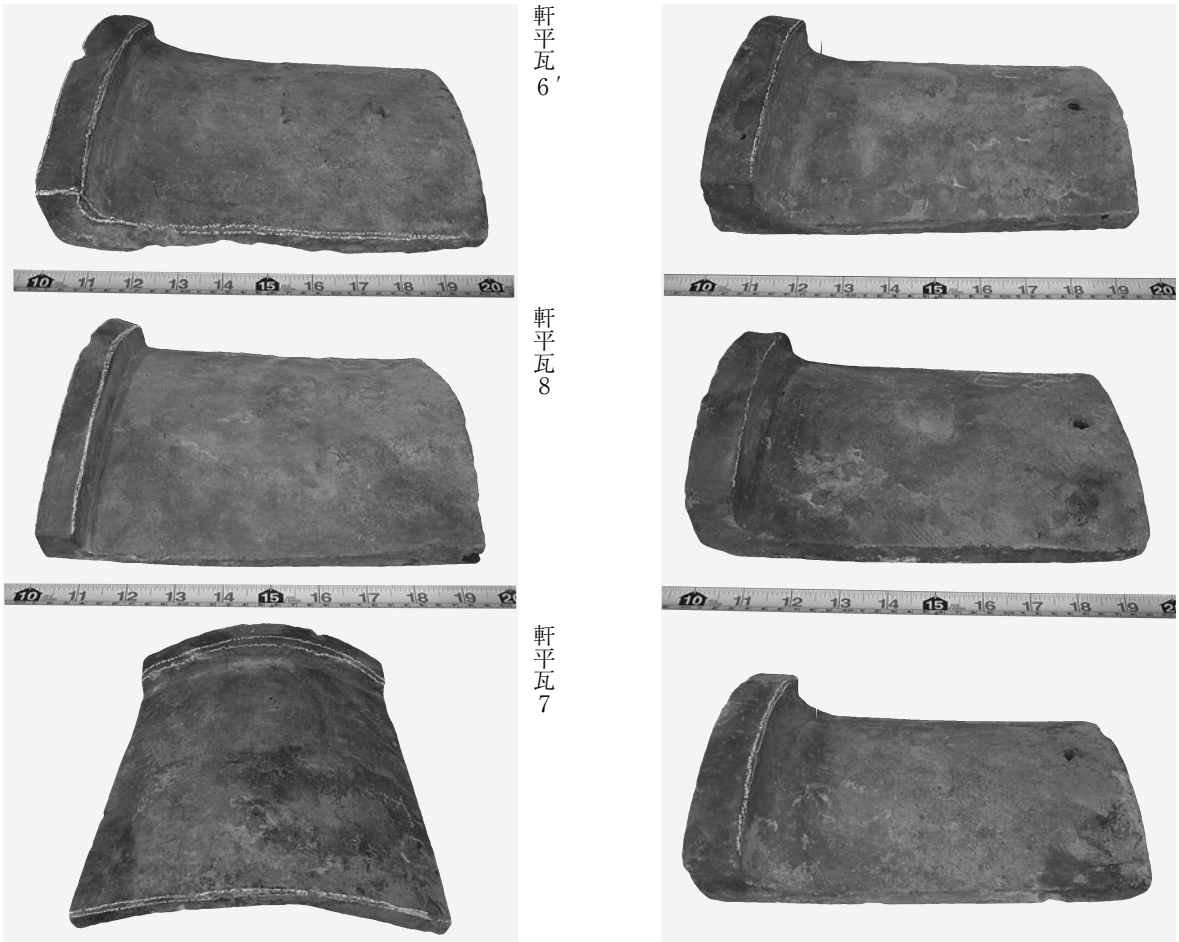
107　大門　軒平瓦６

108　大門　軒平瓦６′



109　大門　軒平瓦７

110　大門　軒平瓦８



111　大門　軒平瓦詳細

112　大門　軒平瓦 9

113　大門　軒平瓦10

114　大門　軒平瓦11

115　大門　軒平瓦12

116　大門　軒平瓦13

117　大門　軒平瓦14

118　大門　軒平瓦15

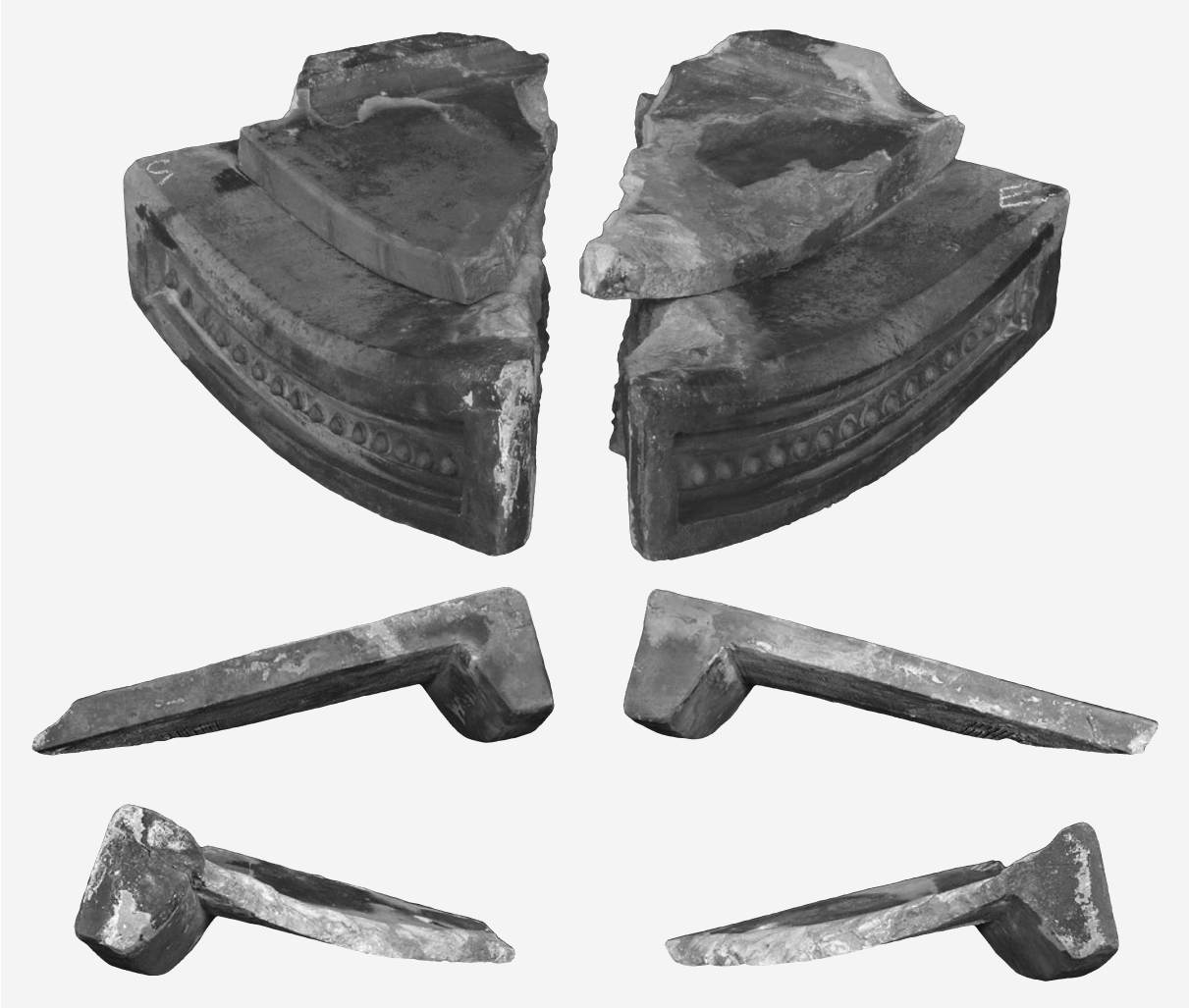
119　大門　軒平瓦16

120　大門　軒平瓦17

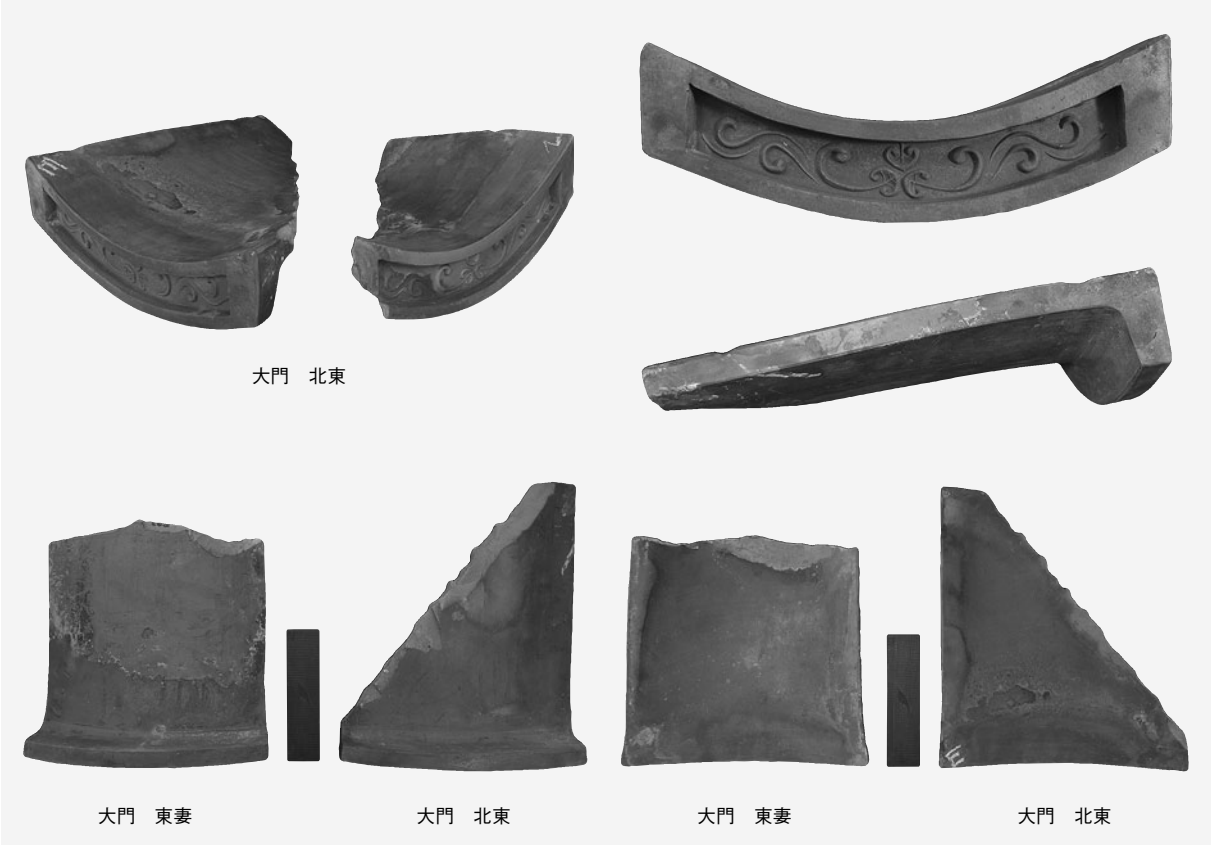
121　大門　軒平瓦18

122　大門　軒平瓦19　明治44年

123　大門　軒平瓦19（蟻羽用）



124　大門　軒平瓦19（隅用）　南東



125　大門　軒平瓦20

126　大門　軒丸瓦 1

127　大門　軒丸瓦 2

128　大門　軒丸瓦 3

129　大門　軒丸瓦 4

130　大門　軒丸瓦５

131　大門　軒丸瓦６

132　大門　軒丸瓦７

133　大門　軒丸瓦８

134　大門　軒丸瓦９

135　大門　軒丸瓦10

136　大門　軒丸瓦11

137　大門　軒丸瓦12

138　大門　軒丸瓦13

139　大門　軒丸瓦14

140　大門　軒丸瓦15　　明治44年

141　大門　軒丸瓦16

142　大門　軒丸瓦17

143　大門　軒丸瓦18

144　大門　軒丸瓦19

145　大門　軒丸瓦20

146　大門　軒丸瓦21

150　軒丸瓦20刻印

151　軒丸瓦21刻印

149　軒丸瓦20刻印

147　軒丸瓦18刻印

148　軒丸瓦19刻印

152　大門　隅軒丸瓦13′　南東　近世　上中央は軒丸瓦13（左）との比較

153　大門　隅軒丸瓦15′　南西　明治44年

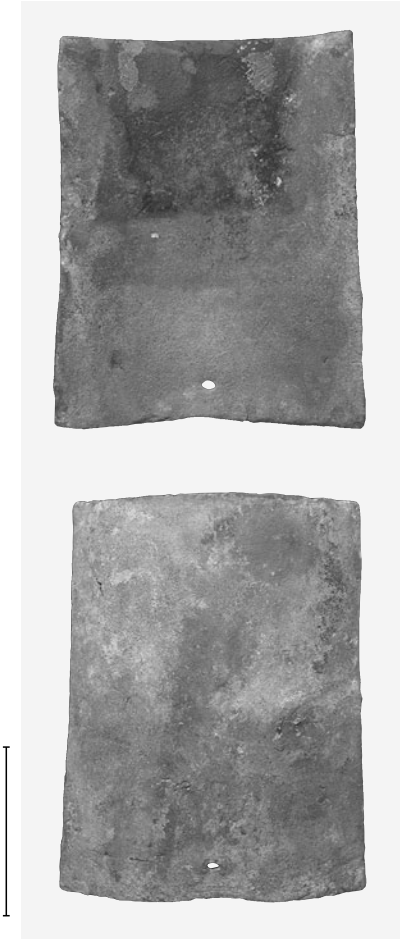
154　大門　隅軒丸瓦18′　北東　昭和36年

大門　瓦

※写真左脇の棒線は各瓦に対して５寸

157　大門　平瓦２

156　大門　平瓦１′



155　大門　平瓦１

160　大門　平瓦４

159　大門　平瓦３

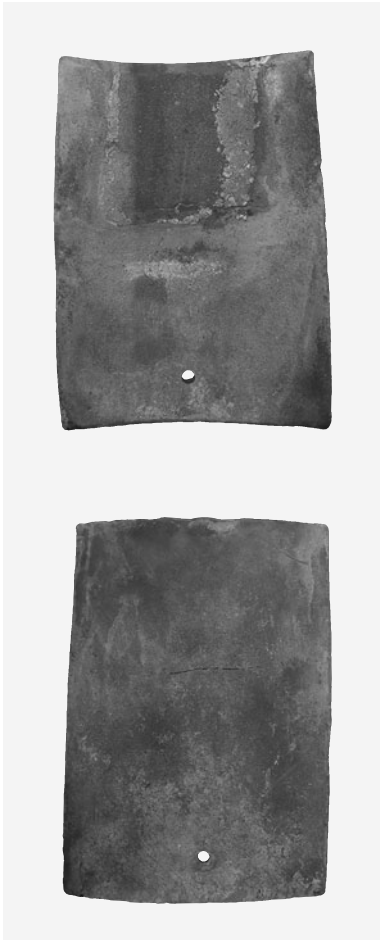
158　大門　平瓦２′

163　大門　平瓦 6

162　大門　平瓦 5

161　大門　平瓦 4 ′

166　大門　平瓦 7 ′



165　大門　平瓦 7

164　大門　平瓦 6 ′

169　大門　平瓦10

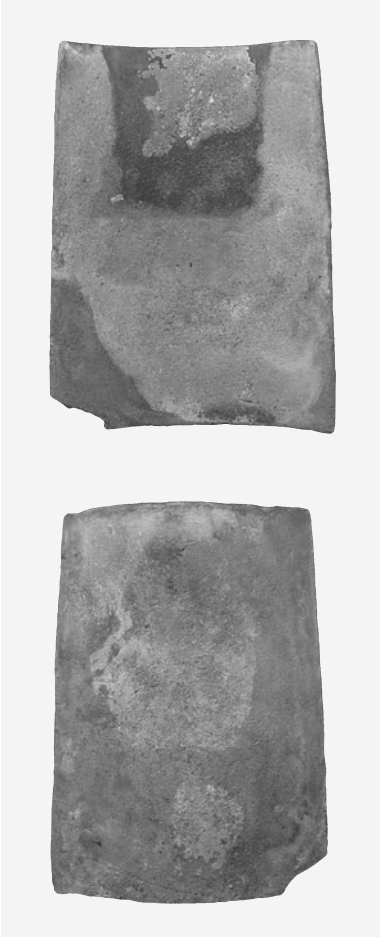
168　大門　平瓦 9

167　大門　平瓦 8

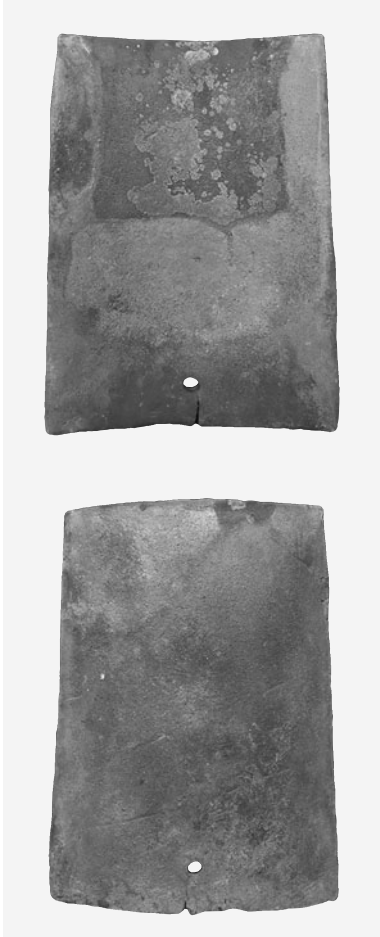
172　大門　平瓦13

171　大門　平瓦12

170　大門　平瓦11



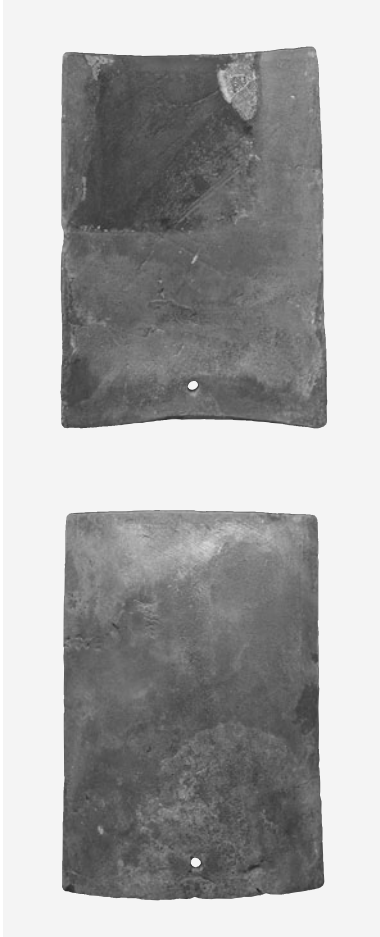
175　大門　平瓦15′



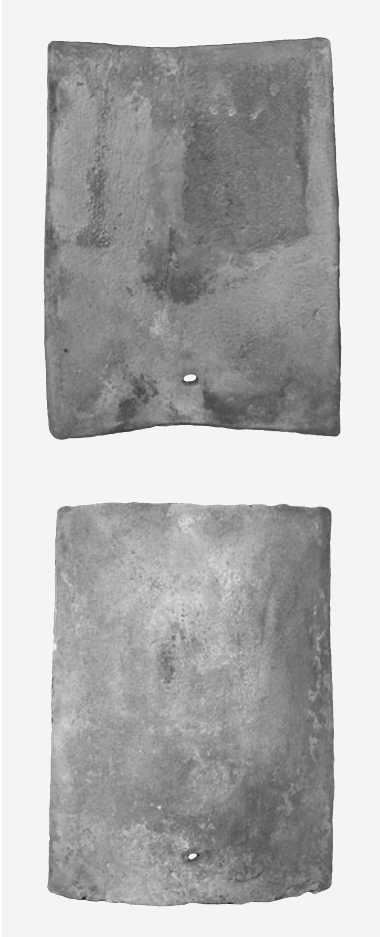
174　大門　平瓦15

173　大門　平瓦14

178　大門　平瓦17′



177　大門　平瓦17



176　大門　平瓦16

181　大門　平瓦18′

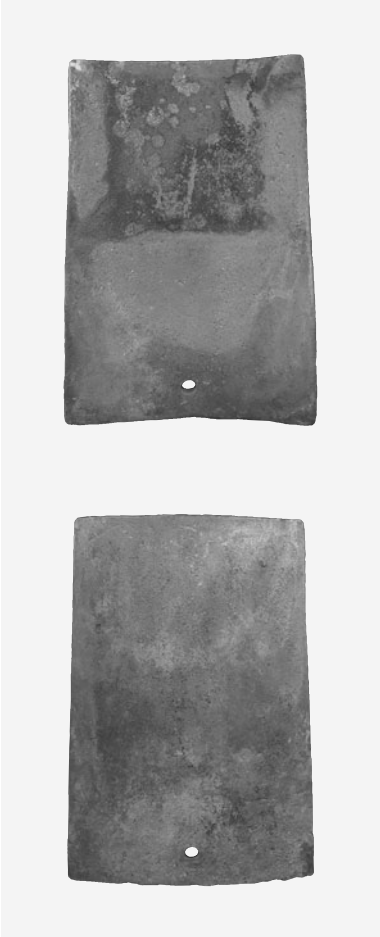
180　大門　平瓦18篦書き

179　大門　平瓦18

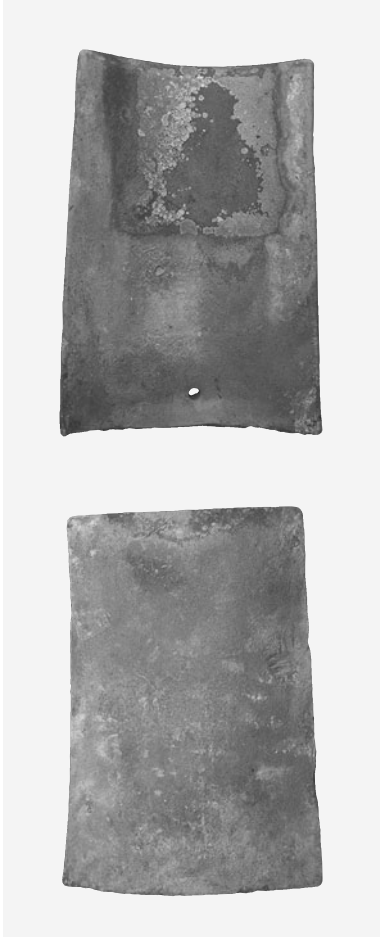
184　大門　平瓦20

183　大門　平瓦19′

182　大門　平瓦19



187　大門　平瓦22



186　大門　平瓦21

185　大門　平瓦20′

190　大門　平瓦22分割線入り 3

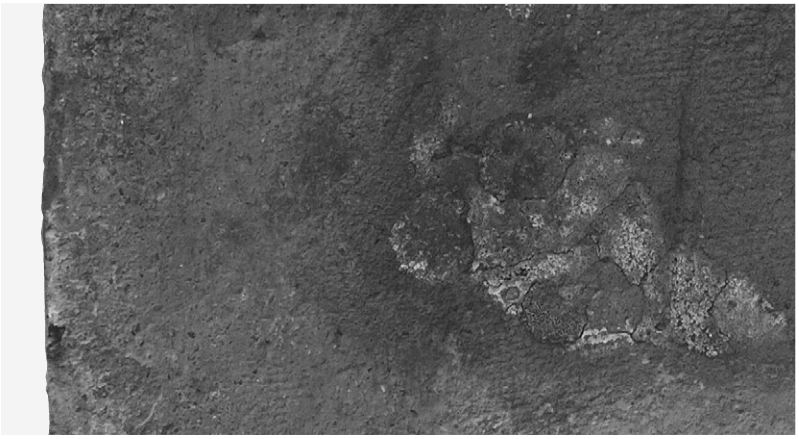
189　大門　平瓦22分割線入り 2

188　大門　平瓦22分割線入り 1

193　大門　平瓦22旧軒平分割線入り

192　大門　平瓦22分割線なし

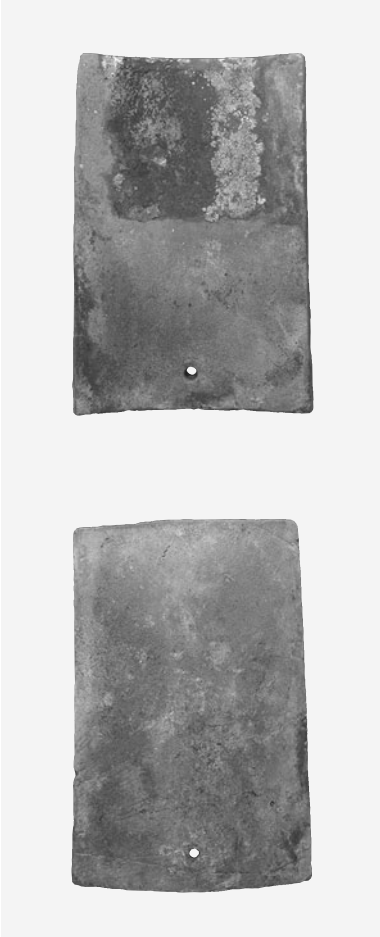
191　大門　平瓦22分割線入り４



195　大門　平瓦19凹面の布目痕跡

196　大門　平瓦22分割線入り２の調整状況　凹面には布目痕跡も残る

194　大門　平瓦18の篦書き部分



199　大門　平瓦24

198　大門　平瓦23′

197　大門　平瓦23

202　大門　平瓦25′

121　大門　平瓦25

200　大門　平瓦24′

205　大門　平瓦27

204　大門　平瓦26分割線入り

203　大門　平瓦26

208　大門　平瓦28′

207　大門　平瓦28

206　大門　平瓦27′

211　大門　平瓦31

210　大門　平瓦30

209　大門　平瓦29

214　大門　平瓦43

213　大門　平瓦42

212　大門　平瓦41

217　大門　平瓦45

216　大門　平瓦44′

215　大門　平瓦44

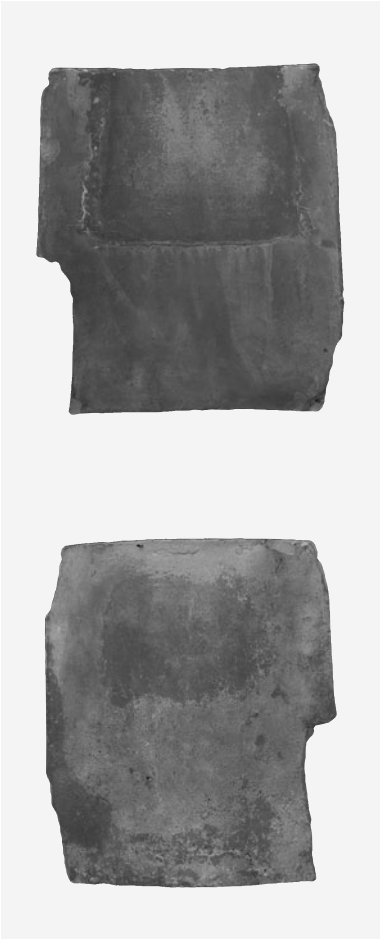
220　大門　平瓦48

219　大門　平瓦47

218　大門　平瓦46

223　大門　平瓦51　明治44年

222　大門　平瓦50



221　大門　平瓦49

226　大門　平瓦54

225　大門　平瓦53

224　大門　平瓦52　明治44年

228　大門　丸瓦２

227　大門　丸瓦１

230　大門　丸瓦３

229　大門　丸瓦２′

232　大門　丸瓦４′

231　大門　丸瓦４

234　大門　丸瓦 6

233　大門　丸瓦 5

236　大門　丸瓦 7′

235　大門　丸瓦 7

238　大門　丸瓦 8′

237　大門　丸瓦 8

240　大門　丸瓦11

239　大門　丸瓦 9

242　大門　丸瓦13

241　大門　丸瓦12

244　大門　丸瓦14

243　大門　丸瓦13′

246　大門　丸瓦15

245　大門　丸瓦14′

248　大門　丸瓦16′

247　大門　丸瓦16

250　大門　丸瓦18

249　大門　丸瓦17

252　大門　丸瓦20

251　大門　丸瓦19

254　大門　丸瓦22

253　大門　丸瓦21

256　大門　丸瓦24

255　大門　丸瓦23

258　大門　丸瓦26

257　大門　丸瓦25

260　大門　丸瓦28

259　大門　丸瓦27

262　大門　丸瓦30

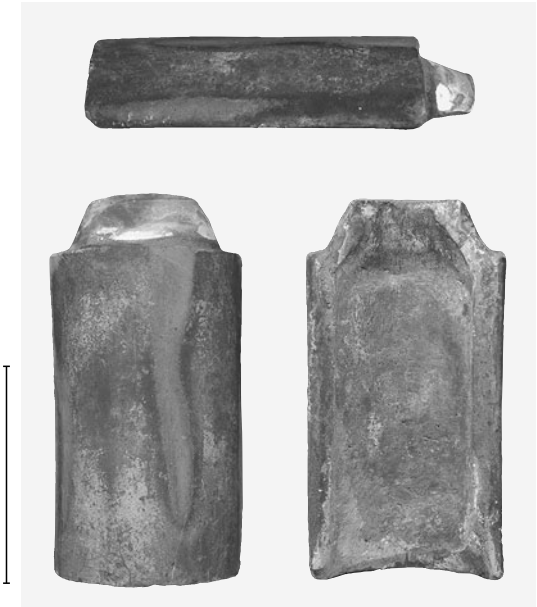
261　大門　丸瓦29

264　大門　丸瓦32

263　大門　丸瓦31

266　大門　丸瓦34

265　大門　丸瓦33



268　大門　丸瓦36

267　大門　丸瓦35

270　大門　丸瓦38

269　大門　丸瓦37

272　大門　丸瓦41

271　大門　丸瓦39

274　大門　丸瓦43

273　大門　丸瓦42

276　大門　丸瓦45

275　大門　丸瓦44

278　大門　丸瓦47

277　大門　丸瓦46

280　大門　丸瓦49

279　大門　丸瓦48

282　大門　丸瓦51

281　大門　丸瓦50

284　大門　丸瓦53

283　大門　丸瓦52

286　大門　丸瓦55

285　大門　丸瓦54

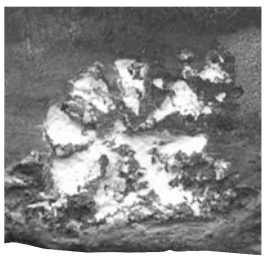
288　大門　丸瓦61　明治44年

287　大門　丸瓦60

290　大門　丸瓦63′

289　大門　丸瓦63

293　丸瓦21の刻印

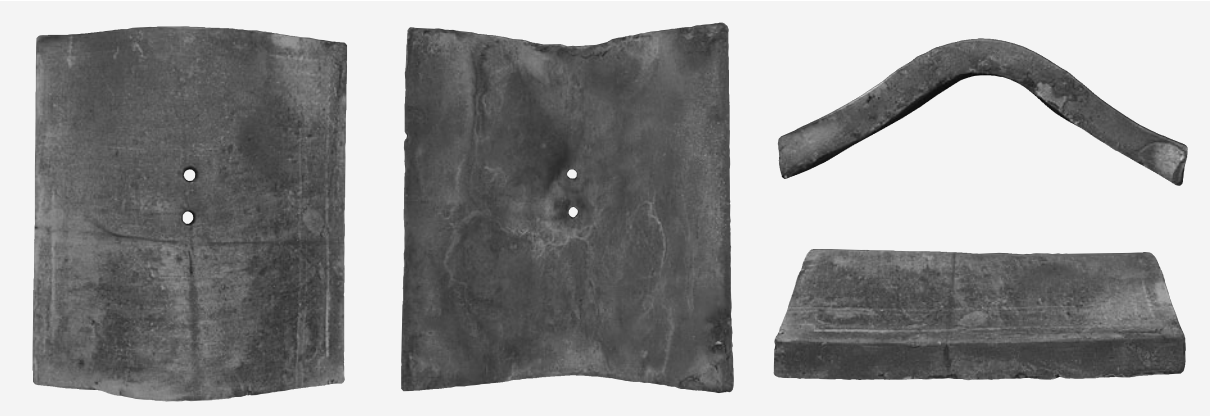


292　平瓦41の刻印

295　丸瓦63″の刻印

294　平瓦42の刻印

291　大門　丸瓦63″



296　大門　大棟衾瓦　昭和３年頃

297　大門　降棟・隅棟衾瓦　南東　昭和３年頃

298　大門　降棟衾瓦　南西　明治44年

299　大門　隅棟衾瓦　北東　明治44年

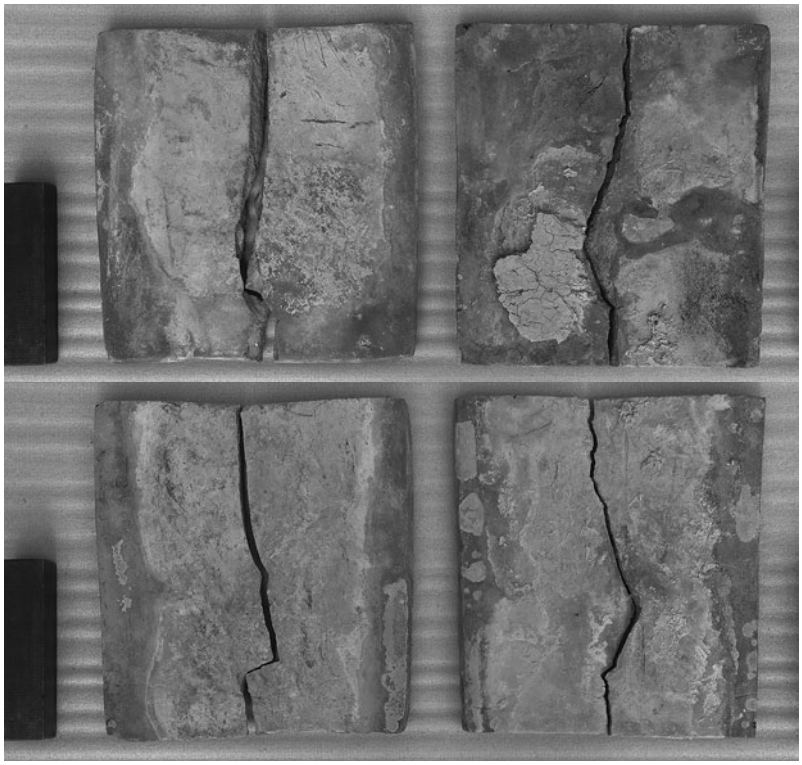
300　大門　大棟鳥衾瓦 東側　昭和３年頃

301　大門　降棟鳥衾瓦　北西　明治44年

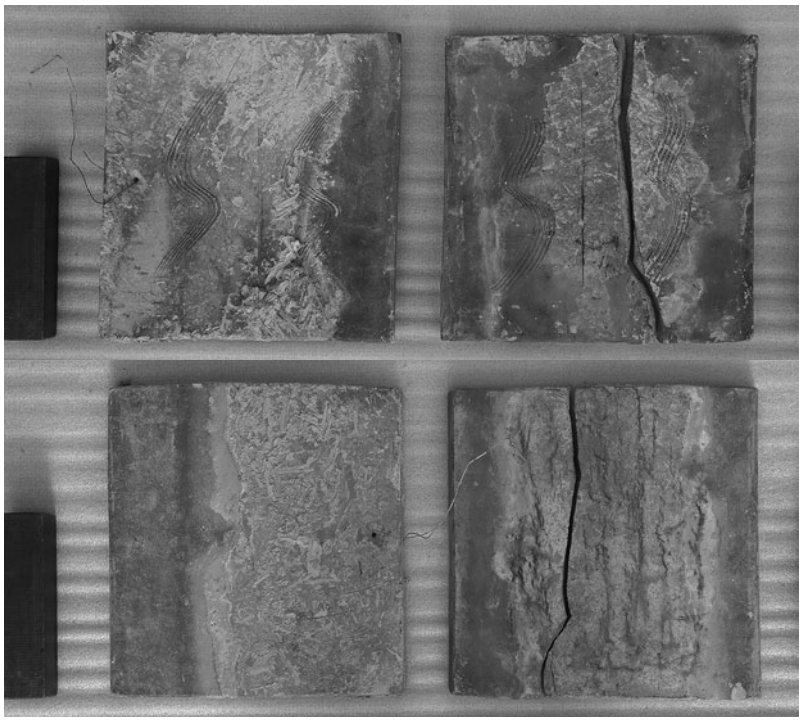
302　大門　隅棟鳥衾瓦　南東　昭和３年頃

303　大門　隅棟鳥衾瓦　北東　昭和36年

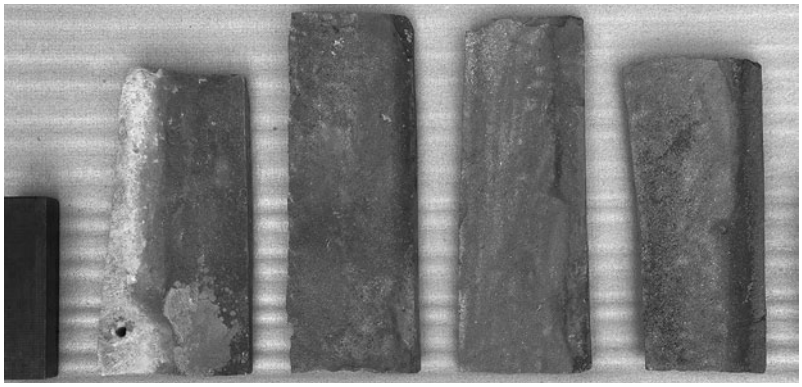
※写真左端の木片は長５寸



307　大門　熨斗瓦　近世　平瓦半截



308　大門　熨斗瓦　明治44年　長８寸５分

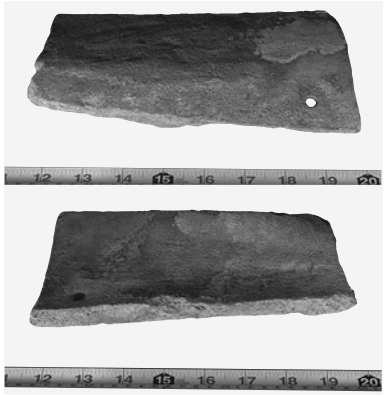


309　大門　熨斗瓦　中世　左２枚は平瓦半截、右２枚は割熨斗

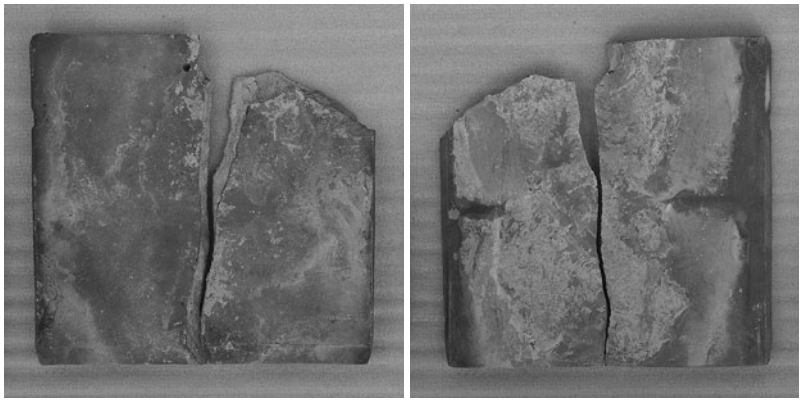
304　大門　降棟鳥衾瓦　北東　断片
昭和36年

305　大門　鳥衾瓦刻印

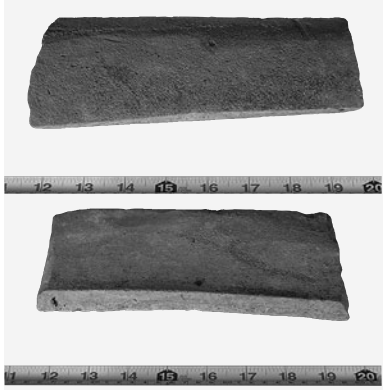
306　大門　大棟での施工状況



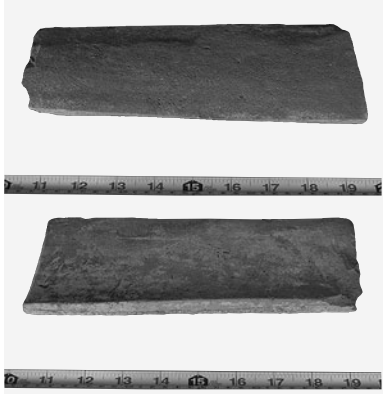
311　大門　熨斗瓦　中世１　平瓦半截



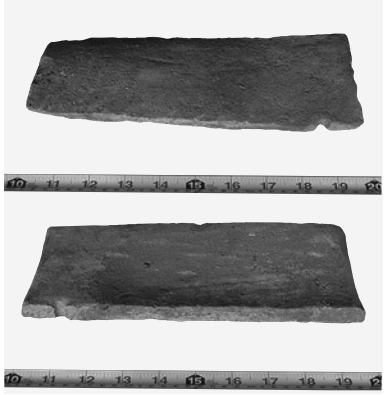
310　大門　熨斗瓦　昭和３年頃　多宝塔下層補足平瓦半截



314　大門　熨斗瓦　中世４　割熨斗



313　大門　熨斗瓦　中世３　割熨斗、長１尺



312　大門　熨斗瓦　中世２　平瓦半截、長１尺

316　大門
大棟鬼瓦の刻印、篦書き

315　大門　面戸瓦

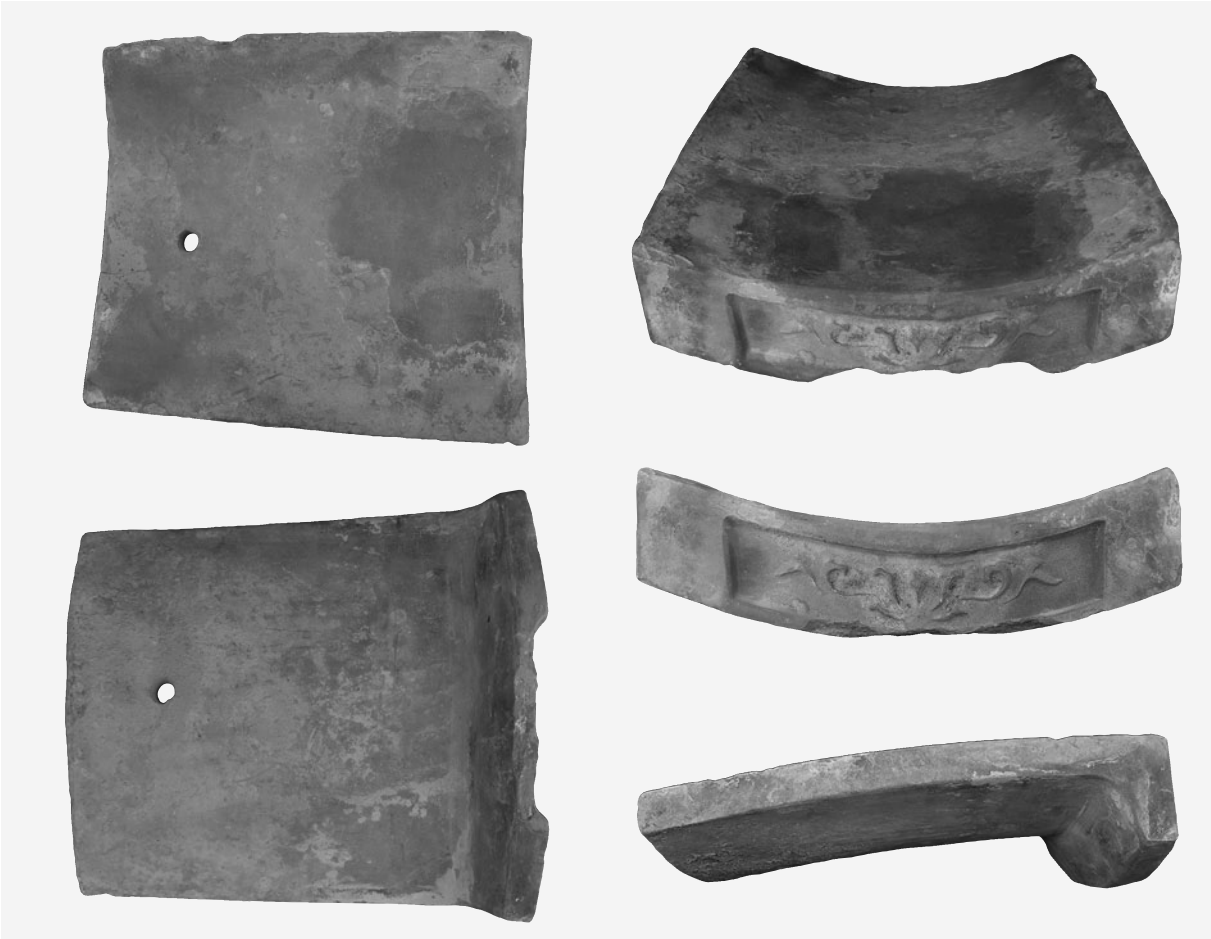
317　大門　鬼瓦　大棟東側

318　大門　鬼瓦　北西降棟

319　大門　鬼瓦　北西隅棟

320　大門　鬼瓦　南西隅棟

321　大門　鬼瓦　北東隅棟



322　多宝塔　軒平瓦 1

323　多宝塔　軒平瓦 2

324　多宝塔　軒平瓦 3

325　多宝塔　軒平瓦 4

329　軒平瓦４瓦当詳細

328　軒平瓦３瓦当詳細

327　軒平瓦２瓦当詳細

326　軒平瓦１瓦当詳細

331　多宝塔　軒平瓦６

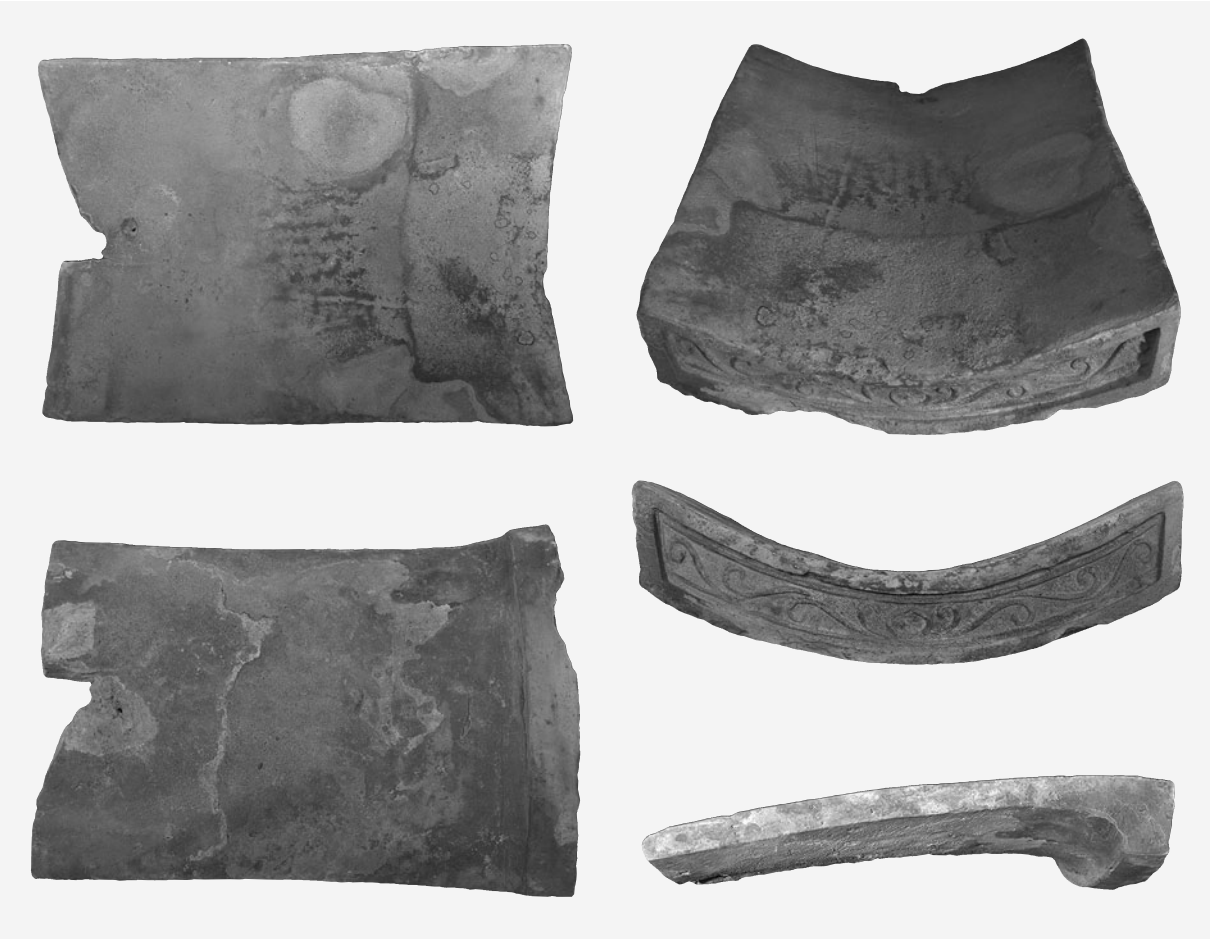
330　多宝塔　軒平瓦５

332　多宝塔　軒平瓦 7

333　多宝塔　軒平瓦 8

334　多宝塔　軒平瓦 9

335　多宝塔　軒平瓦11



336　多宝塔　軒平瓦11′

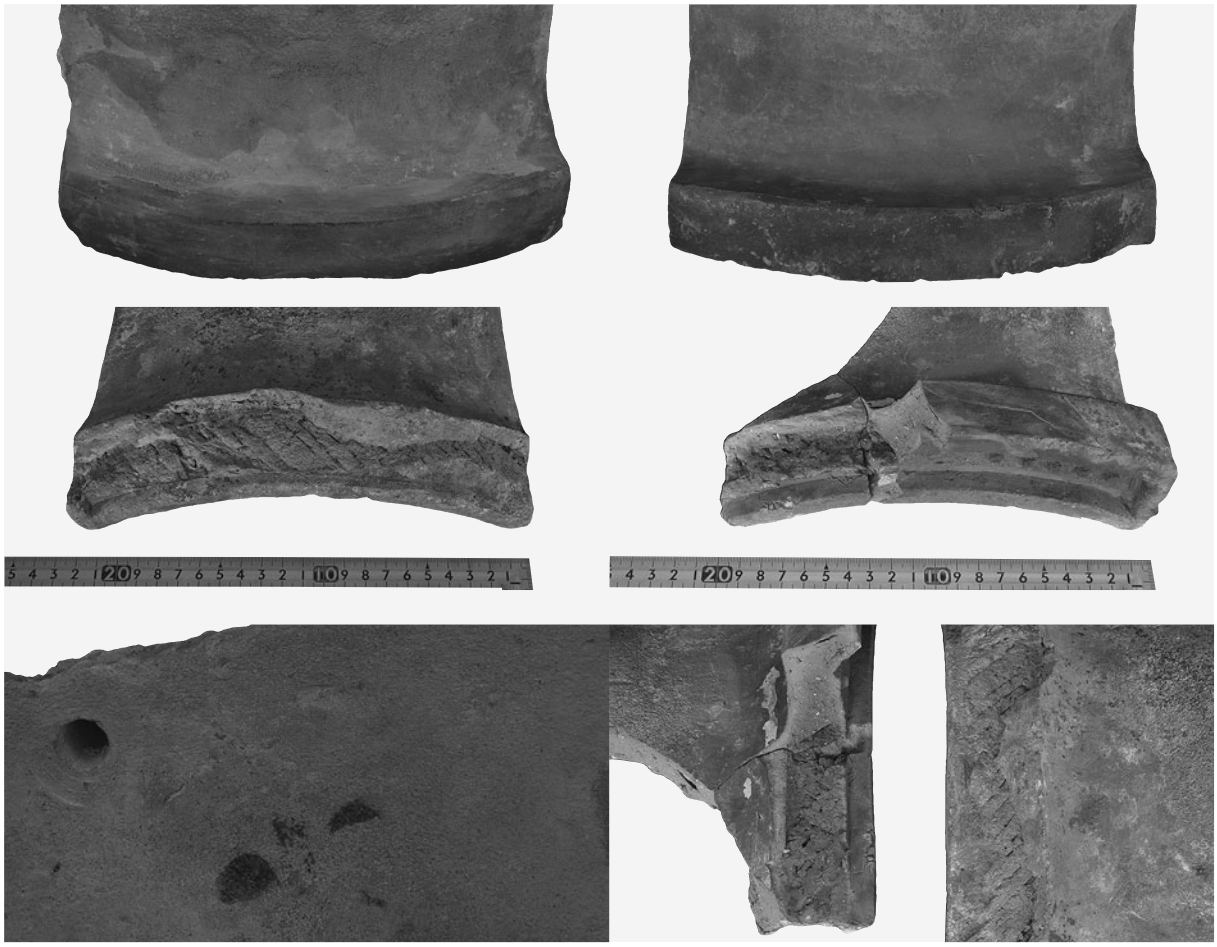
337　多宝塔　軒平瓦11、11′詳細　上段：下が11、上が11′　中段・下段：右が11、左が11′

338　多宝塔　軒平瓦12

339　多宝塔　軒平瓦13

340　多宝塔　軒平瓦14

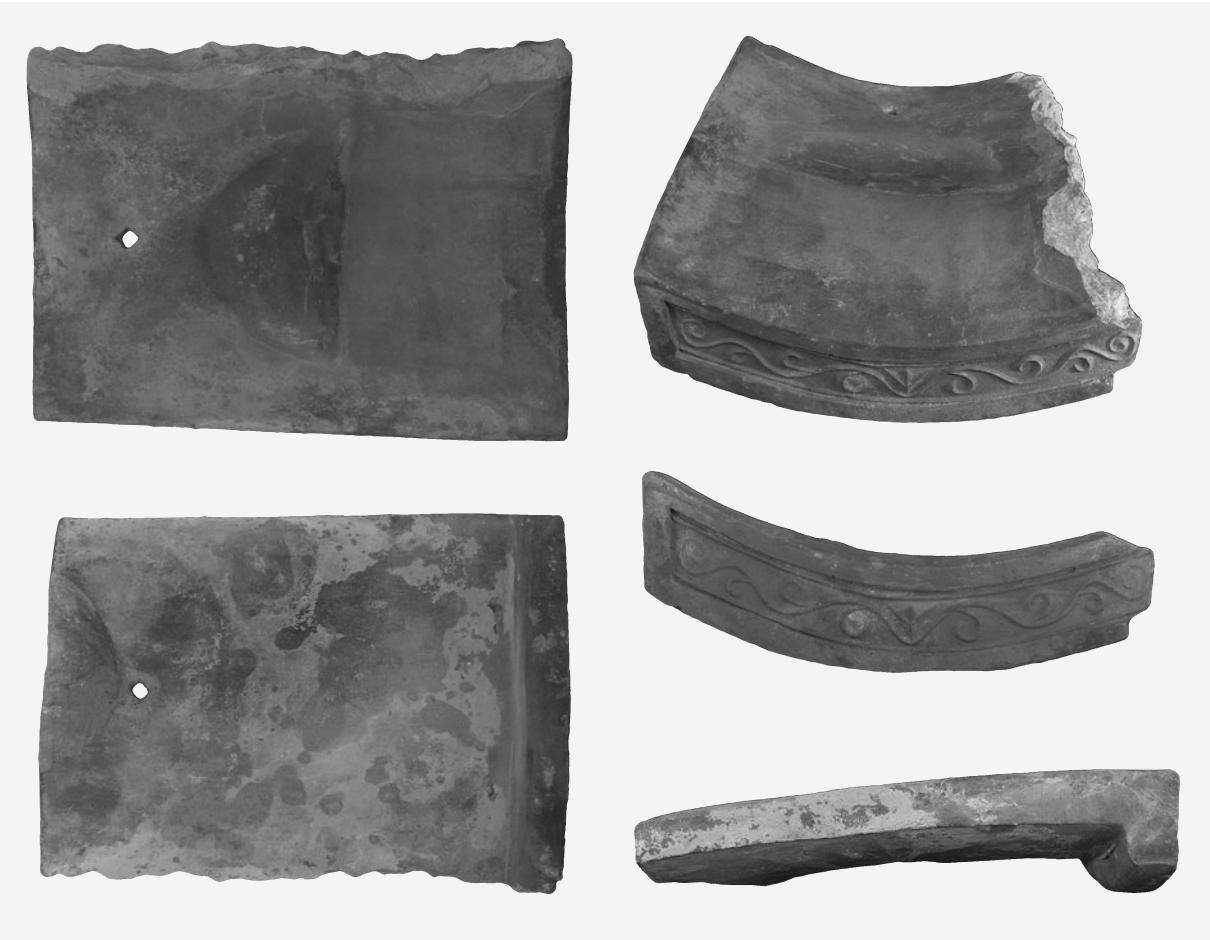
341　多宝塔　軒平瓦15



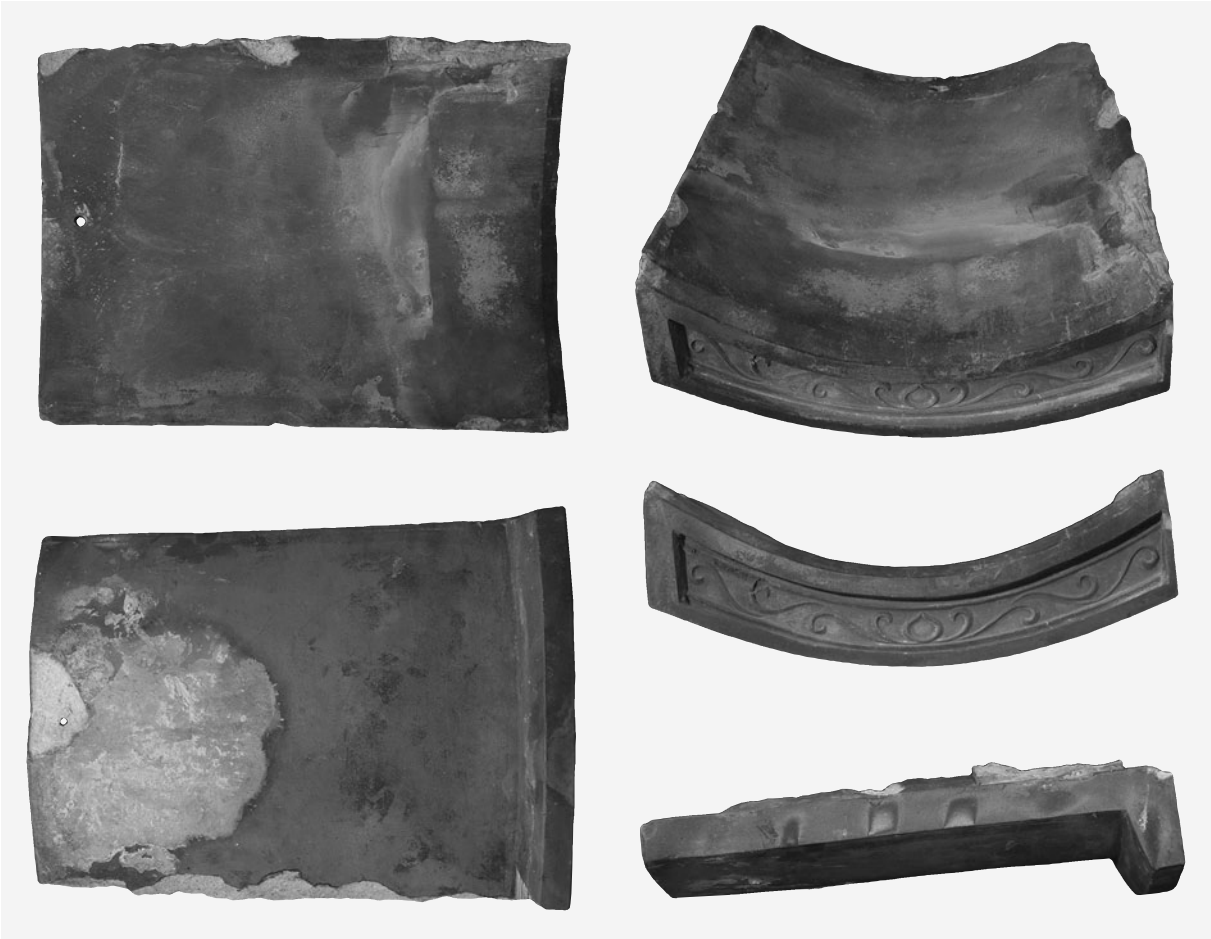
342　多宝塔　軒平瓦13、15詳細　左下は軒平瓦15凹面の布目痕跡

343　多宝塔　軒平瓦16

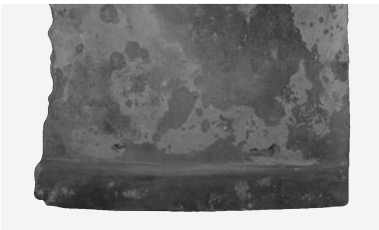
344　多宝塔　軒平瓦17



345　多宝塔　軒平瓦18

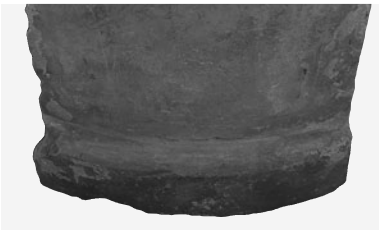


346　多宝塔　軒平瓦19　昭和３年



349　多宝塔　軒平瓦18詳細

348　多宝塔　軒平瓦16詳細



347　多宝塔　軒平瓦12詳細

352　多宝塔　軒平瓦19詳細

351　多宝塔　軒平瓦17詳細

350　多宝塔　軒平瓦14詳細

353　多宝塔　軒丸瓦 1

354　多宝塔　軒丸瓦 2

355　多宝塔　軒丸瓦 3

356　多宝塔　軒丸瓦 4

357　多宝塔　軒丸瓦 5

358　多宝塔　軒丸瓦 6

359　多宝塔　軒丸瓦 7

360　多宝塔　軒丸瓦 8

361　多宝塔　軒丸瓦 9

362　多宝塔　軒丸瓦10

363　多宝塔　軒丸瓦11

364　多宝塔　軒丸瓦12

365　多宝塔　軒丸瓦13

366　多宝塔　軒丸瓦14

367　多宝塔　軒丸瓦15

368　多宝塔　軒丸瓦16

369　多宝塔　軒丸瓦17

370　多宝塔　軒丸瓦18

371　多宝塔　軒丸瓦19

372　多宝塔　軒丸瓦20

373　多宝塔　軒丸瓦21

374　多宝塔　軒丸瓦22

375　多宝塔　軒丸瓦23　昭和３年

376　多宝塔　軒丸瓦24

377　多宝塔　軒丸瓦31-1

378　多宝塔　軒丸瓦31-2

379　多宝塔　軒丸瓦32

380　多宝塔　軒丸瓦33　昭和３年

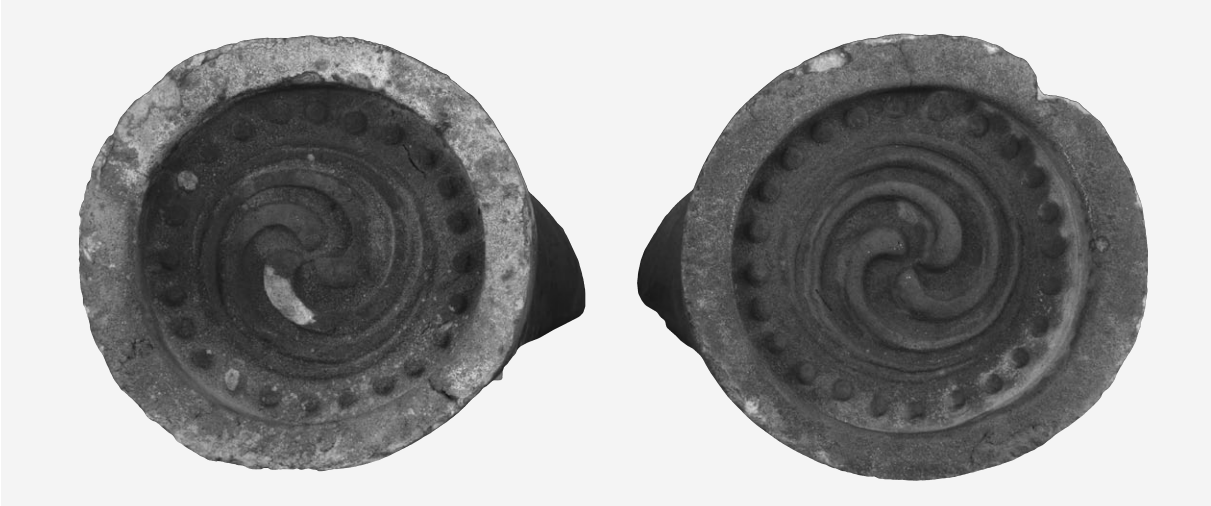
381　多宝塔　軒丸瓦34

382　多宝塔　軒丸瓦35

383　多宝塔　隅軒丸瓦 1

384　多宝塔　隅軒丸瓦25

385　多宝塔　隅軒丸瓦26



386　多宝塔　軒丸瓦31、32の瓦当面比較　左が31、右が32

387　多宝塔　軒丸瓦31、32の凹面比較　いずれも右が31、左が32

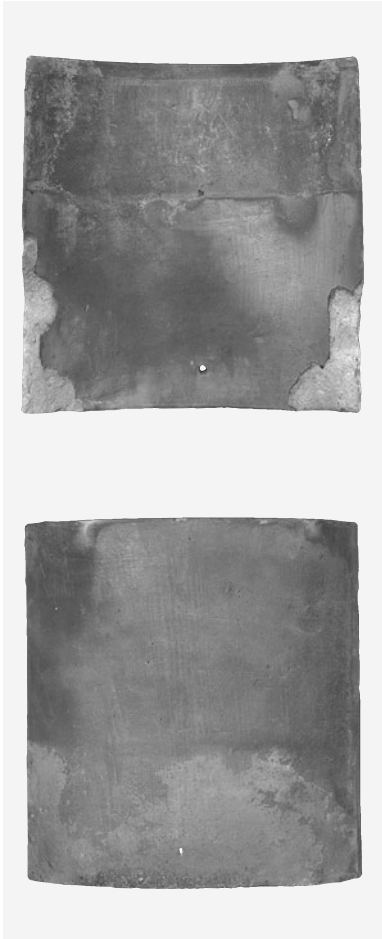
388　多宝塔　隅軒丸瓦25、26の瓦当面比較　左が25、右が26

390　薬王寺観音堂の当初比定軒丸瓦
株式会社瓦宇工業所保管

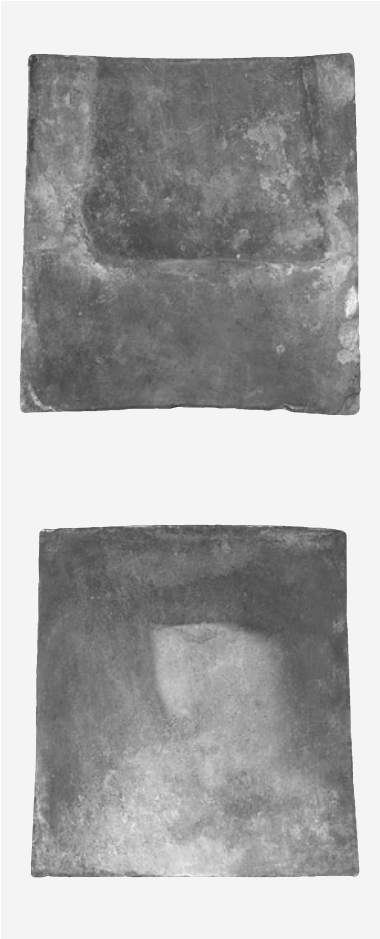
389　薬王寺観音堂の西面に３本残る当初比定軒丸瓦

※写真左脇の棒線は各瓦に対して５寸

393　多宝塔　平瓦５

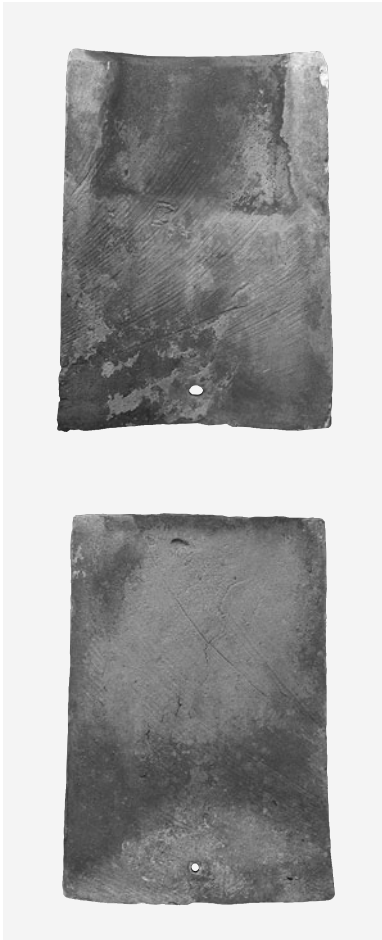


392　多宝塔　平瓦２　昭和３年



391　多宝塔　平瓦１

396　多宝塔　平瓦12-１



395　多宝塔　平瓦11-２

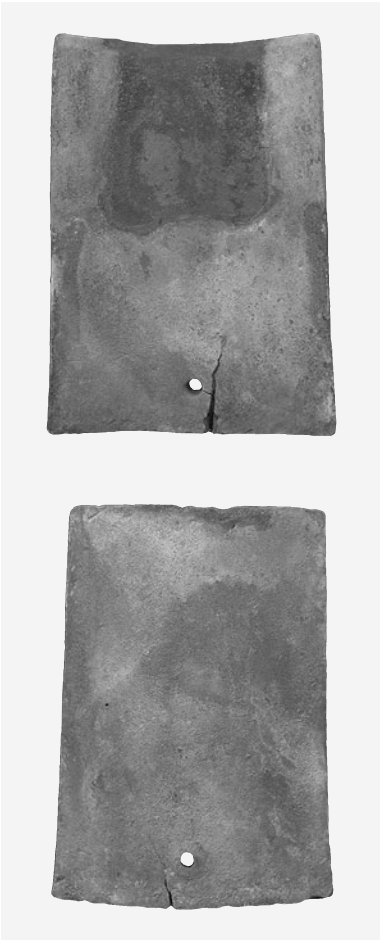
394　多宝塔　平瓦11-１

398　多宝塔　平瓦13

397　多宝塔　平瓦12-2

401　多宝塔　平瓦15′

400　多宝塔　平瓦15

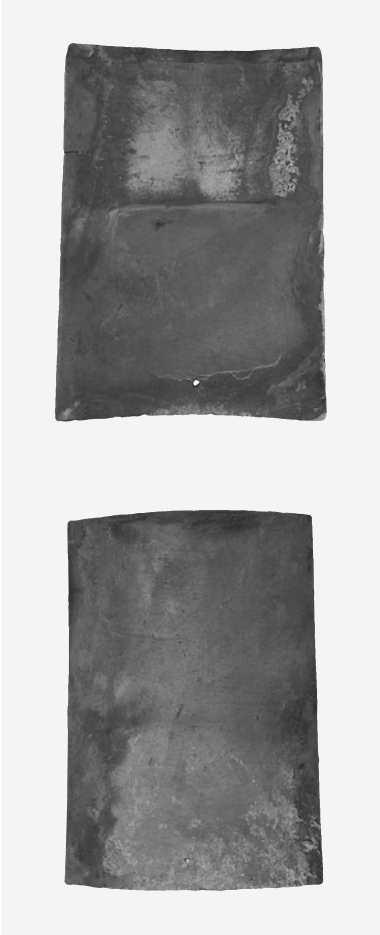


399　多宝塔　平瓦14

404　多宝塔　平瓦17-2

403　多宝塔　平瓦17-1

402　多宝塔　平瓦16

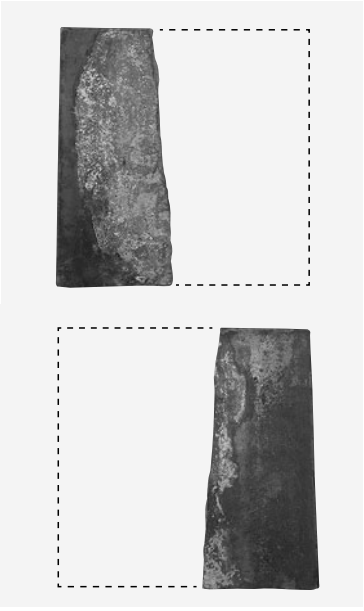


407　多宝塔　平瓦20　昭和３年

406　多宝塔　平瓦19

405　多宝塔　平瓦18

408　多宝塔　平瓦17頭部の刻印



409　多宝塔　割熨斗に転用されていた近世期の刻印入り平瓦　丸瓦25と対応

411　多宝塔　丸瓦２

410　多宝塔　丸瓦１

413　多宝塔　丸瓦４

412　多宝塔　丸瓦３

415　多宝塔　丸瓦 5－1

414　多宝塔　丸瓦 4′

417　多宝塔　丸瓦 5′

416　多宝塔　丸瓦 5－2

420　多宝塔　丸瓦 5－2

419　多宝塔　丸瓦 5－1

418　多宝塔　丸瓦 3

422　多宝塔　丸瓦 7

421　多宝塔　丸瓦 6

424　多宝塔　丸瓦 9

423　多宝塔　丸瓦 8

426　多宝塔　丸瓦10

425　多宝塔　丸瓦 9 ′

428　多宝塔　丸瓦12

427　多宝塔　丸瓦11

430　多宝塔　丸瓦14

429　多宝塔　丸瓦13

432　多宝塔　丸瓦16

431　多宝塔　丸瓦15

434　多宝塔　丸瓦18

433　多宝塔　丸瓦17

436　多宝塔　丸瓦19′

435　多宝塔　丸瓦19

438　多宝塔　丸瓦21

437　多宝塔　丸瓦20

440　多宝塔　丸瓦22′

439　多宝塔　丸瓦22

442　多宝塔　丸瓦24

441　多宝塔　丸瓦23

444　多宝塔　丸瓦26

443　多宝塔　丸瓦25

446　多宝塔　丸瓦28

445　多宝塔　丸瓦27

448　多宝塔　丸瓦30

447　多宝塔　丸瓦29

450　多宝塔　丸瓦32

449　多宝塔　丸瓦31

452　多宝塔　丸瓦34

451　多宝塔　丸瓦33

454　多宝塔　丸瓦36　昭和３年

453　多宝塔　丸瓦35（47と同種）

456　多宝塔　丸瓦38

455　多宝塔　丸瓦37（49と同種）　昭和３年

458　多宝塔　丸瓦39（51と同種）

457　多宝塔　丸瓦38″

460　多宝塔　丸瓦41′

459　多宝塔　丸瓦41

462　多宝塔　丸瓦42′

461　多宝塔　丸瓦42

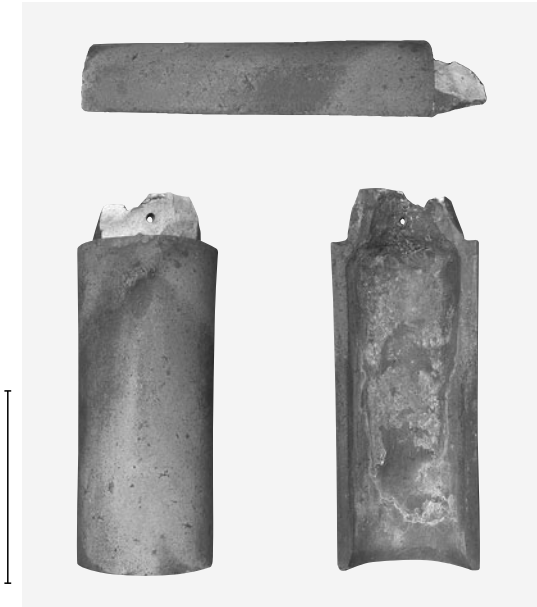
464　多宝塔　丸瓦44

463　多宝塔　丸瓦43

466　多宝塔　丸瓦46

465　多宝塔　丸瓦45

468　多宝塔　丸瓦50



467　多宝塔　丸瓦48　昭和３年

469　丸瓦８の凹面比較

471　丸瓦17の内叩き状況

470　丸瓦10の凹面比較

473　丸瓦14の玉縁篦痕跡

472　丸瓦11の凹面比較

479　丸瓦38

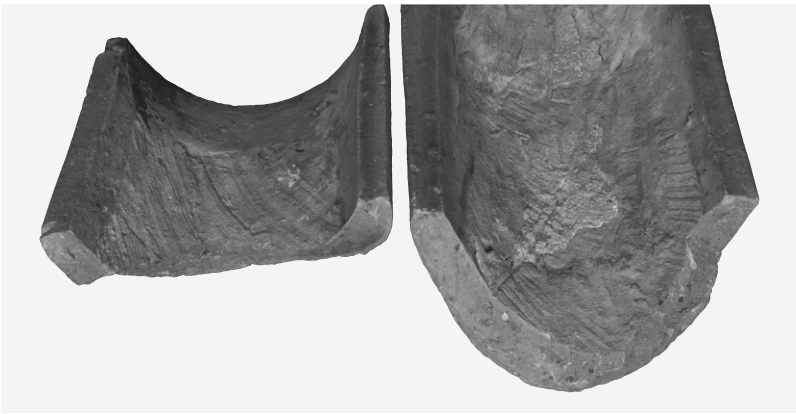
478　丸瓦37

477　丸瓦29

476　丸瓦27-２

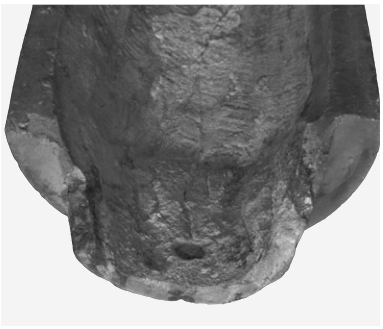
475　丸瓦27-１

474　丸瓦25



481　多宝塔　丸瓦41詳細

480　多宝塔　丸瓦41



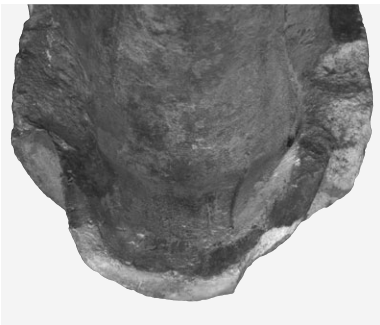
482　多宝塔　丸瓦41詳細

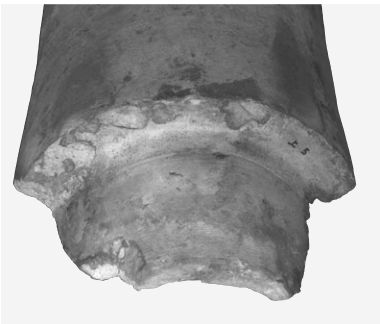
484　多宝塔　丸瓦42

483　多宝塔　丸瓦41′

486　多宝塔　丸瓦43

485　多宝塔　丸瓦42′





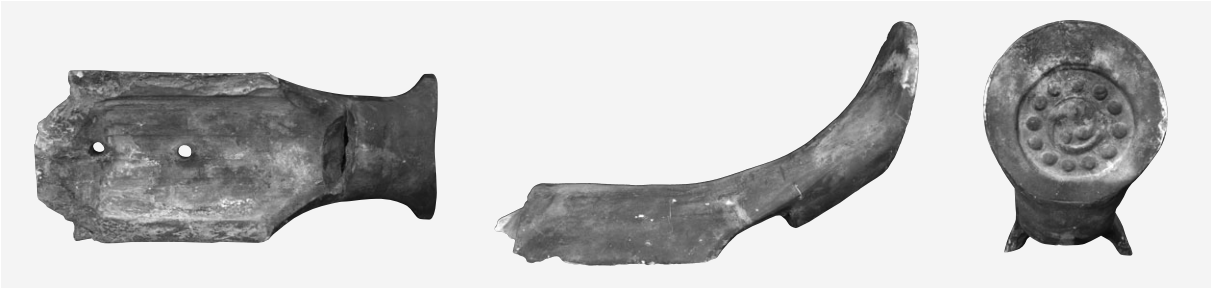
489　多宝塔　丸瓦45詳細

488　多宝塔　丸瓦45

487　多宝塔　丸瓦44

490　多宝塔　鳥衾瓦　下層南東

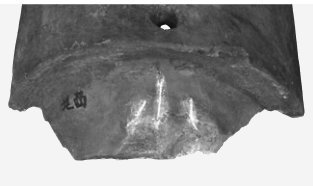
491　多宝塔　鳥衾瓦　下層南西



492　多宝塔　鳥衾瓦　下層北西

493　多宝塔　鳥衾瓦　下層北東

496　多宝塔　鳥衾瓦と丸瓦の対応
下層北西と丸瓦22

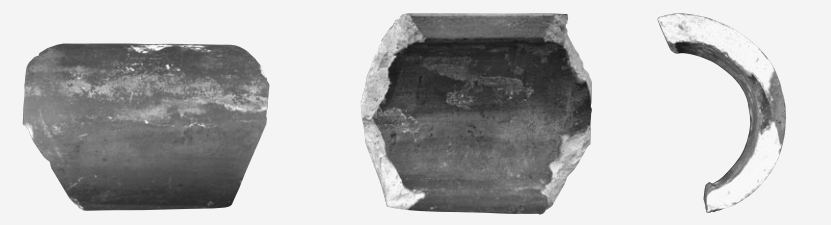


495　多宝塔　鳥衾瓦
下層北西　玉縁篦痕跡

494　多宝塔　鳥衾瓦と丸瓦の対応
下層南西・北東と丸瓦31

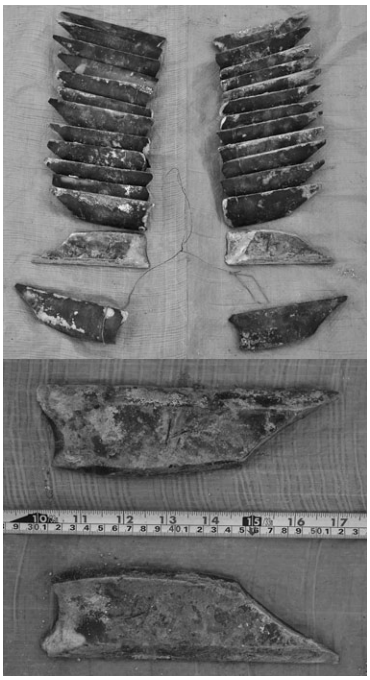
497　多宝塔　鳥衾瓦　上層北西　南東・北東も同じ

498　多宝塔　鳥衾瓦　上層南西　胴部線穴は中古

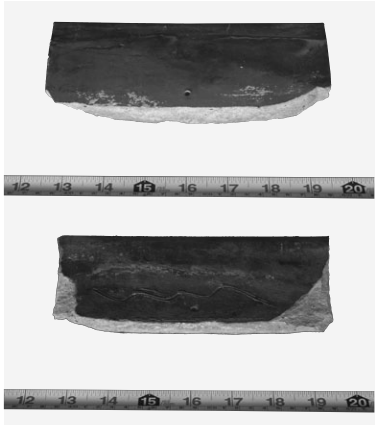


500　多宝塔　際面戸瓦　上層補足丸瓦割り出し

501　多宝塔　下層隅面戸瓦　上層補足丸瓦割り出し

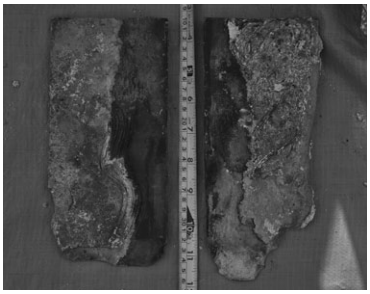


499　多宝塔　上層隅面戸瓦



504　多宝塔　際熨斗瓦

503　多宝塔　捨熨斗瓦の施工状況



502　多宝塔　捨熨斗瓦２種

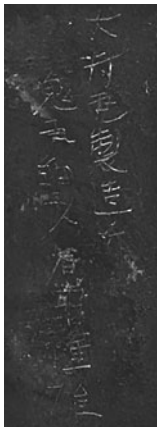
505　多宝塔　鬼瓦　下層南西

506　多宝塔　鬼瓦　下層北西

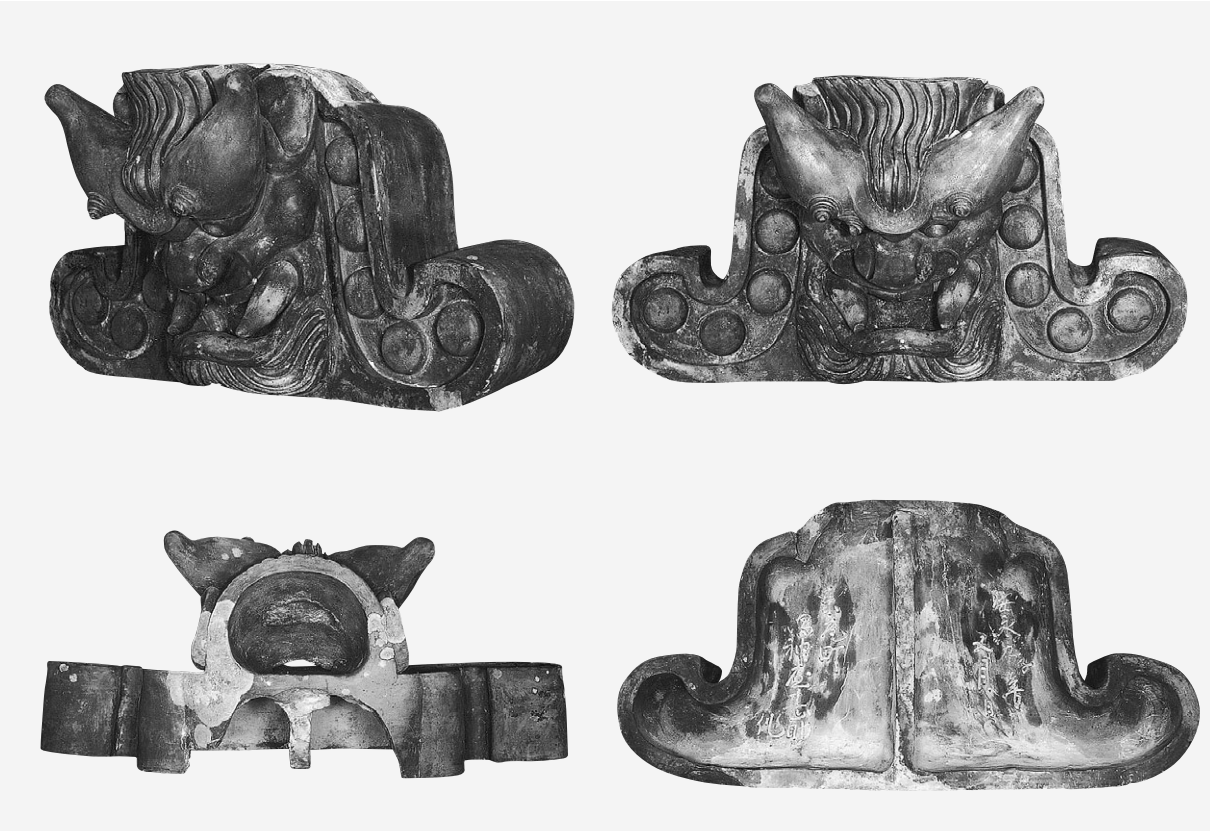
507　多宝塔　鬼瓦　下層北東

508　多宝塔　鬼瓦　上層北西

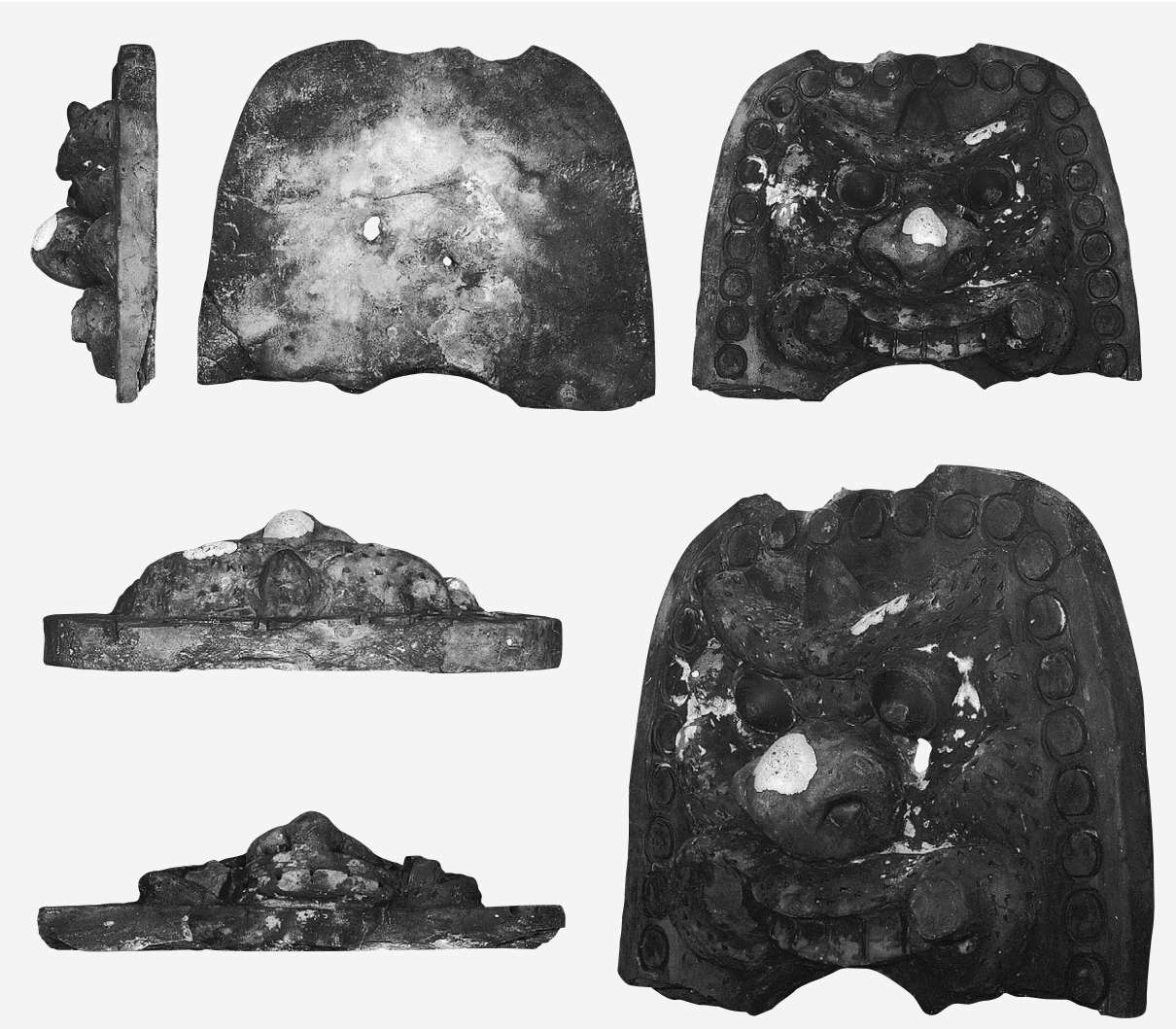
509　多宝塔　鬼瓦　上層北東



510　多宝塔　鬼瓦　上層南東　昭和３年



511　多宝塔　鬼瓦　下層南東　安永 9 年



512　多宝塔　鬼瓦　上層南西

513　鎮守堂　鬼瓦　東

514　鎮守堂　鬼瓦　西

515　鎮守堂　鳥衾瓦　東

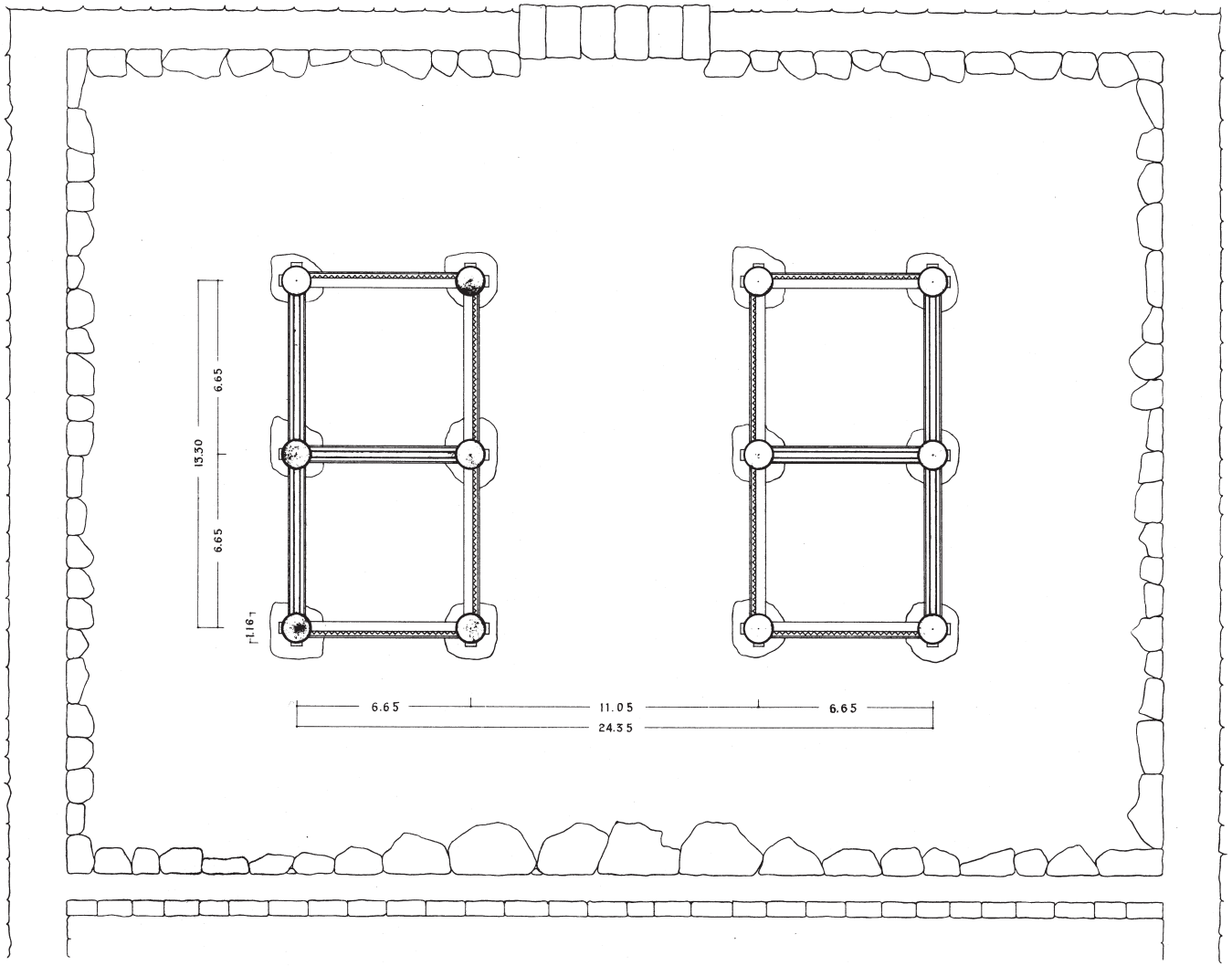
516　鎮守堂　衾瓦　昭和３年

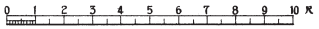
517　鎮守堂　衾瓦　昭和54年　凹面篦書き

図

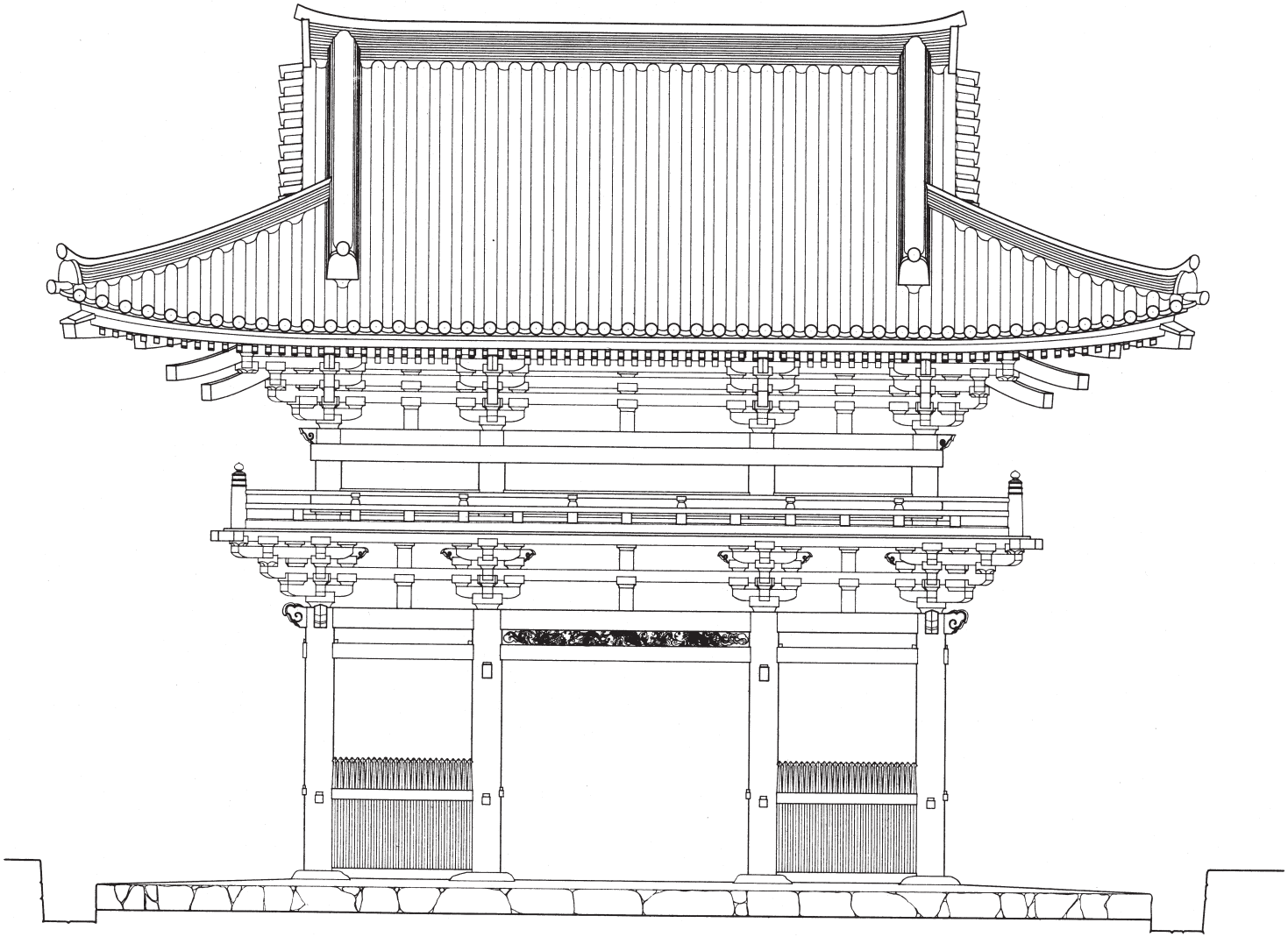
面

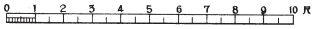
（奈良文化財研究所蔵）



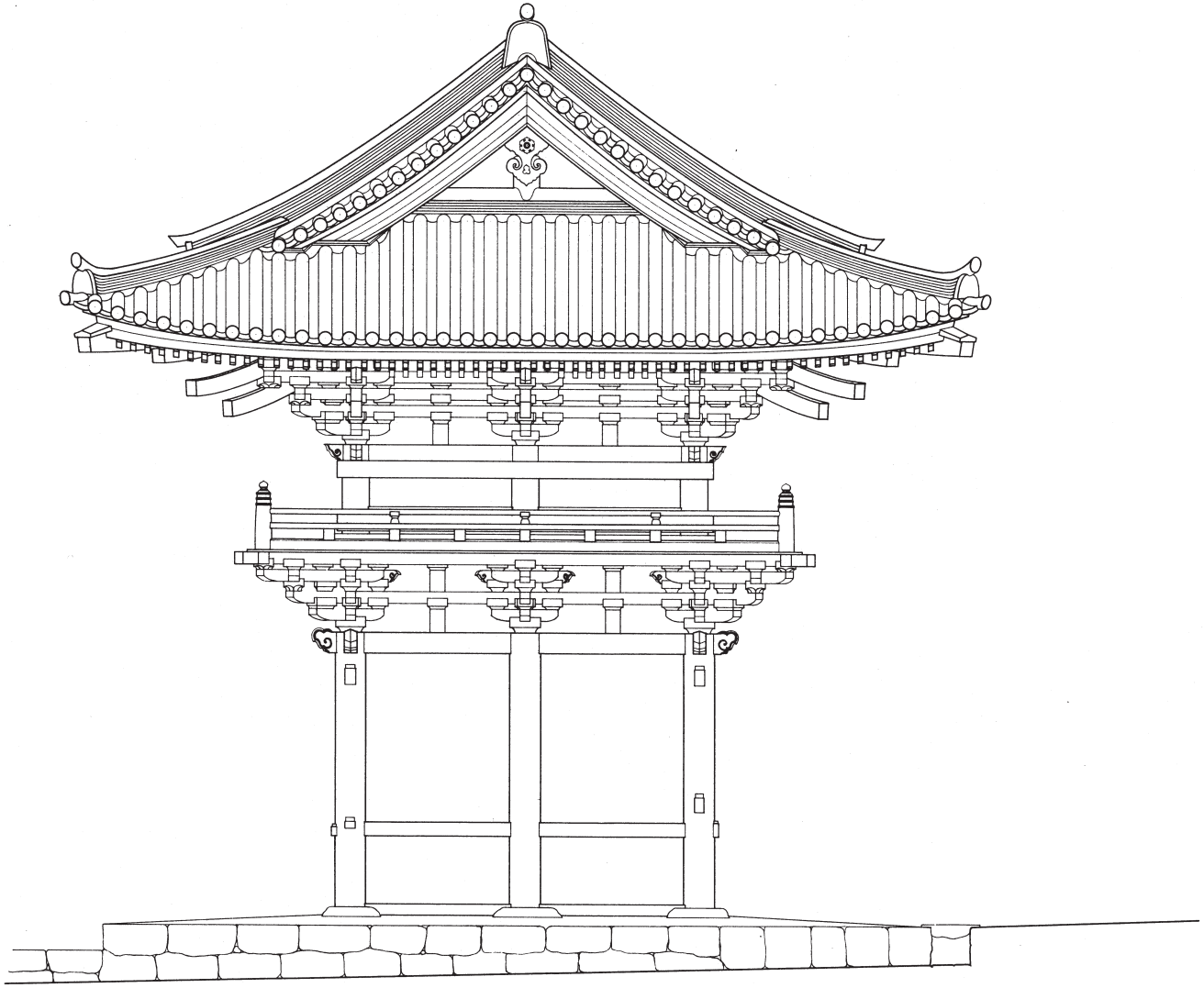


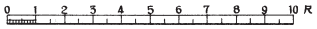
1　大門　平面図



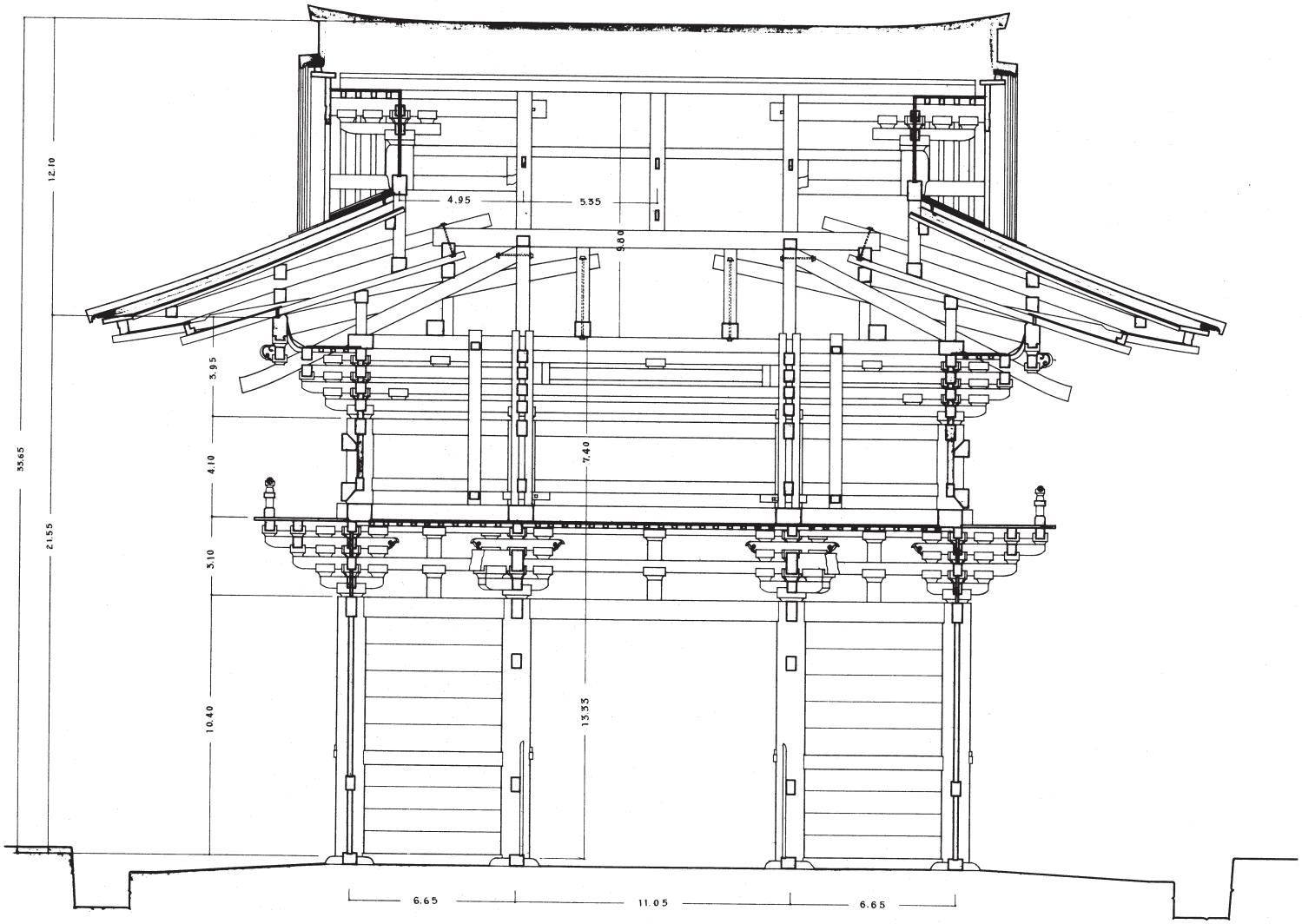


2　大門　正面図



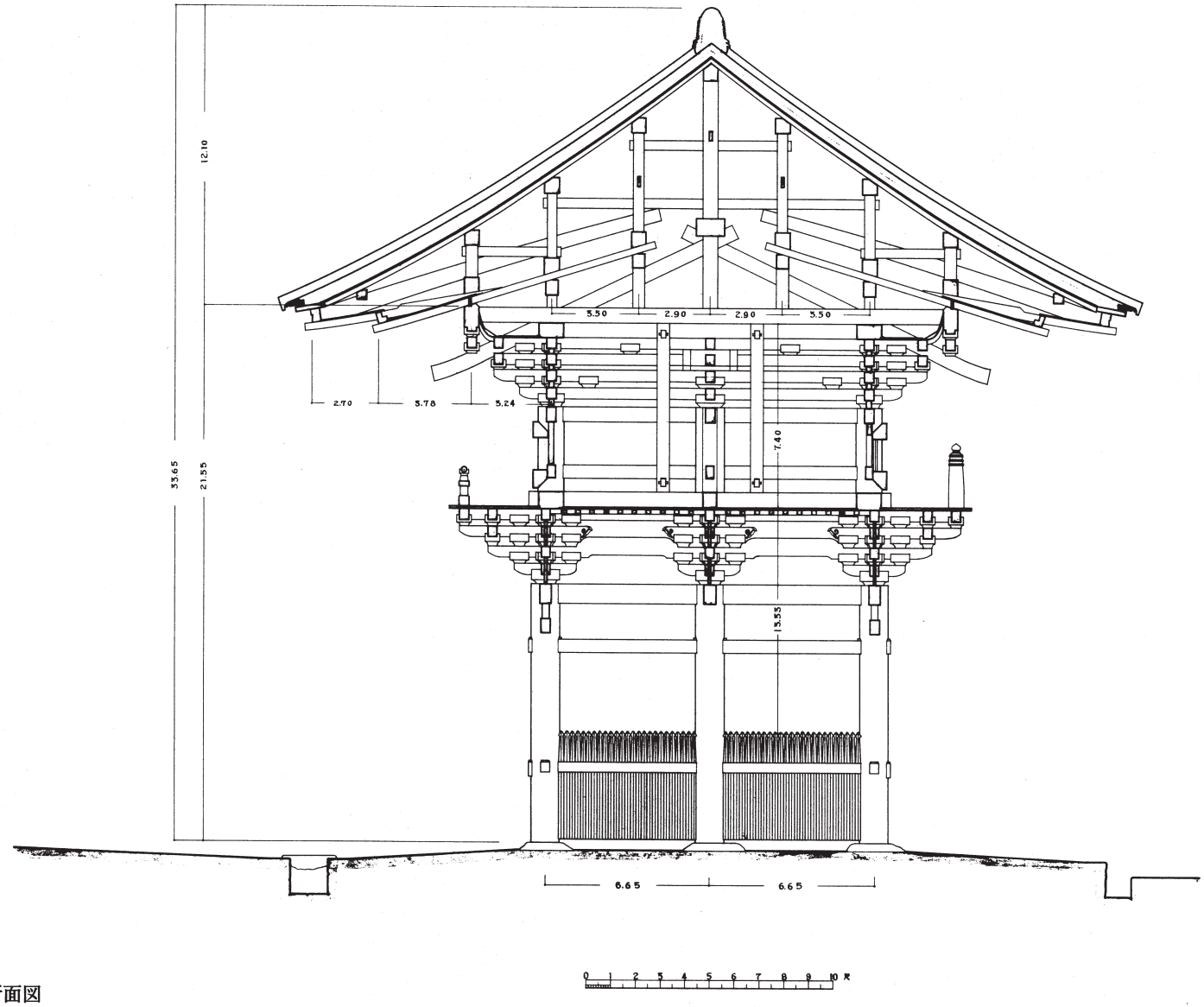


3　大門　側面図

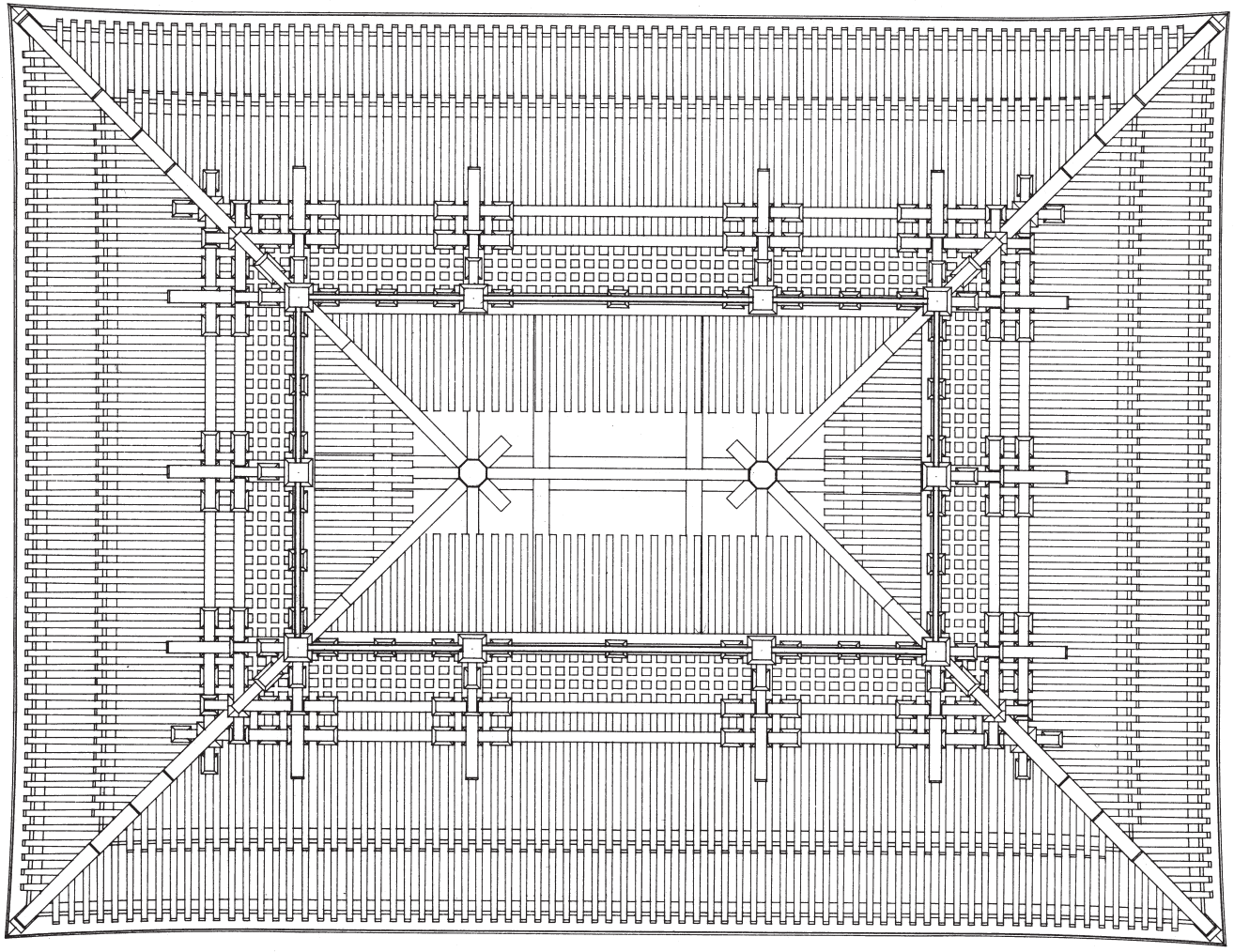


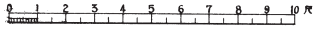
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 尺

4　大門　桁行断面図

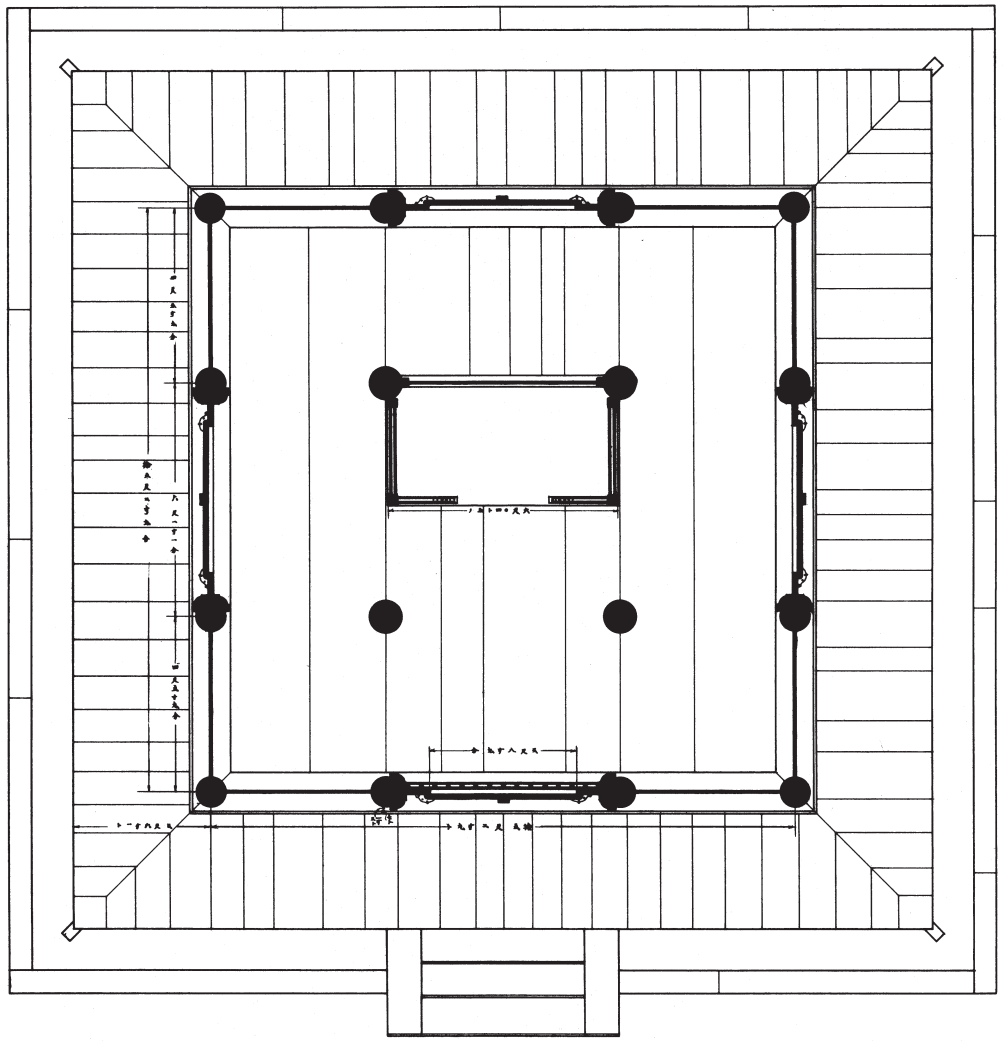

12.10
33.65
21.55
5.50
2.90
2.90
5.50
2.70
3.78
5.24
7.40
13.55
6.65
6.65
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 m

5　大門　梁間断面図

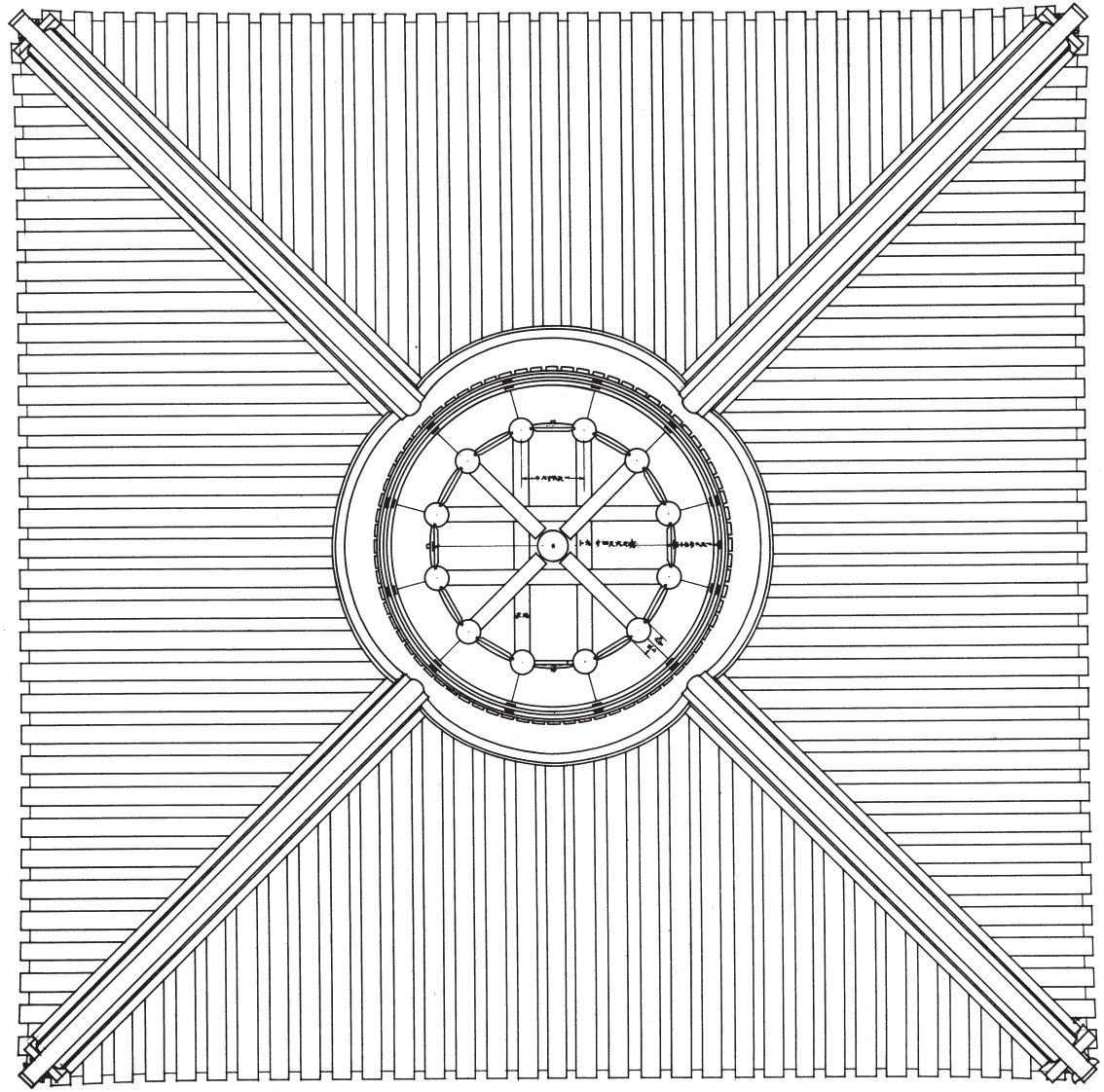




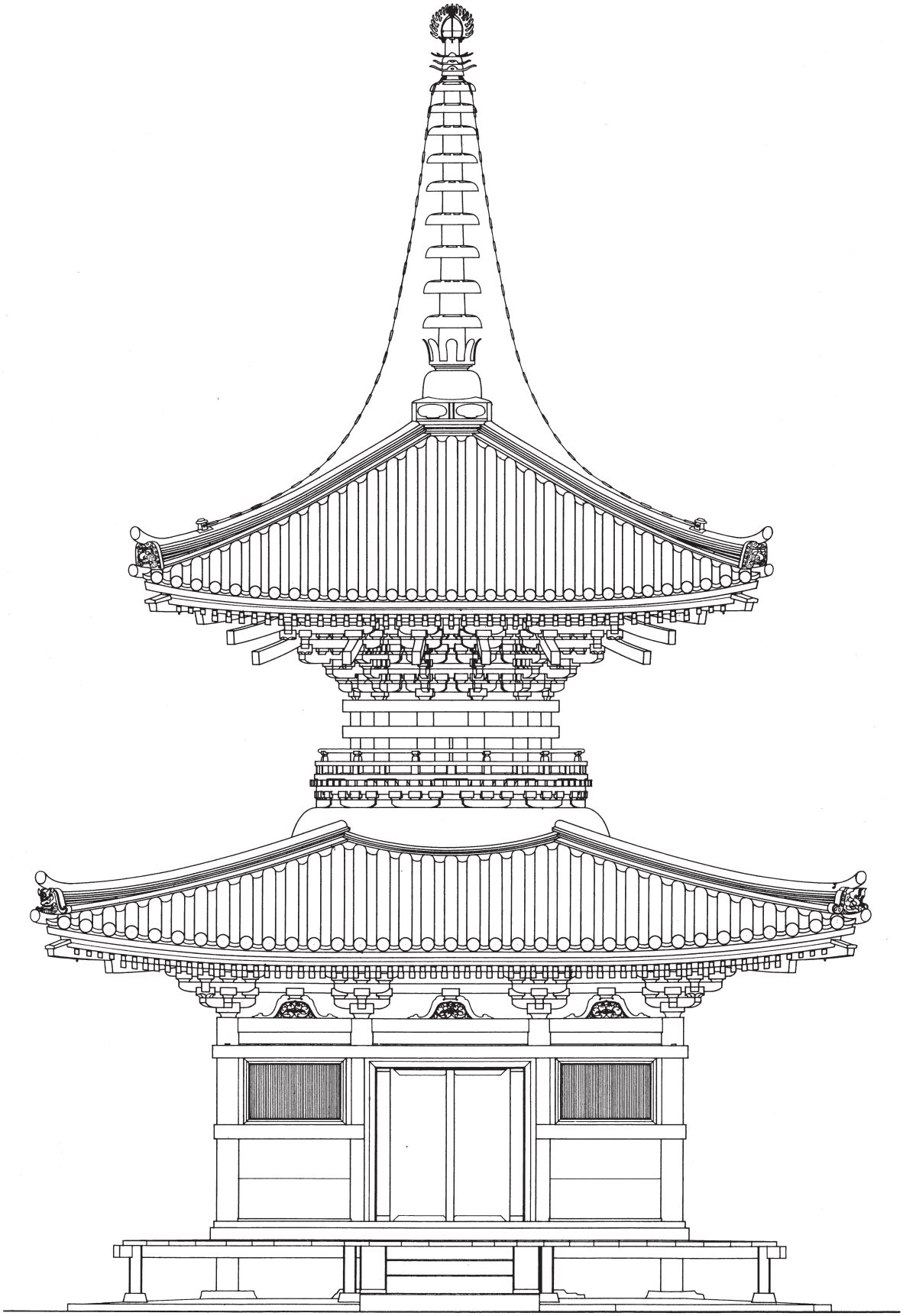
6　大門　軒見上図



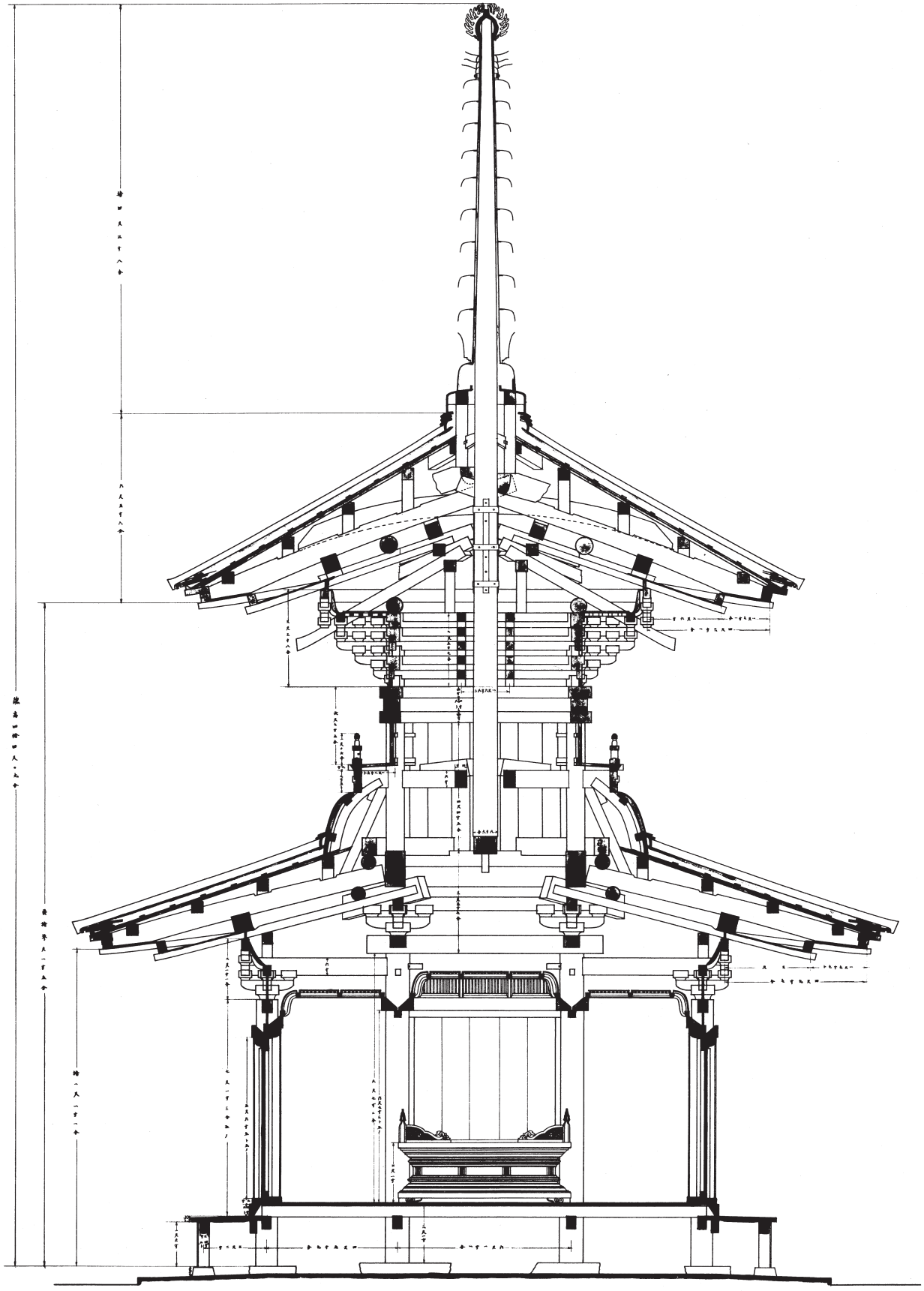
7　多宝塔　下層平面図



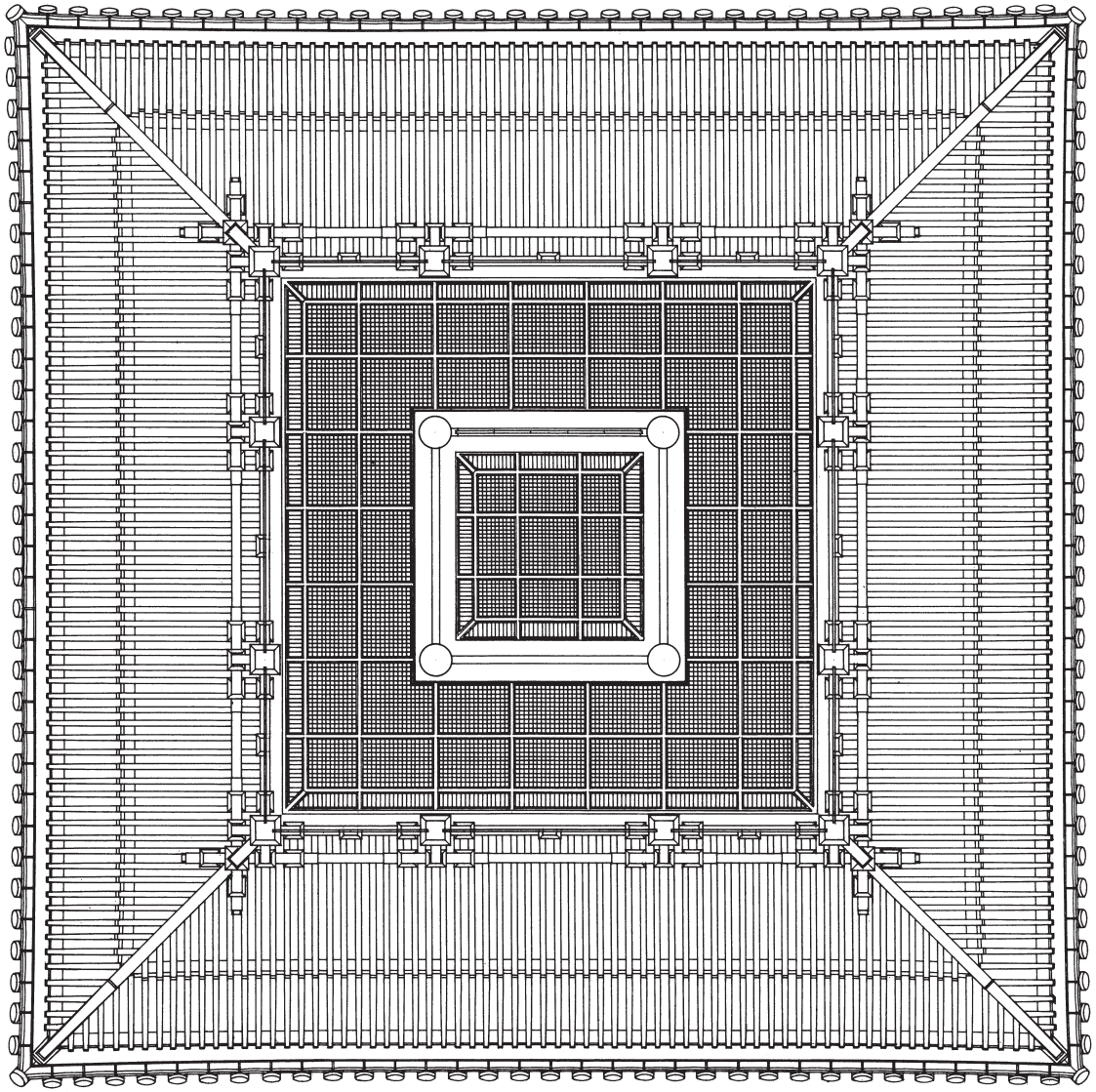
8　多宝塔　上層平面図

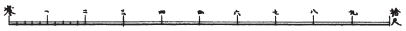


9　多宝塔　正面図

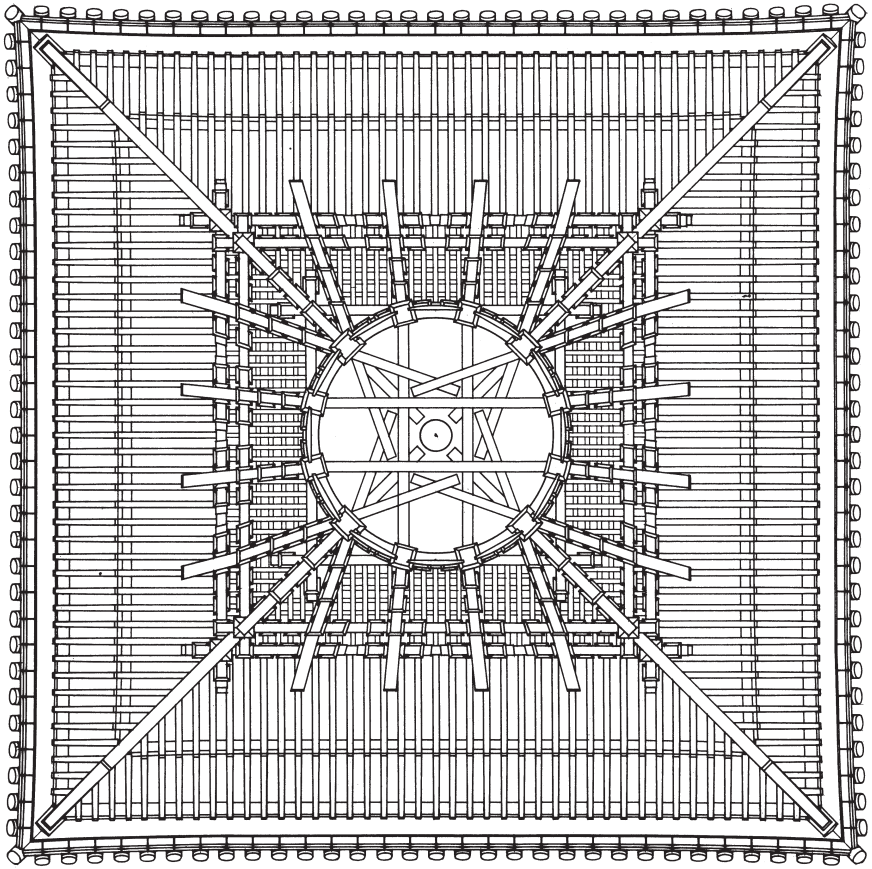


10　多宝塔　断面図

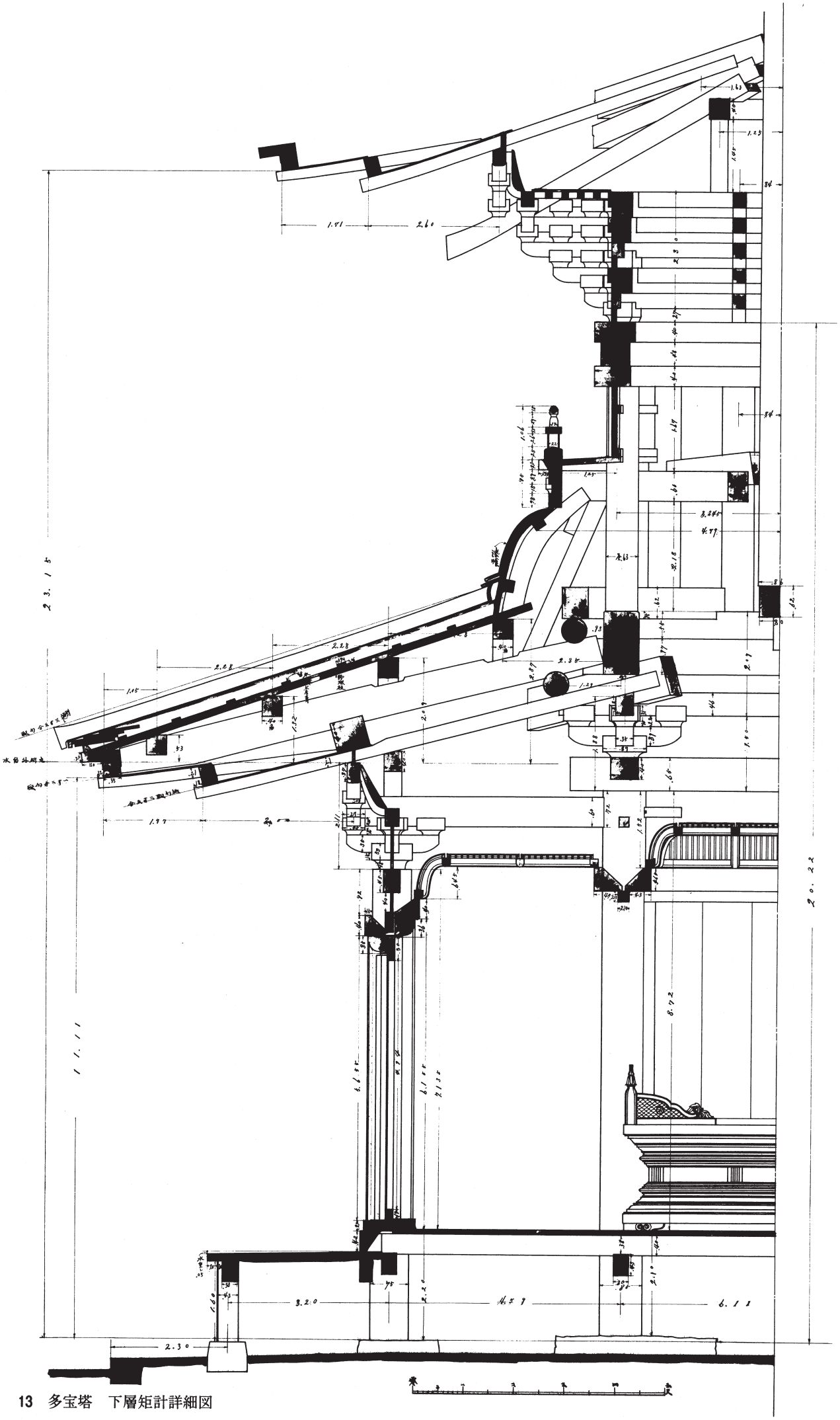




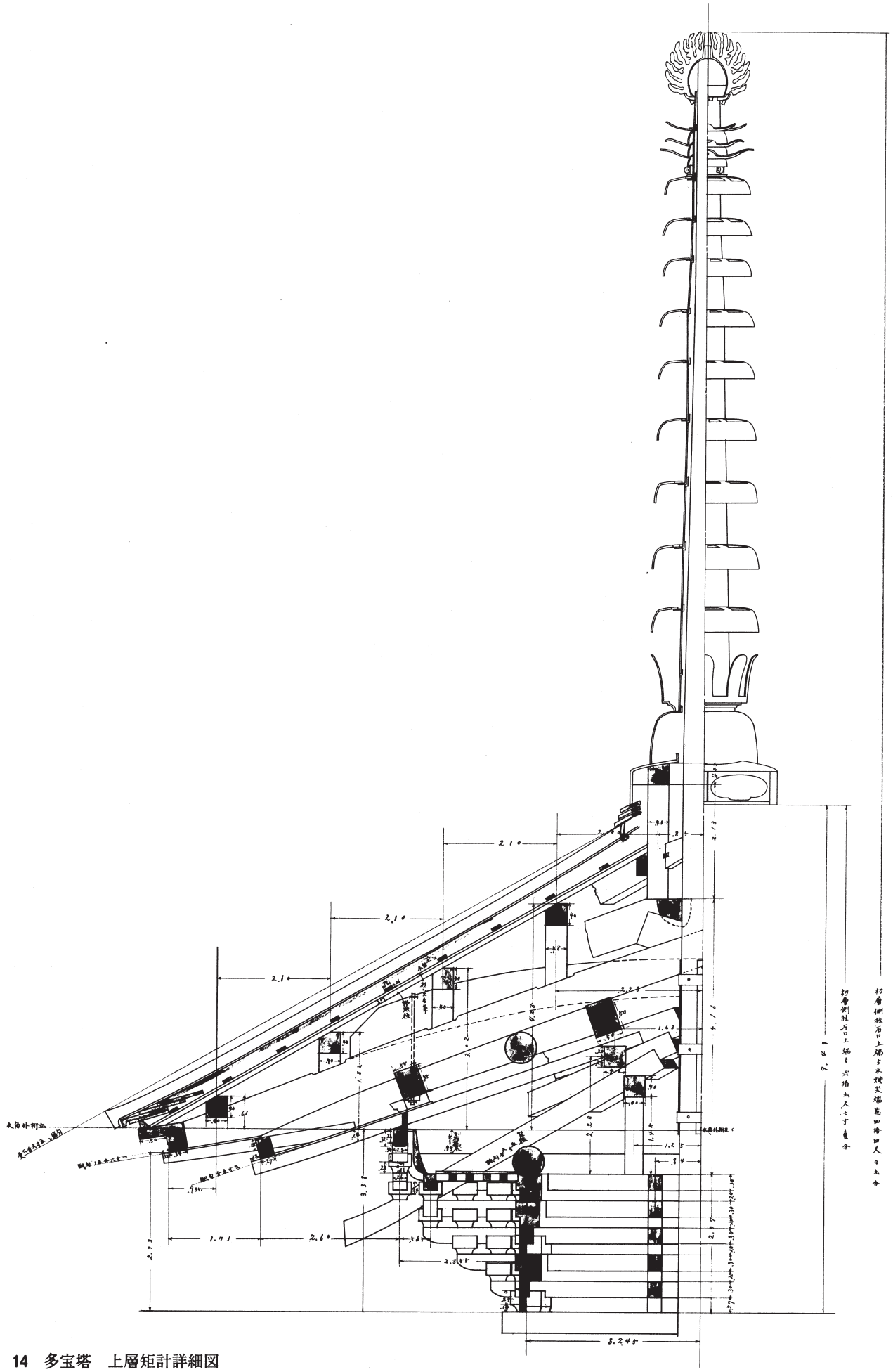
11　多宝塔　下層軒見上図



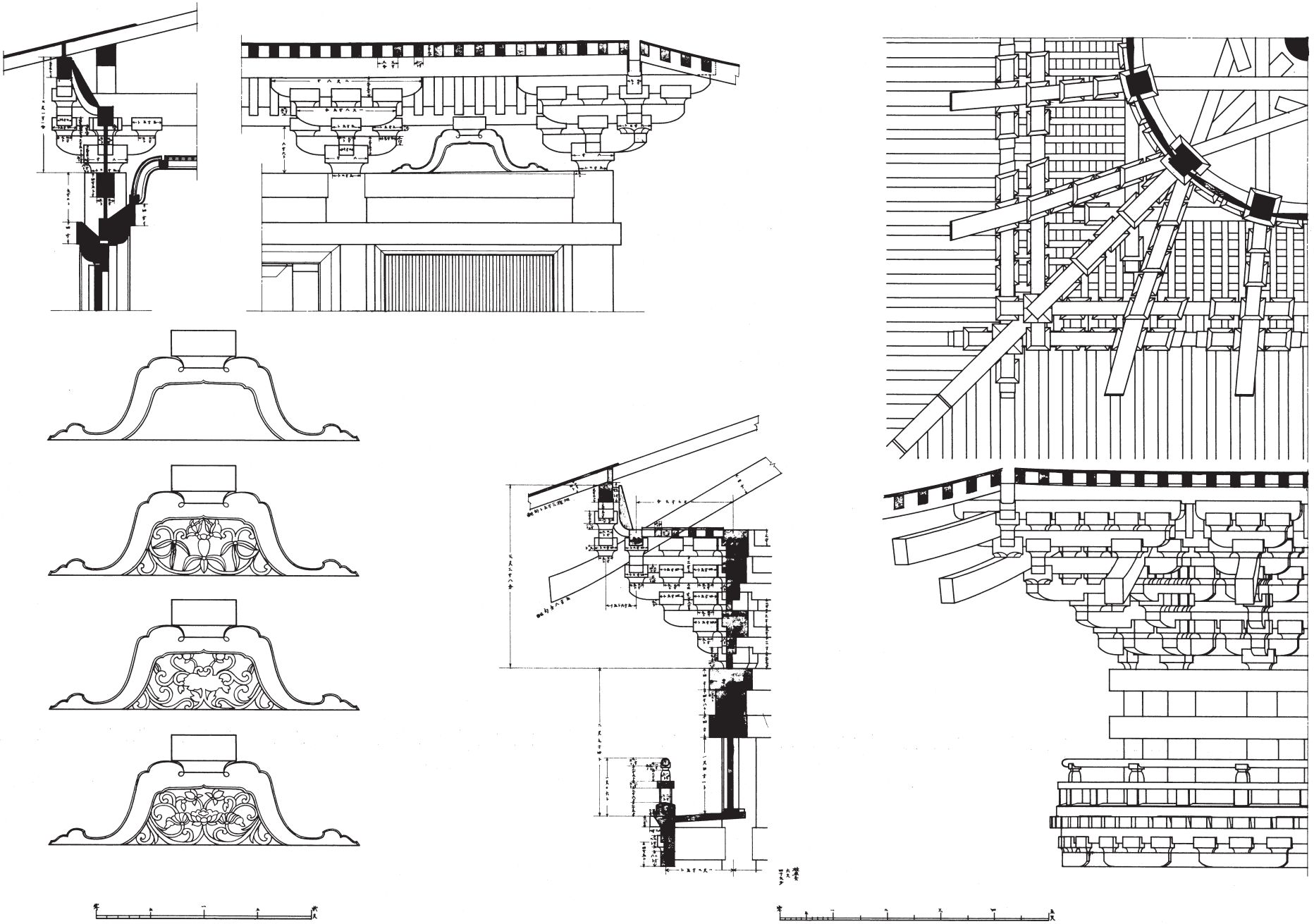
12　多宝塔　上層軒見上図



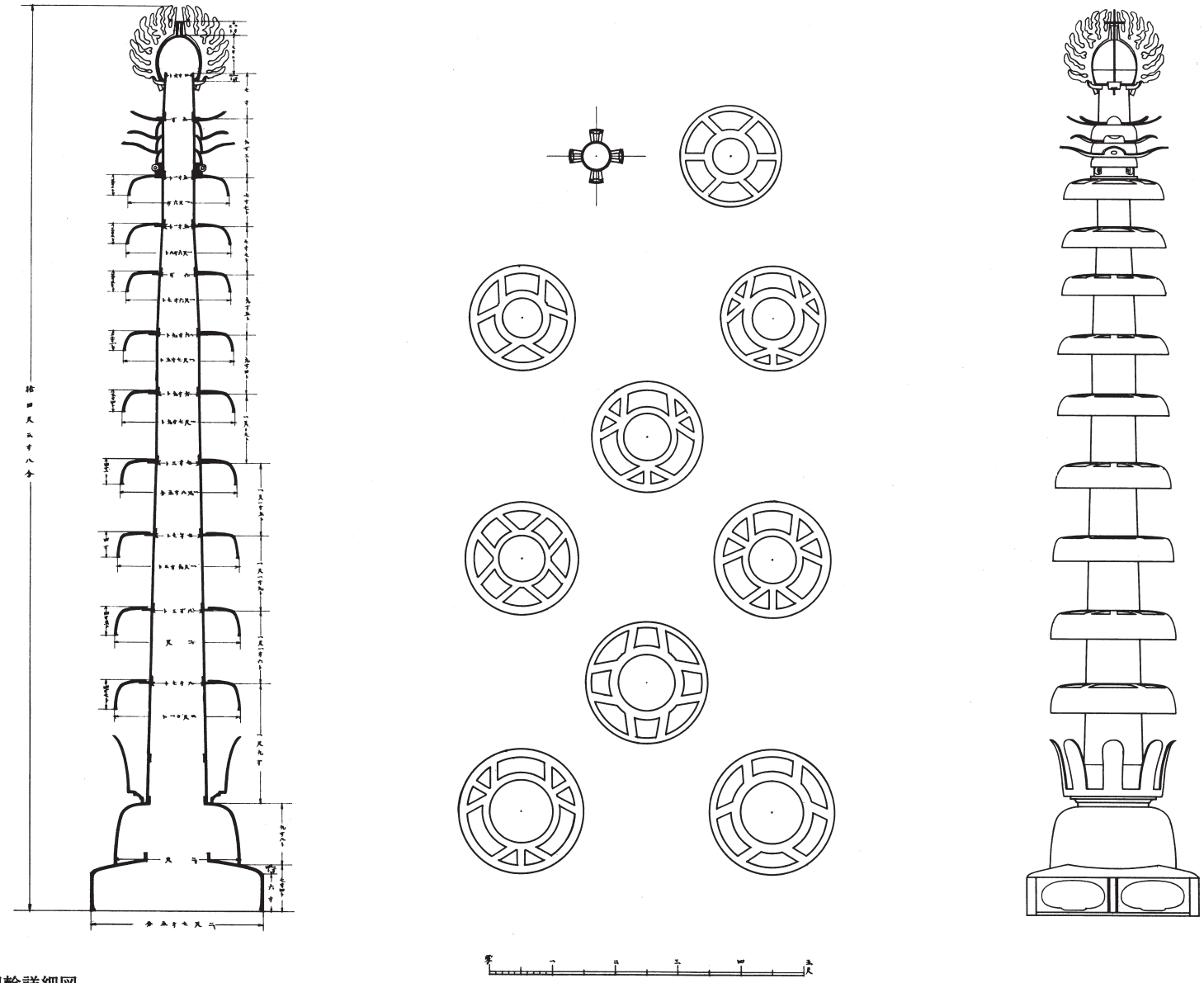
13　多宝塔　下層矩計詳細図



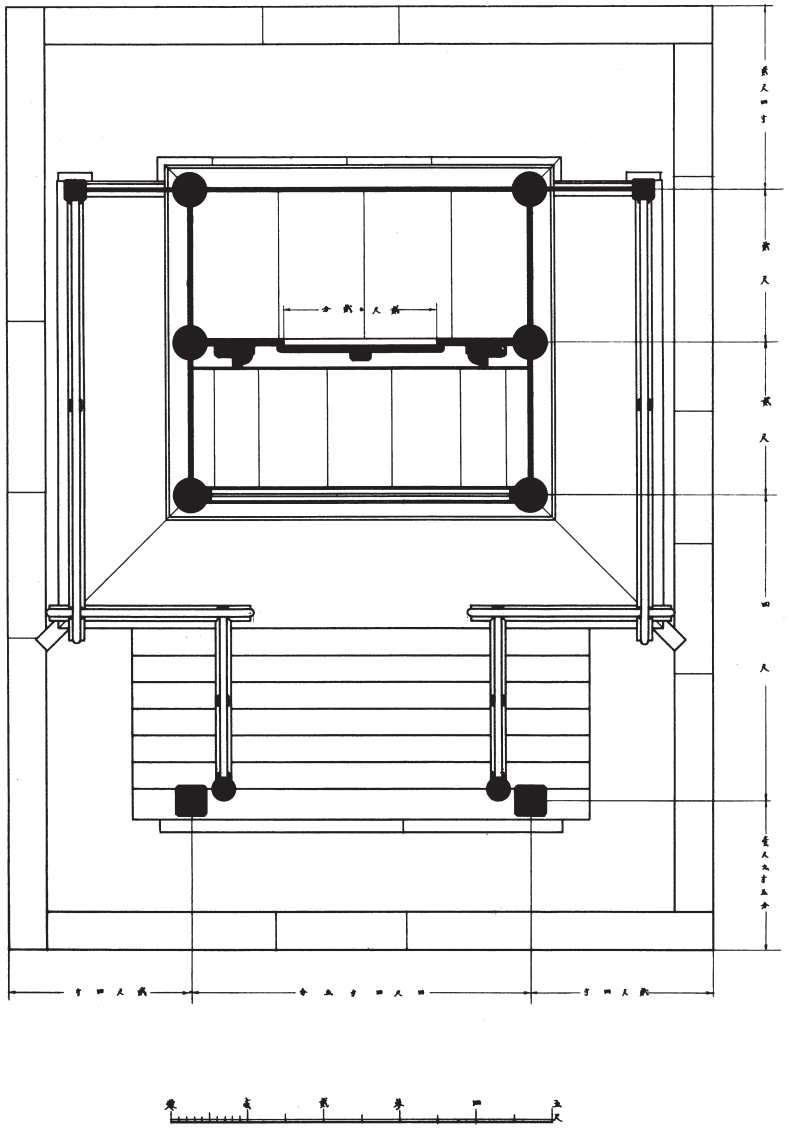
14　多宝塔　上層矩計詳細図



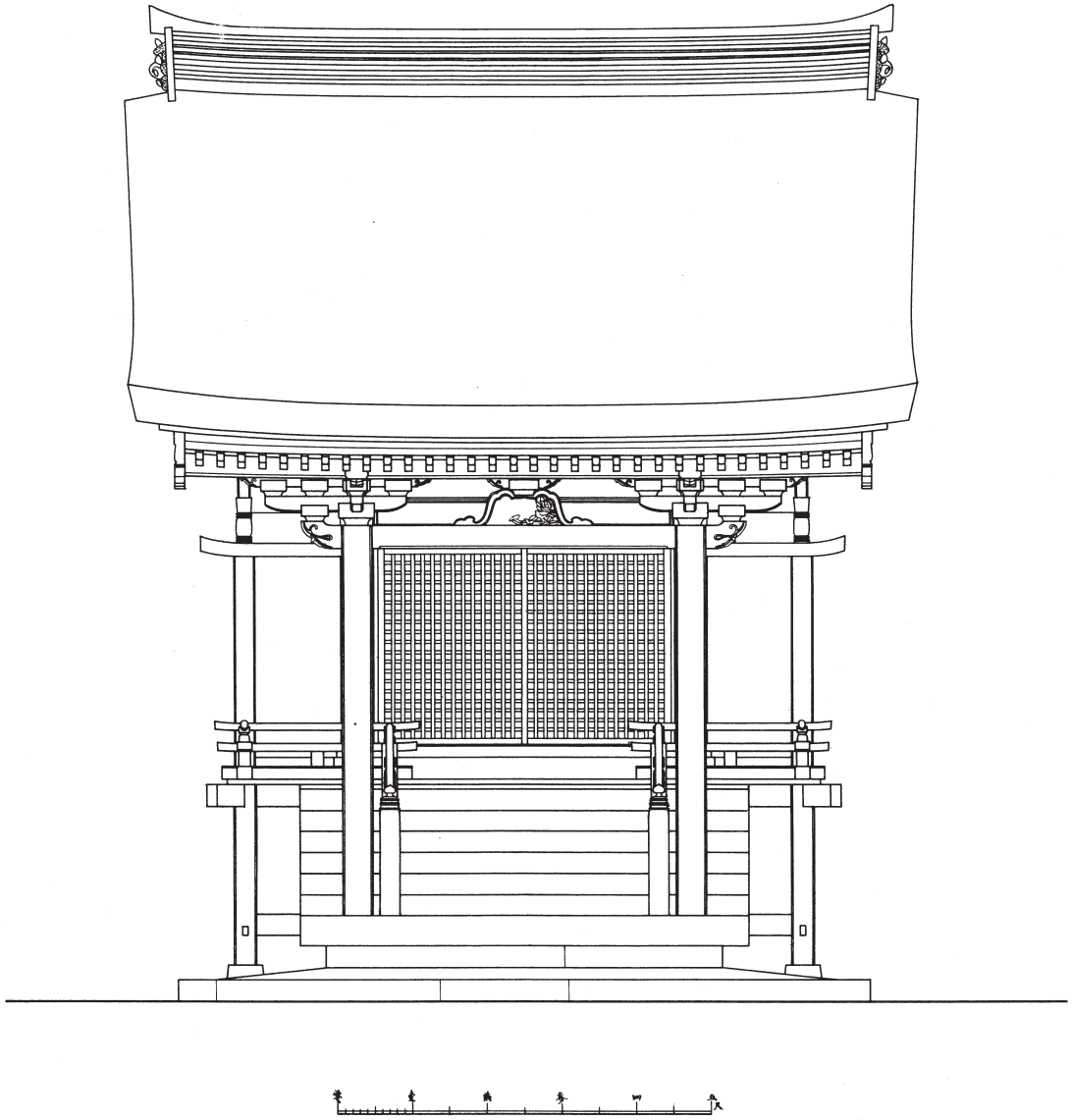
15　多宝塔　組物詳細図



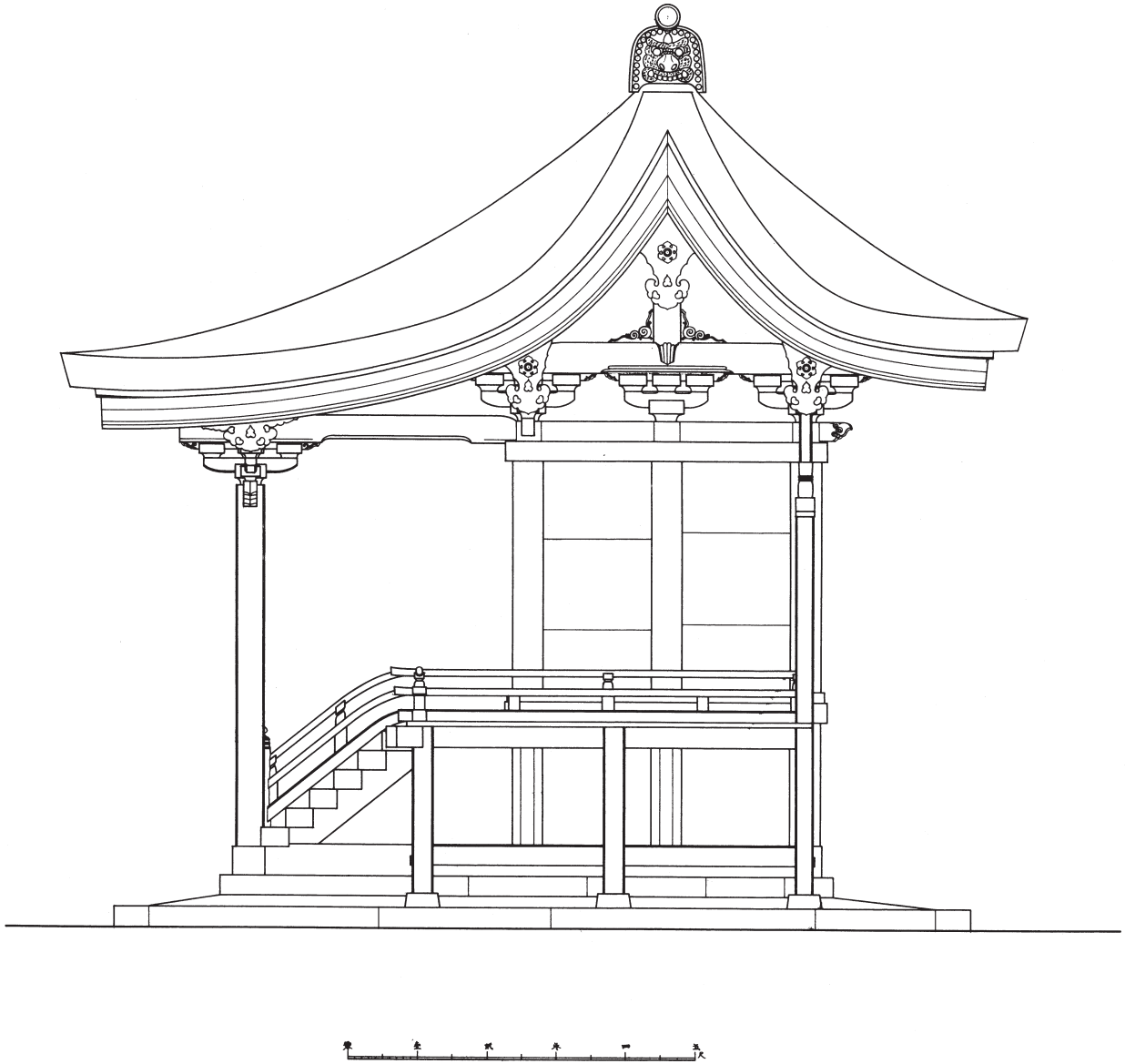
16　多宝塔　相輪詳細図



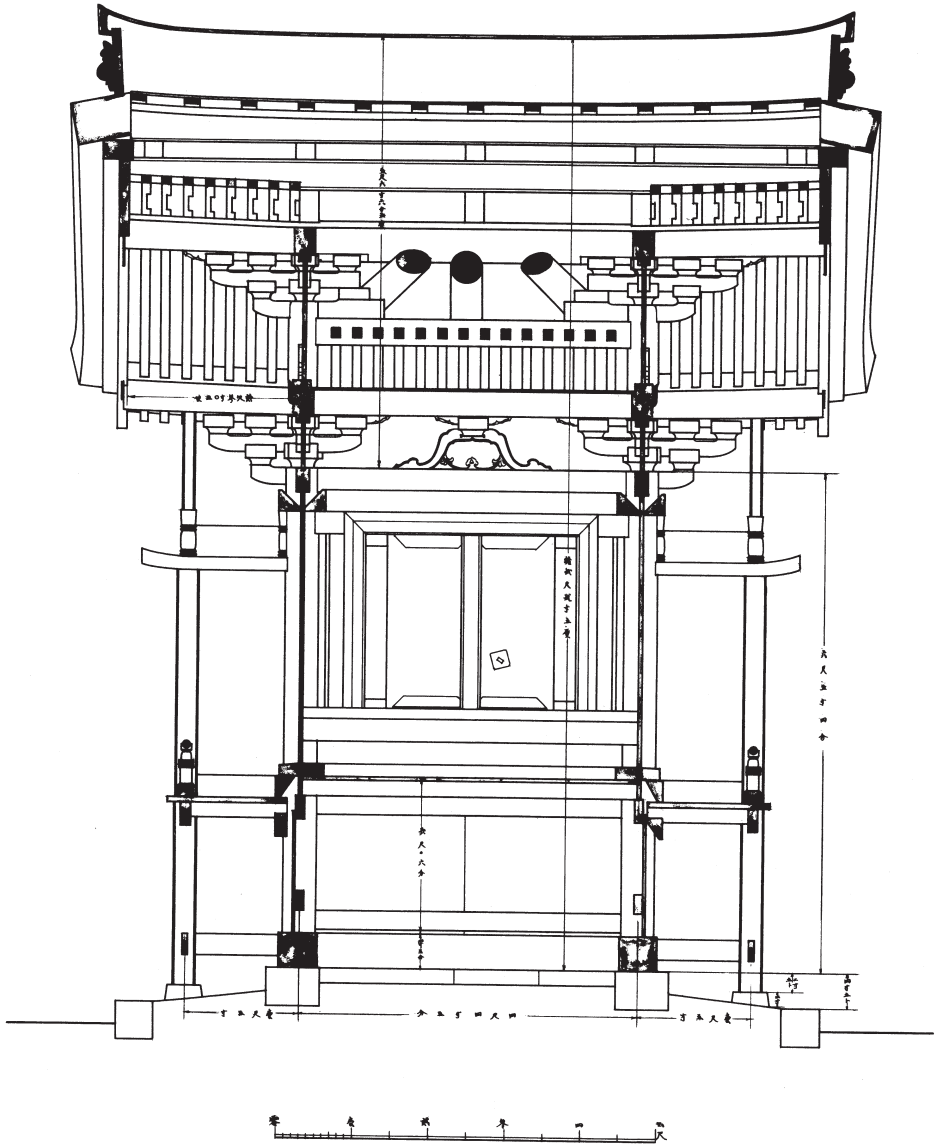
17　鎮守堂　平面図



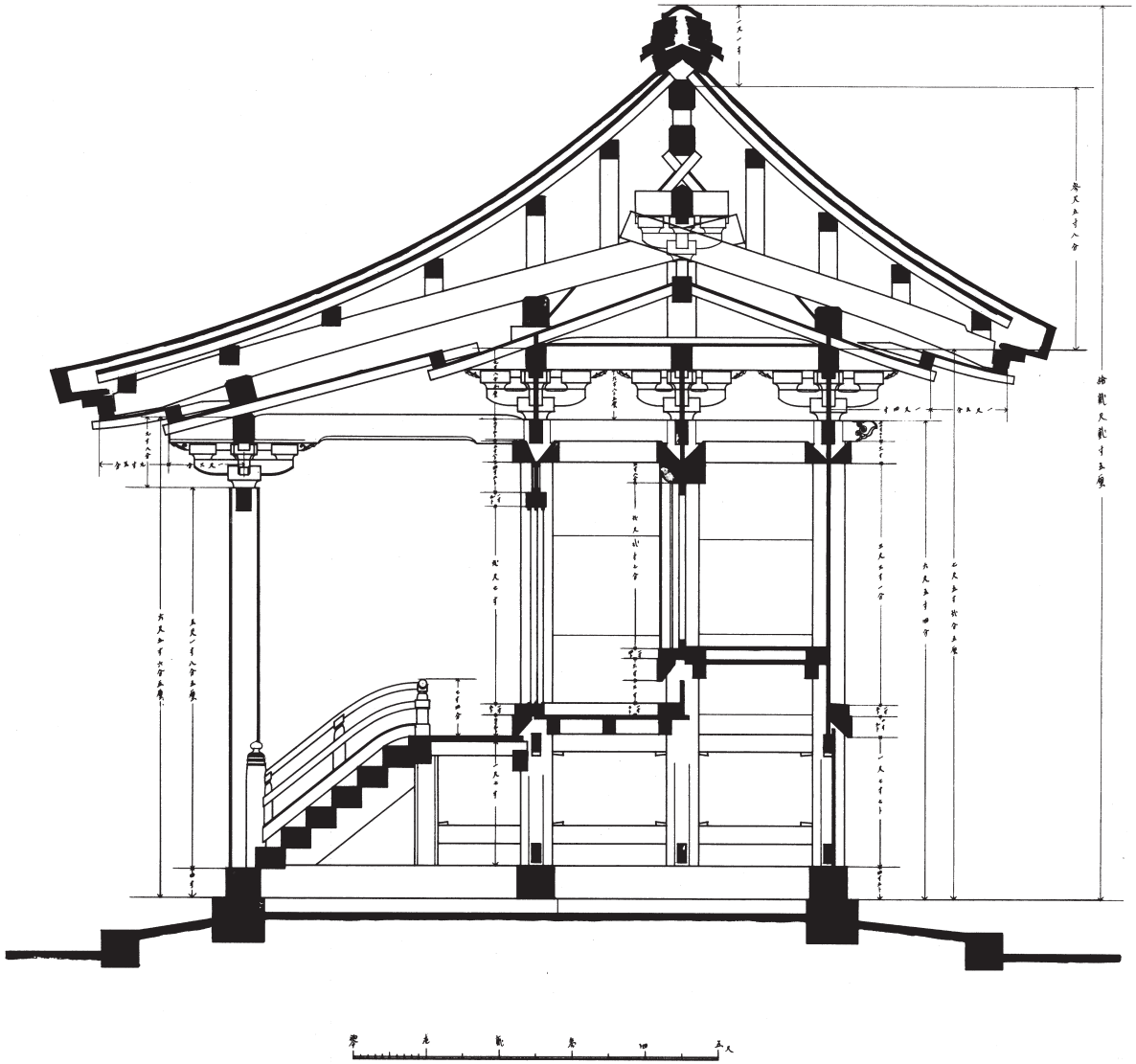
18　鎮守堂　正面図



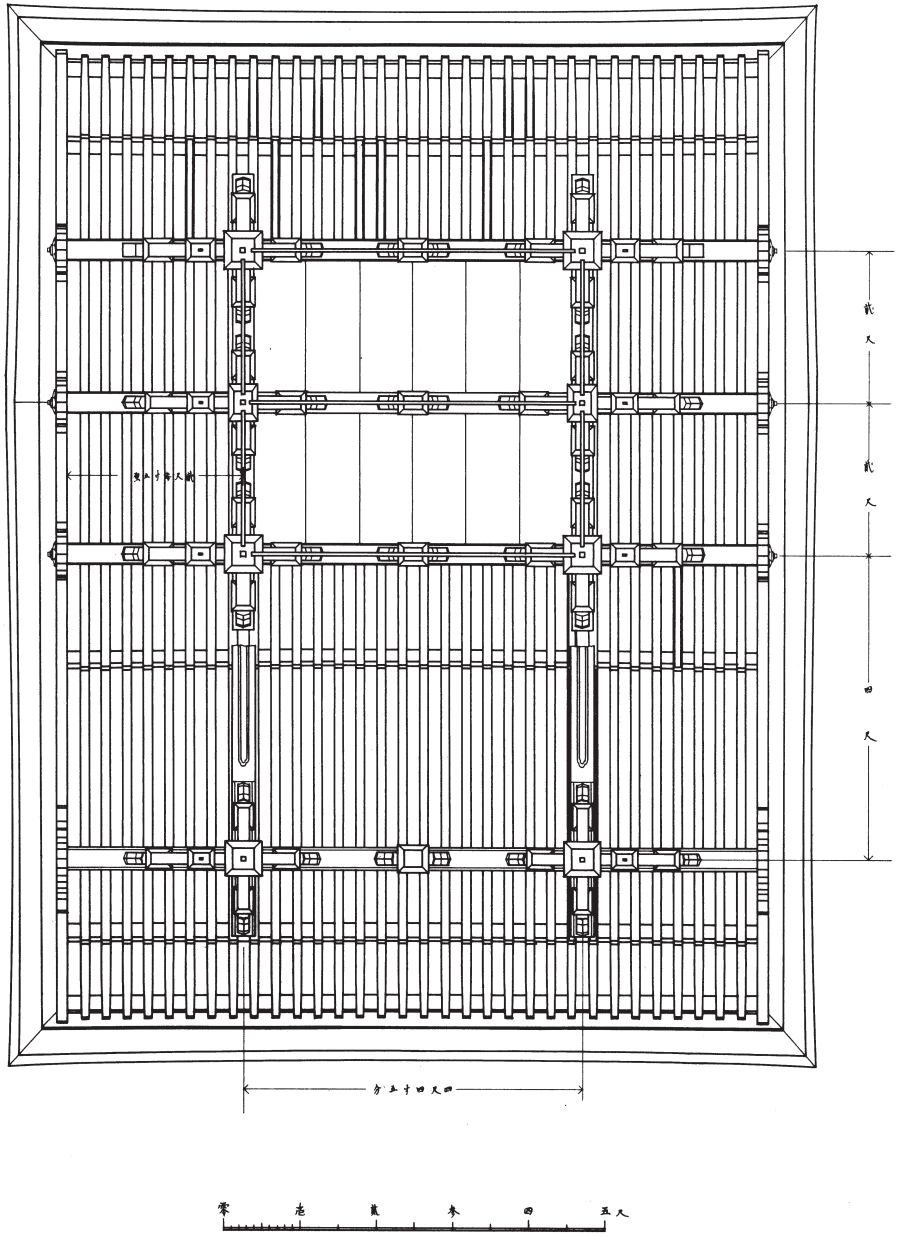
19　鎮守堂　側面図



20　鎮守堂　桁行断面図



21　鎮守堂　梁間断面図



22　鎮守堂　軒見上図

国宝長保寺大門ほか２棟保存修理記録

1　建造物の名称　長保寺大門、多宝塔、鎮守堂

2　分　　類　国宝（大門、多宝塔）、重要文化財（鎮守堂）

3　指定年月日　大門－明治33年（1900）、多宝塔－明治37年（1904）、鎮守堂－大正３年（1914）

4　所　在　地　和歌山県海南市下津町上685（大門）、上690（多宝塔、鎮守堂）

5　所　有　者　宗教法人　長保寺

6　建築種別　大門－門、多宝塔－多宝塔、鎮守堂－鎮守社・本殿

7　建設年代　大　門：嘉慶２年（1388）
多宝塔：正平12年（1357）
鎮守堂：鎌倉時代後期

8　構造形式　大　門：木造、三間一戸楼門、入母屋造、瓦葺
多宝塔：木造、多宝塔、瓦葺
鎮守堂：木造、一間社流造、檜皮葺

9　規　　模　大　門：間口7.4m、奥行4.3m、平面積52.5㎡
多宝塔：間口4.6m、奥行4.6m、平面積21.5㎡
鎮守堂：間口2.2m、奥行2.4m、平面積 3.3㎡

10　創立と沿革　長保寺は海南市の下津港から、２㎞ほど東方の山間に入ったところにある、天台宗の寺院である。一条天皇の勅願で長保２年（1000）に造営され、寛文６年（1666）に紀州徳川家の菩提所となり、歴代藩主が葬られることとなった。

創建当初は、伽藍は現在地の西方にあったとされるが、中世に移転し、現存の本堂が延慶４年（1311）に建てられた。その後続いて、多宝塔が正平12年（1357）、大門が嘉慶２年（1388）に建立され、伽藍が整った。いずれも明治時代後期に特別保護建造物に指定された。

11　事業概要

修理方針　大門－半解体修理、多宝塔－屋根葺替・部分修理、鎮守堂－屋根葺替修理

事業期間　平成23年１月１日～平成24年12月31日

総事業費　150,000,000円

工事関係者　事　業　者：宗教法人　長保寺
設計監理者：公益財団法人 和歌山県文化財センター
施　工　者：株式会社　金剛組

12　工事概要　大門は瓦葺屋根全面を葺き替え、腐朽した野地板や裏甲を補修した。軒先は高さ修正を行った。また軒の垂下防止のため、丸桁桔に鉄骨で補強を施したほか、新たに補強材として二の母屋桔木を取り付けた。壁は漆喰と胡粉を塗り直し、土間は叩きを修理した。

多宝塔は瓦葺屋根全面を葺き替え、腐朽した野地板や裏甲を補修した。相輪はいったん解体し、破損・欠失部分を新たに鋳直した。また亀腹漆喰塗りは全面を塗り替えた。

鎮守堂は桧皮葺屋根全面を葺き替えた。また腐朽した野木舞や裏甲を取り替えた。

11. Outline of restoration

Type of repair	Main Gate	major repair involving partial dismantlement
	Two-storied Treasure Pagoda	reroofing and partial repairs
	Chinju-dō Hall	reroofing
Restoration period	January 1, 2011 to December 31, 2012	
Total cost	150,000,000 yen	
Parties involved	operating body	Chōhō-ji Temple, a religious corporation
	restoration design	Center for Cultural Properties in Wakayama Prefecture (foundation)
construction	Kongo Gumi Co., Ltd.	

12. Outline of restoration

The entire roof of the Main Gate was reroofed while repairing damaged sheathing boards and eave end members. Sagging of the eaves was altered and additional supporting members as well as steel beams were introduced for reinforcement of these eaves. The plaster and white wash finishes on the walls were redone and damaged areas of the earthen floor were repaired.

With the Treasure Pagoda, the entire roof was reroofed, replacing only the damaged tiles, and deteriorated sheathing boards and eave end members were repaired. The pagoda finial was disassembled to replace damaged parts with newly cast elements. Plaster finish of the bun-shaped mound around the foot of the second story was entirely redone.

The cypress roof of the Chinju-dō Hall was reroofed entirely. Damaged sheathing boards and eave end members were repaired.

Documentation on the Restoration Work at Chōhō-ji Main Gate and Two Structures, National Treasures and Important Cultural Property designated by the National Government

1. Name of building	Chōhō-ji Temple Main Gate (daimon), Two-storied Treasure Pagoda (tahōtō), Chinju-dō Hall	
2. Classification	National Treasure (Main Gate, Two-storied Treasure Pagoda), Important Cultural Property (Chinju-dō Hall)	
3. Date of designation	Main Gate	1900 (33rd year of Meiji)
	Two-storied Treasure Pagoda	1904 (37th year of Meiji)
	Chinju-dō Hall	1914 (3rd year of Taishō)
4. Location	685 Shimotsu-cho Kami, Kainan-shi Wakayama Prefecture (Main Gate) 690 Shimotsu-cho Kami, Kainan-shi Wakayama Prefecture (Two-storied Treasure Pagoda and Chinju-dō Hall)	
5. Owner	Chōhō-ji Temple, a religious corporation	
6. Building type	Main Gate	gate
	Two-storied Treasure Pagoda	pagoda
	Chinju-dō Hall	temple guardian god shrine
7. Construction date	Main Gate	1388 (2nd year of Kakei)
	Two-storied Treasure Pagoda	1357 (12th year of Shōhei)
	Chinju-dō Hall	late Kamakura period
8. Material and structure	Main Gate	wood frame, three-bay two-storied gate with entrance through central bay, hip-and-gable roof, roofed with clay tiles
	Two-storied Treasure Pagoda	wood frame, two-storied treasure pagoda, roofed with clay tiles
	Chinju-dō Hall	wood frame, one-bay shrine with extended front roof and stepped canopy, roofed with Japanese cypress bark
9. Dimensions	Main Gate	width 7.4m, depth 4.3m, floor area 52.5㎡
	Two-storied Treasure Pagoda	width 4.6m, depth 4.6m, floor area 21.5㎡
	Chinju-dō Hall	width 2.2m, depth 2.4m, floor area 3.3㎡
10. Historical background	Chōhō-ji Temple of the Tendai sect is located in the mountains about two kilometers inland from Shimotsu Port in Kainan City. It was established in 1000 (Second year of Chōho) under the order of Emperor Ichijō. Since 1666 (6th year of Kanbun), as the family temple of the Kishū Tokugawa Family reigning Wakayama, successive lords of the domain have been laid to rest here. It is believed that the temple grounds originally further to the west was moved to the present location at some time during the 14th century. The Main Hall was constructed in 1311, the Treasure Pagoda in 1357, followed by the Main Gate in 1388 to complete the temple complex. All three buildings were designated as Buildings under Special Protection by the national government in the late Meiji era.	

平成二四年一二月

国宝 長保寺大門ほか二棟修理工事報告書

発行 宗教法人 長保寺
〒六四九―〇二六四 和歌山県海南市下津町上六九〇
TEL ○七三―四九二―一〇三〇

編集 公益財団法人 和歌山県文化財センター
〒六四〇―八四〇四 和歌山県和歌山市湊五七一―一
TEL ○七三―四三三―三八四三

印刷 有限会社 真陽社
〒六〇〇―八四七五 京都府京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL ○七五―三五一―六〇三四